みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

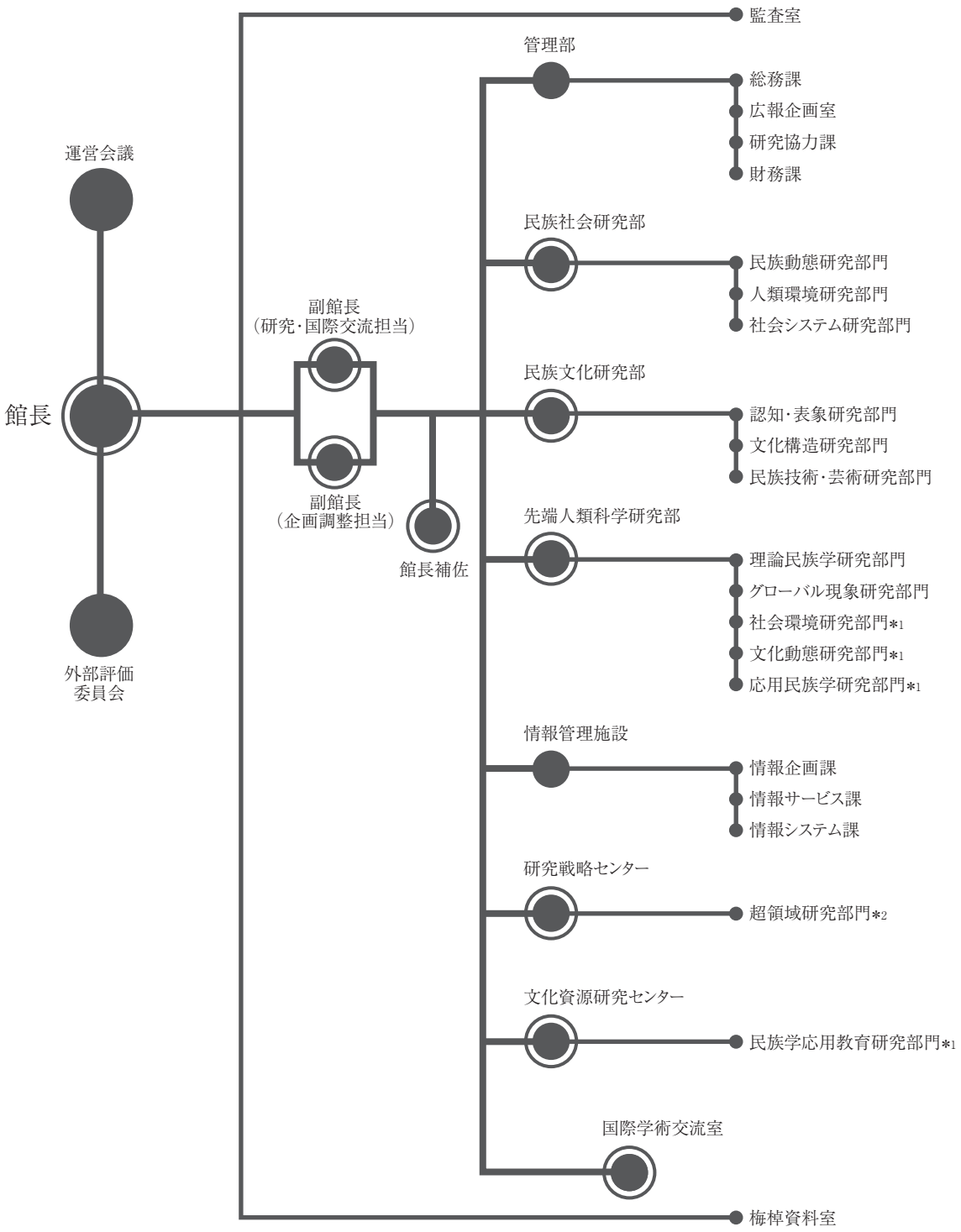
# 1.組織



| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2016-03-10<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者:<br>メールアドレス:<br>所属: |
|---|---|
| URL | http://hdl.handle.net/10502/00005947 |

# 1 組織

## 組織構成図 (2015年 3 月31日現在)




注) *1 客員研究部門
*2 外国人客員研究部門

## 運営組織（2015年３月31日現在）

●運営会議

| | |
|---|---|
| 植野弘子 | 東洋大学社会学部教授＊1 |
| 栗田博之 | 東京外国語大学総合情報コラボレーションセンター長＊2 |
| 栗本英世 | 大阪大学大学院人間科学研究科教授＊1 |
| 建畠　哲 | 京都市立芸術大学長 |
| 富沢寿勇 | 静岡県立大学国際関係学部教授＊3 |
| 松田　凡 | 京都文教大学総合社会学部教授＊3 |
| 松田素二 | 京都大学大学院文学研究科教授＊2 |
| 吉岡政徳 | 神戸大学大学院国際文化学研究科教授＊1 |
| 渡邊欣雄 | 國學院大學文学部教授＊2 |
| （館内） | |
| 池谷和信 | 民族文化研究部長＊1＊2＊3 |
| 韓　　敏 | 民族社会研究部長＊1＊2＊3 |
| 岸上伸啓 | 副館長（研究・国際交流担当）＊1＊2 |
| 久保正敏 | 副館長（企画調整担当）＊1＊2 |
| 佐々木史郎 | 総合研究大学院大学文化科学研究科地域文化学専攻長<br>先端人類科学研究部教授＊1 |
| 塚田誠之 | 研究戦略センター長＊1＊2＊3 |
| 寺田吉孝 | 先端人類科学研究部長＊1＊2＊3 |
| 野林厚志 | 文化資源研究センター長＊1＊2＊3 |

注）＊1　人事委員会委員
　　＊2　共同利用委員会委員
　　＊3　研究倫理委員会委員

●外部評価委員会

| | |
|---|---|
| 安達　淳 | 国立情報学研究所副所長 |
| 黒柳俊之 | 独立行政法人国際協力機構理事 |
| 小泉潤二 | 大阪大学未来戦略機構第一部門特任教授、国際高等研究所副所長 |
| 八村廣三郎 | 立命館大学情報理工学部教授 |
| 廣冨靖以 | 公益財団法人りそなアジア・オセアニア財団理事長 |
| 堀井良殷 | 公益財団法人大阪21世紀協会理事長 |
| 宮田亮平 | 東京藝術大学長 |
| 三輪嘉六 | 国立文化財機構九州国立博物館長 |
| 山本真鳥 | 法政大学経済学部教授 |

## 館内運営組織（2015年３月31日現在）

●部長会議

●館内各種委員会

自己点検・評価委員会
福利厚生委員会
安全衛生委員会
ハラスメント防止委員会
広報企画会議
機関研究運営会議
刊行物審査委員会
研究出版委員会
知的財産委員会
科学研究費補助金管理体制検討委員会
「現代インド地域研究」国立民族学博物館拠点運営委員会
大学院委員会
図書委員会
学術情報リポジトリ委員会
情報システム委員会（休止）
情報システム整備委員会
文化資源運営会議
国際研修博物館学コース運営委員会
施設マネジメント委員会
危機管理委員会
創設40周年記念事業推進委員会
大規模災害復興支援委員会
フォーラム型情報ミュージアム委員会

## 現員（2015年３月31日現在）

| 区　　分 | 館長 | 教授 | 准教授 | 助教 | 事務職員・技術職員 | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 館長 | 1 | | | | | 1 |
| 管理部 | | | | | 26 | 26 |
| 情報管理施設 | | | | | 21 | 21 |
| 研究部 | | 17 | 12 | 3 | | 32 |
| 研究戦略センター | | 5 | 3 | 3 | | 11 |
| 文化資源研究センター | | 5 | 6 | 1 | | 12 |
| 客員（国内） | | 14 | 6 | | | 20 |
| 客員（国外）＊ | | 3 | 7 | | | 10 |
| 計 | 1 | 44 | 34 | 7 | 47 | 133 |

注）客員（国外）＊は、のべ人数

## 歴代館長・名誉教授（2015年３月31日現在）

### ●歴代館長

初　代／梅棹忠夫（故人）　1974年６月～1993年３月
第２代／佐々木高明（故人）1993年４月～1997年３月
第３代／石毛直道　1997年４月～2003年３月
第４代／松園萬亀雄　2003年４月～2009年３月
第５代／須藤健一　2009年４月～

### ●名誉教授

祖父江孝男（故人）1984年４月１日
岩田慶治（故人）1985年４月１日
加藤九祚　1986年４月１日
伊藤幹治　1988年４月１日
中村俊亀智（故人）1988年４月１日
君島久子　1989年４月１日
和田祐一（故人）1990年４月１日
垂水　稔（故人）1991年４月１日
杉本尚次　1992年４月１日
梅棹忠夫（故人）1993年４月１日
大給近達（故人）1993年４月１日
片倉素子（故人）1993年４月１日
竹村卓二（故人）1994年４月１日
周　達生（故人）1995年４月１日
松澤員子　1995年４月１日
大丸　弘　1996年４月１日
友枝啓泰（故人）1996年４月１日
藤井知昭　1996年４月１日
佐々木高明（故人）1997年４月１日
杉村　棟　1997年４月１日
和田正平　1998年４月１日
清水昭俊　2000年４月１日
黒田悦子　2001年４月１日
崎山　理　2001年４月１日
端　信行　2001年４月１日
小山修三　2002年４月１日
森田恒之　2002年４月１日
石毛直道　2003年４月１日
栗田靖之　2003年４月１日
杉田繁治　2003年４月１日
熊倉功夫　2004年４月１日
立川武藏　2004年４月１日
田邉繁治　2004年４月１日
藤井龍彦　2004年４月１日
山田睦男（故人）2004年４月１日
江口一久（故人）2005年４月１日
大塚和義　2005年４月１日
松原正毅　2005年４月１日
石森秀三　2006年４月１日
野村雅一　2006年４月１日
大森康宏　2007年４月１日
山本紀夫　2007年４月１日
松園萬亀雄　2009年４月１日
松山利夫　2010年４月１日
長野泰彦　2011年４月１日
秋道智彌　2012年４月１日
中牧弘允　2012年４月１日
小林繁樹　2014年４月１日
田村克己　2014年４月１日
吉本　忍　2014年４月１日

## 研究部教員の紹介（2015年３月31日現在）

組織図に基づく現員一覧

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 館　長 | | 須藤健一 | | |
| 副館長（企画調整担当） | | 久保正敏 | | |
| 副館長（研究・国際交流担当） | | 岸上伸啓 | | |
| 研究部 | 職名・研究部門 | 教　授 | 准教授 | 助　教 |
| 民族社会研究部 | 研究部長 | 韓　　敏 | | |
| | 民族動態 | 朝倉敏夫<br>小長谷有紀（併）<br>庄司博史<br>横山廣子 | 三島禎子 | |
| | 人類環境 | 印東道子<br>MATTHEWS, Peter J. | | |
| | 社会システム | 西尾哲夫 | 宇田川妙子<br>太田心平<br>佐藤浩司 | 吉岡　乾 |
| 民族文化研究部 | 研究部長 | 池谷和信 | | |
| | 認知・表象 | 八杉佳穂<br>森　明子 | 山中由里子 | 齋藤玲子 |
| | 文化構造 | 笹原亮二<br>杉本良男 | 新免光比呂<br>廣瀬浩二郎 | 藤本透子 |
| | 民族技術・芸術 | 竹沢尚一郎<br>出口正之 | 鈴木　紀 | |
| 先端人類科学研究部 | 研究部長 | 寺田吉孝 | | |
| | 理論民族学 | 佐々木史郎<br>齋藤　晃 | 飯田　卓<br>菊澤律子 | |
| | グローバル現象 | | 丸川雄三<br>松尾瑞穂 | |
| 研究戦略センター | | 塚田誠之（センター長）<br>岸上伸啓（副館長）<br>關　雄二<br>鈴木七美<br>平井京之介 | 樫永真佐夫<br>丹羽典生<br>三尾　稔 | 伊藤敦規<br>河合洋尚<br>菅瀬晶子 |
| 文化資源研究センター | | 野林厚志（センター長）<br>久保正敏（副館長）<br>園田直子<br>吉田憲司<br>信田敏宏 | 上羽陽子<br>林　勲男<br>日髙真吾<br>福岡正太<br>南 真木人<br>山本泰則 | 川瀬　慈 |
| 国際学術交流室 | | 岸上伸啓（室長）（併）<br>印東道子（兼）<br>齋藤　晃（兼）<br>MATTHEWS, Peter J.（兼）<br>横山廣子（兼） | 菊澤律子（兼）<br>山中由里子（兼） | |

## 須藤健一［すどう　けんいち］――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――館長

1946年生。**【学歴】**埼玉大学教養学部卒（1969）、東京都立大学大学院社会科学研究科（社会人類学専攻）修士課程修了（1972）、東京都立大学大学院社会科学研究科（社会人類学専攻）博士課程単位取得満期退学（1975）**【職歴】**国立民族学博物館第３研究部助手（1975）、国立民族学博物館第１研究部助教授（1986）、神戸大学国際文化学部教授（1993）、神戸大学国際文化学部長（2000）、神戸大学大学院総合人間科学研究科長（2002）、神戸大学附属図書館長（2005）、神戸大学大学院国際文化学研究科教授（2007）、国立民族学博物館館長（2009）**【学位】**文学博士（東京都立大学 1986）、文学修士（東京都立大学 1972）**【専攻・専門】**社会人類学、オセアニアの社会と文化、海外移住、伝統政治と民主主義**【所属学会】**日本文化人類学会、日本オセアニア学会、南島史学会、生態人類学会、ニュージーランド学会

**【主要業績】**

［単著］

須藤健一

2008 『オセアニアの人類学――海外移住、民主化、伝統の政治』東京：風響社。

1989 『母系社会の構造――サンゴ礁の島々の民族誌』東京：紀伊国屋書店。

［編著］

須藤健一編

2012 『グローカリゼーションとオセアニアの人類学』東京：風響社。

**【受賞歴】**

2010　第２回石川榮吉賞

1985　第16回澁澤賞

**【2014年度の活動報告】**

◎各個研究

**・研究課題**

オセアニアの海面利用と資源保護の慣行に関する人類学的研究

**・研究の目的、内容**

オセアニアの島をとりまく海の環境は、陸島、火山島、環礁島、隆起サンゴ礁などの島の形成史や地形などにより多様である。それらの島々の住人は、土地や海洋資源の利用と保護に関する独自の慣習をつくりだしてきている。この慣習に関しては、植民地時代の宗主国の統治政策により土地所有などは改革を余儀なくされたが、海面所有や海洋資源の利用と保護に関するしきたりは比較的固有の方式が保持されてきている。本年度は、ミクロネシア地域を中心に島社会における海面利用慣行の比較研究を行い、その差異と共通性を明らかにすると同時に今日的問題についても考察する。

**・成果**

海洋資源に依存するミクロネシア社会の海面利用の方法、権利様式と所有単位、資源保護の方法と管理責任などについての比較研究の成果を、論文「ミクロネシアにおける海面保有と資源保護の様式」としてまとめ、『国立民族学博物館研究報告』39巻２号にて公開した。

◎出版物による業績

［編著］

土方久功著、須藤健一・清水久夫編

2014 『土方久功日記Ⅴ』（国立民族学博物館調査報告124）大阪：国立民族学博物館［査読有］。

［論文］

須藤健一

2014 「ミクロネシアにおける海面保有と資源保護の様式」『国立民族学博物館研究報告』39(2)：175-235［査読有］。

2014 「南洋研究の開拓者――土方日記と先史学・民族学」土方久功著、須藤健一・清水久夫編『土方久功日記Ⅴ』（国立民族学博物館調査報告124）pp.593-611，大阪：国立民族学博物館［査読有］。

2015 「第10章　スペインからドイツ統治時代へ――ヨーロッパ諸国による統治の歴史」印東道子編『ミク

ロネシアを知るための60章』（第２版）pp.59-62，東京：明石書店。

2015 「第11章　日本統治時代――日本の手に渡った植民地」印東道子編著『ミクロネシアを知るための60章』（第２版）pp.63-66，東京：明石書店。

2015 「第16章　母系社会と父系社会――集団編成の基礎となるもの」印東道子編著『ミクロネシアを知るための60章』（第２版）pp.86-90，東京：明石書店。

2015 「第38章　沖縄にやって来たチェチェメニ号――失われた伝統航海術の復興」印東道子編著『ミクロネシアを知るための60章』（第２版）pp.188-191，東京：明石書店。

［事典］

国立民族学博物館編（編集顧問：須藤健一）

2014 『世界民族百科事典』東京：丸善出版。

［事典項目］

須藤健一

2014 「先住民権と移民」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.346-347，東京：丸善出版。

2014 「国立民族学博物館（みんぱく）」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.522-523，東京：丸善出版。

［その他］

須藤健一

2014 「東京講演会実施報告　国立新美術館での『イメージの力』展開催にあたって」『国立民族学博物館友の会ニュース』220：3。

2014 「みんぱく創設40周年にあたって」『みんぱく e-news』156（http://www.minpaku.ac.jp/museum/enews/156）。

2014 「悼む　湯浅叡子さん」『毎日新聞』７月21日朝刊。

2014 「渋沢敬三を敬慕した近藤雅樹さん」『魅せる！超フォークロア――近藤雅樹ワールドの探検』pp.29-31，近藤雅樹追悼企画実行委員会，神戸新聞総合出版センター。

2015 「コラム⑤　展示と研究公演のお礼の旅」高倉浩樹編『展示する人類学――日本と異文化をつなぐ対話』pp.142-144，京都：昭和堂。

2015 「10年にわたる MMP のみんぱく支援」『MMP10周年記念誌 あゆみ』p.3，大阪：みんぱくミュージアムパートナーズ（MMP）。

Sudo, K.

2014 Preface: Congratulations to the Shung Ye Museum of Formosa Aborigines on its 20th Anniversary. *Shung Ye Museum of Formosan Aborigines Special Publication: Formosan Shung Ye, Indigenous Impression*（「序：順益台灣原住民博物館開館二十週年誌慶」『順益台灣・印記原民：順益台灣原住民博物館専刊』）pp.10-11，台北：順益台灣原住民博物館。

2015 Director-General's Reception: Welcome Speech. In N. Sonoda, K. Tamura and Nu Mra Zan（eds.）*Asian Museums and Museology 2013: International Research Meeting on Museology in Myanmar*（Senri Ethnological Reports 125）p.87. Osaka: National Museum of Ethnology［査読有］.

2015 Preface. In N. Sonoda, K. Hirai and Jarunee Incherdchai（eds.）*Asian Museums and Museology 2014: International Workshop on Asian Museums and Museology in Thailand*（Senri Ethnological Reports 129), pp.i-ii. Osaka: National Museum of Ethnology［査読有］.

◎口頭発表・展示・その他の業績

**・研究講演**

2014年11月21日　「家族とジェンダー――日本とオセアニア」天理大学文学部主催、天理大学文学部人権啓発講演会、天理大学

**・広報・社会連携活動**

2014年４月12日　「国立新美術館での『イメージの力』展開催にあたって」佐渡高校関西地区同窓会、国立民族学博物館

2014年４月20日　「チェチェメニ号と航海術――サンゴ礁島のくらし」MMP 教養講座、国立民族学博物館

2014年９月24日　「みんぱく40周年と『イメージの力』」第２回みんぱく × ナレッジキャピタル「イメージをさぐる」、グランフロント大阪・ナレッジキャピタル

2014年９月30日　「博物館を知る――特別展『イメージの力』のねらい」神戸シルバーカレッジ、国立民族学博

物館

2014年11月23日 「民族資料と美術作品のあいだ」第362回みんぱくウィークエンド・サロン

◎調査活動

**・海外調査**

2014年６月25日～７月６日―アメリカ合衆国（北アリゾナ博物館との学術協定調印式出席及び博物館視察）

2014年８月24日～８月28日―タイ（タイの博物館・博物館学に関する共同研究及び研究会）

2014年10月15日～10月25日―イギリス（エディンバラ大学との学術交流協定に関する審議及び博物館視察）

2015年１月29日～２月７日―カナダ、アメリカ合衆国（博物館視察及びブリティッシュコロンビア大学附属博物館長と連携展示、フォーラム型ミュージアム等に係る協議）

◎大学院教育

**・大学院ゼミでの活動**

2014年４月17日 「フィールドワークと成果公開――カヌーと伝統的航海術」文化科学研究科講演

◎社会活動・館外活動

**・他の機関から委嘱された委員など**

公益財団法人大阪府文化財センター評議員、公益財団法人大阪ユニセフ協会理事、金沢大学大学院人間社会環境研究科文化資源マネージャー養成プログラムアドバイザー、関西サイエンス・フォーラム理事、京都大学人文科学研究所共同利用・共同研究拠点運営委員、彩都（国際文化公園都市）建設推進協議会特別委員、公益財団法人坂田記念ジャーナリズム振興財団理事、公益財団法人太平洋人材交流センター最高顧問、日本ニュージーランドセンター理事、公益財団法人日本博物館協会参与、公益財団法人りそなアジア・オセアニア財団助成事業選考委員長、太平洋諸島学会理事、独立行政法人国際協力機構エジプト国大エジプト博物館保存修復センタープロジェクト国内支援委員、独立行政法人国立美術館 国際美術館評議員、NPO法人 パシフィカ・ルネサンス顧問、文化遺産国際協力コンソーシアム運営委員

## 岸上伸啓［きしがみ　のぶひろ］――――――――― 副館長（研究・国際交流担当）、研究戦略センター教授

1958年生。**【学歴】**早稲田大学第一文学部社会学科卒（1981）、早稲田大学大学院文学研究科社会学専修修士課程修了（1983）、マッギル大学人類学部博士課程中退（1989）**【職歴】**早稲田大学文学部助手（1989）、北海道教育大学教育学部函館校専任講師（1990）、北海道教育大学助教授（1992）、国立民族学博物館第１研究部助教授（1996）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（1997）、国立民族学博物館先端民族学研究部助教授（1998）、国立民族学博物館先端人類科学研究部助教授（2004）、国立民族学博物館先端人類科学研究部教授（2005）、総合研究大学院大学文化科学研究科比較文化学専攻長（2006）、国立民族学博物館館長補佐（2008）、国立民族学博物館先端人類科学研究部長（2009）、国立民族学博物館研究戦略センター長（2012）、国立民族学博物館副館長（2013）**【学位】**博士（文学）（総合研究大学院大学文化科学研究科 2006）、文学修士（早稲田大学大学院文学研究科 1983）**【専攻・専門】**文化人類学 1）カナダ・イヌイットの社会変化、2）都市在住のイヌイットの民族誌的研究、3）先住民による海洋資源の利用と管理、4）アラスカ先住民イヌピアットの捕鯨**【所属学会】**日本文化人類学会、日本カナダ学会、国際極北社会科学学会、民族藝術学会

**【主要業績】**

［単著］

岸上伸啓

2007 『カナダ・イヌイットの食文化と社会変化』京都：世界思想社。

［編著］

Kishigami, N., H. Hamaguchi, and J. M. Savelle (eds.)

2013 *Anthropological Studies of Whaling* (Senri Ethnological Studies 84). Osaka: National Museum of Ethnology.

［論文］

Kishigami, N.

2004 A New Typology of Food-Sharing Practices among Hunter-Gatherers, with a Special Focus on InuitExamples. *Journal of Anthropological Research* 60: 341-358.

【受賞歴】

2007　第18回カナダ首相出版賞

1998　第９回カナダ首相出版賞（審査員特別賞）

【2014年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

北アメリカ地域における先住民による捕鯨に関する文化人類学的研究

・研究の目的、内容

本研究の目的は、2009年度から2013年度まで実施した科学研究費補助金（基盤研究（B））「北アメリカ地域における先住民生存捕鯨と先住権」（研究代表者：岸上伸啓）によって収集した米国アラスカ北西地域とカナダ極北地域における先住民による捕鯨と先住権に関するデータを整理、分析し、その成果を発信することである。具体的には、アラスカのイヌピアットの捕鯨文化の現状および「使者祭」の歴史的変遷についてのデータを整理・分析の上、出版する。また、カナダ極北地域のイヌイットの捕鯨の現状について先住権との関連で整理・分析の上、学会において口頭発表を行う。

・成果

アラスカのイヌピアットの捕鯨活動、獲物の分配、捕鯨祭、そして捕鯨文化の存続条件に関する民族誌『クジラとともに生きる　アラスカ先住民の現在』（2014年、臨川書店）と民族誌的解説付きの写真集『イヌピアット写眞帳』（2014年、風土デザイン研究所）を出版した。また、同民族の使者祭りは15世紀以前に始まった新旧大陸間の先住民交易に由来するとする起源、同祭りの19世紀以降の変化と現状について検討した論文「アラスカ・イヌピアット社会における使者祭り」を『人文論究』（2015年、第84号）から出版した。

カナダ・イヌイットのホッキョククジラ猟と先住権については、米国政府によって捕鯨が先住権として承認されていないアラスカ先住民の場合とは異なり、カナダ政府はイヌイットの捕鯨を先住権として承認し、保護している点を、2014年５月15日に千葉市幕張メッセで開催されたInternational Union of Anthropological and Ethnological Sciences（IUAES）において口頭発表した。

なお、これらは2009年度から2013年度まで実施した科学研究費補助金（基盤研究（B））「北アメリカ地域における先住民生存捕鯨と先住権」（研究代表者：岸上伸啓）の成果の一部である。

◎出版物による業績

［単著］

岸上伸啓

2014　『クジラとともに生きる――アラスカ先住民社会の現在』京都：臨川書店。

2014　『イヌピアット写眞帳――バロー村の暮らし』札幌：風土デザイン研究所。

2014　『グリーンランド写眞帳――ヌーク篇』札幌：風土デザイン研究所。

［論文］

岸上伸啓

2014　「アラスカの捕鯨民イヌピアットの真夏の祭典ナルカタック」高倉浩樹・山口未花子編『食と儀礼をめぐる地球の旅――先住民文化からみたシベリアとアメリカ』pp.91-120，仙台：東北大学出版会。

2015　「アラスカ・イヌピアット社会における使者祭りについて」『人文論究』84：51-62［査読有］。

Kishigami, N.

2015　Low-income and Homeless Inuit in Montreal, Canada: Report of a 2012 Research. *Bulletin of the National Museum of Ethnology* 39(4): 575-624［査読有］.

［事典項目］

岸上伸啓

2014　「文化相対主義」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.40-41，東京：丸善出版。

2014　「先住民と紛争」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.112-113，東京：丸善出版。

2014　「グローバル経済」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』p.581，東京：丸善出版。

2014　「格差の拡大」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.582-583，東京：丸善出版。

2014　「リスク社会」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.592-593，東京：丸善出版。

2014　「市場経済」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.594-595，東京：丸善出版。

2014　「カナダのイヌイットの暦」岡田芳郎ほか編集『暦の大事典』pp.31-34，東京：朝倉書店。

［その他］

岸上伸啓

2014 「イヌイットのナビゲーションを在来知のひとつとして記述し、分析した労作――現代のイヌイット文化に関する新しい視点からの独創性ある研究（書評：大村敬一著『カナダ・イヌイトの民族誌』）」『図書新聞』314：3。

2014 「コメント１　海産哺乳類の保護を目指した文理融合型研究の試み」市川光太郎・縄田浩志編『アラブのなりわい生態系７　ジュゴン』pp.296-308，京都：臨川書店。

2014 「イヌイットと醤油」『毎日新聞』８月28日夕刊。

2014 「フォーラム型情報ミュージアムの構築――国立民族学博物館における新たな展開」『民博通信』146：2-7。

2014 「世界最大の島の自然と文化」『月刊みんぱく』38(10)：2-3。

2014 「グリーンランドに見る温暖化 知恵と技術で環境に適応」『産経新聞』10月14日夕刊。

2014 「北アメリカ北西海岸地域での丸木舟収集の思い出――2001年度特別展『ラッコとガラス玉』との関連で」『季刊民族学』150：29-31。

2014 「コラム４　イヌピアットはどのように捕鯨をするのか？」高倉浩樹・山口未花子編『食と儀礼をめぐる地球の旅――先住民文化からみたシベリアとアメリカ』p.121，仙台：東北大学出版会。

2014 「極北の孤島グリーンランドにおける気候変動と文化の変遷」『国立民族学博物館友の会ニュース』223：6。

2014 「アラスカ先住民のクジラ料理　ミキガック」『月刊みんぱく』38(11)：18-19。

2014 「ユーラシアの事例からモースの『贈与論』を再考する」『民博通信』147：14-15。

2015 「グリーンランド――人と自然のかかわり」『季刊民族学』151：3-23。

Kishigami, N.

2014 The Inuit Bowhead Hunt and Indigenous Rights in Canada. In the Organizing Committee of the IUES 2014 (ed.) *Conference Programme* Abstract *of IUAES 2014 with JASCA*, p.32. Tokyo: Tokyo Metropolitan University.

2014 Comparative Studies of Indigenous Cultures around the North Pacific Rim: Focusing on Indigenous Rights and Marine Resource Utilization. *MINPAKU Anthropology Newsletter* 38: 10-11.

2014 Comment on 'The Rotten Renaissance in the Bering Strait.' *Current Anthropology* 55(5): 638-639.

2014 Unknown Land, Greenland: Its Nature and Culture: Thematic Exhibition September 4-November 18, 2014. *MINPAKU Anthropology Newsletter* 39: 14.

◎口頭発表・展示・その他の業績

**・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告**

2014年５月15日　'The Inuit Bowhead Hunt and Indigenous Rights in Canada.' Paper read at IUAES 2014, Makuhari Messe, Chiba, Japan

**・みんぱくゼミナール**

2014年10月18日　「はるかなる北の大地　グリーンランドの自然と人びとの暮らし」第437回みんぱくゼミナール

**・研究講演**

2014年９月６日　「極北の孤島グリーンランドにおける気候変動と文化の変遷」第435回国立民族学博物館友の会講演会

2014年９月12日　「グリーンランドの歴史と現状」吹田市浜屋敷民博夜話、浜屋敷

2014年10月８日　「気候変動は何をもたらしたか――世界最大の島グリーンランド」産経新聞社主催、みんぱく創設40周年記念 カレッジシアター「地球探究紀行」あべのハルカス近鉄本店 ウイング館９階SPACE９

2014年11月12日　「アラスカ先住民イヌピアットと日本人の鯨食文化」平成26年度民族学講座「グローバル化時代の食文化」（和食のユネスコ無形文化遺産登録に寄せて）川西市清和台公民館

**・展示**

企画展「未知なる大地　グリーンランドの自然と文化」実行委員長

◎調査活動

**・海外調査**

2015年２月１日～２月17日―アメリカ合衆国、カナダ（米国・カナダの北西海岸地域の博物館における文化資源デジタル・アーカイブズに関する調査）

◎大学院教育

**・指導教員**

主任指導教員（２人）

**・総研大の開講科目**

比較社会研究特論Ⅱ（前期）、比較社会演習Ⅱ（後期）

**・論文審査**

博士論文審査委員（２件）、予備審査委員（２件）

◎社会活動・館外活動

**・他機関から委嘱された委員など**

第23期日本学術会議連携会員（地域研究）、第23期日本学術会議地域研究多文化共生部会幹事、第25期日本文化人類学会理事、日本カナダ学会理事、民族藝術学会理事、北海道立北方民族博物館研究協力員、京都大学地域研究統合情報センター課題選考委員。第41回澁澤賞選考委員、*Japanese Review of Cultural Anthropology* 編集委員

## 久保正敏［くぼ　まさとし］――――――――――――――― 副館長（企画調整担当）、文化資源研究センター教授

1949年生。**【学歴】**京都大学工学部電気工学科卒（1972）、京都大学大学院工学研究科修士課程電気工学第二専攻修了（1974）**【職歴】**京都大学工学部情報工学科助手（1974）、国立民族学博物館第５研究部助手（1983）、京都大学大型計算機センター助教授（1990）、京都大学学術情報ネットワーク機構兼務学術資料情報担当（1990）、国立民族学博物館第５研究部助教授（1993）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（1994）、国立民族学博物館博物館民族学研究部助教授（1998）、国立民族学博物館博物館民族学研究部教授（1998）、国立民族学博物館情報管理施設長（2000～2004）、国立民族学博物館文化資源研究センター教授（2004）**【学位】**工学博士（京都大学 1986）、工学修士（京都大学大学院工学研究科 1974）**【専攻・専門】**コンピュータ民族学（情報組織化論、博物館情報論）、民族情報学（先住民とメディア文化論）**【所属学会】**情報処理学会、日本文化人類学会、民族藝術学会、日本産業技術史学会、アートドキュメンテーション学会

**【主要業績】**

［単著］

久保正敏

1996 『マルチメディア時代の起点――イメージからみるメディア』（NHK ブックス779）東京：日本放送出版協会。

［論文］

久保正敏

2003 「模倣と創造――エスニック・アートとファイン・アート」山田奨治編『模倣と創造のダイナミズム』pp.215-239, 東京：勉誠出版。

久保正敏・堀江保範

2006 「オーストラリア交通事情――アウトバックの距離を克服する」『季刊民族学』118：3-41。

**【2014年度の活動報告】**

◎各個研究

**・研究課題**

映像アーカイブズ構築のための諸課題の検討と指針策定――倫理・知的財産権・保存と利用の両立を目指して

**・研究の目的、内容**

国立民族学博物館所蔵の映像資料は、国内外での共有を推進すべき文化資源として極めて貴重である。しかし、その長期保存と利用の両立を図るためには、媒体変換など技術的な問題だけではなく、時には相反する、知的財産権の保護と共同利用性の推進を如何に調整するかが課題となる。本研究では、素材の世代管理を含む映像

アーカイブズの構造設計とともに、知的財産権保護と利用の両立を図る媒体管理手法を検討する。映像アーカイブズを運用する諸機関の実態調査を行いながら、本館にとって現実的・具体的な指針を設計する。本計画は、2014年度より開始される「フォーラム型情報ミュージアムの構築」プロジェクトに、密接に関わるものであり、研究の成果をこのプロジェクトに反映させることも目的の一つである。

・成果

久保正敏　「映像アーカイブズから映像の共有を考える――国立民族学博物館での経験から」村尾静二・箭内匡・久保正敏編『映像人類学（シネ・アンスロポロジー）――人類学の新たな実践へ』pp.195-217, 2014年５月23日発行，東京：せりか書房（館外での出版を奨励する国立民族学博物館の制度を利用した成果）。

久保正敏　「文化資源の公開・共有と権利・倫理」園田直子・小長谷有紀・I. Lkhagvasuren 共編『アジアにおける新しい博物館・博物館学の「いま」――モンゴル、ミュージアム・クリルタイ』pp.51-58, 2014年11月21日発行，ウランバートル：モンゴル国立文化遺産センター。

久保正敏・五島敏芳・関野 樹　「鼎談　アーカイブズの現状と可能性（特集　研究資料のアーカイブと活用6）」『SEEDer』11: 43-53, 2014年12月15日発行，京都：昭和堂。

Kubo, Masatoshi　“Problems in Managing Cultural Resources; Resource Sharing, Protecting Intellectual Properties and Ethical Consideration.” In Naoko Sonoda, Katsumi Tamura and Nu Mra Zan (eds.) *Asian Museums and Museology 2013: International Research Meeting on Museuology in Myanmar* (Senri Ethnological Reports 125), pp.133-140, 2015年２月26日発行, Osaka: National Museum of Ethnology.

久保正敏　「友の会講演会要旨　第438回　グローバル時代の『知的生産の技術』――フォーラム型博情館の可能性」『国立民族学博物館友の会ニュース』225: 4, 2015年３月１日発行，大阪：財団法人千里文化財団。

◎出版物による業績

［共編著］

村尾静二・箭内 匡・久保正敏編

2014　『映像人類学（シネ・アンスロポロジー）――人類学の新たな実践へ』東京：せりか書房［査読有］。

久保正敏・堀江保範編

2015　『バウィナンガ・アボリジナル組合の議事録（1978～1994）から見る対アボリジニ政策とインフラ整備の歴史――マニングリダと周辺アウトステーションの活動史』（国立民族学博物館調査報告126）大阪：国立民族学博物館［査読有］。

［論文］

久保正敏

2014　「映像アーカイブズから映像の共有を考える――国立民族学博物館での経験から」村尾静二・箭内匡・久保正敏編『映像人類学（シネ・アンスロポロジー）――人類学の新たな実践へ』pp.195-217, 東京：せりか書房［査読有］。

2014　「文化資源の公開・共有と権利・倫理」園田直子・小長谷有紀・I. Lkhagvasuren 編『アジアにおける新しい博物館・博物館学の「いま」――モンゴル、ミュージアム・クリルタイ』pp.51-58, ウランバートル：モンゴル国立文化遺産センター。

Kubo, M.

2015　Problems in Managing Cultural Resources: Resource Sharing, Protecting Intellectual Properties and Ethical Consideration. In N. Sonoda, K. Tamura and Nu Mra Zan (eds.) *Asian Museums and Museology 2013: International Research Meeting on Museuology in Myanmar* (Senri Ethnological Reports 125) pp.133-140, Osaka: National Museum of Ethnology［査読有］.

［事典項目］

久保正敏

2014　「７　場所・空間　サイバースペース」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.272-273, 東京：丸善出版。

2014　「20　他者・表象　バーチャル空間」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.730-731, 東京：丸善出版。

［その他］

久保正敏

2014　コメント「人文系に功績　言葉残し勇退」『読売新聞』2014年５月13日夕刊。

2014　「おもてなし考」『ふるさと関西を考えるキャンペーン39年　関西からおもてなし』pp.34-35, pp.59-60, 大阪：明治安田生命保険相互会社大阪総務部 関西を考える会。

2014　「集めてみました世界の○○　水筒編」『月刊みんぱく』38(8)：10-11。

2014　コメント「民博　来春も特別展断念」『讀賣新聞』2014年８月19日夕刊。

2014　「みんぱく世界の旅　オーストラリア①　『大航海時代』のオーストラリア」『毎日小学生新聞』９月20日。

2014　「みんぱく世界の旅　オーストラリア②　連絡鉄道阻んだ各州の自治意識」『毎日小学生新聞』９月27日。

2014　「みんぱく世界の旅　オーストラリア③　盗まれた子どもたち」『毎日小学生新聞』10月４日。

2014　「みんぱく世界の旅　オーストラリア④　足あとを読み取る 独自の文化」『毎日小学生新聞』10月11日。

2014　「小山修三氏との対談　チーム・オーストラリアものがたり」『季刊民族学』150：20-24。

2014　「私のパソコン整理術」『婦人之友』2014(11)：29-31。

2014　「五島敏芳・関野 樹との鼎談　アーカイブズの現状と可能性（特集：研究資料のアーカイブと活用6)」『SEEDer』11：43-53。

2015　「喜びも悲しみも歌に込めて　昭和とともに、歌謡曲あり（特集：昭和歌謡ラプソディ)」『望星』2015(1)：16-24。

2015　「制服の世界・世界の征服　異性をまとう」『月刊みんぱく』39(3)：22-23。

2015　「友の会講演会要旨　第438回　グローバル時代の「知的生産の技術」――フォーラム型博情館の可能性」『国立民族学博物館友の会ニュース』225：4。

2015　「キーワードはミクロ―マクロ往還」『みんぱく e-news』165（http://www.minpaku.ac.jp/museum/enews/165)。

2015　「11　フクロムササビ」『図画工作　教師用指導書　アート・カード解説　１・２上／１・２下』p.12, 大阪／東京：日本文教出版株式会社。

◎口頭発表・展示・その他の業績

**・研究講演**

2015年１月10日　「グローバル時代の『知的生産の技術』――フォーラム型博情館の可能性」第438回国立民族学博物館友の会講演会

**・広報・社会連携活動**

2014年６月13日　「オーストラリアの交通文化史――アウトバックの距離はいかに克服されてきたか」NPO法人大阪府高齢者大学校　世界の文化に親しむ科、大阪市教育会館

2014年６月20日　「あるオーストラリア先住民コミュニティの形成史」NPO法人大阪府高齢者大学校　世界の文化に親しむ科、大阪市教育会館

2014年８月３日　「心的イメージとは何か――イメージ・メディア論」第353回みんぱくウィークエンド・サロン

2014年８月17日　「Guide to National Museum of Ethnology」ユネスコ・アジア文化センター・バヌアツ研修、国立民族学博物館

2014年11月14日　特別講義「科学から見るオーストラリア――時空の広さを知ろう　気候・進化・天体・先住民文化」『SPP事業　洛北サイエンス３年　オーストラリアの自然事象を探求する』国立民族学博物館

2015年１月10日　「グローバル時代の『知的生産の技術』――フォーラム型博情館の可能性」第438回国立民族学博物館友の会講演会

2015年１月14日　「オーストラリアへの旅――カンガルーからブーメランまで」産経新聞社主催、みんぱく創設40周年記念カレッジシアター「地球探究紀行」あべのハルカス近鉄本店 ウイング館９階 SPACE 9

◎調査活動

2014年８月24日～８月27日―タイ（タイの博物館・博物館学に関する共同研究および現地調査）

◎上記以外の研究活動

・**人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など**

科学研究費補助金（挑戦的萌芽研究）「動的共創型デジタルアーカイブス構築――梅棹忠夫資料に基づいて」代表者、科学研究費補助金（研究成果公開促進費（データベース））「梅棹忠夫資料のデジタルアーカイブズ」代表者、総合研究大学院大学文化科学研究科併任教授、京都大学地域研究統合情報センター共同研究員

◎社会活動・館外活動

・**非常勤講師**

大阪教育大学「博物館情報・メディア論」（集中講義）

## 民族社会研究部

### 韓 敏 ［ハン ミン］―― 部長（併）教授

**【学歴】** 中国吉林大学外国語学部日本語科卒（1983）、中国吉林大学大学院外国文学・言語研究科日本文学専攻修士課程修了（1986）、東京大学大学院総合文化研究科文化人類学専攻修士課程修了（1989）、東京大学大学院総合文化研究科文化人類学専攻博士課程修了（1993）**【職歴】** 武蔵大学人文学部非常勤講師（1992）、東京大学教養学部客員研究員（1994）、東洋英和女学院大学社会科学部専任講師（1995）、東洋英和女学院大学社会科学部助教授（1998）、国立民族学博物館博物館民族学研究部助教授（2000）、総合研究大学院大学文化科学研究科助教授併任（2001）、国立民族学博物館民族社会研究部助教授（2004）、国立民族学博物館民族社会研究部教授（2011）**【学位】** 学術博士（文化人類学）（東京大学大学院総合文化研究科 1993）、学術修士（文化人類学）（東京大学大学院総合文化研究科1989）、文学修士（中国吉林大学大学院外国文学・言語研究科 1986）**【専攻・専門】** 文化人類学、現代中国の漢族研究 **【所属学会】** 日本文化人類学会

**【主要業績】**

［単著］

Han, M.

2001 *Social Change and Continuity in a Village in Northern Anhui, China: A Response to Revolution and Reform* (Senri Ethnological Studies 58). Osaka: National Museum of Ethnology（『回応革命与改革――皖北李村的社会変遷与延続』南京：江蘇人民出版社，2007）。

［編著］

韓 敏編

2015 『中国社会における文化変容の諸相――グローカル化の視点から』（国立民族学博物館論集３）東京：風響社。

2009 『革命の実践と表象――現代中国への人類学的アプローチ』東京：風響社。

**【2014年度の活動報告】**

◎各個研究

・**研究課題**

革命、改革とグローバル化のもとの中国に関する人類学的研究

・**研究の目的、内容**

本研究は近代中国の革命、改革とグローバル化の過程における社会と文化の連続性と非連続性を、究明することにある。本研究は2007年度から開始し、2014年度に終了予定の長期プロジェクトであり、下記の科研プロジェクトや共同研究会、機関研究プロジェクトと連携して実施する。

1）社会主義革命理念の制度化、近代的シンボルの形成と人びとの生活実践に関する研究を、科学研究費補助金（基盤研究（C））「現代中国の人々の生活実践に関する人類学的ライフヒストリー・アプローチ」（2011年４月～2015年３月）の研究代表者として、引き続き行う。

2）グローバル化の過程における中国文化の再構築について、共同研究会「中国における社会と文化の再構築――グローカリゼーションの視点から」（2008年10月～2011年３月）の代表者として全体の研究成果をまと

め、刊行することにより、成果公開を行う。

3）近代中国の社会と文化の連続性と非連続性について、機関研究「中国における家族・民族・国家のディスコース（2012年４月～2015年３月）」の代表者として、最終年度の総括を行うと同時に、研究成果の編集と執筆を行う。

・成果

1）近代中国の社会と文化の連続性と非連続性に関する国際シンポジウム（機関研究のプロジェクト）を11月に本館で実施した。

2）機関研究の論文集、『中国社会的家族・民族・国家的話語及其動態――東亜人類学的理論探索』（Senri Ethnological Studies 90、中国語）を編集し、出版した。

3）共同研究の論文集『中国社会における文化変容の諸相――グローカル化の視点から』（国立民族学博物館論集３）を風響社から出版した。

4）研究フォーラムの成果を『近代社会における指導者崇拝の諸相』（国立民族学博物館調査報告127）として出版した。

◎出版物による業績

［編著］

韓 敏編

2015 『近代社会における指導者崇拝の諸相』（国立民族学博物館調査報告127）大阪：国立民族学博物館［査読有］。

2015 『中国社会における文化変容の諸相――グローカル化の視点から』（国立民族学博物館論集３）東京：風響社［査読有、共同研究成果］。

［共編］

韓 敏・末成道男編著

2014 『中国社会的家族・民族・国家的話語及其動態――東亜人類学的理論探索』（Senri Ethnological Studies 90）大阪：国立民族学博物館［査読有、機関研究成果］。

［論文］

韓 敏

2014 「序章　中国社会的家族・民族・国家的話語及其動態――東亜人類学的理論探索」韓 敏・末成道男編著『中国社会的家族・民族・国家的話語及其動態――東亜人類学的理論探索』（Senri Ethnological Studies 90）pp.1-16，大阪：国立民族学博物館［査読有、機関研究成果］。

2015 「序論　近代社会の指導者崇拝に関する人類学的アプローチ」韓 敏編『近代社会における指導者崇拝の諸相』（国立民族学博物館調査報告127）pp.5-13，大阪：国立民族学博物館［査読有］。

2015 「近代中国における毛沢東崇拝の成り立ち」韓 敏編『近代社会における指導者崇拝の諸相』（国立民族学博物館調査報告127）pp.35-60，大阪：国立民族学博物館［査読有］。

2015 「序論　中国社会における文化の再構築とグローカル化――人類学のアプローチ」韓 敏編『中国社会における文化変容の諸相――グローカル化の視点から』（国立民族学博物館論集３）pp.9-21，東京：風響社［査読有、共同研究成果］。

2015 「項羽祭祀の伝承とその文化遺産化――安徽省和県烏江鎮の３月３覇王祭」韓 敏編『中国社会における文化変容の諸相――グローカル化の視点から』（国立民族学博物館論集３）pp.153-175，大阪：国立民族学博物館［査読有］。

［事典項目］

韓 敏

2014 「英雄崇拝」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.216-217，東京：丸善出版。

［その他］

韓 敏

2014 「みんぱく世界の旅　中国⑦　生きている伝統――花嫁の輿」『毎日小学生新聞』４月５日。

2014 「みんぱく世界の旅　中国⑧　鮮やかな中国の農民画」『毎日小学生新聞』４月12日。

2014 「土の香りのモダンアート」『月刊みんぱく』38(5)：6-7。

2014 「花嫁の輿、花轎」『月刊みんぱく』38(5)：8-9。

2014 「漢族はなぜ家族を大切にするのか」『国立民族学博物館友の会ニュース』221：4。

2014 「観光で結ぶ中国と日本」『和華』4(4)：7-9。

2014 「日中の人類学の交流と今後の展開」『民博通信』146：8-9。

2014 「中国社会的家族・民族・国家的話語及其動態——東亜人類学的理論探索」(Senri Ethnological Studies no.90)『民博通信』147：25。

2015 「集めてみました世界のはきもの」『月刊みんぱく』39(3)：10-11。

2015 「旅・いろいろ地球人　信じる⑧　故人への思いから生まれた明器」『毎日新聞』３月12日夕刊。

**・電子ガイドの制作・監修**

［中国地域の文化］

韓　敏監修

2014 『花嫁の輿』日本語，英語，韓国語，中国語。

2014 『漢族の位牌』日本語，英語，韓国語，中国語。

2014 『紙銭』日本語，英語，韓国語，中国語。

◎口頭発表・展示・その他の業績

**・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告**

2014年11月22日～23日　機関研究・国際シンポジウム『中国の文化の持続と変化——グローバル化の下の家族・民族・国家（Continuity and Change of Chinese Culture: Family, Ethnicity and State under Globalization)』国立民族学博物館

**・共同研究会**

2015年１月31日　「近代中国の聖地作り——指導者ゆかりの場所を事例に」『聖地の政治経済学——ユーラシア地域大国における比較研究』北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター

**・研究講演**

2014年５月３日　「漢族はなぜ家族を大切にするのか？」第431回国立民族学博物館友の会講演会

2014年12月17日　「第27回　現代中国の農村の暮らし——ある家族の幸せのかたち」産経新聞社主催、みんぱく創設40周年記念カレッジシアター「地球探究紀行」あべのハルカス近鉄本店 ウイング館９階 SPACE 9

◎調査活動

**・海外調査**

2014年７月23日～８月２日—中華人民共和国（現代中国の人々の生活実践に関する人類学的調査）

2014年９月６日～９月15日—中華人民共和国（現代中国の人々の生活実践に関する人類学的調査）

◎大学院教育

**・指導教員**

副指導教員（１人）

## 朝倉敏夫［あさくら　としお］—— 教授

1950年生。**【学歴】**武蔵大学人文学部社会学科卒（1974)、明治大学大学院政治経済学研究科修士課程修了（1977)、明治大学大学院政治経済学研究科博士後期課程満期退学（1985)**【職歴】**国立民族学博物館第４研究部助手（1988)、国立民族学博物館第１研究部助教授（1994)、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（1994)、国立民族学博物館民族社会研究部助教授（1998)、国立民族学博物館民族社会研究部教授（2001)、国立民族学博物館民族文化研究部長（2006)、国立民族学博物館民族社会研究部教授（2008）国立民族学博物館文化資源研究センター教授（2010)**【学位】**政治学修士（明治大学大学院政治経済学研究科 1977)**【専攻・専門】**社会人類学、韓国社会論**【所属学会】**日本文化人類学会、日本民俗学会、比較家族史学会、韓国文化人類学会

**【主要業績】**

［単著］

朝倉敏夫

2005 『世界の食文化１　韓国』東京：社団法人農山漁村文化協会。

［編著］

朝倉敏夫編

2003 『「もの」から見た朝鮮民俗文化』東京：新幹社。

［共編］

朝倉敏夫・嶋 陸奥彦編

1998 『変貌する韓国社会――1970～80年代の人類学調査の現場から』東京：第一書房。

**【受賞歴】**

2013 大韓民国玉冠文化勲章

**【2014年度の活動報告】**

◎各個研究

**・研究課題**

「食」の文化人類学

**・研究の目的、内容**

日本における「食文化研究」は、石毛直道先生の研究に始まったといってよい。世界における食文化研究は、どのようにして始まり、現在はどのような状況にあるのか、食文化研究の俯瞰図を描くことを目的とする。

2014年度に始まる立命館大学との学術交流協定に基づき、国際シンポジウムを開催し、イタリア、中国、韓国、日本における食文化研究の概要を明らかにし、あわせて博物館が食文化研究に果たす役割について考察する。

**・成果**

2014年度に始まった立命館大学との学術交流協定に基づき、12月６日～７日に本館において国際シンポジウム「世界の食文化研究と博物館」を開催し、イタリア、中国、韓国、日本における食文化研究の概要を明らかにし、あわせて博物館が食文化研究に果たす役割について考察した。

国際シンポジウム「世界の食文化研究と博物館」の報告書は、2015年度に刊行される立命館大学社会システム研究所の紀要『社会システム研究』に掲載される予定であるが、本館『民博通信』No.148の評論・展望に、その概要を記載した。

また、このシンポジウムで発表された日本と韓国における食に関する博物館についての成果を、2015年度に開催する特別展「韓日食博」において展示する計画である。

◎出版物による業績

［論文］

朝倉敏夫

2014 「四天王寺ワッソと平城京天平祭の事例報告と歴史再現方祝祭の正体性についての一考察」『百済文化歳の現在と未来戦略』pp.21-38（日本語），pp.39-58（韓国語）財団法人百済文化祭推進委員会。

2014 「解題」村山智順『朝鮮의 場市研究』pp.205-220，ソウル：民俗苑。

2014 「전통의 보존，맛과 기후의 변화 – 한국에“아지노모토”가 왔다（伝統の保存、味と嗜好の変化――韓国に味の素がやってきた）」*Traditional Foods: Culture Meets Science* pp.59-106，2014 韓国食生活文化学会30周年記念学術大会。

2014 토론「“음식문화 구조와 김장”에 관하여（討論「食文化の構造とキムヂャン」に関して）2014第２回キムチ学シンポジウム『キムチの人文学的理解』pp.159-162，世界キムチ研究所。

2014 Korean Kimchi and Japanese Tsukemono. In S. Kim（trans.）*Humanistic Understanding of Kimchi and Kimjang Culture*（Kimchiology Series 1）pp.112-137. Gwangju: World Institute of Kimchi.

［事典項目］

朝倉敏夫

2014 「12. 生活文化」（セクション概説）国立民族学博物館編『世界民族百科事典』p.434，東京：丸善書店。

2014 「食のグローバリゼーション」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.450-451，東京：丸善書店。

［その他］

朝倉敏夫

2014 「食から見る植民地期」『月刊みんぱく』38(6)：4-5。

2014 「チャンスン・ソッテと小正月の行事」『季刊民族学』150：64-66。

2014 「『学芸者』として」『魅せる！超フォークロア――近藤雅樹ワールドの探検』pp.344-346，兵庫：神戸新聞総合出版センター。

2015 「なぜ日本人はラーメンとキムチが好きなのか?」福田アジオ責任編集『知って役立つ民俗学』pp.248-253，京都：ミネルヴァ書房。

2015 「評論・展望　世界の食文化研究と博物館」『民博通信』148：4-9。

◎映像音響メディアによる業績

**・国立民族学博物館映像音響資料の制作・監修**

［ビデオテーク］

朝倉敏夫監修、梨花大学校チーム制作

2014 『現代韓国の結婚準備過程――スドメを知っていますか？』（韓国国立民俗博物館との交流事業）日本語，韓国語，16分。

朝倉敏夫監修、韓国学中央研究院・ソウル芸術大学校チーム制作

2014 『旧正月の風景――ユン・スジュンさんのソル茶礼』日本語，韓国語，11分。

朝倉敏夫監修、安東大学校チーム制作

2014 『韓国の大学入試文化――大学入試を準備する特別な方法』日本語，韓国語，16分。

**・電子ガイドの制作・監修**

［朝鮮半島の文化］

朝倉敏夫監修

2015 『味の素の新聞広告１　販売戦略編』日本語，英語，韓国語，中国語。

2015 『味の素の新聞広告２　女性編』日本語，英語，韓国語，中国語。

2015 『味の素の新聞広告３　料理編』日本語，英語，韓国語，中国語。

2015 『オデンとウドン』日本語，英語，韓国語，中国語。

2015 『中国料理店のオムライス』日本語，英語，韓国語，中国語。

2015 『石臼と甕――植民地期におけるある夫婦の暮らし』日本語，英語，韓国語，中国語。

◎口頭発表・展示・その他の業績

**・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告**

2014年12月６日～７日 「趣旨説明」「挨拶」国立民族学博物館・立命館大学学術交流協定締結記念国際シンポジウム『世界の食文化研究と博物館』国立民族学博物館講堂

**・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告**

2014年８月26日 「四天王寺ワッソと平城京天平祭の事例報告と歴史再現方祝祭の正体性についての一考察」『百済文化歳の現在と未来戦略』財団法人百済文化祭推進委員会、公州大学校

2014年９月28日 基調講演「『和食』の無形文化遺産登録を受けて――食文化研究と和食」『日本食文化の魅力シンポジウム in 京都』農林水産省、京都府立大学

2014年９月28日 パネルディスカッション「学問として伝える和食」『日本食文化の魅力シンポジウム in 京都』農林水産省、京都府立大学

2014年11月14日 「전통의 보존, 맛과 기후의 변화 – 한국에 “아지노모토” 가 왔다（伝統の保存、味と嗜好の変化――韓国に味の素がやってきた）」2014韓国食生活文化学会30周年記念学術大会 “Traditional Foods: Culture Meets Science” 韓国食文化生活学会、漢陽大学校

2014年11月26日 토론「“음식문화 구조와 김장” 에 관하여（討論「食文化の構造とキムヂャン」に関して）2014 第２回キムチ学シンポジウム『キムチの人文学的理解』世界キムチ研究所、国立中央図書館

2014年12月19日 「韓国の近代化――味の素の『東亜日報』掲載広告を通して」アジア・日本研究センター学術支援プログラム　公開研究会、国士舘大学

**・研究講演**

2014年６月12日 「食からみる韓国文化」早稲田大学韓国学研究所2014年度春学期連続講座『文化でみる現代韓国』早稲田大学26号館

**・研究公演**

2014年９月15日 司会・解説『伝統芸能パンソリによる韓国文化の理解』国立民族学博物館講堂

**・広報・社会連携活動**

2014年４月18日 「韓国の食文化」NPO 法人大阪府高齢者大学校　世界の文化に親しむ科、大阪市教育会館

2014年４月25日 「キムチが語る」NPO 法人大阪府高齢者大学校　世界の文化に親しむ科、大阪市教育会館

2014年７月27日　「ウドン・オムライス・味の素――朝鮮半島における『食』の近代化」第352回みんぱくウィークエンド・サロン
2014年７月28日　「ようこそ、みんぱくへ！」東大阪市立太平寺小学校教職員研修会、国立民族学博物館
2014年８月２日　「植民地期に海を渡った日本の食」第434回国立民族学博物館友の会講演会
2014年８月５日　「みんぱくの教員によるミュージアムツアー」ワークショップ『「すごろく教材」で異文化理解』博学連携教員研修ワークショップ2014 in みんぱく、国立民族学博物館
2014年８月６日　「韓国食文化――韓国ドラマの事例から」第７回教職員韓国文化研修会、大阪韓国文化院
2014年10月６日　「チャンスン・ソッテと仮面」特別展「イメージの力」ギャラリートーク、国立民族学博物館
2014年10月18日　「食から知る韓国」教育・男女共同参画学習会、守口市立中央公民館
2015年２月14日　「朝鮮王朝の食文化――現代に根付く“薬食同源”」高麗美術館新春企画展『チャングムが生きた時代』研究講座、高麗美術館
2015年３月11日　「韓国の食の世界――ご飯」産経新聞社主催、みんぱく創設40周年記念 カレッジシアター「地球探究紀行」あべのハルカス近鉄本店 ウイング館９階 SPACE 9

◎調査活動

**・海外調査**

2014年５月24日～５月29日―大韓民国（日韓共同開催の2015年度特別展のための事前調査及び韓国国立民俗博物館との協議）
2014年７月15日～７月19日―大韓民国（朝鮮半島の文化に関する映像資料の開発と作成及び平成27年特別展準備協議）
2014年８月10日～８月12日―大韓民国（フォーラム型情報ミュージアムに関する韓国国立民俗博物館との協議）
2014年８月25日～８月30日―大韓民国（百済文化祭シンポジウムに参加・情報収集及びインフォ・フォーラムミュージアムの協議）
2014年11月13日～11月18日―大韓民国（韓国食生活文化学会へ参加及び特別展準備）
2014年11月25日～11月27日―大韓民国（キムチ学シンポジウムへ参加及び情報収集）
2015年１月24日～１月26日―大韓民国（フォーラム型情報ミュージアムに関する韓国国立民俗博物館との協議）
2015年２月22日～２月25日―大韓民国（フォーラム型情報ミュージアムに関する韓国国立民俗博物館との協議）
2015年３月15日～３月19日―中華人民共和国（広州を中心とする客家料理の調査）

◎大学院教育

**・大学院ゼミでの活動**

2014年10月２日　「食文化研究・入門」テーマ・シリーズ

◎社会活動・館外活動

**・他の機関から委嘱された委員など**

高麗美術館理事

**・非常勤講師**

神戸女子大学「衣・食・住Ⅰ」、「世界の食文化」

## 印東道子［いんとう　みちこ］――教授

**【学歴】**東京女子大学文理学部史学科卒（1976）、ニュージーランド・オタゴ大学人類学部修士課程修了（1982）、ニュージーランド・オタゴ大学人類学部大学院博士課程修了（1988）**【職歴】**東京女子大学文理学部史学科研究助手（1976）、北海道東海大学国際文化学部助教授（1988）、北海道東海大学国際文化学部教授（1996）、国立民族学博物館民族社会研究部教授（2000）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任教授（2001）、放送大学客員教授（2006）**【学位】**Ph.D.（オタゴ大学人類学部大学院博士課程 1989）、M.A.（オタゴ大学人類学部大学院修士課程 1982）**【専攻・専門】**オセアニア先史学・民族学 1）オセアニアの土器文化、2）島嶼環境における人間居住**【所属学会】**日本オセアニア学会、日本人類学会、日本考古学協会、New Zealand Archaeological Society、Indo-Pacific Prehistory Association

【主要業績】

［単著］

印東道子

2014 『南太平洋のサンゴ島を掘る――女性考古学者の謎解き』（フィールドワーク選書４）京都：臨川書店。

2002 『オセアニア　暮らしの考古学』（朝日選書715）東京：朝日新聞社。

［編著］

印東道子編著

2013 『人類の移動誌』京都：臨川書店。

【受賞歴】

2006　大同生命地域研究奨励賞

【2014年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

島嶼環境への人類の移動と適応

・研究の目的、内容

1）オセアニアの島嶼環境への人類の移動の様子や移動後の居住に関する研究を、科学研究費補助金（基盤研究（A））「東南アジア・オセアニアにおける現生人類の拡散移住史」（研究代表者：松村博文）の研究分担者として、引き続き行う。

2）本年度、新規採択された科学研究費補助金（基盤研究（B））「ウォーラシア海域と環太平洋域における人類移住・海洋適応・物質文化の比較研究」（研究代表者：小野林太郎）の研究分担者として、主としてインドネシア多島海地域とオセアニアの物質文化の比較研究を行う。

3）共同研究会「アジア・オセアニアにおける海域ネットワーク社会の人類史的研究：資源利用と物質文化の時空間比較」（研究代表：小野林太郎）において、海域世界を特徴とするオセアニアへ拡散した初期の人々の物質文化がどのように変化したかを海洋適応との関連で明らかにする。

・成果

1）科学研究費補助金（基盤研究（A））「東南アジア・オセアニアにおける現生人類の拡散移住史」の成果報告として出版される英語論文集の分担執筆を行った（2015年10月にオーストラリア国立大学出版局から出版予定）。

2）東南アジア考古学会で「ミクロネシアの海域ネットワーク：その起源に関する一考察」と題する発表を行った。

3）昨年終了した科学研究費補助金（新学術領域研究（研究領域提案型））の成果刊行物『文明の盛衰と環境変動――マヤ・アステカ・ナスカ・琉球の新しい歴史像』（青山和夫他編、岩波書店）にコラムを執筆し、成果の一端を発表した。

4）編著『ミクロネシアを知るための60章［第２版］』を刊行した。

◎出版物による業績

［単著］

印東道子

2014 『南太平洋のサンゴ島を掘る――女性考古学者の謎解き』（フィールドワーク選書４）京都：臨川書店。

［編著］

印東道子編

2015 『ミクロネシアを知るための60章［第２版］』東京：明石書店。

［論文］

印東道子

2014 「ブタをつれて海を渡った人たち――ミクロネシア・ファイス島の発掘から」『季刊民族学』149：69-86。

2014 「イースター島民は最後の木を切り倒さなかった」青山和夫・米延仁志・坂井正人・高宮広土編『文明の盛衰と環境変動――マヤ・アステカ・ナスカ・琉球の新しい歴史像』pp.248-249，東京：岩波書店。

［事典項目］

印東道子

2014 「環境史」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.612-613，東京：丸善出版。

［その他］

印東道子

2014 「海を渡った人類」『産経新聞』７月28日夕刊。

2015 「ミクロネシアの島じま」印東道子編『ミクロネシアを知るための60章［第２版］』pp.18-21，東京：明石書店。

2015 「火山島とサンゴ島」印東道子編『ミクロネシアを知るための60章［第２版］』pp.22-25，東京：明石書店。

2015 「雨期と乾期・自然災害」印東道子編『ミクロネシアを知るための60章［第２版］』pp.31-34，明石書店。

2015 「ミクロネシアの植物」印東道子編『ミクロネシアを知るための60章［第２版］』pp.39-43，東京：明石書店。

2015 「ミクロネシアの人びと」印東道子編『ミクロネシアを知るための60章［第２版］』pp.46-49，東京：明石書店。

2015 「ヨーロッパ人との遭遇」印東道子編『ミクロネシアを知るための60章［第２版］』pp.55-58，東京：明石書店。

2015 「調理法のいろいろ」印東道子編『ミクロネシアを知るための60章［第２版］』pp.109-112，東京：明石書店。

2015 「日本統治時代の生活」印東道子編『ミクロネシアを知るための60章［第２版］』pp.166-169，東京：明石書店。

2015 「チャモロ文化の源流」印東道子編『ミクロネシアを知るための60章［第２版］』pp.199-203，東京：明石書店。

2015 「巨石遺跡ラッテの謎」印東道子編『ミクロネシアを知るための60章［第２版］』pp.204-208，東京：明石書店。

2015 「色濃く残るスペインの影響」印東道子編『ミクロネシアを知るための60章［第２版］』pp.209-213，東京：明石書店。

山口洋兒・印東道子

2015 「ミクロネシアの日系人」印東道子編『ミクロネシアを知るための60章［第２版］』pp.192-196，東京：明石書店。

◎口頭発表・展示・その他の業績

**・共同研究会**

2014年11月16日 「ミクロネシアの海域ネットワーク――その起源に関する一考察」『アジア・オセアニアにおける海域ネットワーク社会の人類史的研究』東南アジア考古学会大会と共同開催、上智大学

**・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告**

2014年７月18日 「南太平洋の考古学――人類の海洋進出の歴史」d-labo セミナー、東京ミッドタウン

2014年９月26日 「大規模レトロトランスポゾン多型情報を利用した南米およびオセアニア在来サツマイモ遺伝資源の系統ネットワーク解析」（門田有希、田原谷薫、印東道子、斎藤成也、田原 誠）日本育種学秋季大会第126回講演会、南九州大学

2014年11月２日 「オセアニアへの新石器文化集団の拡散――ラピタ集団以前にマリアナ諸島へ」第68回日本人類学会大会、アクトシティ浜松

◎大学院教育

**・指導教員**

副指導教員（４人）

**・大学院ゼミでの活動**

リサーチプロポーザル指導（井上、荘司）

１年生ゼミ 「考古資料を批判的に読むために――J. ダイアモンドのイースター島文明崩壊説の崩壊」

◎上記以外の研究活動

**・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など**

科学研究費補助金（基盤研究（A））「東南アジア・オセアニアにおける現生人類の拡散移住史」（研究代表：松村博文）研究分担者、科学研究費補助金（基盤研究（B）（海外））「ウォーラシア海域と環太平洋域における人類移住・海洋適応・物質文化の比較研究」（研究代表：小野林太郎）研究分担者

◎社会活動・館外活動

**・他機関から委嘱された委員など**

日本学術会議連携会員、日本オセアニア学会会長、日本人類学会評議員

## 小長谷有紀［こながや　ゆき］—— 教授（併）

1957年生。**【学歴】**京都大学文学部史学科卒（1981）、京都大学大学院文学研究科修士課程修了（1983）、京都大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学（1986）**【職歴】**京都大学文学部助手（1986）、国立民族学博物館第１研究部助手（1987）、国立民族学博物館第１研究部助教授（1993）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（1993）、国立民族学博物館民族文化研究部助教授（1998）、国立民族学博物館民族学研究開発センター助教授（2000）、国立民族学博物館民族社会研究部教授（2003）、国立民族学博物館研究戦略センター教授（2004）、総合研究大学院大学地域文化学専攻長（2005）、国立民族学博物館研究戦略センター長（2007）、国立民族学博物館民族社会研究部長（2009-2011）、人間文化研究機構理事（2014）**【学位】**文学修士（京都大学大学院文学研究科 1983）**【専攻・専門】**人文学**【所属学会】**日本文化人類学会、日本モンゴル学会、人文地理学会、生き物文化誌学会

**【主要業績】**

［単著］

小長谷有紀

2005 『世界の食文化③　モンゴル』東京：社団法人農山漁村文化協会。

［編著］

小長谷有紀・シンジルト・中尾正義編

2005 『中国の環境政策「生態移民」――緑の大地、内モンゴルの砂漠化を防げるか？』京都：昭和堂。

小長谷有紀編

2004 『モンゴルの二十世紀――社会主義を生きた人びとの証言』（中公叢書）東京：中央公論新社。

**【受賞歴】**

2013　紫綬褒章

2013　教育研究に関する感謝状ならびに優秀学術研究者徽章（モンゴル国教育文化科学省）

2009　大同生命地域研究奨励賞

2007　モンゴル国ナイラムダルメダル（友好勲章）

1993　第29回翻訳出版文化賞

**【2014年度の活動報告】**

◎各個研究

**・研究課題**

モンゴルにおける社会主義的近代化

**・研究の目的、内容**

これまで、「モンゴルにとって20世紀とはなんであったか？」という問いを立てて行ってきた研究を継承しつつ、「社会主義的近代化とはなんであったか？」という問いへと問題を鋭角に転換して、各個研究ではモンゴルおよび中国内モンゴル自治区についての事例研究を目的とする。社会主義的近代化を体現した当事者たちによるナラティブ（語り）を収集し、それらを多声的に構成して近代化という時空間に関するモノグラフ（民族誌的歴史）を描くことによって、正統な歴史記述とは異なるテクストをナラティブから構成する。

**・成果**

モンゴルについては、すでに刊行したもののうち、現役の政治家たちについて、モンゴル語から英語に翻訳し

て、Senri Ethnological Reports 121号を刊行した。また、2012年２月に本館で実施した、鉱業開発に関するシンポジウムの際に来日したホルツ氏の口述史を、モンゴル語と英語で作成して加えた。なお、邦訳はNPO法人モンゴルパートナーシップ研究所のHPで公開した。内モンゴル自治区については、ブリヤートの移動について焦点をあてて、外国人客員教員のサランゲレル氏と共同で実施し、モンゴル語と日本語で作成し、国立民族学博物館調査報告119号として刊行した。

◎出版物による業績

［単著］

小長谷有紀

2014 『人類学者は草原に育つ――変貌するモンゴルとともに』（フィールドワーク選書９）京都：臨川書店。

［編著］

小長谷有紀編

2014 『梅棹忠夫のモンゴル調査――ローマ字カード集』（国立民族学博物館調査報告122）大阪：国立民族学博物館［査読有］。

［共編著］

小長谷有紀・前川愛編著

2014 『現代モンゴルを知るための50章』東京：明石書店。

Konagaya, Y. and I. Lkhagvasuren（interviews conducted), Mary Rossabi（trans.）and Morris Rossabi（ed. and intro.）

2014 *Mongolia's Transition from Socialism to Capitalism: Four Views*（Senri Ethnological Reports 121). Osaka: National Museum of Ethnology［査読有］.

Юки Конагая（Ред.), Ю. И. Елихина（Konagaya, Y.（ed.), J. I. Elikhina）

2014 *Некоторые археологические находки Монголо-советской экспедиции под руководством С.В. Киселева: Городище Каракорум, коллекция Государственного Эрмитажа*（*Some Archeological Findings of the Mongolian-Soviet Expedition Led by S.V. Kiselev: Karakorum Settlement Relicts Stored in Hermitage Museum*）（Senri Ethnological Reports 123). Osaka: National Museum of Ethnology（ロシア語・英語）［査読有］.

［共著］

小長谷有紀・サランゲレル・ソヨルマ編

2014 『20世紀におけるブリヤート人たち――中国内モンゴル自治区フルンボイルにおける口述史』（国立民族学博物館調査報告119）大阪：国立民族学博物館［査読有］。

［事典項目］

小長谷有紀

2014 「環境破壊」『世界民族百科事典』pp.624-625, 東京：丸善出版。

［その他］

小長谷有紀

2014 「モンゴルにおけるウマの習性と個性に対する認知」『BIOSTORY』21：72-79。

2014 「梅棹忠夫探訪記①梅棹のコーパス」『ミネルヴァ通信「究」』37：20-23。

2014 「みんぱく、こぼれ話⑤『日本を愛してくれて、ありがとう！』」『TOYRO BUSINESS』164：30。

2014 「梅棹忠夫探訪記②近くて遠い今西錦司との仲」『ミネルヴァ通信「究」』38：20-23。

2014 「梅棹忠夫探訪記③水平思考の生まれる秘密」『ミネルヴァ通信「究」』39：20-23。

2014 「梅棹忠夫探訪記④『知的生産』の原理」『ミネルヴァ通信「究」』40：20-23。

2014 「梅棹忠夫探訪記⑤ロングセラーの源泉」『ミネルヴァ通信「究」』41：20-23。

2014 「みんぱく、こぼれ話⑥『クリミア危機の余波がブリヤートの歌姫に』」『TOYRO BUSINESS』165：30。

2014 「世界の現在　サンドイッチの具であるモンゴルからのラブコール」『坂の上の雲ミュージアム通信「小日本」』18：３-５。

2014 「モンゴル研究の歩みたどる」『信濃毎日新聞』７月16日。

2014 「梅棹忠夫探訪記⑥ローマ字運動への傾倒」『ミネルヴァ通信「究」』42：20-23。

2014 「歴代大統領たち――リーダーたちの横顔（プロフィール）」『現代モンゴルを知るための50章』pp.24-28, 東京：明石書店。

2014 「農業開発『アタル』――食糧安全保障と環境保全のはざま」『現代モンゴルを知るための50章』pp.49-52, 東京：明石書店。
2014 「研究と本とわたし――未知の世界へのあくなき探究心で人類の歴史と文化を読み解く』」『WEDGE Infinity』10月１日（http://wedge.ismedia.jp/articles/-/4242?page=1）。
2014 「みんぱく、こぼればなし⑦『消費者が若き研究者たちを支援する』」『TOYRO BUSINESS』166：30。
2014 「梅棹忠夫探訪記⑦『カメラと写真』」『ミネルヴァ通信「究」』43：20-23。
2014 「モンゴルの遊牧文化を通して自分自身を見直すきっかけに！」『club keibun』（しがぎん経済文化センター）386：2。
2014 「本で知る人生いろいろ第35回　そうはなれなかった我が脇道の話――梅棹忠夫」『SUMISEI Best Book』347：29。
2014 「梅棹忠夫探訪記⑧『引紹批言』の記録」『ミネルヴァ通信「究」』44：20-23。
2014 「梅棹忠夫探訪記⑨文章表現をめぐる飽くなき努力」『ミネルヴァ通信「究」』45：20-23。
2015 「梅棹忠夫探訪記⑩ヒツジをめぐる物語」『ミネルヴァ通信「究」』46：20-23。
2015 「みんぱく、こぼれ話⑧『出前サービスをつくるも…』」『TOYRO BUSINESS』164：30。
2015 「梅棹忠夫探訪記⑪ベンゼン核の好敵手」『ミネルヴァ通信「究」』47：20-23。
2015 「知的生産学ぶ『梅棹キット』」『読売新聞』２月10日夕刊。

**・国立民族学博物館映像音響資料の制作・監修**

［ビデオテーク］

小長谷有紀監修

2014 『トゥバ人たちの住むところ』日本語，83分。

◎口頭発表・展示・その他の業績

**・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告**

2014年５月６日 「梅棹忠夫と21世紀の『知的生産の技術』情報デザインの未来・過去・現代」一般財団法人ナレッジキャピタル、グランフロント大阪ナレッジキャピタル北館タワーＣ８階

**・研究講演**

2014年９月６日 「知的生産の技術――民族学者、梅棹忠夫の眼」ナレッジキャピタル「超」学校シリーズ『21世紀の「知的生産の技術」vol.5　梅棹忠夫の眼――写真にみるその視点とは』一般社団法人ナレッジキャピタル、グランフロント大阪北館ナレッジキャピタル１F CAFE Lab.

**・広報・社会連携活動**

「梅棹忠夫のモンゴル調査をたどる旅――中国内モンゴルの草原と史跡をゆく」第84回国立民族学博物館友の会民族学研修の旅（2014年９月８日～９月14日）、みんぱっく制作「歩くウメサオタダオ展」

◎調査活動

**・海外調査**

2014年８月４日～８月12日―モンゴル（中央・北アジア展示新構築のための資料収集）

◎大学院教育

**・論文審査**

博士論文審査委員（１件）

◎上記以外の研究活動

**・他機関から委嘱された委員など**

大同生命地域研究賞選考委員、中央環境審議会臨時委員（自然環境部所属臨時委員）、科学技術・学術審議会臨時委員（学術分科会）、東京大学東洋文化研究所付属東洋学研究情報センター運営委員会委員、日本学術振興会専門委員、京都大学経営協議会委員、総合研究大学院大学博士論文審査委員

## 庄司博史［しょうじ　ひろし］――教授

**【学歴】**ヘルシンキ大学人文学部卒（1977）、関西外国語大学大学院外国語研究科修士課程修了（1980）**【職歴】**国立民族学博物館第３研究部助手（1980）、国立民族学博物館第３研究部助教授（1990）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（1991）、国立民族学博物館民族社会研究部助教授（1998）、国立民族学博物館民族社会研究部教授（1999）、国立民族学博物館民族社会研究部部長（2000-2002）、総合研究大学院大学文化科学科比較文化専攻長（2003-2004）**【学位】**文学修士（関西外国語大学 1980）**【専攻・専門】**言語学、ウラル語学、言語政策論**【所属学会】**日本

ウラル学会、日本言語学会、日本社会言語科学会、日本移民学会、多言語化現象研究会、International Sociological Association

**【主要業績】**

［編著］

庄司博史編

1999 『ことばの二〇世紀』（二〇世紀における諸民族文化の伝統と変容６）東京：ドメス出版。

［共編］

庄司博史・P. バックハウス・F. クルマス編

2009 『日本の言語景観』東京：三元社。

真田信治・庄司博史編

2005 『事典――日本の多言語社会』東京：岩波書店。

**【2014年度の活動報告】**

◎各個研究

**・研究課題**

日本の多民族化・多言語化の実態についての研究

**・研究の目的、内容**

本研究では近年の外国人増加にともなう地域の多民族化の実態をふまえ、多民族化がいかに社会の多言語化に影響するか、また多言語化はいかに日本社会の言語間の関係、日本人の言語意識にかかわるかに焦点をあて研究を進めてきた。昨年度に引き続き、特に多言語化の実態を移民言語とのかかわりに注目しながら、検討を進めていく予定である。また今日移民の中でもあまり注目されることの少なかった非識字者の社会参加に関する調査も国際比較の観点から進める予定である。

**・成果**

今年度は、以下の出版、および学会での口頭による発表、講演をおこなった。

◎出版物による業績

［編著］

庄司博史編

2015 『世界の文字事典』東京：丸善出版。

［事典項目］

庄司博史

2014 「民族と言語」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.24-25，東京：丸善出版。

2014 「５. 言語・文字」（セクション概説）国立民族学博物館編『世界民族百科事典』p.165，東京：丸善出版。

2014 「移民言語」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.174-175，東京：丸善出版。

2014 「多言語化・多言語主義」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.192-193，東京：丸善出版。

2014 「言語景観」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.196-197，東京：丸善出版。

2014 「母語教育」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.288-289，東京：丸善出版。

2014 「多言語社会」『日本語大事典 下巻』pp.1293-1294，東京：朝倉書店。

2015 「エストニア語」庄司博史編『世界の文字事典』pp.28-31，東京：丸善出版。

2015 「フィンランド語」庄司博史編『世界の文字事典』pp.76-79，東京：丸善出版。

［その他］

庄司博史

2014 「旅・いろいろ地球人　共に生きる③　多数派はどっち？」『毎日新聞』４月24日夕刊。

2014 「みんぱく世界の旅　日本に住む外国人①　さまざまな国の言葉と文化」『毎日小学生新聞』５月３日。

2014 「みんぱく世界の旅　日本に住む外国人②　日本にある外国人学校」『毎日小学生新聞』５月10日。

2014 「特別展『多みんぞくニホン』から10年」『月刊みんぱく』38(8)：2-3。

2015 「もう一つの『東海』」『月刊みんぱく』39(1)：21。

2015 「文字をめぐる雑感」『みんぱく e-news』164（http://www.minpaku.ac.jp/museum/enews/164）

2015 「フィンランドのソウルフード？　カレリア・パイ」『月刊みんぱく』39(3)：18-19。

Shoji, H.

2014　Examining the Linguistic Mind of Japanese. *MINPAKU Anthropology Newsletter* 39: 9–11.

◎映像音響メディアによる業績

**・電子ガイドの制作・監修**

庄司博史制作・監修

2015 『移民と日本』日本語，英語，中国語，韓国語。

2015 『多文化をになう子どもたち』日本語，英語，中国語，韓国語。

**・DVD・CD などの制作・監修**

［DVD］

庄司博史監修

2014 『エストニアの伝統文化』みんぱく映像民族誌第16集，国立民族学博物館撮影・製作，日本語77分。

**・TV・ラジオ番組などの制作・監修**

［TV 番組］

庄司博史監修

2014 「サーミ人地域」『THE 世界遺産』TBS（11月 9 日放送）。

◎口頭発表・展示・その他の業績

**・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告**

2014年 7 月 5 日 「フィンランド語のカタカナ表記に関する考察――フィンランド語前舌母音の聴覚テストにもとづき」第41回日本ウラル学会研究発表大会、中部大学

2014年 7 月18日 ‘Is a Multilingual Mind Possible for the Japanese?’ XVIII International Sociological Association World Congress of Sociology, Pacifico Yokohama, Japan

**・みんぱくゼミナール**

2014年 5 月17日「多みんぞくニホンのいま――特別展から10年」第432回みんぱくゼミナール

**・研究講演**

2014年 9 月 8 日 ‘Monikulttuuristuva ja Monikielistyvä Japani, onko totta?’ University of Helsinki, Department of World Cultures and Japanin Kulttuurin Ystävät RY., University of Helsinki, Republic of Finland

2014年10月25日 「大自然と物語の国々　北欧がおもしろい②　伝統と革新――フィンランド再発見」NHK 文化センター・梅田

◎調査活動

**・海外調査**

2014年 8 月25日～ 9 月10日―フィンランド、エストニア（エストニア南部セト地方の民族関係及びフィンランド移民政策に関する調査）

◎大学院教育

**・指導教員**

主任指導教員（ 1 人）

**・審査委員**

予備審査委員（ 1 件）

◎社会活動・館外活動

**・他の機関から委嘱された委員など**

NPO 法人多言語センター Facil 理事、貝塚市人権擁護審議会委員・副委員長

**・非常勤講師**

関西外国語大学「フィンランド語」、京都外国語大学「言語と文化」

## 西尾哲夫［にしお　てつお］ 教授

1958年生。**【学歴】**大阪外国語大学外国語学部アラビア語科卒（1981）、京都大学大学院文学研究科修士課程言語学専攻修了（1984）、京都大学大学院文学研究科博士後期課程言語学専攻満期退学（1987）**【職歴】**東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助手（1989）、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助教授（1994）、国立民族学博物館第２研究部助教授（1996）、国立民族学博物館民族文化研究部助教授（1998）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（1998）、国立民族学博物館研究戦略センター助教授（2004）、国立民族学博物館民族社会研究部教授（2006）、国立民族学博物館民族文化研究部長（2008）、国立民族学博物館研究戦略センター長（2011）、国立民族学博物館副館長（2012）**【学位】**文学博士（京都大学大学院文学研究科 2005）、言語学修士（京都大学大学院文学研究科 1984）**【専攻・専門】**言語学・アラブ研究 1）アラブ遊牧民の言語人類学的研究、2）アラビアン・ナイトをめぐる比較文明学的研究**【所属学会】**日本言語学会、日本中東学会、日本オリエント学会

**【主要業績】**

［単著］

西尾哲夫

2013 『ヴェニスの商人の異人論――人肉一ポンドと他者認識の民族学』東京：みすず書房。

2011 『世界史の中のアラビアンナイト』（NHK ブックス）東京：NHK 出版。

2007 『アラビアンナイト――文明のはざまに生まれた物語』東京：岩波書店。

**【受賞歴】**

2011　第28回田邉尚雄賞（東洋音楽学会）

1992　オリエント学会奨励賞

1992　新村出記念財団研究助成賞

1992　流沙海西奨学会賞

**【2014年度の活動報告】**

◎各個研究

**・研究課題**

アラブ世界の言語社会的位相と文学伝統の変容

**・研究の目的、内容**

2010年、エジプト検察当局は、イスラーム系弁護士団体による「アラビアンナイト発禁処分申し立て」を「古くから読まれており芸術家にも影響を与えてきた」という理由で却下した。近世エジプトでは、都市部中流層の台頭などによる中間アラビア語の誕生にともない、中世シリアの伝承物語集に民間説話が付加されて現在のアラビアンナイトが成立した。この過程ではキリスト教徒も関与しており、挿絵入りエジプト系写本が新たに発見された。近世エジプト系写本の物語および言語分析を通し、相反する価値観が併存してきた理由ならびに異文化交流による成立過程を解明する。また、中間アラビア語の発生と伝播を通じて顕著にみられるアラブ世界に特徴的な言語社会的位相を分析し、フェイスブック革命に代表される社会変動メカニズムを解明する。

**・成果**

1）編著書として、『〈断〉と〈続〉の中東――非境界的世界を游ぐ』（堀内正樹と共編、悠書館）を刊行した。同書中に論文として、「枠物語異聞――もうひとつのアラビアンナイト、ヴェッツシュタイン写本試論」pp.379-412を発表した。

2）研究発表として、「シンドバード航海記の写本の分類と系統――筆写年入り写本として最古のペティス・ド・ラ・クロワ『アラブの物語　海のシンドバード』をめぐって」日本オリエント学会第56回大会（於：上智大学、2014年10月26日）をおこなった。

3）一般向けの研究広報として、「アラビアンナイトの変容――語り継がれる物語」『季刊民族学』148号、pp.85-94を発表した。また「イスラームの世界観――アラビアンナイトから考える」（カレッジシアター地球探検紀行第22回、於：あべのハルカス近鉄本店ウイング館９F「SPACE 9」、2014年11月12日）の講演をおこなった。

4）事典等の項目として、「グローバル化する舞踊」（米山知子と共著）国立民族学博物館編『世界民族百科事典』（丸善出版）、「セム諸語」佐藤武義・前田富祺他編『日本語大事典』（朝倉書店）、「アラビア語」庄司博史編

『世界の文字事典』（丸善出版）を執筆・刊行した。

5）科学研究費補助金（基盤研究（A））「アラブ世界の都市部中流層文化とアラビアンナイト――エジプト系伝承形成の謎を解く」（代表：西尾哲夫）による国内調査ならびに文献調査をおこなった。

◎出版物による業績

［共編著］

堀内正樹・西尾哲夫編

2014 『〈断〉と〈続〉の中東――非境界的世界を游ぐ』東京：悠書館［査読有、国立民族学博物館共同研究成果］。

［論文］

西尾哲夫

2014 「枠物語異聞――もうひとつのアラビアンナイト、ヴェッツシュタイン写本試論」堀内正樹・西尾哲夫編『〈断〉と〈続〉の中東――非境界的世界を游ぐ』pp.379-412，東京：悠書館［査読有、国立民族学博物館共同研究成果］。

［その他］

西尾哲夫

2014 「アラビアンナイトの変容――語り継がれる物語」『季刊民族学』148：85-94。

［事典項目］

西尾哲夫・米山知子

2014 「グローバル化する舞踊」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.488-489，東京：丸善出版。

西尾哲夫

2014 「セム諸語」佐藤武義・前田富祺他編『日本語大事典 上巻』pp.1218-1220，東京：朝倉書店。

2015 「アラビア語」庄司博史編『世界の文字事典』pp.316-321，東京：丸善出版。

◎口頭発表・展示・その他の業績

**・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告**

2014年10月26日 「シンドバード航海記の写本の分類と系統――筆写年入り写本として最古のペティス・ド・ラ・クロワ『アラブの物語　海のシンドバード』をめぐって」日本オリエント学会第56回大会、上智大学

**・研究講演**

2014年11月12日 「イスラームの世界観――アラビアンナイトから考える」産経新聞社主催、みんぱく創設40周年記念カレッジシアター「地球探究紀行」あべのハルカス近鉄本店 ウイング館９階SPACE９

**・展示**

年末年始展示イベント「ひつじ」

◎大学院教育

**・大学院ゼミでの活動**

論文ゼミ担当、「研究マネージメントと競争的外部資金」１年生ゼミ、テーマシリーズ（2014年９月25日）

◎上記以外の研究活動

**・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など**

科学研究費補助金（基盤研究（A））「アラブ世界の都市部中流層文化とアラビアンナイト――エジプト系伝承形成の謎を解く」研究代表者、科学研究費補助金（基盤研究（B））「中東・北アフリカ地域における音文化の越境と変容に関する民族音楽学的研究」（研究代表者：水野信男）研究分担者

◎社会活動・館外活動

**・他機関から委嘱された委員など**

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所運営委員

**・非常勤講師**

京都大学文学部「アラブ語」

## MATTHEWS, Peter Joseph［マシウス、ピーター・ジョセフ］―――― 教授

1959年生。**【学歴】**オークランド大学卒（1981）、オークランド大学大学院修士課程修了（1984）、オーストラリア国立大学大学院博士課程修了（1990）**【職歴】**科学技術庁特別研究員（農水省野菜茶業試験場）（1990）、日本学術振興会特別研究員（京都大学理学部）（1993）、国立民族学博物館第4研究部助手（1995）、国立民族学博物館民族学研究開発センター助手（1998）、国立民族学博物館民族学研究開発センター助教授（1999）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2002）、国立民族学博物館研究戦略センター助教授（2004）、国立民族学博物館民族社会研究部准教授（2008）、国立民族学博物館民族社会研究部教授（2015）**【学位】**Ph.D.（オーストラリア国立大学 1990）、M. Sc.（オークランド大学 1984）**【専攻・専門】**先史学、民族植物学**【所属学会】**Society for Economic Botany, Indo-Pacific Prehistory Association, Society of Writers, Editors and Translators, International Aroids Society, European Association of Science Editors, World Archaeology Congress, Royal Society of New Zealand

**【主要業績】**

［単著］

Matthews, P. J.

2014 *On the Trail of Taro: An Exploration of Natural and Cultural History*（Senri Ethnological Studies 88). Osaka: National Museum of Ethnology.

［編著］

Spriggs, M., D. Addison and P. J. Matthews（eds.）

2012 *Irrigated Taro*（Colocasia esculenta）*in the Indo-Pacific: Biological, Social and Historical Perspectives*（Senri Ethnological Studies 78). Osaka: National Museum of Ethnology.

［論文］

Matthews, P. J.

2010 An Introduction to The History of Taro as a Food. In V. R. Rao, P. J. Matthews, P. B. Eyzaguirre, and D. Hunter（eds.）*The Global Diversity of Taro: Ethnobotany and Conservation*, pp.6-29. Rome: Bioversity International.

**【2014年度の活動報告】**

◎各個研究

**・研究課題**

辺境少数民族地帯での植物利用及び伝統知の遺存と地域発展活動や国際経済の影響評価

**・研究の目的、内容**

1）アジア・太平洋地域のサトイモと他の食べられるサトイモ科植物の自然史・文化史の探究。食用サトイモ科植物の野生近縁種の民族植物学・生態学・遺伝子学に重点を置く。(a) その一環として、台湾で現地調査を行う。(b) 2013年に得られた *Colocasia esculenta* と *Alocasia macrorrhizos*（フィリピン中部―南部）の葉緑体DNAの遺伝子座の分析を継続して行う。

2）植物利用及び伝統知の遺存：インド北部・ミャンマーにおける食用サトイモ科植物とその野生近縁種の民族植物学的野外調査。このため、インドのグワハチ大学、ミャンマーのイェヴィン農業大学との協力体制を継続する。

**・成果**

University of BernのLinguistics Institute（スイス）のDr. Maxwell P. Phillipsが主催する国際シンポジウム“Migrations and Transfers in Prehistory: Asian and Oceanic Ethnolinguistic Phylogeography”（2014年7月27日～31日）とUniversidad Academia Humanismo CristianoのEscuela de Antropología（チリ）のDr. Andrea Seelenfreundが主催する国際シンポジウム“Barkcloth and Paper Mulberry in the Asia Pacific Region”（2014年10月6日～19日）へ発表者として招待された。

また、執筆中の論文は、1）ニュージーランドと日本のワラビの利用と歴史の検討、2）フィリピンでのColocasia formosana発見の報告、3）野生種・栽培種サトイモの系統を区分するために葉緑体DNAのテストを利用したアジア・太平洋地域のColocasia 200標本の研究結果報告、である。ウェブサイト『Wild Taro Research Project』の維持・更新を続ける。

◎出版物による業績

［論文］

Matthews, P. J.

2014 Memories of New Zealand. In Tokyo Bunkamura Museum of Art（ed.）*Captain Cook's Voyage and Banks' Florilegium*, pp.72–73. Tokyo: Bunkamura（Exhibition Catalogue).

Matthews, P. J. and D. Medhi

2014 Feasibility Study for Field Research: Ethnobotany and Ecology of Wild and Cultivated Aroids in Assam State, Northeast India. *Annual Report on Exploration and Introduction of Plant Genetic Resources*（*AREIPGR*）30: 159–183［査読有］.

Matthews, P. J. and D. V. Nguyen

2014 Origins and Development of Taro. In C. Smith（ed.）*Encyclopedia of Global Archaeology* vol.9, pp.7237–7240. Berlin: Springer.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2014年７月27～31日 'Phylogeography, Ethnobotany, and Linguistics: Issues Arising from Research on the Natural and Cultural History of Taro *Colocasia esculenta*（L）Schott'（see Matthews et al. 2015, in press), presented at International Symposium: "Migrations and Transfers in Prehistory: Asian and Oceanic Ethnolinguistic Phylogeography, Bern"（Organiser: Maxwell P. Phillips), Linguistics Institute, University of Bern, Switzerland

2014年10月８日 'Historical Ethnobotany of Paper Mulberry in Asia and the Pacific,' "Keys to Understand the Colonization of Easter Island: Migration patterns of Polynesians to Remote Oceania through Genetic Analysis of Paper Mulberry（*Broussonetia papyrifera*)"（Organiser: Andrea Seelenfreund, Escuela de Antropología), Universidad Academia Humanismo Cristiano, Santiago City, Chile

2014年10月９日 'Ethnobotany and Genetics: Approaches to the Study of Human History in the Pacific,' "Keys to Understand the Colonization of Easter Island: Migration patterns of Polynesians to Remote Oceania through Genetic Analysis of Paper Mulberry（Broussonetia papyrifera)"（Organiser: A. Seelenfreund), Universidad Academia Humanismo Cristian, Santiago City, Chile

2014年10月14日 (public lecture) 'Ethnobotany and Plant Dispersals: From Southeast Asia to Rapanui,' "Keys to Understand the Colonization of Easter Island: Migration patterns of Polynesians to Remote Oceania through Genetic Analysis of Paper Mulberry（Broussonetia papyrifera)"（Organiser: A. Seelenfreund), William Mulloy Library, Museo Antropológico P. Sebastián Englert, Hangaroa, Rapanui, Chile

2014年10月25日 'Research on the Natural and Cultural History of Taro *Colocasia esculenta*（L）Schott,' World Vegetable Center, Tainan City, Taiwan（AVRDC）

2014年12月11日 'Origins of Taro: The Phylogeographic Approach,' "Origin of Japonesians"（Organiser: Naruya Saito), Sokendai project meeting, Hayama

2015年１月20日 'Taro（*Colocasia esculenta*）as a Useful Wild Vegetable in Asia and the Pacific: Distribution in Natural Habitats and Modified Environments,' the National Seminar on Environmental Issues, Bhawanipur Anchalik College, Barpeta City, Assam, India

2015年２月５日 'On the Trail of Taro: *Kochu* in Assam,' 3rd D. N. Majumdar Memorial Talk, Kanaklal Barua Auditorium, Assam State Museum, Guwahati City, Assam, India

2015年２月６日 'Research and Research Communication,'（invited lecture）Karmashree Hiteswar College, Guwahati City

・広報・社会連携活動

2014年12月22日 Gallery talk for Exhibition Opening: "Captain Cook's Voyage and Bank's Florilegium," 23rd Dec. 2014 – 1st March 2015, Bunkamura Museum of Art Museum, Tokyo

2015年３月29日 「パプア・ニューギニアのタイムカプセル――ジョージ・ブラウン・コレクション」第377回みんぱくウィークエンド・サロン

◎調査活動

・**海外調査**

2014年7月24日～8月7日―スイス、イタリア（国際会議「先史期の移住と転移：アジア・オセアニアの民族言語学的系統地理学」に参加、研究セミナーに参加、イタリア考古学コレクションに係る情報・資料収集）

2014年8月21日～9月6日―台湾（中央研究院・世界野菜センターにおいて研究討論に参加及びサトイモ属・コウゾ属植物野外調査）

2014年10月5日～10月20日―チリ（カジノキと太平洋の民族植物学に関する国際ワークショップに参加）

2015年1月15日～2月7日―インド（アッサム地方におけるサトイモ科植物に関する野外調査）

◎大学院教育

・**指導教員**

主任指導教員（1人）

・**大学院ゼミでの活動**

論文ゼミ「比較技術研究演習Ⅰ」

◎上記以外の研究活動

・**人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など**

科学研究費補助金（基盤研究（A））「辺境少数民族地帯での植物利用および伝統知の遺存と地域発展活動や国際経済の影響評価」（研究代表者：渡邊和男）研究分担者

## 横山廣子［よこやま　ひろこ］―― 教授

**【学歴】**東京大学教養学部教養学科文化人類学分科卒（1977）、東京大学大学院社会学研究科修士課程修了（1981）**【職歴】**東京大学教養学部助手（1981）、東洋英和女学院短期大学国際教養科専任講師（1986）、東洋英和女学院大学人文学部社会科学科助教授（1989）、国立民族学博物館第2研究部助教授（1994）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（1994）、国立民族学博物館民族社会研究部助教授（1998）、国立民族学博物館民族社会研究部教授（2015）、総合研究大学院大学地域文化学専攻長（2015）**【学位】**社会学修士（東京大学大学院社会学研究科 1981）**【専攻・専門】**文化人類学 1）雲南省大理ペー族社会の研究、2）中国における国家とエスニシティに関する研究、3）中国西南部から東南アジア大陸部における民族集団の移動と包摂に関する研究**【所属学会】**日本文化人類学会、東南アジア学会、American Anthropological Association

**【主要業績】**

［編著］

横山廣子編

2004　『少数民族の文化と社会の動態――東アジアからの視点』（国立民族学博物館調査報告50）大阪：国立民族学博物館。

2001　『中国における民族文化の動態と国家をめぐる人類学的研究』（国立民族学博物館調査報告20）大阪：国立民族学博物館。

［共編］

塚田誠之・瀬川昌久・横山廣子編

2001　『流動する民族――中国南部の移住とエスニシティ』東京：平凡社。

**【2014年度の活動報告】**

◎各個研究

・**研究課題**

中国雲南省とその隣接地域における文化・社会とアイデンティティ

・**研究の目的、内容**

政治や経済の情勢、あるいは人々をとりまく社会状況の変化とともに、地域の人々の生活や文化・社会がどのように変化し、それとともに自身やその属する集団、社会的カテゴリー、あるいは文化に対する人々の認識や意識がどのように変化するかを現地調査データならびに民族誌などの調査資料、地方志などの歴史的資料に基

づいて実証的に明らかにする。

・成果

近年、中国では世界的な文化遺産指定の進展のなかで、政府による文化政策が急速に推進されている。それが引き金になって各地で文化を活用した観光開発など、文化をめぐる新たな変化と問題が生じている。その問題を考察するための比較事例として、2014年９月に山西大学（中国山西省太原市）にて開催された「人類学と黄土文明」をテーマとする「第13回人類学高級フォーラム」に出席し、「文化遺産保護とコミュニティ住民の参加――富田林寺内町建造物群の事例から」という報告をおこない、日本における町並み保存の事例に関して、比較的成功をおさめている要因の分析を提示した。また、2012年９月に山西省介休市で開催された国際円卓会議での報告をもとに同様の趣旨で執筆した論文が収録された『黄土文明一亮点』（喬 健・王 懐民主編）が台湾の華芸学術出版社より刊行された（2014年９月）。

雲南省の少数民族の社会と文化の近年の状況に関する民族誌的研究の一端として、民博ビデオテーク番組「回族の婚礼――中国雲南省大理」、「リス語の讃美歌――中国雲南省怒江リス族自治州の教会」、「ミャオ族の聖歌隊――中国雲南省富民県西山教会献堂式」の３本の番組を編集し、完成させた。

◎出版物による業績

［論文］

横山廣子

2014 「博物館以及城市文化遺産的保護与発展」喬 健・王 懐民主編『黄土文明一亮点――介休市保護文化遺産与発展城市文化論述』pp.45-75，台湾新北市：華芸学術出版社。

［その他］

横山廣子

2014 「おしゃれ心がいっぱい」『月刊みんぱく』38(5)：6-7。

2014 「宗教と文字をめぐる文明・文化の展開」『月刊みんぱく』38(5)：8-9。

2014 「人民服――二〇世紀中葉に中国で隆盛した制服系ファッション」『月刊みんぱく』38(7)：22-23。

2014 「旅いろいろ地球人　共に生きる②　大理のペー族と回族」『毎日新聞』４月17日夕刊。

2014 「旅いろいろ地球人　組織③　雲南で広がる教会の輪」『毎日新聞』10月９日夕刊。

◎映像音響メディアによる業績

・国立民族学博物館映像音響資料の制作・監修

［ビデオテーク］

横山廣子監修

2015 「回族の婚礼――中国雲南省大理」（33分，2012年撮影，2015年製作）。

2015 「リス語の讃美歌――中国雲南省怒江リス族自治州の教会」（19分，1997年，2010年撮影，2015年製作）。

2015 「ミャオ族の聖歌隊――中国雲南省富民県西山教会献堂式」（20分，2010年撮影，2015年製作）。

・電子ガイドの制作・監修

［中国地域の文化展示］

横山廣子監修

2014 「チベット族男性の衣装」日本語，英語，韓国語，中国語。

2014 「ペー族老年女性の衣装」日本語，英語，韓国語，中国語。

2014 「刺繍図案の切り紙」日本語，英語，韓国語，中国語。

2014 「ペー族の位牌と家型厨子」日本語，英語，韓国語，中国語。

2014 「回族の礼拝」日本語，英語，韓国語，中国語。

2014 「トンパ経典」日本語，英語，韓国語，中国語。

2014 「讃美歌が響く村の教会」日本語，英語，韓国語，中国語。

2014 「酒入れ（改訂）」日本語，英語，韓国語，中国語。

2014 「持仏入れ（改訂）」日本語，英語，韓国語，中国語。

2014 「マニ車（改訂）」日本語，英語，韓国語，中国語。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウム

2014年11月22日 「コメント／第２セッション 国家と社会のディスコース」機関研究成果公開 国際シンポジウム『中国文化の持続と変化――グローバル化の中の家族・民族・国家』国立民族学博物館

2015年１月24日　「コメント／第Ⅰ部 中国の有形文化遺産①　住民の眼から見た世界遺産」機関研究成果公開 国際フォーラム『中国地域の文化遺産――人類学の視点から』国立民族学博物館

**・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告**

2014年９月27日　「文化遺産保護とコミュニティ住民の参加――富田林寺内町建造物群の事例から」第13回人類学高級フォーラム（第13届人類学高級論壇）、山西大学（中国山西省太原市）

**・研究講演**

2014年５月９日　「特別講座・中国ムスリム回族の信仰と暮らし――雲南省大理から」産経新聞社主催、みんぱく創設40周年記念 カレッジシアター「地球探究紀行」あべのハルカス近鉄本店 ウイング館９階SPACE 9

2014年６月18日　「南詔大理国の末裔、ペー族の結婚式」産経新聞社主催、みんぱく創設40周年記念 カレッジシアター「地球探究紀行」あべのハルカス近鉄本店 ウイング館９階SPACE 9

2014年８月20日　「トンパ村――雲南シャングリラに芽生えた文化復興」産経新聞社主催、みんぱく創設40周年記念 カレッジシアター「地球探究紀行」あべのハルカス近鉄本店 ウイング館９階SPACE 9

**・広報・社会連携活動**

2014年５月11日　「雲南省におけるキリスト教の展開」第344回みんぱくウィークエンド・サロン

2014年10月27日　「ギャラリートーク　ミャオ族の衣装」特別展「イメージの力――国立民族学博物館コレクションにさぐる」国立民族学博物館特別展示館

◎調査活動

**・海外調査**

2014年９月26日～10月１日―中華人民共和国（中国山西省山西大学で開催される「第13回人類学高級フォーラム（第十三届人類学高級論壇）に参加）

◎大学院教育

**・指導教員**

主任指導教員（２人）

◎社会活動・館外活動等

**・他の機関から委嘱された委員など**

日本文化人類学会「学会賞検討委員会」委員

## 宇田川妙子［うだがわ　たえこ］――――――――――――**准教授**

1960年生。**【学歴】**東京大学教養学部教養学科第一卒（1982)、東京大学大学院社会学研究科修士課程修了（1984)、東京大学大学院総合文化研究科博士課程単位取得退（1990）**【職歴】**東京大学教養学部助手（1990)、中部大学国際関係学部講師（1992)、中部大学国際関係学部助教授（1995)、国立民族学博物館第３研究部併任助教（1997)、金沢大学文学部助教授（1998)、国立民族学博物館先端民族学研究部併任助教授（1998)、国立民族学博物館民族文化研究部助教授（2002)、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2002)、国立民族学博物館先端人類科学研究部助教授（2004)、国立民族学博物館民族社会研究部准教授（2010）**【学位】**社会学修士（東京大学大学院社会学研究科 1984）**【専攻・専門】**文化人類学 イタリアおよびヨーロッパ地域の人類学的研究・ジェンダーとセクシャリティ研究・ヨーロッパ近代をめぐる問題群**【所属学会】**日本文化人類学会、日本女性学会

**【主要業績】**

［共編］

宇田川妙子・中谷文美編

2007　『ジェンダー人類学を読む――地域別・テーマ別基本文献レヴュー』京都：世界思想社。

［論文］

宇田川妙子

2004　「広場は政治に代われるか――イタリアの戸外生活再考」『国立民族学博物館研究報告』28(3)：329-375。

1999　「イタリアの家族論と家族概念」『日伊文化研究』37：11-22。

【2014年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

公共性と親密性の再検討と再編

・研究の目的、内容

本研究は、近年さらなる注目を浴びている公共性と親密性（私性）という概念を、理論的に再検討していくことによって、生産的な意味での再編・陶冶につなげていくことを目的とする。具体的には、まずは、これまでの社会科学理論等における両概念の変遷や背景、多様性などを探っていく一方で、個別事例としてはイタリア社会を取り上げて、公共性と親密性という概念・構図が孕む限界や可能性を考察しながら、この概念図式のさらなる再編を試みていくつもりである。

・成果

地域性の問題について、科学研究費補助金（基盤研究（C））「現代イタリア社会におけるローカリティに関する文化人類学的研究」（2014-2017）を取得し、本年はその１年目として、９月半ばから約４週間ローマ近郊での現地調査とローマ大学等での文献調査を行い、イタリアにおける地域性の変容にかんして具体的な資料収集を開始するとともに、理論的考察の基礎となる議論を把握することができた。

『世界民族百科事典』（国立民族学博物館編　丸善出版　2014年６月）の編集委員を務めるとともに、「民族アイデンティティ」（pp.34-35）、「スローフードとローカル」（pp.452-453）、「社会化――養育、世代関係」（pp.660-661）を執筆した。

◎出版物による業績

［事典項目］

宇田川妙子

2014 「民族アイデンティティ」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.34-35, 東京：丸善出版。

2014 「スローフードとローカル」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.452-453, 東京：丸善出版。

2014 「社会化――養育、世代関係」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.660-661, 東京：丸善出版。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・広報・社会連携活動

2014年７月11日 「イタリアの家族」NPO法人大阪府高齢者大学校　世界の文化に親しむ科、大阪市教育会館

2014年７月18日 「イタリアの地域社会１」NPO法人大阪府高齢者大学校　世界の文化に親しむ科、大阪市教育会館

2014年７月25日 「イタリアの地域社会２」NPO法人大阪府高齢者大学校　世界の文化に親しむ科、大阪市教育会館

2014年９月９日 「こどもの朝ごはん」ふらっと市民セミナー、ふらっとねやがわ

2014年11月９日 「みんぱくワールドシネマ『海と大陸　TERRAFERMA』」みんぱく映画会

2014年11月14日 「イタリアと食」兵庫県阪神シニアカレッジ尼崎市中小企業センター

2014年11月19日 「地域社会にねづくイタリアの食」産経新聞社主催、みんぱく創設40周年記念 カレッジシアター「地球探究紀行」あべのハルカス近鉄本店 ウイング館９階SPACE９

2014年12月２日 「イタリアの家族」兵庫県阪神シニアカレッジ尼崎市中小企業センター

◎調査活動

・海外調査

2014年９月20日～10月20日―イタリア（科研「現代イタリア社会におけるローカリティに関する文化人類学的研究」に関わる調査）

2015年３月15日～３月19日―中華人民共和国（中国・広州の食文化調査）

◎大学院教育

・論文審査

予備審査委員（１件）

◎社会活動・館外活動等

・他の機関から委嘱された委員など

*Journal of Ethnic Foods*（Korea Food Research Institute）編集委員

## 太田心平［おおた　しんぺい］ 准教授

1975年生。**【学歴】**大阪大学人間科学部人間科学科社会学専修卒（1998）、大阪大学大学院人間科学研究科人間学専攻博士前期課程修了（2000）、ソウル大学大学院人類学科博士課程単位取得（2003）、大阪大学大学院人間科学研究科人間科学専攻博士後期課程修了（2007）**【職歴】**日本学術振興会特別研究員（PD）（2004）、大阪大学大学院人間科学研究科特任助手（2005）、国立民族学博物館先端人類科学研究部助教（2007）、国立民族学博物館研究戦略センター助教（2010）、アメリカ自然史博物館上級研究員（2011）、国立民族学博物館民族社会研究部助教（2012）、国立民族学博物館民族社会研究部准教授（2013）、総合研究大学院大学文化科学研究科比較文化学専攻併任准教授（2014）**【学位】**博士（人間科学）（大阪大学 2007）、修士（人間科学）（大阪大学 2000）**【専攻・専門】**社会文化人類学、北東アジア研究**【所属学会】**日本文化人類学会、韓国文化人類学会（韓国）、朝鮮学会、韓国・朝鮮文化研究会

**【主要業績】**

［論文］

太田心平

2012 「国家と民族に背いて――アイデンティティの生き苦しさ、韓国を去りゆく人びと」太田好信編『政治的アイデンティティの人類学――21世紀の権力変容と民主化にむけて』pp.304-336，京都：昭和堂。

2008 「センセーショナリズムへの冷笑――移行の言説としての韓国『民主化』と元労働運動家たちの懐古」石塚道子・田沼幸子・冨山一郎編『ポスト・ユートピアの人類学』pp.161-186，京都：人文書院。

Ota, S.

2006 Ryohan: Anthropology of Knowledge and the Japanese Representation of Korean Yangban under Colonialization. *Korean Cultural Anthropology* 39(2): 85-128（韓国語）。

**【2014年度の活動報告】**

◎各個研究

**・研究課題**

韓国・朝鮮における文化の統合性と多様性

**・研究の目的、内容**

韓国・朝鮮の社会は民族的な均質性が高く、その文化も統合的に捉えられている傾向が強い。しかし、社会の表面に色々な対立項が看守できるように、韓国・朝鮮の社会には多様性が秘められている。この研究の目的は、韓国・朝鮮の事例をもとに、社会文化の統合性と多様性の両立状況がいかに可能であり、それによりもたらされる緊張状態がいかに文化変容の原動力となっているのかを明らかにすることにある。

この期間には、この研究に２つの柱を立て、それらを中心として研究を推進する。

第１の柱は、1980年代以降の政治文化を対象としたもので、韓国の社会文化が、「民主化」とその前後の過程において、どのようなマクロ－ミクロ双対性をもっていたのかを明らかにするものである。こうした分野の研究は、大きな物語としてのイデオロギーと、小さな物語としての民衆世界という二項対立で論じられてきたが、この研究はそういった先行研究の蓄積を脱構築しようとする。援用するのは、イデオロギーへの着目の反面で軽視されてきたユートピアという概念であり、対象化するのは、民衆に寄り添うあまり蔑ろにされてきた知識人社会である。

第２の柱は、現在進行形の事象を研究対象とするものであり、韓国・朝鮮の社会文化が、世界の博物館展示としていかに編成されるか、そのメカニズムを明らかにするものである。この分野を遂行するため、科学研究費補助金（若手研究(B)）（課題番号：25871066、2013～2016年度）を研究代表者として受諾している。また、アメリカ自然史博物館人類学部門の上級研究員を兼業しているが、この兼業の研究課題はこの分野とする。日米韓の３か国においてフィールドワークをはじめるが、並行して文献研究を進め、欧州諸国における比較調査も進めることで、研究の効率化をはかる。

**・成果**

第１の柱、韓国・朝鮮の社会文化の「民主化」前後のマクロ－ミクロ双対性の研究に関しては、米国で招待講演をおこない、現地の研究者に研究結果を開示するとともに、深い意見交換をおこなった（S. C. Ota “If I Could Get Out of This Place: Utopistics of Newcomer Koreans in the Greater New York Area,” a brownbag lunchtime lecture, New York: American Museum of Natural History, 15, May, 2014.）。ここでは、「絶望移

民」と呼ばれる近年の韓国人移民に対して過去15年以上おこなってきたインタビュー調査および参与観察の結果を総括した。「絶望移民」は、マクロな韓国の国家政治と民族主義思想の観点から、社会問題として非難されがちである。しかし、ミクロな政治心性やユートピア思想の分析をつうじて、彼／彼女らが韓国の国家政治や民族主義思想にむしろ強く貢献してきた過去をもち、かつその延長線上で「絶望移民」となっていくことを立証できた。これは、従来のイデオロギー研究において「転向」と言いあらわされていた運動家たちの一見不可解な行為を、ユートピア研究の立場から必然的段階として解釈しなおすことに成功したという点で、学術的意義をもつ。

また、英文学術誌『Senri Ethnology Studies（SES)』に論文 “Collection or Plunder: Vanishing Sweet Memories of South Korea’s Democracy Movement” として成果を寄稿し、本年度中に査読を通過した。ここでは、人文社会科学において1990年代を中心に広く展開された記憶研究をとらえなおし、そうした記憶研究ブームが当事者の記憶の操作につながってきたという過程を明らかにした。これには、記憶研究を脱構築したという学術的意義がある。

第２の柱、韓国・朝鮮の社会文化の現在進行形の編成メカニズムに関しては、科学研究費補助金（若手研究(B)）（課題番号：25871066、2013～2016年度）により、韓国および米国で現地調査を進めるとともに、本館の機関研究「民族学資料の収集・保存・情報化に関する実践的研究――ロシア民族学博物館との国際共同研究」によって、ロシアの事例との比較検討を進めた。その成果は、国際ワークショップで学術発表をおこない、プロシーディングスとして公刊した（S. C. Ota “Failure Teaches Success: A Miscommunication between Source Community and Researchers,” International Workshop “Collaboration with Source Communities in the Exhibition of Collections and Media in Ethnological Museums,” Suita, Osaka: National Museum of Ethnology, 10 March, 2015)。ここでは、現代韓国において国史学者、民俗学者、人類学者が、韓国の表象するべき「真正な文化」をいかにして決定し、そこにどのような試行錯誤や、当事者との葛藤がみられるのかを事例報告した。これは、英文ではほとんどない韓国・朝鮮の旧在地士族層に関する事例報告である。より影響力あるメディアにて今後に公刊しなおすことにより、世界の韓国・朝鮮研究はもちろん、韓国における旧士族層の当事者たちにも貢献できるものと期待できる。この国際ワークショップでは、そのために必要な内容のピアレビューとブラッシュアップを受けることも出来た。

◎出版物による業績

［論文］

Ota, S.

2014 Failure Teaches Success: A Miscommunication between Source Community and Researchers. In *Proceedings of International Workshop “Collaboration with Source Communities in the Exhibition of Collections and Media in Ethnological Museums,”* pp.41–44, Osaka: National Museum of Ethnology.

［事典項目］

太田心平

2014 「『人種』のるつぼ――アメリカ」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.68–69, 東京：丸善出版。

2014 「ユートピア」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.558–559, 東京：丸善出版。

2014 「グローバル・シティ」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.586–587, 東京：丸善出版。

［その他］

太田心平

2014 「朝鮮半島から世界へ①　ニューヨークには韓国語がいっぱい」『毎日小学生新聞』４月19日。

2014 「朝鮮半島から世界へ②　キムチとわかちあい」『毎日小学生新聞』４月26日。

2014 「旅・いろいろ地球人　共に生きる④　多様化する婚礼衣装」『毎日新聞』５月１日夕刊。

2014 「マトリックス展示！――新しい『朝鮮半島の文化』展示」『月刊みんぱく』38(6)：2–4。

2015 「旅・いろいろ地球人　信じる⑦　アカ狩りにあった教会」『毎日新聞』３月５日夕刊。

◎映像音響メディアによる業績

**・電子ガイドの制作・監修**

［朝鮮半島の文化展示］

太田心平監修

2014 『旧制服』日本語，英語，韓国語，中国語。

2014 『新制服』日本語，英語，韓国語，中国語。
2014 『折衷婚礼服』日本語，英語，韓国語，中国語。
2014 『セマウル運動』日本語，英語，韓国語，中国語。
2014 『大型書店』日本語，英語，韓国語，中国語。
2014 『移民・留学』日本語，英語，韓国語，中国語。
2014 『国家試験準備（考試）』日本語，英語，韓国語，中国語。
その他、電子ガイド韓国語校閲合計34件。

◎口頭発表・展示・その他の業績

**・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告**

2015年３月10日 ‘Failure Teaches Success: A Miscommunication between Source Community and Researchers,’ International Workshop “Collaboration with Source Communities in the Exhibition of Collections and Media in Ethnological Museums,” National Museum of Ethnology（機関研究「民族学資料の収集・保存・情報化に関する実践的研究――ロシア民族学博物館との国際共同研究」（代表：佐々木史郎）

**・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告**

2014年11月１日 「社会的なもの（the social）依存症の症例とその予後の事例報告」東アジア人類学再考研究会、高知県立大学

**・みんぱくゼミナール**

2014年６月21日 「現在進行形の海外移民――韓国を去りゆく人びとの胸のうち」第433回みんぱくゼミナール

**・研究講演**

2014年５月15日 ‘If I Could Get Out of This Place: Utopistics of Newcomer Koreans in the Greater New York Area,’ A Brownbag Lunchtime Lecture, New York: American Museum of Natural History

**・研究公演**

2014年10月13日 「モンゴル秋祭り――ナマリーンバヤル」在大阪モンゴル総領事館主催、国立民族学博物館

**・広報・社会連携活動**

2014年５月24日 私立大阪桐蔭中学校課外学習
2014年６月15日 「韓国文化の変わった点と変わらない点」第348回みんぱくウィークエンド・サロン
2014年６月18日 MMP ステップアップ講座
2014年６月29日 MMP 新規募集にかかる養成研修
2014年７月13日 愛知県立旭丘高等学校課外学習

◎調査活動

**・海外調査**

2014年４月17日～５月18日―アメリカ合衆国（標本管理者のエージェンシーに関する調査研究）
2014年７月15日～10月11日―韓国、アメリカ合衆国（標本管理者のエージェンシーに関する調査研究）
2014年12月４日～2015年１月24日―アメリカ合衆国（標本管理者のエージェンシーに関する調査研究）

◎大学院教育

**・大学院ゼミでの活動**

１年生ゼミ　テーマシリーズ：知識人類学概論

**・審査委員**

予備審査委員（１件）

◎上記以外の研究活動

**・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など**

科学研究費補助金（若手研究（B））「博物館展示の再編過程の国際比較による『真正な文化』の生成メカニズムの解明」研究代表者、機関研究「文化遺産の人類学――グローバル・システムにおけるコミュニティとマテリアリティ」（研究代表者：飯田 卓）研究分担者、機関研究「民族学資料の収集・保存・情報化に関する実践的研究――ロシア民族学博物館との国際共同研究」（研究代表者：佐々木史郎）研究分担者、人間文化研究機構地域研究ネットワーク型基幹研究プロジェクト「北東アジア」ワーキングメンバー

◎社会活動・館外活動

**・他の機関から委嘱された委員など**

アメリカ自然史博物館人類学部門（アメリカ合衆国）上級研究員

**・非常勤講師**

大阪大学大学院人間文化研究科「政治経済の人類学特定演習／特別演習」、宮崎公立大学「韓国文化論」（集中講義）

## 佐藤浩司［さとう　こうじ］―― 准教授

**【学歴】**東京大学工学部卒（1977）、東京大学大学院修士課程修了（1983）、東京大学大学院博士課程単位取得（1989）**【職歴】**国立民族学博物館助手（1989）、国立民族学博物館助教授（1998）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2000）、国立民族学博物館文化資源研究センター助教授（2004）、国立民族学博物館民族社会研究部准教授（2008）**【学位】**工学修士（東京大学工学部 1989）**【専攻・専門】**建築史学、民族建築学**【所属学会】**建築史学会、民俗建築学会、家具道具室内史学会

**【主要業績】**

［編著］

佐藤浩司編

1998～1999 『シリーズ建築人類学《世界の住まいを読む》１～４』京都：学芸出版社。

**【2014年度の活動報告】**

◎各個研究

**・研究課題**

東南アジア木造建築史の再構築

**・研究の目的、内容**

東南アジアの木造建築史を概観するための資料の作成、東南アジア史の再構築。

**・成果**

東南アジアの木造建築を読み解くための資料を作成中。ホームページにて逐次公開している。http://www.sumai.org

◎調査活動

**・海外調査**

2014年６月28日～７月６日―インドネシア（ニアス島の建築文化に関する調査研究）

2014年８月29日～９月26日―インドネシア（インドネシアの建築文化に関する調査研究）

## 三島禎子［みしま　ていこ］―― 准教授

1963年生。**【学歴】**セネガル共和国国立応用経済学院社会コミュニケーション学部卒（1989）、津田塾大学大学院国際関係学研究科博士前期課程修了（1992）、パリ第５大学大学院社会科学研究科第２課程修了（1992）、パリ第５大学大学院社会科学研究科第３課程修了（1993）**【職歴】**国立民族学博物館第３研究部助手（1995）、国立民族学博物館民族社会研究部助手（1998）、国立民族学博物館民族社会研究部助教授（2003）**【学位】**D. E. A. Sci. Soc（パリ第５大学大学院社会科学研究科 1993）、M. Soc.（パリ第５大学大学院社会科学研究科 1992）、国際関係学修士（津田塾大学大学院国際関係学研究科 1992）**【専攻・専門】**文化人類学（西アフリカ研究）**【所属学会】**アフリカ学会、日本文化人類学会

**【主要業績】**

［編著］

Charbit, Y. et T. Mishima（éds.）

2014 *Question de migrations et de santé en Afrique sub-saharienne*. Paris: L'Harmattan.

［論文］

Mishima, T.

2014 Anthropologie des migrations internationales des Soninké : Formation et transmission de la richesse. In Y. Charbit et T. Mishima（éds.）*Question de migrations et de santé en Afrique sub-saharienne*. Paris: L'Harmattan.

三島禎子

2011 「民族の離散と回帰――ソニンケ商人の移動の歴史と現在」駒井 洋監修・編、小川充夫編『グローバル・ディアスポラ』pp.105-130, 東京：明石書店。

**【2014年度の活動報告】**

◎各個研究

**・研究課題**

アフリカ商業民の財の形成と継承に関する文化人類学的研究

**・研究の目的、内容**

アフリカ商業民によるアジア・アフリカ間貿易は、中国経済の拡大とともに今日のアフリカ経済の主要な現象のひとつになっている。西アフリカに故地をもつソニンケ民族は、地球規模の民族ネットワークでつながり、他の集団に先駆けてこの新しい経済機会をとらえた。その経済倫理には民族文化の伝統が受け継がれている。

10世紀以上前から商業民として知られるソニンケ民族は、民族文化とともにある種の「財」を継承してきたと考えられる。この有形・無形の「財」の本質と、継承の形態について調査し、移動と商業を生業とするソニンケの民族文化について考察を深めるのが本研究の目的である。

以下２件の科学研究費補助金において現地調査をおこなうとともに、文献調査では歴史的背景を把握する。

基盤研究（A）「環太平洋地域における移住者コミュニティの動態の比較研究――近年の変遷に注目して」（2011～2014年度、代表：栗田和明）

基盤研究（B）「日中韓在住アフリカ人の生活戦略とアジア――アフリカ関係の都市人類学的研究」（2014～2016年度、代表：和崎春日）

**・成果**

2014年３月１日～２日に開催した国際シンポジウム『個人・家族・国家のゆくえ――文化人類学と人口学からの学際的アプローチ』（人間文化研究機構の機構長裁量経費）の成果をとりまとめ、パリ・デカルト大学・人口開発研究所と共同で下記の本を出版した。

◎出版物による業績

［編著］

Charbit, Y. et T. Mishima（éds.）

2014 *Question de migrations et de santé en Afrique sub-saharienne*. Paris: L'Harmattan.

［論文］

Mishima, T.

2014 Anthropologie des migrations internationales des Soninké: Formation et transmission de la richesse. In Y. Charbit et T. Mishima（éds.）*Question de migrations et de santé en Afrique sub-saharienne*. Paris: L'Harmattan.

2014 Anthropological Analysis on Africa-Asia Trade: Dynamics of an Ethnic Group. In *Proceedings of International Symposium on Global Migration and Transnational Activities in Pacific Rim*, pp.26-34. Tokyo: Rikkyo Institute for Peace and Community Studies.

［その他］

三島禎子

2014 「『モノを見る目』といういかがわしさ」『季刊民族学』150：43。

2014 Individual, Family and State: Interdisciplinary Approach from Anthropology and Demography on International Migration and Health, International Symposium, March 1-2, 2014. *MINPAKU Anthropology Newsletter* 38: 13.

◎口頭発表・展示・その他の業績

**・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告**

2014年10月11日 「コメント」『ネルソン・マンデラ記念シンポジウム　南アフリカの過去と現在――ネルソン・

マンデラから続く道』国立民族学博物館

・**学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告**

2014年10月15日　'Anthropological Analysis on Africa-Asia Trade: Dynamics of an Ethnic Group,' International Symposium "Global Migration and Transnational Activities in the Pacific Rim," National Taiwan University

・**広報・社会連携活動**

2014年７月13日　「アフリカの布からみる世界の経済」第351回みんぱくウィークエンド・サロン

2014年12月５日　「一夫多妻のからくりと女性の一生――セネガルの婚姻事情」NPO 法人大阪府高齢者大学校　世界の文化に親しむ科、大阪市教育会館

2015年１月15日　「アフリカ式ビジネス――移動と商業」NPO 法人大阪府高齢者大学校　世界の文化に親しむ科、大阪市教育会館

2015年２月20日　「アフリカの布と商人――植民地交易から現代の国際貿易まで」園田・みんぱく連携講座「変化する現代世界」園田女子学園大学

◎調査活動

・**海外調査**

2014年10月12日～10月16日―台湾（台北大学における国際シンポジウムへ参加）

2015年２月２日～２月10日―大韓民国、シンガポール、ベトナム（アジア諸都市におけるアフリカ商人の生活実態についての調査及びアジアにおけるソニンケ商人のネットワークについての調査）

◎大学院教育

・**指導教員**

副指導教員（１人）

◎上記以外の研究活動

・**人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など**

科学研究費補助金（基盤研究（A））「環太平洋地域における移住者コミュニティの動態の比較研究――近年の変遷に注目して」（研究代表者：栗田和明）研究分担者、科学研究費補助金（基盤研究（B））「日中韓在住アフリカ人の生活戦略とアジア――アフリカ関係の都市人類学的研究」（研究代表者：和崎春日）研究分担者

◎社会活動・館外活動等

・**他の機関から委嘱された委員など**

*Revue Européenne des Migrations Internationales* 編集委員（アジア担当）、『アフリカ研究』編集委員

## 吉岡 乾［よしおか　のぼる］―― **助教**

1979年生。**【学歴】**東京外国語大学外国語学部ウルドゥー語学科卒（2003）、東京外国語大学大学院地域文化研究科博士前期課程（アジア第三専攻）修了（2007）、東京外国語大学大学院地域文化研究科博士後期課程修了（2012）**【職歴】**国立国語研究所言語対照研究系プロジェクト奨励研究員（2013）、日本学術振興会特別研究員 PD（2013）、東京外国語大学世界教養プログラム非常勤講師（2013）、国立民族学博物館民族社会研究部助教（2014）**【学位】**博士（学術）（東京外国語大学 2012）、修士（言語学）（東京外国語大学 2007）**【専攻・専門】**言語学、記述言語学、ブルシャスキー語、ドマーキ語、シナー語、南アジア（パキスタン）研究**【所属学会】**日本言語学会、関西言語学会、南アジア学会

**【主要業績】**

［博士論文］

Yoshioka, N.

2012　A Reference Grammar of Eastern Burushaski. 東京外国語大学大学院地域文化研究科。

［論文］

吉岡 乾

2014　「格配列パタンを決める動詞的要素と名詞的要素――パキスタンの言語を対照して」『思言：東京外国語大学記述言語学論集』10：159-202。

Yoshioka, N.
2010　The Interrogative Element in Burushaski. *Language, Area and Cultural Studies* 16: 383–391.

**【2014年度の活動報告】**

◎各個研究

**・研究課題**

北パキスタン諸言語の記述言語学的研究

**・研究の目的、内容**

北パキスタンは幾つもの系統の言語が多々入り乱れている地域であるが、それらの言語の記述研究はこれまでにも少なく、今現在も研究者が多くない状況にある。本研究は、ギルギット・バルティスタン自治州フンザ・ナゲル県モミナバード村などで話されている、消滅の危機にある言語であるドマーキ語を中心にしつつ、ブルシャスキ語、シナー語といった周辺言語も併せて、現地調査によって得られたデータを基に言語記述をしていくことを目的とする。

**・成果**

2014年度はシナー語の調査にも着手し、北パキスタン諸言語の最大勢力である印欧語インド・イラン語派のいわゆる「ダルド語群」の研究にも本格的に乗り出した。これにより、系統的孤立語のブルシャスキー語、インド語派中央インドグループのドマーキ語、「ダルド語群」のシナー語と、対照研究にも第三の系統グループが加わり、更に相同相異を考察できる環境が整ってきた。成果は、以下に示すように、論文、学会発表の形で公表した。

◎出版物による業績

［論文］

吉岡 乾

2014「格配列パタンを決める動詞的要素と名詞的要素――パキスタンの言語を対照して」『思言：東京外国語大学記述言語学論集』10：159–202［査読有］。

2014「ブルシャスキー語の希求法不定詞とは何か」『思言：東京外国語大学記述言語学論集』10：223–233［査読有］。

［その他］

吉岡 乾

2014「旅・いろいろ地球人　生き物⑧　その角が格好いいから」『毎日新聞』7月18日夕刊。

2014「名詞化とその周辺に存在する諸問題―― Malchukov（2006）の枠組みをもとにして（特集「名詞化」）」『思言：東京外国語大学記述言語学論集』10：205–209。

2015「ヒトの隣にヒツジ・ヤギ――パキスタン北部」『みんぱく e-news』163（http://www.minpaku.ac.jp/museum/enews/163）。

2015「パフラヴィー文字と日本のかな・漢字」庄司博史編『世界の文字事典』p.385, 東京：丸善出版。

2015「アラビア系文字の拡がる世界」庄司博史編『世界の文字事典』p.395, 東京：丸善出版。

2015「異聞逸聞　山奥で飲んで食う人たち」『月刊みんぱく』39(2)：21。

Yoshioka, N.

2014　Yak and Pig, Glacier and Sea. *MINPAKU Anthropology Newsletter* 39: 1–3.

◎口頭発表・展示・その他の業績

**・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告**

2014年6月7日　「ブルシャスキー語の動詞連体修飾構造」日本言語学会第148回大会、法政大学

2014年6月8日　「ブルシャスキー語の希求法不定詞とはなにか」日本言語学会第148回大会、法政大学

2014年9月13日　（with Peter Hook and Omkar Koul）‘Impersonal Causal Expressions: Searching for the likes among Kashmiri, Shina of Gilgit, and Burushaski,’ 47th Conference of Societas Linguistica Europaea, Adam Mickiewicz University, Poznań

**・みんぱく研究懇談会**

2014年10月29日　「何が格を決めるのか――動詞的要素と名詞的要素」第261回みんぱく研究懇談会

**・展示**

年末年始展示イベント「ひつじ」、本館展示新構築「南アジア」

・**広報・社会連携活動**

2015年３月１日　「言語の調査とはどういうものか」第374回みんぱくウィークエンド・サロン

◎調査活動

・**海外調査**

2014年７月28日～８月29日―パキスタン・イスラム共和国（ブルシャスキー語、ドマーキ語及びシナー語調査）

◎上記以外の研究活動

・**人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など**

人間文化研究機構地域研究推進事業「現代インド地域研究」国立民族学博物館拠点（代表者：三尾　稔）拠点構成員、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同研究「複雑系としての言語：運用に基づく文法理論の可能性」（代表者：中山俊秀）共同研究員

◎社会活動・館外活動等

・**他の機関から委嘱された委員など**

博士論文審査委員（Faculty of Higher Studies, National University of Modern Languages, Pakistan）

## 民族文化研究部

### 池谷和信［いけや　かずのぶ］―― 部長（併）教授

1958年生。**【学歴】**東北大学理学部地球科学系卒（1981）、筑波大学大学院環境科学研究科修士課程修了（1983）、東北大学大学院理学研究科博士課程単位取得退学（1990）**【職歴】**北海道大学文学部附属北方文化研究施設助手（1990）、国立民族学博物館第１研究部助手（1995）、国立民族学博物館民族社会研究部助教授（1998）、総合研究大学院大学先導科学研究科助教授（1999）、国立民族学博物館民族社会研究部教授（2007）、総合研究大学院大学文化科学研究科地域文化学専攻長（2009～2010）、国立民族学博物館民族文化研究部教授（2014）**【学位】**理学博士（東北大学大学院理学研究科 2003）**【専攻・専門】**環境人類学・人文地理学・地球学・生き物文化誌学 1）世界の狩猟採集文化、家畜文化の研究、2）植民地時代における民族社会の変容に関する研究、3）地球環境問題および地球環境史に関する研究**【所属学会】**日本文化人類学会、日本アフリカ学会、日本地理学会、日本沙漠学会、人文地理学会、日本人類学会、日本熱帯生態学会、日本民俗学会、生き物文化誌学会、ヒトと動物の関係学会、国際人類学民族学連合（IUAES）、アメリカ人類学会（American Anthropological Association）、日本生態学会、日本動物考古学会、東北地理学会、日本養豚学会、環境社会学会、比較文明学会、生態人類学会、日本タイ学会

**【主要業績】**

［単著］

池谷和信

2003　『山菜採りの社会誌――資源利用とテリトリー』宮城：東北大学出版会。

2002　『国家のなかでの狩猟採集民――カラハリ・サンにおける生業活動の歴史民族誌』（国立民族学博物館研究叢書４）大阪：国立民族学博物館。

［編著］

池谷和信編

2009　『地球環境史からの問い――ヒトと自然の共生とは何か』東京：岩波書店。

**【受賞歴】**

2007　日本地理学会優秀賞

1998　日本アフリカ学会研究奨励賞

**【2014年度の活動報告】**

◎各個研究

・**研究課題**

狩猟採集民の定住化に関する研究

・研究の目的、内容

人類の歴史のなかで定住化は、大きな社会変化を導いたといわれる。ある研究者は、「定住革命」と呼ぶ。本研究では、遊動時代と比べて、定住化はどのような変化を与えたのかを把握する。事例としては狩猟採集民に限定することなく、人類全体にとっての定住化の意味について考える。

・成果

2014年５月の国際人類学民族学・中間会議（IUAES，千葉市幕張開催）のなかで、「Comission of Nomadic Peoples（遊動民コミッション）」のもとに、人類の定住化に関わるパネルをもうけた。そこでは、狩猟採集民を中心として、焼畑農耕民、牧畜民、商業民なども入れて定住化の過程とその要因に関する議論を行った。その成果は、2015年度に論文集として刊行される予定である。

◎出版物による業績

［単著］

池谷和信

2014 『人間にとってスイカとは何か――カラハリ狩猟民と考える』（フィールドワーク選書５）京都：臨川書店。

［論文］

池谷和信

2014 「世界の家畜飼養の起源――ブタ遊牧からの視点」池内 了編『「はじまり」を探る』pp.105-126，東京：東京大学出版会。

2015 「野鶏から家鶏への道を求めて――熱帯アジアの森から世界の台所へ」『在来家畜研究会報告』27：93-104。

Ikeya, K.

2015 Pig Farming at Kinshasa in the Democratic Republic of the Congo. *African Study Monographs. Supplementary Issue* 51: 107-118.

Faruque, M. O., K. Ikeya and T. Amano

2015 「Present Status of Gayal in the Home Tract in Bangladesh」『在来家畜研究会報告（*Rep. Soc. Res. Native Livestock*）』27: 35-46。

［事典項目］

池谷和信

2014 「希少資源と紛争」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.94-95，東京：丸善出版。

2014 「ノマド」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.324-325，東京：丸善出版。

2014 「環境・資源」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』p.609，東京：丸善出版。

2014 「環境と民族」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.610-611，東京：丸善出版。

2014 「環境と災害」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.644-645，東京：丸善出版。

［その他］

池谷和信

2014 「人と家畜のエピソード25　現代に生きづく牛車やロバ車」『JVM 獣医畜産新報』67(4)：245。

2014 「人と家畜のエピソード26　ニホンミツバチの養蜂」『JVM 獣医畜産新報』67(5)：325。

2014 「人と家畜のエピソード27　カラハリ砂漠の山羊」『JVM 獣医畜産新報』67(6)：405。

2014 「旅いろいろ地球人 生き物① 古代から生き続ける豚」『毎日新聞』 6月5日夕刊。

2014 「人と家畜のエピソード28　犬と人の絆」『JVM 獣医畜産新報』67(7)：548。

2014 「世界の動物利用の諸相――地球環境史の視点から」食の文化フォーラム編『野生から家畜へ　第1回 狩猟と家畜の歴史』pp.16-20，東京：味の素食の文化センター。

2014 「掛谷さんと私の修論」『生態人類学会ニュースレター』No.20 別冊（特集 掛谷誠氏追悼）：40-41。

2014 「人と家畜のエピソード29　西アフリカの牛と人」『JVM 獣医畜産新報』67(8)：617。

2014 「みんぱく世界の旅　アジアのにわとり　東南アジアににわとりの祖先」『毎日小学生新聞』 8月16日。

2014 「人と家畜のエピソード30　ゾウと人との多様なかかわり」『JVM 獣医畜産新報』67(9)：645。

2014 「人と家畜のエピソード31　世界最大級の角を持つ牛――東アフリカのウガンダ」『JVM 獣医畜産新報』67(10)：725。

2014 「アフリカビーズ研究の展開」『季刊民族学』150：88-92。

2014 「人と家畜のエピソード32　ビクーニャからアルパカへ」『JVM 獣医畜産新報』67(11)：805。

2014 「人類にとって定住化とは何か――2014年国際人類学民族学科学連合中間会議の成果から」『民博通信』147：12–13。

2014 「国立民族学博物館における食文化の展示」『「世界の食文化研究と博物館」要旨集』p.11，大阪：国立民族学博物館。

2015 「人と家畜のエピソード33　ダチョウ――野生から『家畜』へ」『JVM 獣医畜産新報67(12)：885。

2015 「虫と歩む人類史」『月刊みんぱく』39(3)：2–3。

2015 「グローバル的視野に立った〈鶏と人の研究〉のあり方――第12回国際動物考古学会に参加して」『家畜資源研究会報』14：2–7。

2015 「人と家畜のエピソード34　羊と人とのかかわり」『JVM 獣医畜産新報』68(1)：5。

2015 「人と家畜のエピソード35　水牛の移動牧畜」『JVM 獣医畜産新報』68(2)：85。

2015 「岩の作品が残されたナミビアの荒野――岩石彫刻画、岩絵、奇岩のギャラリー」（写真解説文）『Newton』2015(4)：82–90。

2015 「人と家畜のエピソード36　アッサムのイノシシと豚」『JVM 獣医畜産新報』68(3)：165。

Ikeya, K.

2014 Human History of Nomadism and Sedentarism among Nomadic Peoples. In the Organizing Committee of the IUAES 2014 (ed.) *Conference Programme* (Abstract of IUAES 2014 with JASCA) p.79. Makuhari Messe, Chiba, Japan.

2014 The Taming Process of Red Junglefowl in Southeast Asia. *Abstract of ICAZ* (International Council for Archaeozoology) p.81, San Rafael, Argentina.

Nakai, S. and K. Ikeya

2014 Sedentarizing Process and Socio-economical Changes of the Mlabri Hunter-gatherer in Thailand. In the Organizing Committee of the IUAES 2014 (ed.) *Conference Programme* (Abstract of IUAES 2014 with JASCA), p.86. Makuhari Messe, Chiba, Japan.

◎映像音響メディアによる業績

**・TV・ラジオ番組などの制作・監修**

［TV 番組］

池谷和信監修

2014 「ドラケンスバーグ公園（南アフリカ・レソト）」『THE 世界遺産』TBS（6月15日放送）。

2014 「インドネシアのコロワイ族」『所さんのビックリ村7』テレビ東京（12月27日放送）。

◎口頭発表・展示・その他の業績

**・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告**

2014年10月11日 「趣旨説明」『南アフリカの過去と現在――ネルソン・マンデラから続く道』講演会「南アフリカの都市化」、国立民族学博物館

2014年10月11日 「ケープタウンのカエリチャ地区での20年（1994–2014）――掘っ建て小屋のくらしの真実を探る」『南アフリカの過去と現在――ネルソン・マンデラから続く道』講演会「南アフリカの都市化」、国立民族学博物館

2014年12月7日 「国立民族学博物館における食文化の展示」『世界の食文化研究と博物館』（国立民族学博物館・立命館大学学術交流協定締結記念国際シンポジウム）、国立民族学博物館

**・共同研究会**

2014年4月26日 「趣旨説明――アジアの森や海と狩猟採集民」『熱帯の「狩猟採集民」に関する環境史的研究――アジア・アフリカ・南アメリカの比較から』

2014年7月26日 「狩猟採集民の定住度と社会変化」『熱帯の「狩猟採集民」に関する環境史的研究――アジア・アフリカ・南アメリカの比較から』

2015年2月8日 「趣旨説明――これまでの共同研究会」『熱帯の「狩猟採集民」に関する環境史的研究――アジア・アフリカ・南アメリカの比較から』

**・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告**

2014年4月19日 「熱帯林におけるタンパク質の獲得について――コンゴ民主共和国とウガンダの比較」中部アフリカ研究会、京都大学

2014年5月15日 'Human History of Nomadism and Sedentarism among Nomadic Peoples. Sedentarization and Concentration among Nomadic Peoples.' (Commission on Nomadic Peoples/NME

Panel）IUAES, Makuhari Messe, Chiba, Japan

2014年５月15日　（Nakai, S. and K. Ikeya）‘Sedentarizing Process and Socio-economical Changes of the Mlabri Hunter-gatherer in Thailand.’ IUAES, Makuhari Messe, Chiba, Japan

2014年５月17日　Comments for the panel entitled ‘Hunting, Animal Welfare, and Defence against Wildlife Attack.’（organized by A. Nobayashi）IUAES, Makuhari Messe, Chiba, Japan

2014年６月７日　「世界の動物利用の諸相――地球環境史の視点から」『野生から家畜へ　第１回 狩猟と家畜の歴史』第１回食の文化フォーラム、味の素食の文化センター

2014年６月21日　Comments for the panel entitled ‘Indigenous’ Space and Local Politics（organized by J. Lawy and T. Osawa）, Association of Social Anthropologists of the UK and Commonwealth Decennial Conference, Edinburgh, UK.

2014年８月18日　Humanity group in HCMR(Japanese side), Tokyo HCMR Seminar, Toshi Center Hotel, Tokyo, Japan

2014年８月24日　「リスクへの対応――三陸海岸での集落と生業の変化」小規模経済プロジェクト 第１回全体会議、地球環境学研究所

2014年９月13日　「山田町でのシンポジウムに対するコメント」東北地理学会 第１回研究集会（公開シンポジウム『山田での東日本大震災を検証する』）、山田町役場

2014年９月14日　「大槌町での民俗芸能と地域復興」東北地理学会 第１回研究集会（公開シンポジウム『大槌での東日本大震災を検証する』）、大槌町公民館

2014年９月15日　「大槌町での民俗芸能の現状（巡検案内）」東北地理学会 第１回研究集会

2014年９月23日　‘The Taming Process of Red Junglefowl in Southeast Asia.’ 12th International Conference of Archaeozoology, San Rafael, Argentina

2014年10月29日　「世界の再構成にむけて」（コスモス国際賞受賞者・フィリップ・デスコラ教授との対談）公益財団法人 国際花と緑の博覧会記念協会、大丸心斎橋劇場

2014年12月１日　「アフリカの環境史――象牙、ダチョウの羽、キツネの毛皮」アフリカ史とグローバルヒストリー研究会（代表：竹沢尚一郎）、国立民族学博物館

2015年１月13日　‘Kelp（Konbu）and Abalone Collecting in Small Fishing Communities after the Great East Japan Earthquake.’小規模経済プロジェクト第２回全体会議、総合地球環境学研究所

2015年１月24日　「趣旨説明――野生動物から家畜への道」人と動物との関係学会 第106回月例会　あべのハルカス近鉄本店

2015年１月24日　「家畜化と人類文化史――イノシシの事例から」人と動物との関係学会 第106回月例会　あべのハルカス近鉄本店

2015年１月24日　「野生動物から家畜への道（総合討論での司会）」人と動物との関係学会 第106回月例会　あべのハルカス近鉄本店

2015年１月25日　「アフリカの環境史――象牙、ダチョウの羽、キツネの毛皮」新しい世界史研究会（アフリカ史とグローバルヒストリー）、国立民族学博物館

2015年２月７日　「文化としての豚（総合討論での司会）」生き物文化誌学会・沖縄例会、沖縄子供の国

2015年３月20日　「水牛飼育とその生産物」『料理の環境文化史』成果報告会（代表：野林厚志）、国立民族学博物館

2015年３月27日　「インド・アッサム州における豚・水牛飼育について」、第13回熱帯家畜利用研究会、馬の博物館（横浜市）

2015年３月28日　「東日本大震災以降の三陸の漁村における天然昆布とアワビの採取について」日本地理学会春季大会、日本大学文理学部

・みんぱくゼミナール

2015年２月21日　「遊牧の起源――バングラデシュの豚と人のかかわり」第441回みんぱくゼミナール

・研究講演

2014年５月21日　「美しさをもとめて――ビーズをめぐる人類の旅」産経新聞社主催、みんぱく創設40周年記念 カレッジシアター「地球探究紀行」あべのハルカス近鉄本店 ウイング館９階 SPACE 9

2014年６月３日　「ブタの文化誌」阪神シニアカレッジ、尼崎市中小企業センター

2014年６月10日　「ラクダの文化誌」阪神シニアカレッジ、尼崎市中小企業センター

2014年10月15日　「人類の美の追求――ガラスビーズと鳥の羽の世界」連続講座「みんぱく × ナレッジキャピタル――イメージの力をさぐる」グランフロント大阪ナレッジキャピタル１F CAFE Lab.
2014年10月22日　「人間は何を食べてきたか――アフリカの食から考える」産経新聞社主催、みんぱく創設40周年記念 カレッジシアター「地球探究紀行」あべのハルカス近鉄本店 ウイング館９階SPACE９
2015年１月23日　「ニワトリの文化誌――野鶏から家鶏への道を求めて」阪神シニアカレッジ、尼崎市中小企業センター
2015年２月６日　「生き物文化誌①　ニワトリと人のかかわり」NPO法人大阪府高齢者大学校　世界の文化に親しむ科、大阪市教育会館
2015年２月13日　「生き物文化誌②　ラクダと人のかかわり」NPO法人大阪府高齢者大学校　世界の文化に親しむ科、大阪市教育会館
2015年２月27日　「白熱教室」NPO法人大阪府高齢者大学校　世界の文化に親しむ科、大阪市教育会館
2015年３月７日　「いま、焼畑を考える――自然破壊か、それとも共生か」第440回国立民族学博物館友の会講演会

・展示

常設展示　日本（３点の展示物を変更）

・広報・社会連携活動

2014年10月11日　『遠い夜明け』みんぱく映画会（「南アフリカの過去と現在――ネルソン・マンデラから続く道」関連）
2015年１月16日　協力『グッド！モーニング』テレビ朝日
2015年２月23日　協力『ちちんぷいぷい』毎日放送
2015年３月４日　出演『中西哲生のクロノス』TOKYO FM
2015年３月８日　「鶏からみた世界史――アジアの森から世界の台所へ」第375回みんぱくウイークエンド・サロン

◎調査活動

・国内調査

2014年５月30日～６月１日―鹿児島県徳之島、奄美大島（イノシシと人とのかかわりに関する研究）
2014年６月13日～６月15日―岩手県大槌町（小規模社会の持続可能性に関する研究）
2014年８月17日～８月21日―岩手県大槌町（小規模社会の持続可能性に関する研究）
2014年９月12日～９月16日―岩手県山田町、大槌町（三陸の漁村における資源利用に関する研究）
2014年10月18日～10月21日―岩手県山田町（三陸の漁村における資源利用に関する研究）
2014年12月10日～12月15日―岩手県山田町（三陸の漁村における資源利用に関する研究）
2015年２月28日～３月３日―岩手県山田町（三陸の漁村における資源利用に関する研究）

・海外調査

2014年６月18日～６月25日―英国（英国社会人類学会議に参加及び家畜資料の収集）
2014年８月８日～８月15日―バングラディシュ、タイ（モンスーンアジアにおける家畜飼育に関する資料収集）
2014年８月26日～９月３日―南アフリカ（熱帯の資源利用に関する研究）
2014年９月19日～９月30日―アルゼンチン（国際動物考古学会議での研究報告及び自然資源利用に関する資料収集）
2014年11月８日～11月19日―ケニア（東アフリカにおける高地文明に関する調査研究）
2014年12月22日～12月29日―インド（人と家畜との関わりについての研究）
2015年１月30日～２月５日―モンゴル（乳文化に関する資料収集）
2015年２月13日～２月19日―ラオス（狩猟採集民の料理に関する資料収集）
2015年３月８日～３月12日―インド、タイ（熱帯の家畜飼育文化に関する資料収集）
2015年３月15日～３月17日―中華人民共和国（中国の食文化に関する資料収集）

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（２人）副指導教員（３人）

・大学院ゼミでの活動

１年生ゼミ　テーマシリーズ：環境人類学

・**論文審査**

博士論文審査委員（１件）

◎上記以外の研究活動

・**人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など**

科学研究費補助金（基盤研究（A））「熱帯の牧畜における生産と流通に関する政治生態学的研究」研究代表者、（基盤研究（A））「アフリカ熱帯林におけるタンパク質獲得の現状」（研究代表者：木村大治）研究分担者、（基盤研究（A））「熱帯高地における環境開発の地域間比較研究――『高地文明』の発見に向けて」（研究代表者：山本紀夫）研究分担者、（基盤研究（A））「乳文化の視座からの牧畜論考――全地球的地域間比較による新しい牧畜論の創生」（研究代表者：平田昌弘）研究分担者、（基盤研究（B））「多起源的家畜化モデルの構築と学融合型資料収蔵システムの確立」（研究代表者：遠藤秀紀）研究分担者、総合研究大学院大学・学融合研究事業「料理の環境文化史：生態資源の選択、収奪、消費の過程が環境に与えるインパクト」（代表者：野林厚志）研究分担者、「失われた生態システムの多様性解明に向けた古代DNA研究の展開」（代表者：足立 淳）研究分担者、総合地球環境学研究所研究プロジェクト「地域に根ざした小規模経済活動と長期的持続可能性――歴史生態学からのアプローチ」（代表者：羽生淳子）研究分担者、総合地球環境学研究所研究プロジェクト「在地の農業における環境知の結集」（代表者：舟川晋也）研究分担者、家禽資源研究会（HCMR）研究分担者、牛車研究会（代表者：池内克史）研究分担者

◎社会活動・館外活動

・**他機関から委嘱された委員など**

*Nomadic Peoples*、*Berghahn Journal*（UK）編集委員、*Museum Anthropology*（USA）編集委員、*Tribes and Tribals*（India）編集委員、在来家畜研究編集委員、人文地理学会理事、東北地理学会評議員、生き物文化誌学会常任理事、ヒトと動物の関係学会評議員、北海道立北方民族博物館研究協力員、家畜資源研究会理事、総合地球環境学研究所運営会議委員

・**非常勤講師**

広島大学大学院国際協力研究科「途上国農村地域研究」（集中講義）、奈良女子大学大学院文学研究科「地域環境学特殊研究」（集中講義）

## 笹原亮二［ささはら　りょうじ］――教授

1959年生。**【学歴】**早稲田大学第一文学部卒（1982）、神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科博士課程前期修了（1995）、神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科博士課程後期退学（1995）**【職歴】**相模原市立博物館学芸員（1982）、国立民族学博物館第１研究部助手（1996）、国立民族学博物館民族文化研究部助手（1998）、国立民族学博物館民族文化研究部助教授（2001）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2004）**【学位】**博士（歴史民俗資料学）（神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科 2001）、修士（歴史民俗資料学）（神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科 1995）**【専攻・専門】**民俗学、民俗芸能研究 1）日本の獅子舞の民俗学的研究、2）日本の民俗芸能の近代～現代における伝承の研究、3）民俗学における資料論**【所属学会】**日本民俗学会、民俗芸能学会、芸能史研究会

**【主要業績】**

［単著］

笹原亮二

2003 『三匹獅子舞の研究』京都：思文閣出版。

［編著］

笹原亮二編

2009 『口頭伝承と文字文化――文字の民俗学　声の歴史学』京都：思文閣出版。

［論文］

笹原亮二

2005 「用と美――柳田国男の民俗学と柳宗悦の民藝を巡って」熊倉功夫・吉田憲司共編『柳 宗悦と民藝運動』pp.273-294，京都：思文閣出版。

【2014年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

日本の祭と民俗芸能における装飾性の諸相

・研究の目的、内容

我々の生活の場には、衣類や食器や家具などさまざまなモノが存在し、我々はそれらを所有し、用いて生活を営んできた。そうしたモノに対し、我々は道具としての利便性や実用性に関心を向けがちである。しかし、現実の生活の場には、道具としての利便性や実用性が必ずしも問題とされないモノも存在する。それは、祭や民俗芸能において見られる御幣・仮面・笠・曳山などの品々である。それらは、形態や色彩などに殊更に趣向が凝らされ、日々の生活の場のモノとは大いに趣を異にする。その最たるものが、祭や年中行事の際に地元の人びとが趣向を凝らして作り、見物の観覧に供する造形物、「つくりもの」である。こうしたつくりものを初め、各地の祭や民俗芸能に登場する多種多様なハレの造形物を、人々の願いや喜びや晴れがましさといったハレの機会における闊達な精神活動の所産として捉え、特にその装飾性に注目して実態の把握を試みる。そして、それを通じ、各地でさまざまな祭や民俗芸能を脈々と営んできた人びとの心性、「ハレのこころ」のありようや歴史を考える。

本研究の実施にあたっては、笹原が研究代表者の科学研究費補助金（基盤研究（C））「瀬戸内海及び西日本における多島海世界の民俗芸能の研究」も活用しながら進める。

・成果

各地の祭と民俗芸能について、現地調査や論文・調査報告書等の関係資料の調査を実施し、それらにおける装飾的な造形の多様性の把握を試みた。2014年度は、瀬戸内海の沿岸や島嶼を中心とした中国・四国地方等の西日本に加えて、獅子踊や田植踊等の東北地方の風流系の民俗芸能についても現地調査や先行研究等の関連資料の調査を行い、両者の異同を検討した。特に、瀬戸内海の沿岸や島嶼に関しては、笹原が研究代表者の科学研究費補助金（基盤研究（C））「瀬戸内海及び西日本における多島海世界の民俗芸能の研究」も活用しながら研究を進めた。

その結果、民俗語葉としての「フリュウ」は東北地方でも認められないわけではないが、装飾性を強調した造形的な趣向の具体例に関しては、瀬戸内海地方各地の屋台や曳山の造形物を初め、西日本各地のほうがやはり優越していることが判明した。

こうした研究成果をもとに、『造り物の文化史――歴史・民俗・多様性』（福原敏男・笹原亮二共編著、思文閣出版、2014年）、『ハレのかたち――造り物の歴史と民俗』（笹原亮二・西岡陽子・福原敏男共著、岩田書院、2014年）を作成した。

◎出版物による業績

［共著］

笹原亮二・西岡陽子・福原敏男

2014 『ハレのかたち――造り物の歴史と民俗』東京：岩田書院。

［共編著］

福原敏男・笹原亮二編

2014 『造り物の文化史――歴史・民俗・多様性』東京：勉成社出版［査読有、共同研究成果］。

［論文］

笹原亮二

2014 「民俗芸能と祭祀――中在家の花祭の現場を巡って」神奈川大学常民文化研究機構編『国際常民文化研究叢書７　アジア祭祀芸能の比較研究』pp.369-382, 神奈川：神奈川大学常民文化研究機構。

◎社会活動・館外活動

・他機関から委嘱された委員など

島根県古代文化センター資料評価委員・同客員研究員、鳥取県文化財保護審議会専門委員

・非常勤講師

関西学院大学文学部「地理学地域文化学特殊講義」

## 杉本良男［すぎもと　よしお］――教授

1950年生。**【学歴】**東京都立大学人文学部人文科学科卒（1974）、東京都立大学大学院社会科学研究科社会人類学専攻修士課程修了（1977）、東京都立大学大学院社会科学研究科社会人類学専攻博士課程単位取得退学（1980）**【職歴】**国際基督教大学教養学部社会科学科非常勤助手（1979）、南山大学文学部講師（1981）、南山大学人類学研究所第一種研究所員併任（1984）、南山大学文学部助教授（1986）、国立民族学博物館第3研究部助教授（1995）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（1995）、国立民族学博物館民族文化研究部助教授（1998）、国立民族学博物館民族文化研究部教授（1999）、国立民族学博物館民族学研究開発センター教授（2003）、国立民族学博物館先端人類科学研究部教授（2004）、国立民族学博物館民族社会研究部教授（2007）、国立民族学博物館民族文化研究部教授（2011）**【学位】**博士（社会人類学）（東京都立大学 1995）、文学修士（東京都立大学 1977）**【専攻・専門】**社会人類学、南アジア研究**【所属学会】**日本文化人類学会、「宗教と社会」学会、日本南アジア学会

**【主要業績】**

［単著］

杉本良男

2002 『インド映画への招待状』東京：青弓社。

［編著］

杉本良男編

2014 『キリスト教文明とナショナリズム――人類学的比較研究』（国立民族学博物館論集２）東京：風響社。

杉本良男・高桑史子・鈴木晋介編

2013 『スリランカを知るための58章』東京：明石書店。

**【2014年度の活動報告】**

◎各個研究

**・研究課題**

キリスト教文明と南アジア・ナショナリズム

**・研究の目的、内容**

本研究は、主としてフランス革命期以後の「キリスト教文明」の展開が、南アジア地域においてどのような影響を与え、またそれがどのような問題を引き起こしているのかについて、文献研究と現地調査によって系譜論的に明らかにしようとするものである。本年度は、グローバル化が進む南インドにおいて、構造的な社会変動が進んでいることについて実証的に明らかにすることを目的としている。

本年度は、科学研究費補助金（基盤研究(B)）「経済自由化後の南インド社会の構造変動に関する総合的研究」（研究代表者：杉本良男）および科学研究費補助金（基盤研究(B)）「インドにおける都市消費市場の構造と農村・都市間の物的人的循環――生活文化の視点から」（研究代表者：杉本大三）によって村落、都市部における共同調査を実施し、さらにこれまでの調査資料とあわせて整理してとりまとめの作業を行う。それとともに、科学研究費補助金（基盤研究(B)）「神智学運動とその汎アジア的文化接触の比較文学的研究――東西融和と民主主義の相克」（研究代表者：安藤礼二）により、神智（学）協会と南アジア・ナショナリズムとの関連についての調査研究を実施する予定である。

**・成果**

本年度は、各種外部資金などにより以下のような調査研究を実施した。

科学研究費補助金（基盤研究(B)）（「経済自由化後の南インド社会の構造変動に関する総合的研究」（研究代表者：杉本良男、2013～2015年度）により、2011年より実施してきた南インド、タミルナードゥ州クンバコーナム市および近郊農村における共同調査を実施し、補足的な資料収集にあたるとともに、インド側のメンバーも含めて、成果公刊に向けての具体的な作業を実施した。また、ヨーロッパ、モーリシャス、韓国などにおけるインド人コミュニティの現状およびインド文化（とくに映画）の受容についての調査研究を実施した。

科学研究費補助金（基盤研究(B)）「インドにおける都市消費市場の構造と農村・都市間の物的人的循環――生活文化の視点から」（研究代表者：杉本大三、2013～2015年度）により、南インド農村の構造変化について資料の整理を行った。

科学研究費補助金（基盤研究(B)）「神智学運動とその汎アジア的文化接触の比較文学的研究――東西融和と民主主義の相克」（研究代表者：安藤礼二、2014～2017年度）により、アジアにおける近代仏教研究の成果公開

のためのシンポジウム開催の必要経費の一部を負担した。

これらの研究成果は、論文「ネオ・ヒンドゥイズムの系譜学――南アジア宗教ナショナリズムの病い」として公刊したほか、クラクフにおける国際学会、および各種研究会において発表した。

◎出版物による業績

［編著］

国立民族学博物館編（編集委員長：杉本良男）

2014 『世界民族百科事典』東京：丸善出版。

［論文］

杉本良男

2015 「ネオ・ヒンドゥイズムの系譜学――南アジア宗教ナショナリズムの病い」三尾 稔・山根 聡編『英領インドにおける諸宗教運動の再編――コロニアリズムと近代化の諸相』（NIHU Research Series of South Asia and Islam 7）pp.1-40, 京都：人間文化研究機構地域間連携研究の推進事業「南アジアとイスラーム」。

［事典項目］

杉本良男

2014 「ネーション（ネイション）」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.46-47, 東京：丸善出版。

2014 「宗教と紛争」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.116-117, 東京：丸善出版。

2014 「カースト制と仕事」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.404-405, 東京：丸善出版。

［その他］

杉本良男

2014 「キリスト教文明とナショナリズム――人類学的比較研究（国立民族学博物館論集２）」『民博通信』145：28。

2014 「聖概念のイデオロギー性、歴史性」『民博通信』145：12-13。

2015 「旅・いろいろ地球人　信じる⑥　人は見かけによらず」『毎日新聞』２月19日夕刊。

◎口頭発表・展示・その他の業績

**・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告**

2014年５月９日 「変貌するインド社会①　急速な経済発展」NPO法人大阪府高齢者大学校　世界の文化に親しむ科、大阪市教育会館

2014年５月11日 「映画からみる現代インドの素顔――グローバル化とローカル化」NHKカルチャー講座、NHK文化センター梅田教室

2014年５月16日 「変貌するインド社会②　カースト社会の空洞化」NPO法人大阪府高齢者大学校　世界の文化に親しむ科、大阪市教育会館

2014年５月23日 「変貌するインド社会③　手織りサリーの危機」NPO法人大阪府高齢者大学校　世界の文化に親しむ科、大阪市教育会館

2014年７月26日 「グレート・ゲーム――露国令室無宿渡世記西蔵編」第９回「仏教と近代」研究会 第３回神智学研究会「マダム・ブラヴァツキーのチベット」龍谷大学

2014年７月28日 「日本におけるインド研究の現状と今後の学術交流」神戸大学国際文化学研究推進センター開所記念講演会、神戸大学

2014年８月19日 ‘Dynamics of Religious Spaces and Multiplicity of Factors: A Case Study of Thiruppurambiyam in Tamil Nadu, India.’（S. Subbiah, Y. Sugimoto, A. Sagayaraj and S. Sugimoto）Thematic Session: Religion and Changes of Socio-economic and Cultural Space of Cities and Regions 1, IGU（International Geographical Union）Regional Conference “Changes, Challenges, Responsibility.” Jagiellonian University, Krakow

2014年10月３日 「ネオ・ヒンドゥイズムの系譜学」2014年度人間文化研究機構地域間連携研究推進事業（IAS-INDAS連携事業）南アジアとイスラーム「現代社会の政治と思想」研究会シンポジウム『英領インドにおける諸宗教運動の再編――コロニアリズムと近代化の諸相』京都大学

2014年11月14日 「グローバルな時空間認識――インド社会に学ぶ」神戸大学付属中等教育学校構内研修会講演、神戸大学付属中等教育学校

2015年２月20日 「2014年度調査報告」科学研究費研究会「インドにおける都市消費市場の構造と農村・都市間の物的人的循環――生活文化の視点から」（研究代表者：杉本大三）名城大学

2015年２月27日　「東と東のすれ違い――アナガーリカ・ダルマパーラと日本」京都大学人文科学研究所共同研究「日本宗教史像の再構築」特別講演会『秘教的コネクションと近代世界』京都大学人文科学研究所

◎調査活動

**・海外調査**

2014年８月９日～９月16日―フランス、チェコ、ポーランド、タイ、インド（インド社会の構造変動に関する調査研究）

2014年10月７日～10月11日―大韓民国（アジアにおけるインド映画受容についての調査研究）

2014年12月18日～2015年１月２日―インド、モーリシャス（モーリシャスにおけるヒンドゥー文化復興に関する調査研究）

2015年３月３日～３月13日―インド（南インド村落社会の構造的変動に関する調査研究）

◎上記以外の研究活動

**・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など**

科学研究費補助金（基盤研究(B)）「経済自由化後の南インド社会の構造変動に関する総合的研究」研究代表者、科学研究費補助金（基盤研究(B)）「インドにおける都市消費市場の構造と農村・都市間の物的人的循環：生活文化の視点から」（研究代表者：杉本大三）研究分担者、科学研究費補助金（基盤研究(B)）「神智学運動とその汎アジア的文化接触の比較文学的研究――東西融和と民主主義の相克」（研究代表者：安藤礼二）研究分担者

◎社会活動・館外活動

**・他機関から委嘱された委員など**

公益信託「澁澤民族学振興基金」運営委員、日本学術会議連携会員、神戸大学附属中等教育学校文部科学省指定研究開発に係る運営指導委員

## 竹沢尚一郎［たけざわ　しょういちろう］――教授

1951年生。**【学歴】**東京大学文学部宗教学専攻卒（1976）、東京大学大学院人文科学研究科宗教学専攻修士課程修了（1978）、フランス社会科学高等研究院社会人類学専攻博士課程修了（1985）**【職歴】**日本学術振興会特別研究員（1985）、九州大学文学部助教授（1988）、国立民族学博物館併任助教授（1996）、九州大学大学院人間環境学研究院教授（1998）、国立民族学博物館民族学研究部教授（2001）、九州大学大学院併任教授（2001）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2002）、国立民族学博物館民族文化研究部教授（2004）、総合研究大学院大学文化科学研究科地域文化学専攻長（2007）**【学位】**民族学博士（フランス社会科学高等研究院 1985）、文学修士（東京大学 1978）**【専攻・専門】**宗教人類学、アフリカ史、人類学学説史**【所属学会】**日本宗教学会、日本文化人類学会、日本アフリカ学会

**【主要業績】**

［単著］

竹沢尚一郎

2013　『被災後を生きる――吉里吉里・大槌・釜石奮闘記』東京：中央公論社。

2010　『社会とは何か――システムからプロセスへ』（中公新書）東京：中央公論社。

2007　『人類学的思考の歴史』京都：世界思想社。

**【受賞歴】**

1988　日本宗教学会賞

**【2014年度の活動報告】**

◎各個研究

**・研究課題**

1）西アフリカ史研究

2）被災のコミュニティ研究

・研究の目的、内容

1）2012～2015年度の日本学術振興会の科学研究費補助金を得て、アフリカ史研究を遂行する。具体的には、西アフリカ・マリ国で考古学発掘調査を実施し、その成果を素に西アフリカ史記述をおこなう。また、他のアフリカ史研究者と共同研究を推進する。

2）三井物産環境基金の資金を得て、岩手県の大槌町、釜石市などで、被災者の被災後の行動を記録する。この基金と総合研究大学院大学学融合プロジェクトの資金により、東日本大震災の展示を国内外の博物館で実施するべく準備を進める。

・成果

1）2012～2015年度の日本学術振興会の科学研究費補助金を得て、アフリカ史研究を実施した。成果として、竹沢尚一郎『西アフリカの王国を掘る』（臨川書店、2014年）を出版したほか、これまでの研究成果を、英語、仏語、日本語で出版するべく準備した。

2）三井物産環境基金の資金により、2013年１月に出版した『被災後を生きる』の英訳がほぼ終わっているので、これを外国の出版社から出版するよう尽力した。また、2009～2012年度に実施した国立民族学博物館機関研究「モノの崇拝」プロジェクト、および2013～2014年度に実施した総合研究大学院大学学融合研究「ニューミュージオロジーの確立のための研究」の成果を、竹沢尚一郎編著『ミュージアムと負の記憶』（東信堂）として2015年10月に出版する。

◎出版物による業績

［単著］

竹沢尚一郎

2014 『西アフリカの王国を掘る』（フィールドワーク選書10）京都：臨川書店。

［論文］

竹沢尚一郎

2015 「イギリスとフランスにおける呪術研究」江川純一・久保田浩編著『「呪術」の呪縛』上巻（宗教史学論叢19）pp.79-98, 東京：リトン。

2015 「西アフリカにおける指導者崇拝」韓 敏編著『近代社会における指導者崇拝』（国立民族学博物館研究報告127）pp.97-115, 大阪：国立民族学博物館［査読有］。

［その他］

竹沢尚一郎

2014 「パリにサンバはたくさんいる」『サンバ』（映画『サンバ』劇場パンフレット）東京：ギャガ。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2014年５月15日 ‘Positive or Negative: What Makes Life in the Evacuating Shelter Positive?,’ IUAES（International Union of Anthropological and Ethnological Sciences）2014 Meetings, Makuhari Messe, Chiba

2014年11月18日 ‘La découverte d’un palais royal le plus ancien en Afrique de l’Ouest,’ “La journée sur l’Afrique,” Université libre de Bruxelle

2014年11月20日 ‘Au-delà du trauma: faire une exposition sur le Tohoku Séisme et préserver ses traumatiques restes,’ Sur le Reste, Musée des Civilisations de l’ Europe et de la Méditerrané

◎調査活動

・国内調査

2014年４月17日～４月29日―岩手県上閉伊郡大槌町（企画展示「東日本大震災の展示」のための準備を実施）

2014年６月18日～６月30日―岩手県上閉伊郡大槌町（企画展示「東日本大震災の展示」のための準備を実施）

2014年７月13日～７月21日―岩手県上閉伊郡大槌町（企画展示「東日本大震災の展示」のための準備を実施）

2014年９月24日～９月30日―岩手県上閉伊郡大槌町（企画展示「東日本大震災の展示」のための準備を実施）

・海外調査

2014年８月19日～９月19日―ベルギー（アフリカ史の研究のための資料収集）

2014年11月２日～11月27日―フランス（アフリカ史関係の資料収集と研究成果の出版に向けた討議及び民族学博物館に関するシンポジウムの実施）

2015年２月８日～３月４日―マリ、フランス（マリ国において学術交流及び考古学発掘成果の共同研究、フランスにおいて出版のための調査研究）

◎大学院教育

**・論文審査**

博士論文審査委員（１件）

予備審査委員（１件）

◎上記以外の研究活動

**・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など**

科学研究費補助金（基盤研究（A））「世界の中のアフリカ史の再構築」研究代表者、総合研究大学院大学学融合プロジェクト「ニュー・ミュージオロジーの確立のための研究」（2013～2014年度）研究代表者

## 出口正之［でぐち　まさゆき］―――― 教授

1955年生。**【学歴】**大阪大学人間科学部人間科学科卒（1979）**【職歴】**ジョンズ・ホプキンス大学国際フィランソロピー研究員（1991）、財団法人サントリー文化財団事務局長（1992）、総合研究大学院大学教育研究交流センター教授（1995）、総合研究大学院大学学長補佐（2001）、国立民族学博物館民族学研究開発センター教授（2003）、国立民族学博物館文化資源研究センター教授（2004）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2004）、内閣府公益認定等委員会委員（2010）、国立民族学博物館民族文化研究部教授（2013）、総合研究大学院大学教授（2014）**【専攻・専門】**NPO、メセナ、フィランソロピー、ボランティア、言政学**【所属学会】**国際NPO・NGO学会（ISTR = International Society for Third Sector Research）、米国NPO学会（ARNOVA = The Association for Researchon Nonprofit Organizations and Voluntary Action）、非営利法人研究学会、日本NPO学会、日本文化人類学会

**【主要業績】**

［共編著］

Vinken, H., Y. Nishimura, B. L. J. White and M. Deguchi

2010　*Civic Engagement in Contemporary Japan Civic Engagement in Contemporary Japan*. New York/Dordrecht/Heidelberg/London: Springer.

本間正明・出口正之編著

1996　『ボランティア革命』東京：東洋経済新報社。

［分担執筆］

Deguchi, M.

2001　The Distortion between Institutionalized and Noninstitutionalized NPO: New Policy Initiative and the Nonprofit Organizations in Japan. In H. K. Anheier, J. Kendall（eds.）*Third Sector Policy at the Crossroads: An International Nonprofit Analysis*, pp.277-301. London and New York: Routledge.

**【受賞歴】**

1988　東洋経済高橋亀吉賞最優秀賞

1988　日経産業新聞15周年記念論文最優秀賞

1995　ESP大来佐武郎賞

**【2014年度の活動報告】**

◎各個研究

**・研究課題**

NPO・NGO等の総合的研究

**・研究の目的、内容**

1）非営利・非政府（公益法人を含む。また、民間助成財団の研究も含む。）の組織に関して、文化人類学を含む広い観点からの研究を実施して、Cris Shore, Susan Wright らの “Anthropology of Policy” の水準を学術的に向上させる。

2）非営利の「縁」を「社縁」とともに「結社縁」として捉え、中牧弘允、日置弘一郎らが、開拓した「経営人類学」を一層、拡大発展させる。本件については、国立民族学博物館の共同研究に代表者として申請中。

・成果

2）については不採択となり、研究を実施せず。1）について活発な研究活動を行い、下記のような業績を発表した。

◎出版物による業績

［論文］

出口正之

2015 「主務官庁制度のパターナリズムは解消されたのか」岡本仁宏編著『市民社会セクターの可能性――110年ぶりの大改革の成果と課題』pp.79-106，兵庫：関西学院大学出版会。

2015 「制度統合の可能性と問題――ガラパゴス化とグローバル化」岡本仁宏編著『市民社会セクターの可能性――110年ぶりの大改革の成果と課題』pp.157-183，兵庫：関西学院大学出版会。

［その他］

出口正之

2014 「新設法人の減少率は『4割強』公益監視等委員会に変身することなかれ 58％」（新年度特別企画 有識者に訊く 新公益法人制度への移行を採点すれば何点か？）『公益・一般法人』866：8-10。

2014 「全日本テコンドー協会の認定取消し申請の経緯とチャレンジ・グラントについて」『公益・一般法人』870：15-34。

2014 「収益事業課税試論――イコール・フッティング論を巡って」『公益・一般法人』871：4-13。

2014 「公益法人制度改革における公益認定等委員会のパターナリズムの傾向」（特集 非営利法人における制度・会計・税制の改革を総括する）『非営利法人研究学会誌』16：1-13。

2015 「論壇『民間公益活動』の質的・量的拡大を」『公益・一般法人』884：1-1。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2014年7月22～25日 '"Globalization" of Standards; Study from Participant Observation on Japan's Charity Commission,' 11th International Conference, "International Society for Third Sector Research," University of Münster, Münster, Germany

2014年9月10～11日 「学校法人・社会福祉法人創設との比較における公益法人制度改革」第18回大会非営利法人研究学会、横浜国立大学

2015年3月14～15日 「『公益目的事業財産』とNPOの存在意義――『第三の財産』を巡って」日本NPO学会第16回年次大会、武蔵大学

◎調査活動

・海外調査

2014年7月21日～7月27日―ドイツ（国際NPO・NGO学会国際会議における研究発表）

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

公益財団法人助成財団センター評議員、茨木市文化振興施策推進委員会委員長

## 森 明子［もり あきこ］―― 教授

**【学歴】**筑波大学大学院博士課程歴史・人類学研究科単位取得退学（1989）**【職歴】**筑波大学歴史・人類学系文部技官（1989）、筑波大学歴史・人類学系助手（1990）、国立民族学博物館第3研究部助手（1990）、国立民族学博物館第3研究部助教授（1997）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（1999）、国立民族学博物館研究戦略センター教授（2006）、国立民族学博物館研究戦略センター長（2009）、民族文化研究部教授（2011）**【学位】**文学博士（筑波大学大学院歴史・人類学研究科 1997）、文学修士（筑波大学大学院歴史・人類学研究科 1984）**【専攻・専門】**文化人類学 1）ヨーロッパ人類学、2）ドイツ、オーストリアの民族誌研究、3）民族学・民俗学の歴史的展開**【所属学会】**日本文化人類学会

**【主要業績】**

［単著］

森 明子

1999 『土地を読みかえる家族――オーストリア・ケルンテンの歴史民族誌』東京：新曜社。

［編著］

森 明子編

2014 『ヨーロッパ人類学の視座――ソシアルなるものを問い直す』京都：世界思想社。

Mori, A.（ed.）

2013 *The Anthropology of Europe as Seen from Japan: Considering Contemporary Forms and Meanings of the Social*（Senri Ethnological Studies 81）Osaka: National Museum of Ethnology.

**【2014年度の活動報告】**

◎各個研究

**・研究課題**

人類学的比較の再考

**・研究の目的、内容**

比較は、文化人類学研究を、基底的に性格づけている。ポストモダン人類学は、比較のための単位を実体的・硬直的にとらえる文化の理解を批判したが、これに対して最近、超越的な比較ではない水平的な比較という議論が起こってきた。全体を見通すのではない部分的なヴィジョンに着目して、人類学的な比較を説明しようとするものである。本研究は、こうした議論を参照しながら、ヨーロッパ人類学の実践において、民族誌記述と人類学的比較が、いかに照射しあっているのか、検討するものである。

**・成果**

第１に、本研究課題をこれから数年にわたって取り組むための基盤となる共同研究を組織することに力を注ぎ、２つの共同研究をたちあげた。ひとつめは、ケアと保育の制度化に関する比較研究をテーマとする国立民族学博物館共同研究「家族と社会の境界面の編成に関する人類学的研究――保育と介護の制度化／脱制度化を中心に」（研究代表者：森 明子）で、18人の研究者から構成される共同研究を10月から開始した。ふたつめは、ケア・ネットワークの編成のあり方を比較研究する科学研究費補助金（基盤研究（B））「ポスト福祉国家時代のケア・ネットワーク編成に関する人類学的研究」（研究代表者：森 明子）の組織で、来年度より研究年度がスタートする。

第２に、民族学・民俗学のディシプリンの比較研究として、大学研究所における研究＝教育の取り組みを、ドイツのベルリン・フンボルト大学ヨーロッパ民族学研究所で調査した。この調査は、本年度開始した科学研究費補助金（基盤研究（A））「東アジア〈日常学としての民俗学〉の構築に向けて：日中韓と独との研究協業網の形成」（研究代表者：岩本通弥）の研究分担者として、東アジアとドイツとの比較として行った。

第３に、前年度終了した科学研究費補助金（基盤研究（C））「21世紀の市民運動に関する文化人類学的研究――ベルリン外国人集住地区の事例」（研究代表者：森 明子）の成果とりまとめを進めて、その一部を国際学会で口頭発表した。

◎出版物による業績

［事典項目］

森 明子

2014 「場所・空間」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』p.239，東京：丸善出版。

2014 「空間の象徴的意味」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.240-241，東京：丸善出版。

2014 「民族学博物館」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.514-515，東京：丸善出版。

2014 「カーニバルと他者表象」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.746-747，東京：丸善出版。

［その他］

森 明子

2014 「旅・いろいろ地球人　父親② ベルリンのイスメット」『毎日新聞』11月27日夕刊。

2015 「ケアの実践から家族と社会の編成を考える」『民博通信』148：14-15。

◎口頭発表・展示・その他の業績

**・共同研究**

2014年11月16日 「共同研究の趣旨説明と問題提起」『家族と社会の境界面の編成に関する人類学的研究――保育と介護の制度化／脱制度化を中心に』

**・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告**

2014年５月16日 ‘Rethinking the Social in Berlin: An Ethnographic Study,’ in the Panel: “Mutual Anthropology: A Proposal for Future Equality in the Discipline.” IUAES（the

International Union of Anthropological and Ethnological Sciences), Makuhari Messe; International Convention Complex, Chiba, Japan

・みんぱくゼミナール

2015年３月21日　「ミシンと家庭――100年前のグローバル商品」第442回みんぱくゼミナール

・研究講演

2014年11月26日　「オーストリア農村の家と家族」Klub Zukunft、梅田エステートビル

2015年１月30日　「移民とともにつくる社会――ドイツの試み」園田学園女子大学特別講座、園田学園女子大学

・広報・社会連携活動

2015年１月11日　「ドイツのクリスマス・ピラミッド」第367回みんぱくウィークエンド・サロン

・展示

2014年９月21日～2015年２月28日　'Europe and Bread.' In "Making Europe(s)," Special Exhibition of "Museum Europäischer Kulturen, Staatliche Museen zu Berlin, Preußischer Kultur Besitz," Germany

◎調査活動

・海外調査

2015年２月19日～３月13日―ドイツ（科研「東アジア〈日常学としての民俗学〉の構築に向けて――日中韓と独との研究協業網の形成」にかかる調査研究

◎大学院教育

・大学院ゼミでの活動

論文ゼミ委員として論文指導、１年生ゼミ大学院テーマシリーズ講義「人類学的比較――M. Strathernの《部分的連接》について」（2014年11月20日）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費補助金（基盤研究（A））「東アジア＜日常学としての民俗学＞の構築に向けて――日中韓と独との研究協業網の形成」（研究代表者：岩本通弥）研究分担者

◎社会活動・館外活動

・他機関から委嘱された委員など

独立行政法人大学評価・学位授与機構大学機関別認証評価委員会専門委員、日本学術振興会特別研究員等審査会専門委員及び国際事業委員会書面審査員、京都大学人文科学研究所 共同利用・共同研究拠点共同研究委員会委員、日本民俗学会国際交流特別委員会委員、人間文化研究機構男女共同参画委員会委員、Wissenschaftlicher Beirat von *Historische Anthropologie: Kultur-Gesellschaft-Alltag*（Köln, Weimar, Wien）（ドイツ・オーストリアで刊行されている学術雑誌の研究顧問）

## 八杉佳穂［やすぎ　よしほ］――教授

1950年生。**【学歴】**京都大学文学部卒（1975）**【職歴】**国立民族学博物館第４研究部助手（1980）、国立民族学博物館第４研究部助教授（1990）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（1991）、国立民族学博物館第２研究部教授（1997）、国立民族学博物館民族文化研究部教授（1998）、総合研究大学院大学文化科学研究科地域文化学専攻長（2001）**【学位】**文学博士（総合研究大学院大学 1994）**【専攻・専門】**言語人類学、マヤ学**【所属学会】**日本言語学会、古代アメリカ学会、日本ラテンアメリカ学会

**【主要業績】**

［単著］

八杉佳穂

2004　『チョコレートの文化誌』京都：世界思想社。

2003　『マヤ文字を解く』東京：中央公論新社。

Yasugi, Y.

1995　*Native Middle American Languages: An Areal-Typological Perspective*（Senri Ethnological Studies 39). Osaka: National Museum of Ethnology.

【2014年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

カクチケル語とユカテク語の文献言語学的研究

・研究の目的、内容

古典カクチケル語で書かれた『カクチケル年代記』と古典ユカテク語の代表的文献である『チュマイェルのチラムバラムの書』の分析と翻訳を行う。Torresano（1754), Flores（1753)による古典カクチケル語の文法書の分析を完成させたのち、Domingo de Vico（1555), Varea（1604), Coto（17c), Saenz de Santa Maria（1940), Smiles（1989)らの古典カクチケル語の辞書を用い、合わせて現代カクチケル語の諸文法書や辞書を利用して、『カクチケル年代記』を分析するとともに、その翻訳を完成させる。その後『チュマイェルのチラムバラムの書』の翻訳と文法分析を行う。

・成果

Torresano（1754), Flores（1753)らによる古典カクチケル語の文法書の記述をもとに、『カクチケル年代記』の文法分析を行い、文法記述を行うとともに、逐語的翻訳をより日本語に近づける作業を行った。またユカテク語との相違と同似の点を検討した。『カクチケル年代記』は2016年度中に出版申請の予定である。

◎出版物による業績

［監修］

八杉佳穂

2014 『ずかん文字』東京：技術評論社。

［論文］

八杉佳穂

2014 「メソアメリカ諸文明（マヤ・アステカ等）の暦」岡田芳朗編『暦の大事典』pp.35–44, 東京：朝倉書店。

Koizumi, M., Y. Yasugi, K. Tamaoka, S. Kiyama, J. Kim, J. E. Ajsivinac. Sian and L. P. O. García Mátzar

2014 On the（non）Universality of the Preference for Subject-object Word order in Sentence Comprehension: A Sentence-processing Study in Kaqchikel Maya. *Language* 90(3): 722–736［査読有］.

［その他］

八杉佳穂

2014 「言語学の力――グアテマラ」みんぱく e-news 157（http://www.minpaku.ac.jp/museum/enews/157)。

2014 「千家十職×みんぱく――創造を生みだす刺激と美を追求した展示」『月刊みんぱく』38(9)：4–6。

2014 「旅いろいろ地球人　食べる⑧　ペピアンとホコン」『毎日新聞』 9 月18日夕刊。

2014 「使命感に燃えて」『季刊民族学』150：34–36。

2014 「みんぱく世界の旅　中央アメリカ①　さまざまな文明が栄えた大陸」『毎日小学生新聞』12月13日。

2014 「みんぱく世界の旅　中央アメリカ②　世界中の言語の数は」『毎日小学生新聞』12月20日。

2014 「みんぱく世界の旅　中央アメリカ③　マヤの地も時代とともに変化」『毎日小学生新聞』12月27日。

2015 「みんぱく世界の旅　中央アメリカ④　アメリカ大陸原産の植物たち」『毎日小学生新聞』 1 月 3 日。

2015 「中米の地名」庄司博史編『世界の文字事典』pp.182–183, 東京：丸善出版。

2015 「マヤ文字」庄司博史編『世界の文字事典』pp.390–394, 東京：丸善出版。

2015 「数々の思い込み」『月刊みんぱく』39(3)：20–21。

Yasugi, Y.

2014 Head-marked Languages in Middle America. *MINPAKU Anthropology Newsletter* 39: 7–9.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2014年12月21日　「マヤ文明の魅力とマヤ語の特徴」公開シンポジウム『マヤ語からみた言語と思考と脳』国立民族学博物館

2015年 1 月10日～11日　「マヤ文明の魅力とマヤ語の特徴」公開シンポジウム『マヤ語からみた言語と思考と脳』慶應義塾大学三田キャンパス北館ホール

・**広報・社会連携活動**

2014年４月29日　「マヤ文字で名前を書いてみよう」第342回みんぱくウィークエンド・サロン
2014年７月25日　「マヤ文明と世界遺産」立花市民大学、尼崎市立立花公民館
2014年８月５日　「ことばと文化への目覚め」（吉村雅仁・岩坂泰子・八杉佳穂・中牧弘允）博学連携教員研修ワークショップ2014 in みんぱく
2014年10月15日　「古代マヤ人のことばを探る」阿倍野ハルカスカレッジシアター
2014年11月14日　「チョコレートの文化誌」d-labo、ミッドタウン・タワー７Ｆ（東京）

## 新免光比呂［しんめん　みつひろ］―― **准教授**

1959年生。**【学歴】**早稲田大学政治経済学部政治学科卒（1983）、東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了（1986）、東京大学大学院人文科学研究科博士課程修了（1992）**【職歴】**東方研究会専任研究員（1992）、横浜国立大学非常勤講師（1992）、帝京大学非常勤講師（1992）、国立民族学博物館第３研究部助手（1993）、国立民族学博物館民族社会研究部助教授（2000）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2002）、国立民族学博物館民族文化研究部助教授（2004）**【学位】**文学修士（東京大学大学院人文科学研究科 1986）**【専攻・専門】**宗教学・東欧研究**【所属学会】**東方研究会

**【主要業績】**

［単著］

新免光比呂

2000 『祈りと祝祭の国――ルーマニアの宗教文化』京都：淡交社。

［共著］

新免光比呂・保坂俊司・頼住光子

1998 『比較宗教への途３――人間の文化と神秘主義』東京：北樹出版。

［論文］

新免光比呂

1999 「社会主義国家ルーマニアにおける民族と宗教――民族表象の操作と民衆」『国立民族学博物館研究報告』24(1)：1–42。

**【2014年度の活動報告】**

◎各個研究

・**研究課題**

ルーマニアと日本におけるファシズム運動の比較研究

・**研究の目的、内容**

1930年代のルーマニアと日本におけるファシズム運動を比較することで、宗教と政治の関係に関する新たな知見を得たい。

・**成果**

研究主題は、1930年代のルーマニアと日本におけるファシズム運動を比較して宗教と政治の関係に関する新たな知見を得ることであったが、ルーマニア・アメリカ大学から招聘され、2014年５月５日から６日にかけて、ルーマニア・アメリカ大学所属ルーマニア日本研究センターが、ブカレスト大学歴史学部、ルーマニアアカデミー世界経済研究所、ルーマニア日本語教師会と共同して開催した「日本とルーマニア――差異、類似、重複」シンポジウムに参加して、Towards the reflective comparison-Political and religious movements in Japan and Romania というテーマで発表した。また論文としては「ルーマニアにおける二つの指導者崇拝――コドレアヌとチャウシェスク」韓 敏編『近代社会における指導者崇拝の諸相』（国立民族学博物館調査報告127）pp.79–95、2014を発表した。

◎出版物による業績

［論文］

新免光比呂

2014 「ルーマニアにおける二つの指導者崇拝――コドレアヌとチャウシェスク」韓 敏編『近代社会における指導者崇拝の諸相』（国立民族学博物館調査報告127）pp.79–95，大阪：国立民族学博物館［査

読有]。

◎映像音響メディアによる業績

**・国立民族学博物館映像音響資料の制作・監修**

[ビデオテーク]

新免光比呂

2014 『神への祈りと喜びの舞曲―バッハからバルトークへ』日本語，マルチ。

**・DVD・CD などの制作・監修**

[DVD]

新免光比呂

2014 『みんぱく映像民族誌 第14集 ルーマニアの伝統と信仰』日本語，107分。

◎口頭発表・展示・その他の業績

**・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告**

2014年５月５日～６日 「日本とルーマニア――差異、類似、重複」ルーマニア・アメリカ大学所属ルーマニア日本研究センター、ブカレスト大学歴史学部、ルーマニアアカデミー世界経済研究所、ルーマニア日本語教師会との共同開催シンポジウム“Towards the Reflective Comparison-Political and Religious Movements in Japan and Romania”、ルーマニア・アメリカ大学

◎調査活動

**・海外調査**

2014年５月１日～５月14日―ルーマニア、フランス（ルーマニアアメリカ大学日本研究センター国際会議へ参加及び研究打合せ・資料収集）

2014年10月15日～10月31日―アルメニア・グルジア（アルメニア・グルジアの大衆音楽に関する調査研究）

◎大学院教育

**・指導教員**

副指導教員（１人）、特別共同利用研究員の研究指導教員（１人）

◎上記以外の研究活動

**・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など**

科学研究費補助金（基盤研究(B)）「旧東欧地域における『演歌型』大衆音楽の比較研究」（研究代表者：伊東信宏）研究分担者

## 鈴木　紀 [すずき　もとい] ―― 准教授

1959年生。**【学歴】**東京大学教養学部教養学科卒（1982）、東京大学大学院社会学研究科修士課程修了（1985）、東京大学大学院総合文化研究科博士課程単位取得退学（1991）**【職歴】**ニューヨーク州立大学ビンガムトン校人類学科教務助手（1992）、千葉大学文学部助教授（1996）、国立民族学博物館先端人類科学研究部准教授（2007）、国立民族学博物館民族文化研究部准教授（2013）**【学位】**社会学修士（東京大学大学院 1985）**【専攻・専門】**開発人類学・ラテンアメリカ文化論 1）開発援助プロジェクト評価、2）フェアトレード、3）マヤ・ユカテコ民族の社会変化、4）先住民族文化の比較展示学**【所属学会】**日本文化人類学会、国際開発学会、日本ラテンアメリカ学会、Society for Applied Anthropology、American Anthropological Association

**【主要業績】**

[編著]

鈴木 紀・滝村卓司編

2013 『国際開発と協働―― NGO の役割とジェンダーの視点』（みんぱく実践人類学シリーズ８）東京：明石書店。

[論文]

鈴木 紀

2014 「開発」山下晋司編『公共人類学』pp.69-84，東京：東京大学出版会。

2011 「開発人類学の展開」佐藤 寛・藤掛洋子編『開発援助と人類学：冷戦・蜜月・パートナーシップ』pp.45-

66，東京：明石書店。

【2014年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

国際開発のための実践人類学

・研究の目的、内容

本研究の目的は、社会問題の解決に寄与するための文化人類学である実践人類学を、国際開発活動の分野で推進することにある。とくに開発プロジェクトが、その対象社会で持続、発展していくための条件を、プロジェクトのインパクト（事前に予期された影響および予期されていなかった影響）に関する民族誌的調査を通じて明らかにしていく。

今年度もフェアトレード研究を継続する。フェアトレードのインパクトを調査するため、中央アメリカのカカオ栽培者を事例に、フェアトレードに参加している団体だけでなく、参加していない団体の情報収集を目的とした現地調査をおこなう。この調査には、科学研究費補助金（基盤研究(B)）「フェアトレードによるインパクトの地域間比較：徳の経済を念頭に」（研究代表者：池上甲一）の資金を充当する。

・成果

科学研究費補助金（基盤研究(B)）「フェアトレードによるインパクトの地域間比較――徳の経済を念頭に」（研究代表者：池上甲一）の研究分担者として、研究発表および調査をおこなった。2014年11月８日の白山人類学研究会第７回研究フォーラム（第２回オルタトレード研究会）（於：東洋大学白山キャンパス）において「ベリーズのカカオ産業――フェアトレードと歩んだ20年」について発表した。また2015年１月５日から17日まで、コスタリカとパナマを訪問し、カカオのフェアトレードがカカオ産地に及ぼす社会経済的影響を調査した。コスタリカではタラマンカ地方を訪問し、カカオのフェアトレードに関連するエコ・ツーリズムやコミュニティー・ツーリズムの発展状況を参与観察した。パナマではカカオ生産者共同組合COCABOを訪問し、同組合の沿革や、組合員による観光振興の取り組みについて情報収集した。

研究成果の一端として次の出版物を発表した。

1）鈴木 紀「カカオ産地は今――フェアトレードと歩んだ20年」『月刊みんぱく』38(5)：16-17，2014年。

2）鈴木 紀「フェアトレード」『世界民族百科事典』pp.604-605，丸善出版，2014年。

3）鈴木 紀「開発」山下晋司編『公共人類学』pp.69-84，東京大学出版会，2014年。

◎出版物による業績

［論文］

鈴木 紀

2014 「開発」山下晋司編『公共人類学』pp.69-84，東京：東京大学出版会。

青山和夫・米延仁志・坂井正人・鈴木 紀

2014 「『古代アメリカの比較文明論』プロジェクトの目標と展望」『古代アメリカ』17：119-127［査読有］。

［事典項目］

鈴木 紀

2014 「国際社会」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』p.367，東京：丸善出版。

2014 「国際社会の構成」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.368-369，東京：丸善出版。

2014 「国際開発」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.378-379，東京：丸善出版。

2014 「開発途上国」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.380-381，東京：丸善出版。

2014 「フェアトレード」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.604-605，東京：丸善出版。

［その他］

鈴木 紀

2014 「カカオ産地は今――フェアトレードと歩んだ20年」『月刊みんぱく』38(5)：16-17。

2014 「ラテンアメリカ諸国からの米国移民を描いた映画案内――『ヒア・アンド・ゼア』を中心に」『社会科NAVI』8：18-19。

2015 「旅・いろいろ地球人　父親⑦　がんばるお母さん」『毎日新聞』１月８日夕刊。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2014年５月15日 ‘Facing Maya Agency: Reflections on Ethnological Studies of Contemporary Mayan

People,' International Union of Anthropological and Ethnological Sciences 2014, Makuhari Messe, Chiba, Japan

2014年５月17日　'Comment to Claudio Lomnitz's Public Life and Anthropology,' International Union of Anthropological and Ethnological Sciences 2014, Makuhari Messe, Chiba, Japan

2014年９月16日　'Comentario al Panel B: Reconstrucción del Pasado en Torno al Origen y la Legitimidad de los Pueblos Indígenas del México Colonial y Contemporáneo,' Consejo de Estudios Latinoamericanos de Asia y Oceanía 2014, Kyoto University

2014年11月８日　「ベリーズのカカオ産業――フェアトレードと歩んだ20年」白山人類学研究会第７回研究フォーラム、東洋大学白山キャンパス

2015年３月21日　「マヤ文明とマヤ民族――博物館展示の比較」アンデス文明研究会、東京外国語大学本郷サテライト

**・研究講演**

2014年８月30日　「メキシコ・中南米からの米国移民映画案内」みんぱくワールドシネマ関連ミニレクチャー、国立民族学博物館

**・広報・社会連携活動**

2014年８月30日　「Here and There ――メキシコとアメリカの間で生きる人々」みんぱくワールドシネマ、国立民族学博物館

◎調査活動

**・海外調査**

2014年10月５日～10月18日―メキシコ（メキシコの人類学博物館展示の比較研究）

2014年11月22日～12月９日―アメリカ合衆国（古代アメリカ文明に関する博物館展示の比較研究）

2015年１月５日～１月17日―コスタリカ、パナマ（フェアトレードのカカオ生産者への影響調査）

2015年３月３日～３月18日―メキシコ、グアテマラ（メキシコ・グアテマラの人類学博物館の比較調査研究）

◎大学院教育

**・指導教員**

副指導教員（１人）

**・大学院ゼミでの活動**

比較社会演習 III「社会と経済に関する人類学的アプローチ」担当

**・論文審査**

博士論文審査委員（１件）

◎上記以外の研究活動

**・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など**

科学研究費補助金（新学術領域（研究領域提案型））「古代アメリカの比較文明論」A04計画研究「植民地時代から現代の中南米の先住民文化」研究代表者、科学研究費補助金（新学術領域（研究領域提案型））「古代アメリカの比較文明論」（代表：茨城大学 青山和夫）研究分担者、科学研究費補助金（基盤研究(B)）「フェアトレードによるインパクトの地域間比較：徳の経済を念頭に」（代表：近畿大学 池上甲一）研究分担者

**・他機関から委嘱された委員など**

国際開発学会常任理事（学会誌『国際開発研究』編集長）（～2014年11月）

**・非常勤講師**

大阪大学「ボランティア論」（10月29日「開発援助とボランティア」担当）

## 廣瀬浩二郎［ひろせ　こうじろう］――准教授

**【学歴】**京都大学文学部国史学科卒（1991）、京都大学大学院文学研究科修士課程修了（1993）、カリフォルニア大学バークレイ校留学（1995）、京都大学大学院文学研究科博士課程指導認定退学（1997）**【職歴】**京都大学文学部研修員（1997）、花園大学社会福祉学部非常勤講師（1999）、国立民族学博物館民族文化研究部助手（2001）、国立民族学博物館民族文化研究部准教授（2008）**【学位】**文学博士（京都大学大学院文学研究科 2000）、文学修士（京都大学大学院文学研究科 1993）**【専攻・専門】**日本宗教史、民俗学（日本の新宗教、民俗宗教と障害者文化、福祉の関わりについての歴史、人類学的研究）**【所属学会】**日本史研究会、「宗教と社会」学会、日本武道学会、日本文化人類学会

**【主要業績】**

［単著］

廣瀬浩二郎

2009 『さわる文化への招待――触覚でみる手学問のすゝめ』京都：世界思想社。

2001 『人間解放の福祉論――出口王仁三郎と近代日本』大阪：解放出版社。

［学位論文］

廣瀬浩二郎

2000 「宗教に顕れる日本民衆の福祉意識に関する歴史的研究」京都大学大学院文学研究科。

**【2014年度の活動報告】**

◎各個研究

**・研究課題**

「バリア・フリー」に関する人類学的研究

**・研究の目的、内容**

今年度最大の課題は、昨年度（2013年８月～2014年３月）の在外研究の成果を単行本にまとめることである。８か月のシカゴ滞在中、民博のホームページに「ミドルライフ・ブルース」（全18回）を連載した。本連載記事に加筆し、2015年２月に単著『身体でみる異文化の世界』を刊行する予定である。2013年６月に開催した「京都大学バリアフリーシンポジウム」の報告書についても、すでに各パネリストからの原稿が集まり、編集作業に入っている。編著『大学からのバリアフリー』（仮題）の出版予定は、2014年12月である。さらに『季刊民族学』（2012年10月号～2014年１月号）に連載したコラム「世界をさわる」も、単行本化に向けて出版社と交渉している。「世界をさわる」（全６回）は、2012年度に民博で実施した連続講座の内容を紹介するもので、拙編著の形で刊行できれば、「さわる展示」の入門書、民博の展示ガイドの一つとして多方面で活用されることが期待できる。

書籍出版以外では、館外の各種「さわる展示」への協力も、今年度の活動目標である。また、昨年度は在外研究に出たため、共同研究「触文化に関する人類学的研究」の研究会を１度しか開けなかったが、今年度は本共同研究の運用にも注力したい。

**・成果**

今年度は３冊の著作を刊行することができた。編著『世界をさわる』（2014年９月）は、2012年に行った連続講座「博物館にさわる」、および2013年に実施した体験プログラム「瞽女文化にさわる」の成果をまとめた単行本である。触文化の入門書として多方面で活用されており、新聞・雑誌等でも好意的な評価を得ている。共編著『知のバリアフリー』（2014年12月）は、2013年６月に京都大学で開催した「バリアフリーシンポジウム」の報告書である。単なる障害学生支援のマニュアルというレベルにとどまらず、「障害」を切り口とする新たな学びのあり方を提案している点が本書の特徴といえる。単著『身体でみる異文化』（2015年３月）は、2013年８月～2014年３月の在外研究、シカゴを拠点とするフィールドワークの内容を一般向けに書き下ろしたものである。「触文化から身体論へ」が本書の主題であり、「さわる表紙」「触感を味わう読書法」など、紙の本ならではの魅力を発信する意欲作と位置づけることができる。

出版以外でも、大阪府立中央図書館の企画展「さわっておどろく！」への協力、第87回日本社会学会大会シンポジウム「〈当事者宣言〉の社会学」での報告、大阪大学医学部主催のシンポジウム「アートは脳の楽しみ」での発表など、今年度は学際的な場での発信・交流の機会が多く、自身の触文化研究の広がりを実感している。

◎出版物による業績

［単著］

廣瀬浩二郎

2015 『身体でみる異文化――目に見えないアメリカを描く』京都：臨川書店。

［編著］

廣瀬浩二郎編

2014 『世界をさわる――新たな身体知の探究』京都：文理閣。

［共編］

嶺重 慎・廣瀬浩二郎共編

2014 『知のバリアフリー――「障害」で学びを拡げる』京都：京都大学学術出版会。

［論文］

廣瀬浩二郎

2014 「『さわる』で常識を疑う」『月刊 MOKU』2014(9)：56-63。

2014 「点字研究の最前線」『日本語学』2014(9)：15-19。

2015 「さわる文化が生み出す二つの“なみ”」阿部健一監修『五感／五環――文化が生まれるとき』pp.82-89，京都：昭和堂。

［事典項目］

廣瀬浩二郎

2015 「日本語点字」庄司博史編『世界の文字事典』pp.370-373，東京：丸善出版。

［その他］

廣瀬浩二郎

2014 「『さわる展示』の深化と応用②――観光のユニバーサルデザインを考える」『民博通信』145：18-19。

2014 「旅・いろいろ地球人　組織①　日系宗教の海外伝道」『毎日新聞』 9 月25日夕刊。

2014 「もっと、みんなで、ぴかぴかに」みんぱくミュージアムパートナーズ編『MMP10周年記念誌 あゆみ』p.5，大阪：MMP ニューズレター編集局。

2014 「絵にさわる――“体”で感じる GF 絵画の魅力」『月刊みんぱく』38(11)：21。

2015 「点字とともに①　さわる文字『点字』の起源」『毎日小学生新聞』 2 月 7 日。

2015 「点字とともに②　日本で最初の点字図書館」『毎日小学生新聞』 2 月14日。

2015 「点字とともに③　日本で最初の盲学校は京都」『毎日小学生新聞』 2 月21日。

2015 「点字とともに④　点字新聞 90年以上の歴史」『毎日小学生新聞』 2 月28日。

2015 「見常者がほしくなるような白杖を」『月刊みんぱく』39(2)：22-23。

2015 「『障害』を切り口に学びを変える」『京都大学新聞』 2 月16日。

2015 「観光・まちあるきのユニバーサル化をめざして」『からほり新聞』（特定非営利活動法人 高齢者外出介助の会）33：1。

2015 「ふれ愛――『さわる展示』の原点を求めて」『吹田市立博物館だより』61：7-8。

2015 「さわる文化とユニバーサルデザイン」愛媛県博物館協会編『愛媛の博物館』52：4-5。

◎口頭発表・展示・その他の業績

**・共同研究会**

2015年 3 月 1 日　「共同研究の回顧と展望」『触文化に関する人類学的研究――博物館を活用した“手学問”理論の構築』国際基督教大学博物館

**・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告**

2014年 6 月28日　「“知”のバリアフリー――情報保障から情報変換へ」東海大学課程資格センター主催シンポジウム『ユニバーサル・ミュージアムの未来を語る』東海大学

2014年 7 月 5 日　「ユニバーサル・ミュージアムの六原則」吹田市立博物館主催シンポジウム『触ることで何が得られるのか』吹田市立博物館

2014年10月11日　「世界をさわる――盲人文化と現代」日本盲教育史研究会第 3 回大会基調講演、筑波大学東京キャンパス

2014年11月23日　「触常者とは誰か――自尊心・主導権・持続力を兼ね備えた“当事者”の模索」第87回日本社会学会・大会シンポジウム『〈当事者宣言〉の社会学』神戸大学

2015年 1 月24日　「頭を使うのか、体を使うのか――さわるミュージアムが先導する“知”のバリアフリー」大阪大学医学部主催シンポジウム『アートは脳の楽しみ』大阪大学・中之島センター

2015年 2 月22日　「ユニバーサル・ミュージアム論の新展開」日本アートマネジメント学会九州部会主催フォーラム『アートにさわって対話する』大分オアシスタワーホテル

**・研究講演**

2014年 5 月17日　「身体でみる異文化の世界――音で伝える、色を創る、心に触れる」大阪府立中央図書館主催『さわっておどろく！――触覚がひらく芸術・読書の世界』企画展関連講演会、大阪府立中央図書館

2014年 5 月25日　「触文化と身体感覚」大阪大学コミュニケーションデザイン・センター主催講演会、アートエリア B 1

2014年６月11日　「ユニバーサル・ミュージアムの構想」南山大学人類学博物館主催講演会、南山大学
2014年６月14日　「触文化入門」京都大学ポケットゼミ『障害とは何か』特別講義、国立民族学博物館
2014年６月17日　「博物館とバリアフリー」2014年度博物館学集中コース、国立民族学博物館
2014年６月23日　「ユニバーサル・ミュージアムとは何か」京都文教大学『博物館教育論』特別講義、京都文教大学
2014年７月28日　「触察による制作・批評の可能性」間島秀徳個展関連イベント、銀座 steps gallery
2014年８月１日　「さわる世界と視覚障害者の文化」愛知県立岡崎盲学校主催講演会、愛知県立岡崎盲学校
2014年８月20日　「さわる世界と視覚障害者の文化」石川県立盲学校主催講演会、石川県立盲学校
2014年８月26日　「触常者とは誰か」東京都教育委員会主催人権研修会、国立オリンピック記念青少年総合センター
2014年８月27日　「視覚障害者と美術教育」愛知県立名古屋盲学校主催講演会、愛知県立名古屋盲学校
2014年８月31日　「『さわる展示』の現状と課題」東京都美術館主催ボランティア研修会、東京都美術館
2014年９月４日　「触常者とは誰か」九州地区視覚障害者情報提供施設協会主催講演会、リーガロイヤルホテル小倉
2014年９月26日　「“知”のバリアフリー」天理教点字文庫主催講演会、天理教本部
2014年10月26日　「世界をさわる――視覚障害者文化から触文化へ」岡山県視覚障害を考える会主催講演会、川崎医療福祉大学
2014年11月６日　「“知”のバリアフリー」大阪府立大手前高校主催講演会、大阪府立大手前高校
2014年11月９日　「さわる文化が遊びと学びの扉をひらく」わらべ館主催講演会、鳥取市・わらべ館
2014年11月12日　「視覚障害者の歴史と文化」宮城県立盲学校主催講演会、大阪市・日本ライトハウス
2014年11月14日　「触常者とは誰か」池田市主催人権研修会、池田市役所
2014年12月６日　「風を観る――観光・まちあるきのユニバーサル化をめざして」空堀まちなみ井戸端会主催講演会、からほりお屋敷再生複合ショップ「練」
2014年12月19日　「ユニバーサル・ミュージアムの理論と実践」愛媛県博物館協会主催講演会、愛媛県美術館
2014年12月24日　「盲人文化と視覚障害教育」京都府立盲学校主催講演会、京都府立盲学校
2015年２月11日　「深めて、伸ばして、新しくなるカラダのふしぎ」キッズプラザ大阪主催ワークショップ『くらやみ探検』キッズプラザ大阪
2015年２月14日　「風を観る――情報保障から情報変換へ」つくば市民大学主催講演会、筑波学院大学
2015年２月21日　「触学・触楽の魅力」朝倉文夫記念館主催講演会、朝倉文夫記念館
2015年３月14日　「『世界をさわる』冒険が『知のバリアフリー』をもたらす」千里コラボ大学主催講演会、千里公民館
2015年３月21日　「身体でみる異文化」コンタクト・インプロビゼーション・ミーティング・ジャパン実行委員会主催ワークショップ、デザイン・クリエイティブセンター神戸

**・広報・社会連携活動**

2014年５月２日　出演「ないとエッセー」『ラジオ深夜便』NHK ラジオ第１
2014年５月９日　出演「ないとエッセー」『ラジオ深夜便』NHK ラジオ第１
2014年５月16日　出演「ないとエッセー」『ラジオ深夜便』NHK ラジオ第１

◎調査活動

**・国内調査**

2014年５月７日　南山大学人類学博物館（「さわる展示」の実地調査、および関係者との意見交換）
2014年６月20～21日　福島県いわき市（被災地ツーリズムのユニバーサルデザイン化に関する聞き取り調査）
2014年９月11日　株式会社セガ エンタテインメント（3D サウンドを応用したアトラクション開発に関する情報収集、関係者との意見交換）

◎社会活動・館外活動

**・他の機関から委嘱された委員など**

吹田市立博物館協議会委員

**・非常勤講師**

筑波大学理療科教員養成施設「視覚障害教育」（集中講義）、関西学院大学「障害と人権」

## 山中由里子［やまなか　ゆりこ］ 准教授

1966年生。**【学歴】**カラマズー大学フランス語／美術専攻卒（1988）、東京大学大学院総合文化研究科修士課程修了（1991）、東京大学大学院総合文化研究科博士課程中退（1993）**【職歴】**日本学術振興会特別研究員（1992）、東京大学東洋文化研究所助手（1993）、国立民族学博物館博物館民族学研究部助手（1998）、国立民族学博物館民族文化研究部助手（2004）、国立民族学博物館民族文化研究部准教授（2009）**【学位】**学術博士（東京大学 2007）、学術修士（東京大学 1991）**【専攻・専門】**比較文学比較文化　西アジアにおけるアレクサンドロス伝説の比較文学的研究、「驚異」の文化史**【所属学会】**日本比較文学会、日本中東学会、オリエント学会、日本比較文明学会、国際比較文学会

**【主要業績】**

［単著］

山中由里子

2009 『アレクサンドロス変相――古代から中世イスラームへ』名古屋：名古屋大学出版会。

［共編］

Yamanaka, Y. and T. Nishio（eds.）

2006 *The Arabian Nights and Orientalism: Perspectives from the East and West.* London: I. B. Tauris.

［論文］

Yamanaka, Y.

2012 The Islamized Alexander in Chinese Geographies and Encyclopaedias. In R. Stoneman, K. Erickson and I. Netton（eds.）*The Alexander Romance in Persia and the East*（Ancient Narrative Supplements 15）, pp.263-274. Groningen: Barkhuis.

**【受賞歴】**

2011　日本学術振興会賞

2011　日本学士院学術奨励賞

2010　島田謹二記念学藝賞

2010　日本比較文学会賞

**【2014年度の活動報告】**

◎各個研究

・**研究課題**

中東およびヨーロッパにおける驚異譚の比較文学的研究

・**研究の目的、内容**

本研究が対象とする「驚異譚」とは、ラテン語で mirabilia、アラビア語・ペルシア語で ʿajāʾib と呼ばれる、辺境・異界・太古の怪異な事物や生き物についての言説である。未知の世界の摩訶不思議を語るこのようなエピソードは、東西の歴史書、博物誌・地誌、物語、旅行記・見聞記などに登場するが、これらの多くは古代世界から中世・近世の中東およびヨーロッパに継承され、様々な文化圏で共有されてきた。本研究で明らかにしようとする問題点は、次の3つの主要な軸にまとめることができる

1）ジャンルの枠組とモチーフの分類：驚異譚を比較研究することによって、実際にその言説の語り手（あるいは編纂者）によってどのように定義され、位置づけられてきたかを明らかにする。複数の文化圏に共通する主なモチーフや逸話を関連作品から抽出し、「異民族の驚異」、「異境の驚異」、「太古の驚異」といった分類を試みる。

2）知識の伝播と世界観の変遷：権力の移行、人間の移動、書物・視覚イメージの普及など、知識の伝播や未踏の地の発見を促した歴史的文脈を把握した上で、博物学・人文地理学の発展の流れを明らかにする。さらに、世界地図や挿絵・装飾などの視覚的表象にも注目し、中東とヨーロッパにおける世界観の変遷と相互の影響関係を辿る。

3）宗教・言語・文化的な特異性と超域的な包括性：上記1）と2）のような比較研究を通して、宗教・言語・文化による相違点を浮かびあがらせる一方、異なる文化圏の驚異譚の根底に共通して流れる想像の力と語りの力を明らかにする。

本研究は、「中東およびヨーロッパにおける驚異譚の比較文学的研究」と題して、科学研究費補助金（基盤研

究（B））の交付を受けている。

・成果

本各個研究と共同研究の成果をまとめた論文集『＜驚異＞の文化史――中東とヨーロッパを中心に』を、民博の外部出版助成を得て名古屋大学出版会から2015年度中に刊行する。すでに全論文が揃い、編集作業を進めている。

2014年５月31日に東アジア怪異学会で発表し、その論文「＜驚異＞を媒介する旅人」が『怪異を媒介するもの』（アジア遊学）に掲載予定である。2015年１月14日から16日にゲッティンゲン大学で開かれた日独学術コロキウムで“Travelling Narratives and Networks of Knowledge: the Case of the Alexander Romance”を発表した。

本研究は、「中東およびヨーロッパにおける驚異譚の比較文学的研究」と題して、科学研究費補助金（基盤研究（B））の交付を受けている。また、機構連携研究「驚異と怪異の表象――比較研究の試み」とも連携している。館長リーダーシップ経費を得て研究フォーラム「驚異と怪異――想像界の比較研究に向けて」（2014年10月12日～13日）を開催し、研究の次なる展開を議論した。

◎出版物による業績

［論文］

山中由里子

2015 「未知との遭遇――驚異と怪異の比較研究」小松和彦編『怪異・妖怪文化の伝統と創造――ウチとソトの視点から』（国際研究集会報告書45）pp.31-42，京都：国際日本文化研究センター。

［事典項目］

山中由里子

2014 「民族叙事詩」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.506-507，東京：丸善出版。

［その他］

山中由里子

2014 「未知との遭遇――怪異と驚異の比較研究」『HUMAN ――知の森へのいざない』6：74-78。

2014 「集めてみました世界の○○ ベル編」『月刊みんぱく』38(12)：10-11。

2014-2015 「編集後記」『月刊みんぱく』38(4)～39(3)。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2014年５月31日 「驚異と怪異――想像界の比較研究」東アジア怪異学会、園田学園女子大学

2015年１月16日 ‘Travelling Narratives and Networks of Knowledge: the Case of the Alexander Romance,’ 日独学術コロキウム “Knowledge Transfer Across Borders: Integrative Approaches” ゲッティンゲン大学（ドイツ）

2015年１月24日 ‘L’esprit liquéfié en larme et son récipient,’ 国際シンポジウム『時のうつわ、魂のうつし／Réceptacle du passage』パリ日本文化会館

・展示

「イメージの力――国立民族学博物館コレクションにさぐる」実行委員、本館展示新構築総括班

・広報・社会連携活動

『月刊みんぱく』編集長

2014年９月28日 「絵解きの時」第357回みんぱくウィークエンド・サロン

2014年10月29日 「描かれた時間」連続講座「みんぱく × ナレッジキャピタル――イメージの力をさぐる」一般社団法人ナレッジキャピタル・国立民族学博物館共催、グランフロント大阪ナレッジキャピタル CAFE Lab.

2014年11月29日 特別展「イメージの力」展関連トークイベント「いしいしんじ」司会進行・対談

2014年12月１日 ギャラリートーク「モスクの壁掛け」国立民族学博物館特別展示館

この部分は電子媒体による公開の許諾が得られていません。

◎大学院教育

・**大学院ゼミでの活動**

「西アジア文化研究特論」担当

・**論文審査**

博士論文審査委員（１件）

◎上記以外の研究活動

・**人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など**

人間文化研究機構連携研究代表者「驚異と怪異の表象――比較研究の試み」代表者、科学研究費補助金（基盤研究(B)）「日本現代文学・文化の世界展開の比較文学的研究――＜ポップ＞なテクストを中心に」（研究代表者：平石典子）研究分担者、国際日本文化研究センター共同研究「21世紀10年代日本文化の軌道修正――過去の検証と将来への提言」（代表：稲賀繁美）共同研究員

◎社会活動・館外活動

・**他機関から委嘱された委員など**

日独学術コロキウム「人文社会科学分野における知識移転（Knowledge Transfer across Borders: Integrative Approaches)」幹事（JSPS ボンセンター、ゲッティンゲン大学、人間文化研究機構主催、2015年１月14日～16日、Aula am Wilhelmsplatz 1, 37073 Göttingen)、日本比較文学会関西支部幹事、日本比較文学会国際活動委員会委員、外来研究員受入担当（ジェフリー・ハンブル、イギリス芸術・人文科学会議（AHRC）２月20日～４月20日）

## 齋藤玲子［さいとう　れいこ］――――――

今年度からは、アイヌ文化の継承と当時の社会状況との関係について、とくに物質文化と芸能に注目し、研究する。最終的に、物質文化や芸能が、記録の多く残る江戸時代後期からどう変化してきたかを明らかにし、現代のアイヌ文化の位置づけを示すことを目指す。

具体的には、一昨年スタートした「明治から終戦までの北海道・樺太・千島における人類学・民族学研究と収集活動」の共同研究において、各時代・各地域での生活用具や儀礼具などの製作および使用の状況と、それらを手放した（売却した）事情を明らかにすることから始める。また、科学研究費補助金（基盤研究(B)）「北方寒冷地域における織布技術と布の機能」（代表：佐々木史郎、2014～2016年度）の連携研究者として、とくにアイヌの織物の継承についても調査をすすめる。

**・成果**

共同研究「明治から終戦までの北海道・樺太・千島における人類学・民族学研究と収集活動」では、東京大学大学院情報学環附属社会情報研究資料センター所蔵の坪井正五郎関係資料を中心に調査・研究をおこなった。とくに明治時代に北海道・樺太でアイヌおよびウイルタやニヴフに関する調査が、どのような目的でどうおこなわれたかについて検討をした。民具類を収集する際の目安となる金額や、具体的な交渉内容を記した文書等を発見することができ、成果が得られた。また、関連して、東京大学理学部人類学教室で収集した民族資料がどのように管理されてきたか、残されたカードや台帳類の整理をとおして検討した。結果、資料移管時に付随してきた『土俗品目録』は資料を収集してすぐに作成された台帳ではなく、おそらく昭和のはじめに、分類をしながら作成されたものであるため、一部に情報の抜け落ちや混同があることもわかった。

芸能に関しては、IUAES2014において、アイヌの歌と踊りの継承と実践についてのパネルを企画・実施した。科学研究費補助金（基盤研究(B)）「北方寒冷地域における織布技術と布の機能」では、アイヌの織物の継承のため、イラクサを素材にした糸づくりに実験的に取り組んできた事例について調査をおこなった。

◎出版物による業績

［監修］

齋藤玲子

2014 「第１部　トーテムポールの人びと」八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館編『トーテムポールの人びと――漁労・狩猟採集民のくらし』（平成26年度特別展示図録）pp.2-46，青森：八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館。

［事典項目］

齋藤玲子

2014 「トーテム」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.156-157，東京：丸善出版。

2014 「アイヌ」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.302-303，東京：丸善出版。

2014 「民族集団と博物館」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.516-517，東京：丸善出版。

［その他］

齋藤玲子

2014 「日本民族学会附属民族学博物館の収集資料」『民博通信』145：22-23。

2014 「グリーンランド・イヌイットの文化」『月刊みんぱく』38(10)：6-7。

2014 「『アイヌ古式舞踊』の多様なかたち」『月刊みんぱく』38(11)：14-15。

2014 「民博でのカムイノミ」（特集：民博の礎）『季刊民族学』150：78-79。

2015 「㉗木綿衣」『図画工作３・４　教師用指導書アートカード』，大阪／東京：日本文教出版。

2015 「㊴トーテムポール（墓標）」『図画工作３・４　教師用指導書アートカード』大阪／東京：日本文教出版。

◎口頭発表・展示・その他の業績

**・共同研究会**

2014年９月24日 「坪井正五郎の北海道・樺太調査について」『明治から終戦までの北海道・樺太・千島における人類学・民族学研究と収集活動――国立民族学博物館所蔵のアイヌ、ウイルタ、ニヴフ資料の再検討』東京大学情報学環

2015年１月24日 「坪井正五郎の樺太調査関係資料から見えるもの」『明治から終戦までの北海道・樺太・千島における人類学・民族学研究と収集活動――国立民族学博物館所蔵のアイヌ、ウイルタ、ニヴフ資料の再検討』

2015年２月１日 「アイヌの木彫と表象――松前藩献上品から経産省の伝統的工芸品指定まで」『表象のポリティックス――グローバル世界における先住民／少数者を焦点に』

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2014年５月17日　‘Introduction.’ “Songs and Dances of the Ainu（Aynu): Heritage and Practice in Akan, Hokkaido, Japan.” 日本文化人類学会50周年記念国際大会（Panel 136 in JASCA 50th Anniversary Conference ＋ IUAES Inter-Congress 2014)、幕張メッセ

・みんぱくゼミナール

2014年11月15日　「美術館からみたみんぱくコレクション」（長屋光枝・山田由佳子氏と合同講演）第438回みんぱくゼミナール

・研究講演

2014年８月30日　「サケがつなぐ東西の文化――北西海岸先住民とアイヌ民族」特別展考古学講座、八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館

・展示

「特別展　イメージの力――国立民族学博物館コレクションにさぐる」実行委員、「企画展　未知なる大地――グリーンランドの自然と文化」実行委員、本館展示新構築総括班

・広報・社会連携活動

2014年４月30日　「日本の先住民族アイヌ」JICA 博物館学コース、国立民族学博物館

2014年６月26日　「アイヌ民族の歴史と文化」京都教育大学附属高校２年生対象、京都教育大学Ｆ棟大講義室２

2014年７月８日　「アイヌ民族の歴史と文化」プール学院中学校２年生対象、国立民族学博物館

2014年８月４日　「ようこそ国立民族学博物館へ」大阪府教育センター 大阪府高等学校・支援学校初任者研修、国立民族学博物館

2014年８月30日　特別展ギャラリートーク「トーテムポールの人びと――漁労・採集民のくらし」、八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館

2014年９月27日　トークイベント「イメージの力」司会・聞き手、国立民族学博物館講堂

2014年10月20日　特別展ギャラリートーク「今日のフォーカス」国立民族学博物館特別展示場

2014年10月26日　「消費されるイメージ――観光みやげか博物館資料か」第360回みんぱくウィークエンド・サロン

2014年11月11日　「特別展イメージの力の概要について」兵庫県阪神シニアカレッジ、国立民族学博物館

2014年11月12日　「イメージと商品化」連続講座「みんぱく × ナレッジキャピタル――イメージの力をさぐる」、グランフロント大阪ナレッジキャピタル CAFE Lab.

2014年11月22日～23日　ワークショップ「体感!! イメージの力」講師、国立民族学博物館社会連携室・特別展示場

2014年11月27日　「ミンパク　オッタ　カムイノミ」司会・解説

2014年12月21日　「アイヌ民族の歴史と文化」徳島市立高校対象（博学連携推進モデル事業「高校生が調べる鳥居龍藏――鳥居龍藏とアイヌについて」)、国立民族学博物館

2015年２月22日　特別コーナー展示「北方民族の装い」ギャラリートーク、松浦武四郎記念館

2015年３月18日　「日本とアイヌ民族　隣人としてくらす」産経新聞社主催、みんぱく創設40周年記念 カレッジシアター「地球探究紀行」あべのハルカス近鉄本店 ウイング館９階 SPACE 9

◎調査活動

・国内調査

2014年９月18～22日―釧路市阿寒町（アイヌの織物に関する調査および資料収集）

2015年２月18日―天理市（アイヌの着物および捧酒箸に関する調査）

2015年３月20日―東京都（坪井正五郎関連資料の調査）

2015年３月23～24日―札幌市（アイヌの刺繍資料の調査）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費（基盤研究(B)）「北方寒冷地域における織布技術と布の機能」（研究代表者：佐々木史郎）連携研究者

◎社会活動・館外活動

・他機関から委嘱された委員など

「民族共生の象徴となる空間」における博物館の整備・運営に関する調査検討委員会臨時委員、北海道立北方民

族博物館研究協力員、日本文化人類学会50周年記念国際大会ソーシャル・プログラム委員

・**非常勤講師**

神戸女子大学「多文化共生論」

## 藤本透子［ふじもと　とうこ］――――――

新の成果をふまえて「カザフ草原の暮らし」、「オアシス都市と職人の世界」、「人生儀礼とイスラーム」の3つのサブセクションを設けて展示を新構築する予定である。

・成果

1）カザフのイスラーム動態と共同性再構築に関する調査研究

科学研究費補助金（基盤研究(B)）「多文化空間に生きる越境者の共同性再構築に関する地域間比較研究」（代表：山田孝子、2012～2014年度）の分担者として、モンゴル・中国・ウズベキスタンからカザフスタンに「帰還」したカザフ人の共同性再構築とイスラーム動態に関する調査をカザフスタンで行い、ウズベキスタンでも補足調査を行った。この調査を含め、これまで3年間の調査研究の成果として、12月に国際ワークショップMigration and the Remaking of Ethnic/Micro-regional Connectednessを民博で共催し、Migration to the "Historical Homeland": Remaking Connectedness in Kazakh Society beyond National Borders と題して発表した。また、国立民族学博物館共同研究（若手）の成果として、『現代アジアの宗教――社会主義を経た地域を読む』（編著）が研究出版委員会の査読を経て採択された（春風社より2015年5月出版予定）。本書では、現代において宗教が（再）活性化するメカニズムを、社会主義をさまざまなかたちで経験してきたアジアを対象として、人類学的アプローチから明らかにしている。

2）中央アジア展示新構築（資料収集および基本設計）

中央アジア展示を30年ぶりにリニューアルするため基本設計を行い、文化資源プロジェクト「中央・北アジア展示新構築のための標本・映像音響資料の収集」に基づいて、8～9月にカザフスタン、10月にウズベキスタン、3月に再度カザフスタンで計約200点の標本資料を収集した。この資料収集により、「草原の暮らし」「まちの暮らし」「職人の世界」「人生儀礼とイスラーム」という新たな枠組みで中央アジア展示を行う準備が整った（2015年度リニューアル予定）。また、中央・北アジア全体として「自然との共生」「社会主義と民族文化」に関する展示をするため、収蔵資料の選定などを行った。さらに、中央アジアに関する最新の研究成果を社会還元する一環として、『カザフスタンを知るための60章』（共編著、明石書店）を3月に出版した。

◎出版物による業績

［共編著］

宇山智彦・藤本透子編著

2015 『カザフスタンを知るための60章』東京：明石書店。

［論文］

藤本透子

2014 「カザフスタンの体制移行を生きる女性たち――草原の村の結婚と子育てを中心に」福原裕二・吉村慎太郎編『現代アジアの女性たち――グローバル化社会を生きる』pp.135-153, 東京：新水社［査読有］。

2015 「『歴史的祖国』への移住――カザフスタンにおける『帰還者』の生活と祝祭・宗教実践」小島敬裕編『移動と宗教実践――地域社会の動態に関する比較研究』（CIAS Discussion Paper No.47）pp.45-54。

［その他］

藤本透子

2014 「集めてみました世界の○○ お棺編」『月刊みんぱく』28(11)：10-11。

2014 「カザフスタン村落部における恋愛結婚の諸相」『アジ研・ワールドトレンド』22：26-27。

2014 「私の研究と出会い――カザフ草原の村から展望するイスラーム動態」『HUMAN――知の森へのいざない』7：141-146。

2014 「旅・いろいろ地球人　父親⑥　草原に生きる」『毎日新聞』12月18日夕刊。

2015 「旅・いろいろ地球人　信じる①　ゆるやかなイスラム」『毎日新聞』1月22日夕刊。

2015 「書評　島村一平『増殖するシャーマン――モンゴル・ブリヤートのシャマニズムとエスニシティ』2011年、春風社」『日本モンゴル学会紀要』44：83-86［査読有］。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2014年12月5日　'Migration to the "Historical Homeland": Remaking Connectedness in Kazakh Society beyond National Borders,' International Workshop on Migration and the Remaking of Ethnic/Micro-Regional Connectedness, National Museum of Ethnology

・共同研究会

2014年６月28日　「近代宗教制度報告――カザフスタン」『宗教人類学の再創造――滲出する宗教性と現代世界』

2014年７月６日　「イスラーム復興のなかの贈与交換――カザフスタンの事例から」『贈与論再考――「贈与」・「交換」・「分配」に関する学際的比較研究』

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2015年１月10日「『歴史的祖国』への移住とイスラーム――カザフスタンの事例から」京都大学地域研究統合情報センター共同研究『移動と宗教実践――地域社会の動態に関する比較研究』（代表：小島敬裕）、京都大学地域研究統合情報センター

・研究講演

2015年１月30日　「イスラーム社会の文化人類学――中央アジアを例に」阪神シニアカレッジ国際理解学科２年生、尼崎中小企業センター

2015年１月30日　「イスラーム文化入門」阪神シニアカレッジ国際理解学科１年生、尼崎中小企業センター

2015年２月６日　「中央アジアの社会再編とイスラーム」園田・みんぱく連携講座「変化する現代世界」、園田学園女子大学

・展示

年末年始展示イベント「ひつじ」写真パネル「嫁入り道具のフェルト」、資料写真パネル「羊毛巻き付け具」中央・北アジア展示チームリーダー、文化資源プロジェクト「中央・北アジア展示新構築のための標本・映像音響資料の収集」提案者

・広報・社会連携活動

2015年１月25日　「中央アジアの嫁入り道具」第369回みんぱくウィークエンド・サロン

◎調査活動

・海外調査

2014年８月８日～９月６日―カザフスタン（中央アジアにおける標本・映像音響資料の収集及びカザフ社会における宗教動態と共同性の再構築に関する調査）

2014年９月29日～10月23日―ウズベキスタン（中央アジアにおける標本・映像音響資料の収集及びカザフ社会における宗教動態と共同性の再構築に関する調査）

2015年３月３日～３月28日―カザフスタン（中央アジア展示新構築のための標本・映像音響資料の収集）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費補助金（基盤研究（B））「多文化空間に生きる越境者の共同性再構築に関する地域間比較研究」（代表：山田孝子）研究分担者、京都大学地域研究統合情報センター共同研究「移動と宗教実践――地域社会の動態に関する比較研究」（代表：小島敬裕）共同研究員、京都大学地域研究統合情報センター共同研究「書誌情報データベースの地域情報学的新展開を探る」（代表：帯谷知可）共同研究員、『日本中央アジア学会報』編集委員

## 先端人類科学研究部

### 寺田吉孝［てらだ　よしたか］――――――

**【主要業績】**

［編著］

Terada, Y.（ed.）

2008　*Music and Society in South Asia: Perspectives from Japan*（Senri Ethnological Studies 71）. Osaka: National Museum of Ethnology.

2001　*Transcending Boundaries: Asian Musics in North America*（Senri Ethnological Reports 22）. Osaka: National Museum of Ethnology.

［論文］

Terada, Y.

2000　T. N. Rajarattinam Pillai and Caste Rivalry in South Indian Classical Music. *Ethnomusicology* 44(3): 460–490.

**【2014年度の活動報告】**

◎各個研究

**・研究課題**

音楽・芸能の伝承における映像メディアの活用

**・研究の目的、内容**

民博が映像メディアを用いて蓄積してきた音楽・芸能の情報は膨大な量に達しており、その資料的価値は高い。しかし、活発な収集・制作活動に比べ、映像音響資料の活用に関する議論はこれまで十分に行われておらず、館外での利用、特に取材対象国・地域においての利用は極めて限定的である。本研究は、これまでの番組作成と活用のプロセス（事前調査、取材、編集、上映など）を見直し、音楽・芸能の伝承に寄与することができる映像番組の制作方法を検討することを目的とする。

**・成果**

映像メディアが音楽芸能の継承に果たす役割について、フィリピン（2014年10月）、スペイン（同年11月）、マレーシア（2015年１月）で開催された国際研究集会で研究発表を行うとともに、国際学会、大学、映画祭などで、民博制作映像番組の上映会を計10回開催し、視聴者からの反応に基づいて映像メディアの活用について考察を進めた。これらの研究発表、上映会に基づいた論文を執筆し、スペインのシンポジウムの報告論文集に投稿した。上記の研究は、本研究は人間文化研究機構連携研究「映像による芸能の民族誌の人間文化資源的研究」（代表者：福岡正太）および科学研究費補助金（基盤研究(B)）「映像を用いた東南アジアのゴング文化の音楽人類学的研究」（代表者：福岡正太）の一環として実施したものである。

◎出版物による業績

［論文］

Terada, Y.

2014　The Circular Flow of South Indian Music and Dance. In U. Hemetek, E. Marks and A. Reyes（eds.）*Music and Minorities from Around the World: Research, Documentation and Interdisciplinary Study*, pp.47–71. Newcastle upon Tyne: Cambridge Scholars Publishing［査読有］.

［事典項目］

寺田吉孝

2014　「芸能・芸術」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』p.473，東京：丸善出版。

2014　「楽器」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.480–481，東京：丸善出版。

［その他］

寺田吉孝

2014　「旅・いろいろ地球人　組織⑤　北米のタイコ」『毎日新聞』10月23日夕刊。

◎映像音響メディアによる業績

**・国立民族学博物館映像音響資料の制作・監修**

［ビデオテーク］

米野みちよ・寺田吉孝制作監修

2014　『祝いの音、勝利の記憶――フィリピン・ルソン島山地民の結婚式』日本語，25分。

2014　*Sounds of Bliss, Echoes of Victory: A Kalinga Wedding in the Northern Philippines*. 英語，25分。

2014　*Kasar iti Tabuk*. イロカノ語，25分。

ガルフィアス，R.・寺田吉孝制作監修

2014　*Guitars of Puerto Rico*.　英語，66分。

2014　*Guitars of Portugal*.　英語，47分。

**・DVD・CD などの制作・監修**

［DVD］

寺田吉孝監修

2015　『みんぱく映像民族誌　第17集　沖縄のエイサー、大阪のエイサー』日本語，85分／76分。

◎口頭発表・展示・その他の業績

**・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告**

2015年１月25日　「カナダ、トロント市における南インド音楽・舞踊の実践」現代インド地域研究民博拠点 第４回研究会（代表：三尾 稔）、国立民族学博物館

**・共同研究会**

2015年２月28日　「南インド音楽・舞踊とグローバル化」『グローバリゼーションの中で変容する南アジア芸能の人類学的研究』

**・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告**

2014年10月16日　'Recent Documentation Projects at the National Museum of Ethnology' "Laon-Laon Forum and Conference-Workshop on Preservation of Music Heritage in Asia" フィリピン大学民族音楽学センター（ケソンシティ、フィリピン）

2014年11月５日　'On Making *Drumming out a Message*: Filmmaking and Marginalized Communities.' "MusiCam 2014: International Conference on Visual Ethnomusicology" バリャドリッド大学（バリャドリッド、スペイン）

2015年１月２日　'The Music Cultures of the Marginalized Communities' マドラス大学「メディアと社会」セミナーシリーズ（チェンナイ、インド）

2015年１月26日　'Safeguarding Intangible Cultural Heritage: Process-oriented Applications of Audiovisual Media.' アジア太平洋無形文化遺産国際研究センター（IRCI）国際専門家会議、イスラム芸術博物館（クアラルンプール、マレーシア）

**・研究講演**

2014年４月９日　「演じる音――チャルメラの音に集う人々」産経新聞社主催、みんぱく創設40周年記念 カレッジシアター「地球探究紀行」あべのハルカス近鉄本店 ウイング館９階 SPACE 9

2014年６月11日　「人生は音楽の調べとともに――移り変わるインドの結婚式」産経新聞社主催、みんぱく創設40周年記念 カレッジシアター「地球探究紀行」あべのハルカス近鉄本店 ウイング館９階 SPACE 9

2014年９月17日　「島々に響く青銅と竹の音――フィリピンの伝統音楽」産経新聞社主催、みんぱく創設40周年記念 カレッジシアター「地球探究紀行」あべのハルカス近鉄本店 ウイング館９階 SPACE 9

2014年10月30日　「神像『ナタラージャ』」特別展『イメージの力――国立民族学博物館コレクションにさぐる』ギャラリートーク、国立民族学博物館特別展示館

2015年２月21日　「南インド社会と音楽」第10回無形文化遺産理解セミナー、堺市博物館

2015年２月22日　「音楽展示の楽しみ方」第373回みんぱくウィークエンド・サロン

2015年２月25日　「音楽展示は楽器展示？」第５回 MMP ステップアップ講座、国立民族学博物館

**・研究公演**

2014年７月20日　「アリラン峠を越えていく――在日コリアン音楽の今」国立民族学博物館講堂

**・広報・社会連携活動**

［映像番組上映］

2014年７月20日　*Sounds of Bliss, Echoes of Victory: A Kalinga Wedding in the Northern Philippines*（2014年制作）国際伝統音楽評議会「音楽とマイノリティ」研究グループ第８回国際シンポジウム、国立民族学博物館

2014年10月16日　*Sounds of Bliss, Echoes of Victory: A Kalinga Wedding in the Northern Philippines* および *Music in the Life of Balbalasang: A Village in the Northern Philippines*（共に2014年制作）ラオンラオン会議、フィリピン大学ディリマン校（ケソンシティ、フィリピン）

2014年10月19日　*Musika iti biag ti baryo Balbalasang, amianan ti Pilipinas*（イロカノ語、2014年制作）聖ポ

ール教会（バルバラサン、フィリピン）

2014年10月21日　*Kasar iti Tabuk*（イロカノ語、2014年制作）撮影現地上映会（タブク、フィリピン）

2014年10月24日　*Sounds of Bliss, Echoes of Victory: A Kalinga Wedding in the Northern Philippines* および *Music in the Life of Balbalasang: A Village in the Northern Philippines* フィリピン人類学会（UGAT）第36回大会、セントルイス大学（バギオ、フィリピン）

2014年11月28日　*Valencia's Virgin Mary Festival and the Dulzaina*（2013年制作）および *Guitars of Puerto Rico*（2014年制作）第４回国際民俗音楽映画祭（カトマンズ、ネパール）

2015年１月17日　『大阪のエイサー――思いの交わる場』（2003年制作）天久ヒルトップ（那覇）

2015年２月４日　*Sounds of Bliss, Echoes of Victory: A Kalinga Wedding in the Northern Philippines* および *Music in the Life of Balbalasang: A Village in the Northern Philippines*、TALA ゲストハウス（バギオ、フィリピン）

2015年２月５日　*Sounds of Bliss, Echoes of Victory: A Kalinga Wedding in the Northern Philippines* および *Music in the Life of Balbalasang: A Village in the Northern Philippines*、フィリピン大学バギオ校（バギオ、フィリピン）

2015年２月７日　*Sounds of Bliss, Echoes of Victory: A Kalinga Wedding in the Northern Philippines* および *Music in the Life of Balbalasang: A Village in the Northern Philippines*、フィリピン大学ディリマン校アジアセンター（ケソンシティ、フィリピン）

［ラジオ放送］

2015年３月23日　出演『中村こずえの smile for you』静岡放送 SBS ラジオ

◎調査活動

**・国内調査**

2014年６月28日、７月12日、８月１日、22日、12月17日、18日、2015年３月12日、20日、27日―大阪市（太鼓製作に関する映像音響資料収集）

**・海外調査**

2014年10月12日～10月23日―フィリピン（アジア音楽伝統の保存に関する国際会議へ参加及び民博制作映像番組の上映会）

2014年11月３日～11月10日―スペイン（映像民族音楽学国際会議に参加、発表及び研究グループ「映像民族音楽学」設立にむけての審議）

2014年12月24日～2015年１月５日―インド（南インド音楽世界の定量的研究調査）

2015年１月25日～１月27日―マレーシア（アジア・太平洋地域における無形文化遺産保存に関する専門家会議に参加）

2015年２月３日～２月８日―フィリピン（民博制作映像番組の現地上映会）

◎大学院教育

**・指導教員**

副指導教員（１人）

**・論文審査**

博士論文審査委員（１件）、予備審査委員（１件）

◎上記以外の研究活動

**・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など**

科学研究費補助金（基盤研究（C））「インド音楽の定量的研究」連携研究者、科学研究費補助金（基盤研究（B））「映像を用いた東南アジアのゴング文化の音楽人類学的研究」研究分担者、人間文化研究機構連携研究「映像による芸能の民族誌の人間文化資源的活用」研究分担者

◎社会活動・館外活動

**・他機関から委嘱された委員など**

国際伝統音楽評議会 International Council for Traditional Music 理事、学会誌 *Yearbook for Traditional Music* 映画・ビデオレビュー編集委員、「音楽とマイノリティ」研究グループ書記長、*Ethnomusicology Forum* 誌（イギリス）編集助言委員、*Asian Music* 誌（アメリカ合衆国）編集助言委員、ネパール民俗音楽映画祭（ネパール）国際運営委員、博士論文審査委員（沖縄県立芸術大学）

・非常勤講師

北海道教育大学岩見沢校「アジア文化史II」（集中講義）

◎学会の開催

2014年５月18日　国際シンポジウム「フィリピン音楽の映像音響記録――ロベルト・ガルフィアスの歴史的貢献」国立民族学博物館

2014年７月19日～23日　国際伝統音楽評議会「音楽とマイノリティ」研究会第８回国際シンポジウム、国立民族学博物館

## 齋藤　晃［さいとう　あきら］――教授

**【学歴】**京都大学文学部文学科フランス語学フランス文学専攻卒（1988）、東京大学大学院総合文化研究科文化人類学専攻修士課程修了（1991）、東京大学大学院総合文化研究科文化人類学専攻博士課程単位取得退学（1994）**【職歴】**国立民族学博物館第４研究部助手（1996）、国立民族学博物館博物館民族学研究部助手（1998）、国立民族学博物館博物館民族学研究部助教授（2003）、国立民族学博物館先端人類科学研究部助教授（2004）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2006）、国立民族学博物館先端人類科学研究部教授（2014）**【学位】**学術修士（東京大学大学院総合文化研究科 1991）**【専攻・専門】**文化人類学、ラテンアメリカ研究**【所属学会】**日本文化人類学会、日本ラテンアメリカ学会

**【主要業績】**

［共著］

岡田裕成・齋藤 晃

2007 『南米キリスト教美術とコロニアリズム』名古屋：名古屋大学出版会。

［編著］

齋藤 晃編

2009 『テクストと人文学――知の土台を解剖する』京都：人文書院。

［共編］

Saito, A. et Y. Nakamura（dir.）

2010 *Les outils de la pensée: étude historique et comparative des «textes»*. Paris: Éditions de la Maison des sciences de l'homme.

**【2014年度の活動報告】**

◎各個研究

・研究課題

スペイン領南米における集住政策の先住民社会への影響

・研究の目的、内容

スペイン統治下のアメリカでは、広い範囲に分散する小規模な集落を西欧式の大きな町に統合する集住政策が、植民地全土で実施された。本研究は、この政策の先住民社会への長期的影響を、南米のさまざまな地域の事例の比較を通じて解明する。

・成果

民博の機関研究「近代ヒスパニック世界における国家・共同体・アイデンティティ――スペイン領アメリカの集住政策の研究」の一環として教皇庁立ペルーカトリカ大学（リマ、ペルー）で2013年度に開催した公開セミナーの成果を『国立民族学博物館研究報告』に刊行した。また、2010年度以来進めてきた集住政策に関する国際共同研究の最終成果として、スペイン語の論集をとりまとめた。民博の外部出版経費を申請するため原稿を研究出版委員会に提出し、査読を経て申請が採択された。

民博の研究成果公開プログラムにより、2014年８月、教皇庁立チリカトリカ大学（サンティアゴ、チリ）で開催された第15回国際イエズス会ミッション会議に参加した。会議では、招待講演をおこなうとともに、チリ人研究者と共同でシンポジウムを実施した。成果はスペイン語の論文にまとめ、外国の学術雑誌に投稿した。

◎出版物による業績

［論文］

Saito, A., C. Rosas Lauro, J. R. Mumford, S. A. Wernke, M. Zuloaga Rada y K. Spalding

2014 Nuevos avances en el estudio de las reducciones toledanas. *Bulletin of the National Museum of Ethnology* 39(1): 123-167［査読有、機関研究成果］.

◎口頭発表・展示・その他の業績

**・共同研究会**

2014年12月21日 「近世カトリックの世界宣教と文化順応――趣旨説明」『近世カトリックの世界宣教と文化順応』

**・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告**

2014年８月28日 'Consolidación y reproducción de las parcialidades en las reducciones jesuíticas de Moxos（パネル報告）.' 国際シンポジウム "XV Jornadas Internacionales sobre las Misiones Jesuíticas." Santiago de Chile: Pontificia Universidad Católica de Chile

2014年８月29日 'La guerra indígena y la expansión misional en Moxos, siglos XVII-XVIII（招待講演）.' 国際シンポジウム "XV Jornadas Internacionales sobre las Misiones Jesuíticas." Santiago de Chile: Pontificia Universidad Católica de Chile

◎調査活動

**・海外調査**

2014年８月23日～９月６日―チリ、ペルー（第15回国際イエズス会ミッション会議における研究成果発表及び機関研究の成果刊行のための準備会合）

2015年３月22日～３月27日―中華人民共和国（近世アジアにおけるカトリックの宣教活動に関する文献調査）

◎上記以外の研究活動

**・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など**

人間文化研究機構連携研究『9-19世紀文書資料の多元的複眼的比較研究』共同研究員

## 佐々木史郎［ささき　しろう］―――― 教授

1957年生。**【学歴】**東京大学教養学部教養学科第一卒（1981）、東京大学大学院社会学研究科修士課程修了（1983）、東京大学大学院社会学研究科博士課程中退（1985）**【職歴】**国立民族学博物館第１研究部助手（1985）、大阪大学言語文化部助教授（1991）、国立民族学博物館第４研究部助教授（1995）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（1995）、国立民族学博物館民族学研究開発センター助教授（1998）、国立民族学博物館民族文化研究部教授（2003）、国立民族学博物館研究戦略センター長併任（2004-2007）、国立民族学博物館副館長併任（2010-2012）、総合研究大学院大学文化科学研究科地域文化学専攻長併任（2013-2015）**【学位】**学術博士（東京大学大学院総合文化研究科 1989）、社会学修士（東京大学大学院社会学研究科 1983）**【専攻・専門】**文化人類学 1）シベリア、ロシア極東先住民の狩猟文化、トナカイ飼育文化の研究、2）ロシア極東先住民の近世史、近代史の研究**【所属学会】**日本文化人類学会、言語文化学会

**【主要業績】**

［単著］

佐々木史郎

2015 『シベリアで生命の暖かさを感じる』（フィールドワーク選書13）京都：臨川書店。

1996 『北方から来た交易民――絹と毛皮とサンタン人』（NHK ブックス772）東京：日本放送出版協会。

［編著］

Sasaki, S.（ed.）

2009 *Human-Nature Relation and Historical-Cultural Backgrounds of Hunter-Gatherer Cultures in Northeast Asian Forests: Russian Far East and Northeast Japan*（Senri Ethnological Studies 72）. Osaka: National Museum of Ethnology.

【受賞歴】

1997　第25回澁澤賞

【2014年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

極東ロシア、日本列島北部における近世から近代への転換

・研究の目的、内容

本研究は、これまで継続してきたアムール川下流域の歴史に関する研究をさらに発展させ、地域、対象民族の幅を広げる。すなわち、アムール川流域だけでなく、樺太（サハリン）、千島列島（クリル列島）、北海道まで対象地域を広げ、そこに暮らしてきた現在の先住民族の祖先たちが近代という時代を迎えて、それにどのように対応したのかという点を検討する。ただし従来のように、受動的な社会や文化の変化（多数派民族文化への同化、あるいは伝統文化、民族文化の衰退、消滅）に着目するのではなく、彼らの変化していく政治経済情勢に対する積極的な対応、適応の過程に着目する。

・成果

本各個研究独自の成果として、千島アイヌの文化のあり方を再考する論考、「鳥居龍蔵が出会った北方民族――千島アイヌ」ヨーゼフ・クライナー編『日本とは何か――二〇世紀の民族学』pp.78-79, 東京堂出版（2014年）を発表した。そこで、千島アイヌの独自性は周辺諸民族との交流だけでなく、千島列島をめぐる日ロの政治的な駆け引きにも影響を受けていたことを明らかにした。

ついで、2009年度から2012年度まで実施した科学研究費補助金（基盤研究（A）『ロシア極東森林地帯における文化の環境適応』）による調査研究の成果の一つとして、「北東アジア先住民族の歴史・文化表象――中国黒竜江省敖其村の赫哲族ゲイケル・ハラの人々の事例から」『国立民族学博物館研究報告』39(3)：321-373、2015年を発表した。そこでは、松花江流域とアムール川下流域とに離ればなれになってしまったゲイケル・ハラというナーナイの一氏族の歴史を文書と伝承から復元すると共に、中国、ロシア、日本に広く流布するナーナイという先住民族のイメージと文化表象のあり方が有する問題点を明らかにした。

また、2008年度から2011年度まで実施した共同研究「ポスト社会主義以後の社会変容――比較民族誌的研究」の成果公開としての論集の編集作業を終え、2015年度初頭に国立民族学博物館論集として研究編集委員会に刊行申請するめどが立った。

◎出版物による業績

［単著］

佐々木史郎

2015 『シベリアで生命の暖かさを感じる』（フィールドワーク選書13）京都：臨川書店。

［共編著］

Шагланова Ольга А. и Сасаки Сиро（ред.）

2015 *Культурное наследие бурят, эвенков и семейских: Предметы материальной и духовной культуры из коллекций Этнографического музея народов Забайкалья*（*Республика Бурятия, Россия*）（Senri Ethnological Reports 128). Осака: Национальный музей этнологии［査読有］.

［論文］

佐々木史郎

2014 「鳥居龍蔵が出会った北方民族――千島アイヌ」ヨーゼフ・クライナー編『日本とは何か――二〇世紀の民族学』pp.78-96, 東京：東京堂出版。

2015 「北東アジア先住民族の歴史・文化表象――中国黒竜江省敖其村の赫哲族ゲイケル・ハラの人々の事例から」『国立民族学博物館研究報告』39(3)：321-373［査読有］。

2015 「クロテンの森の先住民族――極東ロシアの森林開発・森林保護とウデヘの人々」北海道立北方民族博物館編『環境変化と先住民の生業文化――開発と適応』（第29回北方民族文化シンポジウム網走報告）pp.27-32, 北海道：一般財団法人北方文化振興協会。

［その他］

佐々木史郎

2014 「変わる国籍変らない人の絆――旧ソ連地域における収集」『季刊民族学』150：73-77。

2014 「民族学資料の情報化とデジタル化」『民博通信』147：9-10。

2015 「コメント」『『坪井正五郎』の著者川村伸秀氏を囲んで』（基幹研究「人類学におけるミクロ－マクロ系の連関」2013年度第２回公開セミナー（2014年１月23日）報告書）pp.20-27，東京：東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所。

2015 「集めてみました世界の○○　手袋編」『月刊みんぱく』39(2)：10-11。

◎口頭発表・展示・その他の業績

**・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告**

2015年３月10日 「趣旨説明」、「『国立のアイヌ文化博物館』（仮称）の基本構想」機関研究「民族学資料の収集・保存・情報化に関する実践的研究――ロシア民族学博物館との国際共同研究」第５回国際ワークショップ『民族学資料の展示への利用とソースコミュニティとの協力関係』、国立民族学博物館

**・共同研究会での報告**

2015年２月28日 「虻田で作られた木綿衣の分布と年代――ロシアおよび北海道の博物館の資料調査から」『明治から終戦までの北海道・樺太・千島における人類学・民族学研究と収集活動――国立民族学博物館所蔵のアイヌ、ウイルタ、ニヴフ資料の再検討』

**・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告**

2014年５月17日 ‘Commercial Hunting of the Indigenous People in the Russian Far East: the Change of their Hunting Strategy and Techniques. Hunting, Animal Welfare, and Defense against Wildlife Attack’（P051, convener: Nobayashi Atsushi), International Union of Anthropological and Ethnological Sciences Inter-Congress 2014, Makuhari Messe, Chiba

2014年８月23日 「間宮林蔵が見たデレンの賑わい――交易に集まった人々の実像」『第22回環オホーツク海文化のつどい』紋別市文化会館

2014年10月４日 「クロテンの森の先住民族――極東ロシアの森林開発・森林保護とウデヘの人々」『第29回北方民族文化シンポジウム』オホーツク・文化交流センター（網走市）

**・研究講演**

2014年12月６日 「ナラ林文化を再考する」第437回国立民族学博物館友の会講演会

**・広報・社会連携活動**

2014年12月10日 「江戸の探検家、間宮林蔵と北方世界」産経新聞社主催、みんぱく創設40周年記念第26回カレッジシアター「地球探究紀行」あべのハルカス近鉄本店 ウイング館９階 SPACE 9

2015年１月12日 「北方の織布と織機」第368回みんぱくウィークエンド・サロン

◎調査活動

**・国内調査**

2014年７月13日～17日―北海道札幌、静内、千歳（アイヌの古い木綿糸擦文時代の出土繊維断片の調査、科学研究費補助金（基盤研究(B)）「北方寒冷地域における織布技術と布の機能」（研究代表者：佐々木史郎）による）

2014年11月15日～18日―北海道函館、札幌、釧路（アイヌの古い木綿衣、アットゥシと千島列島シュムシュ島出土のオホーツク文化期の出土繊維断片の調査、科学研究費補助金（基盤研究(B)）「北方寒冷地域における織布技術と布の機能」（研究代表者：佐々木史郎）による）

**・海外調査**

2014年６月23日～７月６日―ロシア（科学研究費補助金（基盤研究(B)）「北方寒冷地域における織布技術と布の機能」資料調査、機関研究に係る国際ワークショップへ参加）

2014年８月２日～８月17日―ロシア（科学研究費補助金（基盤研究(B)）「北方寒冷地域における織布技術と布の機能」資料調査）

◎大学院教育

**・指導教員**

主任指導教員（２人）、副指導教員（１人）

**・論文審査**

博士論文審査委員（１件）、予備審査委員（１件）

◎上記以外の研究活動

**・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など**

人間文化研究機構『日本関連在外資料の調査研究』「シーボルト父子関係資料をはじめとする前近代（19世紀）に日本で収集された資料についての基本的調査研究」ロシアと北欧における日本関連アジア資料の調査研究班共同研究員、科学研究費補助金（基盤研究(B)）「野生動物の生息域拡大期における都市防衛システムの開発に関する環境学研究」（代表者：田口洋美）研究分担者

◎社会活動・館外活動

**・他機関から委嘱された委員など**

公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構評議員、「民族共生の象徴となる空間」における博物館の整備・運営に関する調査検討委員会委員、北海道大学スラブ研究センター客員研究員

## 飯田　卓［いいだ　たく］――――――

具や漁船を持たなかった農業者、戦後に駐屯先で居つこうとした旧軍人など、さまざまである。こうした多様性をみていくなかで、戦時中や終戦直後に漁業がもっていた意味を明らかにすることが、本研究の最終的な目的である。

なお、この漁は現在もはやおこなわれていないと考えられているが、本研究の公表によって情報提供者が不利益をこうむらないよう、細心の注意を払うつもりである。とくに、違法行為として興味本位で紹介されてきたこの漁が、特別な時代状況においておこなわれてきたことを強調し、これまでの否定的なイメージを払拭するよう努める。

・成果

沖縄地域や奄美地域、さらには北部九州にいたる複数の地点において聞きとり調査を進めた。その詳細は今後公表する予定だが、大分県での聞きとりから、当初想定していたよりも広範囲においてこのタイプの漁がおこなわれていたことが明らかになった。

文献史料を調査するなかでは、戦後に島嶼地域と中国方面を繋いでいた貿易船がダイナマイトを常備していたことが明らかになり、火薬の有力な入手ルートである可能性が浮びあがってきた。また、「火薬」「爆薬」の呼び分けをふまえて、今後は「火薬漁」でなく「爆薬漁」と呼ぶことも検討課題に上がってきた。

現地調査では、聞きとりにもとづく資料のほか、経験者が鉛筆によって漁のようすを表現した細密な絵画も入手し、今後の調査に活用するための同意を得ることができた。

得られた資料は現在も整理中で、できるだけ早期に論文として刊行する予定である。

◎出版物による業績

［単著］

飯田 卓

2014 『身をもって知る技法――マダガスカルの漁師に学ぶ』京都：臨川書店。

［共著］

高城 玲・飯田 卓・井上 潤・小島摩文・清水郁郎・羽毛田智幸・原田健一・小林光一郎・因 琢哉・岡田翔平

2015 『国際常民文化研究叢書８ アチックフィルム・写真にみるモノ・身体・表象（資料編）』神奈川：神奈川大学国際常民文化研究機構。

［共編］

東 賢太朗・市野澤潤平・木村周平・飯田 卓編

2014 『リスクの人類学――不確実な世界を生きる』京都：世界思想社［査読有、共同研究成果］。

［論文］

飯田 卓

2014 「共有のためのメディア――戦後マスメディア史からみた映像人類学の可能性」村尾静二・箭内 匡・久保正敏編『映像人類学（シネ・アンスロポロジー）――人類学の新たな実践へ』pp.176-194，東京：せりか書房［査読有、共同研究成果］。

2014 「自然と向きあうための技術的対応と社会的調整――マダガスカル、ヴェズ漁民が生きぬく現在」東 賢太朗・市野澤潤平・木村周平・飯田 卓編『リスクの人類学――不確実な世界を生きる』pp.262-284，京都：世界思想社［査読有、共同研究成果］。

2015 「昭和初期の公共視覚メディア――渋沢民具学における映画と博物館」『国際常民文化研究叢書10 アチックフィルム・写真にみるモノ・身体・表象（論文編）』pp.245-267，神奈川：神奈川大学国際常民文化研究機構。

2015 「人類学者はなぜ遊んでいるようにみえてしまうのか？」床呂郁哉編『人はなぜフィールドに行くのか――フィールドワークへの誘い』pp.94-107，東京：東京外国語大学出版会。

2015 「マダガスカル南西部のサンゴ礁利用をめぐる複ゲーム状況」「自然と文化」人間文化研究機構 連携研究『自然と文化』事務局編『人間文化研究機構 連携研究「アジアにおける自然と文化の重層的関係の歴史的解明」最終年度報告書』pp.457-463，東京：大学共同利用機関法人 人間文化研究機構。

Iida, T.

2015 Toward an Anthropology of Heritage Practices. *The Newsletter of International Institute for Asian Studies* 70: 46.

［書評］

飯田 卓

2014 「書評　北窓時男著『海民の社会生態誌――西アフリカの海に生きる人びとの生活戦略』」『アフリカ

研究』84：70-71。

2015 「書評 高倉浩樹・滝澤克彦（編）『無形民俗文化財が被災するということ――東日本大震災と宮城県沿岸部地域社会の民俗誌』」『文化人類学』79(4)：480-482。

［その他］

飯田 卓

2014 「『文化遺産の人類学』とはなにか」『民博通信』145：8-9［機関研究成果］。

2014 「渋沢敬三にかかわる研究ネットワーク」近藤雅樹追悼企画実行委員会企画・発行，大国正美・水口千里編『魅せる！超フォークロア――近藤雅樹ワールドの探検』pp.21-26，兵庫：神戸新聞総合出版センター。

2014 「文化遺産を伝える静かなくらし――マダガスカル」『日本経済新聞』11月28日。

◎口頭発表・展示・その他の業績

**・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告**

2014年11月９日 「文化遺産実践の現場という視点」公開フォーラム『文化遺産の人類学』国立民族学博物館

**・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告**

2014年４月７日 'Fishing Technical Innovation among the Vezo: Toward a New Descriptive Method of Fishing Practice.' Madagascar Workshop 2014 (9th), University of Toronto, Canada

2014年５月17日 'Wars and Disasters as Matters of "Anthropology of Heritage." Inter-Congress of the International Union of Anthropological and Ethnological Sciences,' Makuhari Messe, Chiba, Japan

2014年12月５日 'Establishing Hotlines: A Japanese Museum's Experience of Exhibiting Madagascar Cultural Heritage.' 113th Annual Meeting of American Anthropological Association, Marriott Wardman Park Hotel, Washington, DC, United States

2015年１月16日 'Communicative Aspect of Bodily Knowledge: Malagasy Fishers' Innovation in Gears and Techniques.' German-Japanese Colloquium "Knowledge Transfer across Borders: Integrative Approaches." Old Observatory, University of Göttingen, Göttingen, Germany

2015年１月27日 'Ongoing Project of National Museum of Ethnology, Japan.' International Experts Meeting of the Project "Mapping Research on the Safeguarding of Intangible Cultural Heritage (ICH) in the Asia-Pacific Region." Islamic Arts Museum Malaysia, Kuala Lumpur, Malaysia

2015年３月４日 「くらしに息づく文化遺産の国際的認知」琉球大学国際沖縄研究所ワークショップ『無形文化遺産の活用と継承』琉球大学50周年記念館

2015年３月６日 'Appropriation of Traveling Knowledge: A Case of Vezo Coastal Dwellers in Madagascar.' International Workshop "Politics of Environmental Knowledge: Encounters between Indigeneity and Modernity." Osaka University Nakanoshima Center, Osaka, Japan

**・研究講演**

2014年４月12日 「お好みどおりのアフリカを作る」日本アフリカ学会創立50周年記念市民公開講座『アフリカ、その魅力と可能性』第８回、京都大学

2014年６月５日 「学術資料・学術活動の映像記録とその活用――メディアの発展をふまえて」京都大学研究資源アーカイブ　講演・座談会、京都大学

2014年６月６日 「無形遺産に関わる木質文化財――マダガスカル、ザフィマニリの木彫り知識（ユネスコ登録2003年）について」木質文化財研究会2014 第１回見学・講演会、国立民族学博物館

2014年７月９日 「霧の森の木彫り――マダガスカルの無形文化遺産」産経新聞社主催、みんぱく創設40周年記念 カレッジシアター「地球探究紀行」あべのハルカス近鉄本店 ウイング館９階SPACE９

2014年11月４日 「文化遺産を伝える静かなくらし――マダガスカル」みんぱく公開講演会『無形文化遺産――選ぶ視点 選ばれる現実』日経ホール（東京）

◎調査活動

**・国内調査**

2014年４月18日～19日―茨城県つくば市（国立科学博物館の研究動向についての調査）

2014年10月25日～26日―大分県佐伯市（九州北部の戦後漁業における爆薬使用についての調査）

2014年11月21日～24日―沖縄県那覇市、本部町、今帰仁村、鹿児島県与論町（戦後の移住・出稼ぎ・漁業につ

いての調査）

・海外調査

2014年４月６日～４月11日―カナダ（トロント大学マダガスカル・ワークショップへ参加）

2014年８月26日～９月20日―マダガスカル（政治流動化が漁村の生業に与えた影響、ヴェズ漁村における近代科学知の流用及びヴェズ漁村における民話・伝承に関する調査）

2014年12月３日～12月９日―アメリカ合衆国（アメリカ人類学会へ参加及びアフリカ展示に関する調査）

2015年１月13日～１月19日―ドイツ（日独学術コロキウムに参加及び民族学コレクションに関する調査）

2015年１月26日～１月28日―マレーシア（アジア太平洋無形文化遺産調査研究センター専門家会議への参加）

2015年２月９日～２月27日―マダガスカル共和国（ヴェズ漁村における民話・伝承の情報収集）

◎大学院教育

・指導教員

指導教員（１人）、副指導教員（１人）

特別共同利用研究員の研究指導教員（３人）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費補助金（基盤研究(C)）「バイパス型私企業活動の活性化による、マダガスカル山間部の住民行動と地域構造の変容」研究代表者、科学研究費補助金（基盤研究(A)）「インド洋西域島嶼世界における民話・伝承の比較研究」（研究代表者：小田淳一）研究分担者、科学研究費補助金（基盤研究(A)）「『在来知』と『近代知』の比較研究：知識と技術の共有プロセスの民族誌的分析」（研究代表者：大村敬一）研究分担者、科学研究費補助金（基盤研究(B)）「近代都市形成における多文化混住状況と出身地域社会への影響に関する研究」（研究代表者：岡田浩樹）研究分担者、科学研究費補助金（挑戦的萌芽研究）「宇宙開発に関する文化人類学的アプローチの検討」（研究代表者：岡田浩樹）研究分担者、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同研究「現代アフリカにおける＜国家的なもの＞に関する研究――ニューメディア・グローバリゼーション・民主主義」（研究代表者：内藤直樹）研究分担者、神奈川大学共同研究拠点整備推進事業「国際常民文化研究」に関わる共同研究「アチックフィルム・写真にみるモノ・身体・表象」（研究代表者：高城 玲）研究分担者

◎社会活動・館外活動

・他機関から委嘱された委員など

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所フィールドサイエンス・コロキアム運営委員会委員、日本アフリカ学会評議員、マダガスカル研究懇談会世話役代表

・非常勤講師

神戸大学大学院国際文化学研究科「文化情報リテラシー特殊講義」（集中講義）、大阪大学外国語学部「アフリカ地域講義IIa」（集中講義）

## 菊澤律子［きくさわ　りつこ］――准教授

1967年生。**【学歴】**東京大学文学部文科三類言語学専修課程卒（1990）、東京大学大学院人文科学研究科修士課程言語学専攻修了（1993）、東京大学大学院人文科学研究科博士課程中退（1995）**【職歴】**東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助手（1995）、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助教授（2000）、国立民族学博物館先端人類科学研究部助教授（2005）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2006）**【学位】**Ph. D.（Linguistics）（ハワイ大学 2000）、文学修士（言語学）（東京大学 1993）**【専攻・専門】**言語学、比較（歴史）言語学、オーストロネシア諸語、記述言語学、オセアニア先史研究**【所属学会】**日本言語学会、日本オセアニア学会、Association of Linguistic Typology、Australian Linguistic Society、日本歴史言語学会、The Philological Society（UK）、日本展示学会、International Society for Historical Linguistics

**【主要業績】**

［単著］

Kikusawa, R.

2003 *Proto Central Pacific Ergativity: Its Reconstruction and Development in the Fijian, Rotuman and Polynesian Languages.* Canberra: Pacific Linguistics.

［編著］

Kikusawa, R. and L. A. Reid（eds.）

2013 *Historical Linguistics, 2011: Selected papers from the 20th International Conference on Historical Linguistics, Osaka, 25–30 July 2011*（Current Issues in Linguistic Theory 326), Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.

［論文］

Kikusawa, R. and K. A. Adelaar

2014 Malagasy Personal Pronouns: A Lexical History. *Oceanic Linguistics* 53(2): 480–516.

**【受賞歴】**

2015 2014年度学融合推進センター公開研究報告会学融合推進センター賞

2014 2013年度学融合推進センター公開研究報告会学融合推進センター賞

2009 ラルフ・チカト・ホンダ優秀奨学生賞

2008 第４回日本学術振興会賞

2005 第４回日本オセアニア学会賞

**【2014年度の活動報告】**

◎各個研究

**・研究課題**

オーストロネシア諸語の比較形態統語論的研究――動詞の形態法の発達史を探る

**・研究の目的、内容**

本研究は、オーストロネシア諸語の発達史における「名詞化接辞の動詞接辞化」の具体的なメカニズムと、その発達史を解明することを目的とする。

オーストロネシア諸語においては、早い時期に分岐した言語ほど動詞の形態法が複雑であり、オーストロネシア祖語の動詞のシステムは、これをほぼ直接反映させて再建される傾向にある。これに対し菊澤は、昨年度の研究において、形態統語論的な特徴の変遷はシステムの変遷として捉えるべきであり、drift 等の可能性を考慮した、音韻や語彙の再建におけるものとは異なる視点および手法が必要であることを示した。2013年度からはこれに基づき、オーストロネシア諸語における個別事象の比較再建およびそのための方法論の整備、という２つの課題に取り込んでおり、本年度も継続して研究を続ける。

個別事象の比較再建においては、受け入れ中のウィーラ・オスタピラト客員研究員との共同研究データを取り入れることでマクロ語族からの視点をも加味する。また、方法論に関しては、対象語族を超えた一般化に向けて、2015年２月～４月にベルギーのヘント大学からの招聘により、「印欧語の項構造の史的変遷解明のためのプロジェクト」（代表者：ヨハンナ・バースダル）と共同研究を行う予定である。

**・成果**

オーストロネシア諸語の発達史における「名詞化接辞の動詞接辞化」の具体的なメカニズム解明のために必要な前段階の研究として、統語構造変化の比較・再建の方法について、インド・ヨーロッパ語族およびバンツー諸語における類似の研究を参照にしつつ、方法論の確立につとめた。

具体的には、統語構造の変化に関する具体的な変遷の過程を捉えるためには、個別の文法事象を個別に分析した上で相互に与える影響を解明しなくてはならないことを示し、格構造と動詞の形態統語論的特徴の変化の解明に必要な項目をピックアップした。

とくに方法論に関しては、対象語族を超えた一般化に向けて、2015年２月～４月にベルギーのヘント大学からの招聘により、「印欧語の項構造の史的変遷解明のためのプロジェクト」（代表者　ヨハンナ・バースダル）と共同研究を行い、その成果については以下の通り、ほぼ執筆完了したもの２件、海外の学術出版書に論文として刊行される予定のもの２件となっている。

Kikusawa, R.

（to appear） Typological Generalisations and Diachronic Analyses: Actancy Systems in Austronesian Languages. *Historical Linguistics in Japan* 4: 3–32.

Kikusawa, R.

（to appear） Conducting Syntactic Reconstruction of Languages with No Written Records. In E. Luján, J. Barðdal and S. Guildea, *Syntactic Reconstruction: Applying the Comparative Method.*

Brill.

Kikusawa, R.

（to appear） A Diachronic Typology of Applicative Verbs in Western Austronesian Languages: Toward a Comparison and Reconstsruction（synopsis）. In L. Kulikov and S. Kittila, *Diachronic Typology of Voice and Valency-changing Categories*.

Kikusawa, R.

（to appear） Ergativity and Syntactic Change in Austronesian Languages. In J. Coon, D. Massam and L. Travis, *The Oxford Handbook of Ergativity*. Oxford: Oxford University Press.

◎出版物による業績

［論文］

Kikusawa, R. and K. A. Adelaar

2014 Malagasy Personal Pronouns: A Lexical History. *Oceanic Linguistics* 53(2): 480–516.

Kikusawa, R.

2015 Austronesian. In C. Bowern and B. Evans（ed.）*The Routledge Handbook of Historical Linguistics*, pp.657–674. London: Routledge, Taylor & Francis Group.

［事典項目］

菊澤律子

2014 「フィジー語」庄司博史編『世界の文字事典』pp.160–163，東京：丸善出版。

2014 「言語の分類」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.166–167，東京：丸善出版。

2014 「SIL インターナショナル」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.198–199，東京：丸善出版。

［その他］

菊澤律子

2014 「ミクロネシアの言語」印東道子編『ミクロネシアを知る本』pp.50–54，東京：明石書店。

2014 「新しいことばとコミュニケーションの時代へ――フィリピン・ボントックの言語変化とその担い手たち」『Field ＋（プラス）』12：9–10。

2014 What is Your Name? Variations in Fijian Languages and Their Pre-historical Implications. *MINPAKU Anthropology Newsletter* 39: 3–4.

2014 「手話で膨らむことばへのアプローチ」『民博通信』146：10–11。

◎口頭発表・展示・その他の業績

**・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告**

2013年10月３日～10月６日 《機関研究成果公開》「みんぱく手話言語学フェスタ2014」コーディネーター

**・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告**

2014年５月11日 「手話言語学を世界へつなぐ――メディア発信と e-learning 開発に向けて＜活動報告、今年度の予定、今後の見通し＞」『手話言語学を世界へつなぐ――メディア発信と e-learning 開発に向けて』プロジェクト研究会、総合研究大学院大学

2014年６月28日 招待講演「手話で膨らむことばへのアプローチ――国立民族学博物館（みんぱく）における――手話言語学事業の展開」手話言語学会第３回手話学セミナーin 関西、国立民族学博物館

2014年６月29日 「関西地域学術手話通訳研究事業プロジェクト概要」関西地域学術手話通訳研究事業第１回ミーティング、国立民族学博物館

2014年７月20日 ‘Associating Morphosyntactic Changes in Austronesian Languages with Human-migration Routes.’ “Minpaku Linguistics Circle,” National Museum of Ethnology

2014年７月29日 招待講演 ‘Variations in Fijian Languages and Their Historical Implications.’ “Migrations and Transfers in Prehistory: Asian and Oceanic Ethnolinguistic Phylogeography,” University of Bern,

2014年10月７日 「手話ってなに？ 言語学ってなに？」東北大学全学教育リレー講義『手話の世界と世界の手話言語☆入門』第１回講義、東北大学

2014年１月16日 手話言語学を世界へつなぐ――メディア発信と e-learning 開発に向けて――３年間の事業報告と今後の見通しにむけてのディスカッション」『手話言語学を世界へつなぐ――メディア発信と e-learning 開発に向けて』プロジェクト研究会、総合研究大学院大学

2015年１月27日 「ディスカッション（半年間のまとめ）」東北大学全学教育リレー講義『手話の世界と世界の

手話言語☆入門』第15回講義、東北大学

2015年２月23日　招待講演 ‘Conducting Syntactic Reconstruction Based on Languages with No Written Records.’ Department of Linguistics, University of Ghent

2015年３月16日　招待講演 ‘After Identifying Cognate Structures Comparing Applicative Systems in Austronesian languages.’ EVALISA-ΔiaLing Workshop: Hitches in Historical Linguistics 2, University of Ghent

◎社会活動・館外活動等

**・他の機関から委嘱された委員など**

2014年度東北大学全学教育リレー講義「手話の世界と世界の手話言語☆入門」コーディネーター、2014年度手話言語学講師派遣事業コーディネーター、2014年度西地域学術手話通訳研究事業コーディネーター

◎調査活動

**・海外調査**

2014年７月８日～７月18日―フィジー（フィジー語話者の言語の産出及び理解のプロセスに関する現地調査）

2014年７月25日～８月２日―スイス（国際学会「先史における移住と拡散：アジアとオセアニアの言語人類学的系統地理学的アプローチ」に参加）

2014年８月５日～８月18日―フィジー（フィジー語話者の言語の産出及び理解のプロセスに関する現地調査）

2015年２月２日～５月５日―ベルギー、ドイツ（ヘント大学（ベルギー）における共同研究及びライプチヒ・マックスプランク進化人類学研究所における学会参加）

◎大学院教育

**・指導教員**

副主任指導教員（１人）

◎上記以外の研究活動

**・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など**

国立民族学博物館機関研究プロジェクト　マテリアリティの人間学「手話言語と音声言語の比較に基づく新しい言語観の創生」研究代表者、人間文化研究機構連携研究「第３回国際シンポジウム「手話言語と音声言語の記述・記録・保存」の開催」研究代表者、総合研究大学院大学学融合推進センター戦略的共同研究Ⅰ「手話言語学を世界へつなぐ――メディア発信と e-learning 開発に向けて」研究代表者、日本財団助成金「手話言語学に関する講義の実施およびシンポジウム・セミナーの開催」研究代表者、筑波技術大学科研費研究分担者、東北大学科研費研究分担者、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同研究員、国立国語研究所共同研究員

◎社会活動・館外活動

**・他機関から委嘱された委員など**

日本歴史言語学会事務局担当理事、日本言語学会広報委員、International Society for Historical Linguistics 評議員、Association for Linguistic Typology 評議員、国際オーストロネシア言語学会運営委員、第12回国際オーストロネシア言語学会専門委員、欧州リサーチ・カウンシル審査員、Journal of Historical Syntax 編集顧問委員、Brill’sStudies in Historical Linguistics 編集顧問委員、Journal of Historical Linguistics 編集顧問委員

## 松尾瑞穂［まつお　みずほ］――――――

【主要業績】

［単著］

松尾瑞穂

2013 『ジェンダーとリプロダクションの人類学――インド農村社会の不妊を生きる女性たち』京都：昭和堂。

2013 『インドにおける代理出産の文化論――出産の商品化のゆくえ』東京：風響社。

［論文］

松尾瑞穂

2009 「『回復』を希求する――インド農村社会における不妊と『流産』経験」『文化人類学』74(3)：423-440。

【2014年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

インドにおけるリプロダクションとサブスタンスに関する研究

・研究の目的、内容

インド社会において、グローバル化、医療化、生殖医療技術によってリプロダクション（性と生殖）の実践はいかに変化しているのかを検討することを通して、ヒト、家族、親族、カーストといった自他のカテゴリーの生成や他者とのつながり（relatedness）の様態の変容について明らかにする。

1）個からみるサブスタンスや親子・親族関係の変容

リプロダクションの変容をとくに生殖医療技術との関わりにおいて考察するうえで、南アジア地域におけるサブスタンスの概念は重要な出発点となる。ヒトの形成に関しては、南アジアの文脈でいえば、子どもの形成における種と大地という象徴的な民俗生殖理論がよく知られている。また、血液や体液のような身体部品や、食、環境の共有を通して身体が構成され、つながりが生み出されるということも議論されてきた。生殖医療がもたらす遺伝子のつながりと、身体のサブスタンスを介したつながりはどのように接合、あるいは断絶しているのか。今年度は特に母乳に注目し、授乳や哺乳に関する慣習・実践の調査や、都市圏の一部で始まっている母乳バンクと母乳のサーキュレーションに関する調査を行う。その際には、すでに先行研究のある血液と比較しながら、よりジェンダー化されたサブスタンスの特徴を把握する。

2）集団の同定と自他の区別

一方で、サブスタンスは個から派生するつながりを超えた、より集合的な集団形成にも関わっている。インドでは20世紀初頭にインド＝アーリア人を標榜し、社会の浄化を求める優生学運動が、産児制限や社会改革との関わりのなかで繰り広げられてきた。植民地官僚やインド学の学者によって古代インドの輝かしい遺産（とそれの反転としての堕落したインド）として喧伝されたアーリア人説は、インドのエリート層にとっては、植民地経験のなかで古代と近代的科学性が接合しながら、自他の区別と自己アイデンティティの確立に寄与する思想として受容された。ヒンドゥー至上主義者によって集団がより科学的な言説によって同定されるなか、人間の差異と同質性はどのように社会的に構築されるのか。今年度はインドにおけるアーリア人学説の検討を行い、現代インドにおいてそれらが表出する文脈を検討する。

・成果

上記のテーマに関し、文献収集と文献読解、インドにおける２度の現地調査、イギリス・オランダにおける南アジア研究者との研究会議とセミナー発表を行った。これらを通して、母乳がインド社会で有する文化的な特徴と、生殖医療（代理出産や配偶子提供など）による、卵子のような新たなサブスタンスの可視化、顕在化について明らかにした。また、アーリア人学説について主に、言説と歴史的概観を把握し、分析した。なお、海外調査出張に関しては、それぞれ科学研究費補助金（基盤研究(B)）「インド高齢女性のライフヒストリー」（代表：押川文子）、科学研究補助金（基盤研究(B)）「経済自由化後の南インド社会の構造変動に関する総合的研究」（代表：杉本良男）および人間文化研究機構地域研究推進事業「現代インド研究」（民博拠点）によって実施した。

また、民博の共同研究会メンバーおよび人間文化研究機構地域研究推進事業「現代インド地域研究」の拠点構成員として、年間を通した研究会の運営、参加、発表を行った。研究成果の公開としては、社会運動とジェンダーの視点から、インドにおける産児制限運動の展開について分析した論文と、リスク論の視点に基づき、調査地域の家族計画の実践と多元的リスク認識について検討した論文の２本を論集として刊行した。また、インドの人工妊娠中絶にみる被傷性／可傷性と暴力の位相に関する論文と、生殖ツーリズムと代理出産に関する論文を執筆し、それぞれ外部資金による刊行を目指している。さらに、サブスタンスに関するレビューと展望

をまとめ、『民博通信』に投稿した。その他、エッセイや報告書を執筆し公表した。発表による成果公開としては、国際シンポジウムや国内研究会等での研究発表を6回、一般向け講演会を4回実施した。

◎出版物による業績

［論文］

松尾瑞穂

2014 「多産、人口、統計学的未来――インドにおけるリスク管理としての産児制限」市野澤潤平・東賢太朗・木村周平・飯田 卓編『リスクの人類学』pp.39-61，京都：世界思想社［査読有］。

2015 「産児制限運動の複相的展開――危険なリプロダクションへのまなざし」石坂晋哉編『インドの社会運動と民主主義――変革を求める人びと』pp.92-117，京都：昭和堂［査読有］。

［事典項目］

松尾瑞穂

2014 「生殖医療技術」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.622-623，東京：丸善出版。

2014 「死と誕生」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.712-713，東京：丸善出版。

［その他］

松尾瑞穂

2014 「インドの代理出産にみるジェンダーと格差――なぜ子宮を『貸す』のか？」『SYNODOS』4月14日（http://synodos.jp/international/7357）。

2014 「旅・いろいろ地球人　食べる②　母乳をもらう」『毎日新聞』8月7日夕刊。

2014 「西インドのストリートフード　ミサル」『月刊みんぱく』38(9)：18-19。

2015 「家族計画・避妊・人工妊娠中絶（インド）」白井千晶編『アジア研究4　アジアのジェンダーとリプロダクション』（静岡大学人文社会学部・国際シンポジウム報告書）pp.89-102，静岡：静岡大学人文社会科学学部アジア研究センター。

2015 「南アジア社会とアジア共同体」権 寧俊編『東アジア研究Ⅱ』（新潟県立大学・アジア共同体講座講義集）pp.49-56。

2015 「ムガルの皇子ダーラー・シコーとインドの多文化共生の道」『青淵』790：12-14。

◎口頭発表・展示・その他の業績

**・共同研究会**

2014年10月2日 「ヒンドゥーの聖地と宗教産業の形成に関する予備的考察」『聖地の政治経済学――ユーラシア地域大国における比較研究』

2014年10月9日 「神話と遺伝子――現代インドにおける生殖医療の文化的意味付け」2014年度MINDAS第3回合同研究会

**・民博研究懇談会**

2015年1月14日 「インドにおける生殖医療技術の文化論」第263回民博研究懇談会

**・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告**

2015年2月7日 「インドの家族計画とIUD」アジアのリプロダクションとジェンダー、東京・大阪経済法科大学アジア太平洋研究センター

2015年2月26日 'The Cultural Formation of Assisted Reproductive Technology in India,' Seminar at the Centre for the South Asian Studies, Edinburgh University, Edinburgh, U.K.

2015年3月22日 'Traditional Childbirth and the View of Body in India,' The Locality of "Health": Traditional/Folk Medicine, People's Health and the Environment, NIHU Ecohealth Project, Kyoto International Conference Centre, Kyoto, Japan

**・研究講演**

2014年4月28日 「生殖医療をフィールドワークする――『フィールド』ワークから『サイト』ワークへ」桃山学院大学

2014年5月20日 「南アジア共同体とアジア」新潟県立大学

2014年11月26日 「インドにおけるカレーの誕生と食文化」民族学講座『グローバル化時代の食文化』清和台公民館（大阪）

2015年3月8日 「インドの生殖医療と身体の商品化」講座『ジェンダーで社会を考える』第4回講演、新潟・新潟市男女共同参画アルザにいがた

2015年3月20日 「インドのメディカル・ツーリズム――癒しから先端医療まで」国立民族学博物館・毎日新聞

社主催、みんぱく公開講演会『いやし旅のウラ？表？――現代アジアツーリズム考』毎日新聞オーバルホール

・**展示**

南アジア展示新構築チーム

・**広報・社会連携活動**

［コメンテーター］

2014年８月６日　代理出産に関する解説『情報ライブ・ミヤネ屋』読売テレビ放送

2014年11月14日　インドの家族計画に関する解説『情報ライブ・ミヤネ屋』読売テレビ放送

◎調査活動

・**海外調査**

2014年８月８日～８月21日―インド（科研プロジェクトに関わるインドの高齢女性のライフヒストリー収集調査）

2014年11月27日～12月13日―インド、タイ（経済自由化後の南インド社会の構造変動に関する総合的研究にかかるインド及びタイの聖地の形成に関する現地調査）

2015年２月23日～３月４日―イギリス、オランダ（研究セミナー「現代インドにおける生殖医療の文化的形成」に参加及び発表、現代インド地域研究プロジェクト及びインドにおける生殖医療にかかる調査研究）

◎上記以外の研究活動

・**人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など**

科学研究補助金（基盤研究（B））「生活世界の変容とジェンダー――インド高齢女性のライフヒストリーを通して」（研究代表者：押川文子）研究分担者、科学研究補助金（基盤研究（B））「経済自由化後の南インド社会の構造変動に関する総合的研究」（研究代表者：杉本良男）連携協力者、人間文化研究機構「現代インド研究」（国立民族学博物館拠点）拠点構成員

◎社会活動・館外活動

・**非常勤講師**

南山大学人文社会学部「人類文化学特殊講義」（集中講義）、新潟国際情報大学情報文化学部「国際協力論」（集中講義）

## 丸川雄三［まるかわ　ゆうぞう］――――――

【受賞歴】

2011　文部科学大臣表彰科学技術賞（理解増進部門）

【2014年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

連想情報学に基づく文化財情報発信に関する研究

・研究の目的、内容

連想情報学とは、情報システムをデータと利用者を含む統合的な「場」として扱う考え方であり、発信対象の特性に応じた情報発信手法を主な研究対象としている。本研究課題においては、このうち文化財情報を対象に、データ処理技術および情報検索技術、ユーザインタフェースなどの研究開発を行う。2014年度は、近代日本の身装（身体と装い）関係資料を対象とする情報サービスの研究開発を実施する。この研究は、JSPS科学研究費補助金（基盤研究(B)）「近代日本の身装画像デジタルアーカイブの構築――文化変容に視点を据えて」（代表者：高橋晴子、2012年度～2014年度）の助成を受けて実施するものである。さらに美術情報分野を中心とする制作者典拠データベースとその発信環境の研究開発を実施する。この研究は、JSPS科学研究費補助金（基盤研究(B)）「ミュージアムと研究機関の協働による制作者情報の統合」（代表者：丸川雄三、2014年度～2016年度）の助成を受けて実施するものである。

・成果

画像アーカイブズの活用研究として、近代日本の身装（身体と装い）を発信するウェブサイトの研究開発を実施した。明治から昭和期（1868～1945年）における身装に関する画像（身装画像デジタルアーカイブ）のデータベース化を行い、連想検索技術によって検索・閲覧が可能な「近代日本の身装文化」を開発した。さらに、「絵引」の考えを用いた身装画像の分析手法の研究に着手し、成果を2015年１月に「第105回人文科学とコンピュータ研究発表会」で発表した。この研究は、JSPS科学研究費補助金（基盤研究(B)）「近代日本の身装画像デジタルアーカイブの構築――文化変容に視点を据えて」（代表：高橋晴子、2012年度～2014年度）の助成を受けて実施されたものである。また、文化財情報の活用基盤の研究として、制作者典拠データベースの研究開発を実施した。2014年度は、東京文化財研究所および国立美術館と協働で作家データの調査と収集を行い、人名典拠に必要な要件について検討し統合用のデータベースを試作した。この研究は、JSPS科学研究費補助金（基盤研究(B)）「ミュージアムと研究機関の協働による制作者情報の統合」（代表：丸川雄三、2014年度～2016年度）の助成を受けて実施されたものである。

◎出版物による業績

［共著］

［論文］

丸川雄三

2015　「身装画像におけるモチーフの分析と絵引の研究」情報処理学会研究報告『人文科学とコンピュータ研究会報告』2015-CH-105(2)，pp.1-2.

Marukawa, Y.

2014　Involvement with the Business History Image Index Project. In Gil Latz（ed.）*Rediscovering Shibusawa Eiichi in the 21st Century*, pp.226-228. Tokyo: Shibusawa Eiichi Memorial Foundation.

津田徹英・丸川雄三・中村佳史・吉崎真弓・橘川英規（執筆順）

2015　「ウェブ版『みづゑ』の研究――美術資料のデジタル公開と美術アーカイブズへの展望」『美術研究』414：72-88.

［その他］

丸川雄三

2014　「集めてみました世界の○○　ポット編」『月刊みんぱく』38(4)：10-11.

2014　「集めてみました世界の○○　揺りかご編」『月刊みんぱく』38(5)：10-11.

2014　「集めてみました世界の○○　ゲーム編」『月刊みんぱく』38(6)：10-11.

2014　「集めてみました世界の○○　帽子編」『月刊みんぱく』38(7)：10-11.

2014　「人間学のキーワード　ビッグデータ」『月刊みんぱく』38(7)：20.

2014　「旅・いろいろ地球人　組織②　博物館は地域の『顔』」『毎日新聞』10月２日夕刊.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・みんぱく研究懇談会

2014年６月18日　「連想検索技術を用いた身装画像デジタルアーカイブの発信研究」

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2014年７月23日　「東京文化財研究所アーカイブの発信および活用に関する研究」ミュージアムと研究機関の協働による制作者情報の統合・第１回研究会、東京文化財研究所

2014年９月13日　「フォーラム型情報ミュージアムに基づく研究資料のデータベース化とその活用」身装文化デジタルアーカイブプロジェクト研究会、国立民族学博物館

2015年１月31日　「身装画像におけるモチーフの分析と絵引の研究」第105回人文科学とコンピュータ研究発表会、大阪国際大学守口キャンパス

2015年２月５日　「制作者情報のデータ構造設計について」ミュージアムと研究機関の協働による制作者情報の統合・第２回研究会、東京文化財研究所

2015年２月８日　「ウェブサイト『徳之島の唄と踊り』による映像記録資料の共有」フォーラム型情報ミュージアム・徳之島研究会、国立民族学博物館

2015年２月28日　「研究資料のアーカイブズと文化遺産オンラインの活用について」文化資源デジタル・アーカイブズに関するワークショップ・第１回研究会、国立民族学博物館

・みんぱくゼミナール

2015年１月17日　「デジタルアーカイブズの楽しみ――文化遺産オンラインから実業史錦絵絵引まで」第440回みんぱくゼミナール

・研究講演

2015年２月22日　「郵政博物館収蔵資料データベースの公開と文化遺産オンライン」第86回日本アートドキュメンテーション学会研究会、郵政博物館（東京）

・展示

特別展「イメージの力――国立民族学博物館コレクションにさぐる」実行委員

・広報・社会連携活動

2014年11月30日　「デジタルビューアで楽しむ『イメージの力』」第363回みんぱくウィークエンド・サロン

◎調査活動

・国内調査

2015年２月６日―東京国立博物館（文化資源デジタル・アーカイブズにおける資料管理システムの調査）

2015年３月26日～３月27日―九州国立博物館（文化資源デジタル・アーカイブズにおける資料管理システムの調査）

・海外調査

2014年８月10日～８月12日―大韓民国（インフォ・フォーラムミュージアムに関する韓国国立民俗博物館との協議）

2015年２月22日～２月25日―大韓民国（フォーラム型情報ミュージアムに関する韓国国立民俗博物館との協議）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費補助金（基盤研究（B））「ミュージアムと研究機関の協働による制作者情報の統合」研究代表者、科学研究費補助金（基盤研究（B））「近代日本の身装画像デジタルアーカイブの構築――文化変容に視点を据えて」（代表：高橋晴子）研究分担者

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

国立情報学研究所客員准教授、東京国立近代美術館客員研究員、東京文化財研究所「近現代美術資料の収集、整理、公開に関する調査研究」客員研究員、奈良国立博物館「仏教美術に関する共同調査研究」調査員、立命館大学アート・リサーチセンター「歌舞伎・浄瑠璃データベースの活用に関する研究」客員協力研究員

## 研究戦略センター

### 塚田誠之［つかだ　しげゆき］――――――

球文化――その実践とシンボリズム」（韓 敏編2014『中国社会における文化変容の諸相――グローカル化の視点から』（国立民族学博物館論集３）、風響社、pp.227-244、国立民族学博物館）。また、貴州の漢族地方集団「屯堡人」をめぐる観光開発の現状を明らかにした（「有関貴州“屯堡文化”的話語和資源化的現状」（韓 敏・末成道男編 2014『中国社会的家族・民族・国家的話語及其動態――東亜人類学者的理論探索』（Senri Ethnological Studies 90）、pp.93-102、国立民族学博物館）。

◎出版物による業績

［論文］

塚田誠之

2014 「有関貴州“屯堡文化”的話語和資源化的現状」韓 敏・末成道男編『中国社会的家族・民族・国家的話語及其動態――東亜人類学者的理論探索』（Senri Ethnological Studies 90）pp.93-102，大阪：国立民族学博物館［査読有，機関研究成果］。

2015 「チワン族の繡球文化――その実践とシンボリズム」韓 敏編『中国社会における文化変容の諸相――グローカル化の視点から』（国立民族学博物館論集３）pp.227-244，東京：風響社，大阪：国立民族学博物館［査読有、共同研究成果］。

◎映像音響メディアによる業績

**・電子ガイドの制作・監修**

［中国地域の文化］

塚田誠之監修

2014 『足踏み式脱穀機』日本語，英語，韓国語，中国語。

2014 『高床式住居』日本語，英語，韓国語，中国語。

2014 『ミャオ族女性衣装の着方』日本語，英語，韓国語，中国語。

2014 『タイ族「花腰（ホワヤオ）タイ」の女性衣装の着方』日本語，英語，韓国語，中国語。

2014 『銀細工』日本語，英語，韓国語，中国語。

◎口頭発表・展示・その他の業績

**・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告**

2014年11月23日　国際シンポジウム『中国の文化の持続と変化――グローバル化の中の家族・民族・国家』コメンテーター、国立民族学博物館

**・共同研究**

2014年10月18日　「歴史の解釈をめぐって――壮族の『民族英雄』儂智高を事例として」『資源化される「歴史」――中国南部諸民族の分析から』

**・研究講演**

2014年４月５日　「中国最大の少数民族、チワン（壮）族の現在（いま）」第430回国立民族学博物館友の会講演会

◎調査活動

**・海外調査**

2015年２月23日～３月８日―中華人民共和国（中国広西の漢族の歴史の資源化の調査、チワン族の文化資源の調査、チワン族の「民族英雄」儂智高に関する文献調査）

◎大学院教育

**・大学院ゼミでの活動**

2014年４月17日　特別講義「文献史学の効用と問題――中国の事例から」

## 岸上伸啓［きしがみ　のぶひろ］――副館長（研究・国際交流担当）、教授

## 鈴木七美［すずき　ななみ］――教授

**【学歴】**東北大学薬学部薬学科卒（1981）、お茶の水女子大学大学院人文科学研究科修士課程修了（1992）、お茶の水女子大学大学院人間文化研究科博士課程修了（1996）**【職歴】**財団法人仙台複素環化学研究所研究員（1981）、中外製薬株式会社国際開発部（1982）、財団法人相模中央化学研究所第４研究班研究員（1983）、京都文教大学人間学部文化人類学科専任講師（1997）、京都文教大学人間学部助教授（2000）、京都文教大学大学院文化人類学研究科助教授（2002）、マギル大学人類学部客員助教授（2003）、放送大学文化人類学’04分担協力講師（2004）、京都文教大学

人間学部文化人類学科専任教授（2005）、京都文教大学大学院文化人類学研究科教授（2005）、国立民族学博物館先端人類科学研究部教授（2007）、放送大学客員教授（2007）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2009）**【学位】**博士（学術）（お茶の水女子大学 1996）、修士（人文科学）（お茶の水女子大学 1992）、学士（薬学）（東北大学1981）**【専攻・専門】**文化人類学、医療社会史**【所属学会】**日本文化人類学会、日本教育学会、アメリカ学会、日本アメリカ史学会、Association for Anthropology and Gerontology（AAGE）、The International Union of Anthropological and Ethnological Sciences（IUAES）

**【主要業績】**

［単著］

鈴木七美

2002 『癒しの歴史人類学――ハーブと水のシンボリズムへ』京都：世界思想社。

1997 『出産の歴史人類学――産婆世界の解体から自然出産運動へ』東京：新曜社。

［編著］

Suzuki, N.（ed.）

2013 *The Anthropology of Aging and Well-being: Searching for the Space and Time to Cultivate Life Together*（Senri Ethnological Studies 80), Osaka: National Museum of Ethnology.

**【受賞歴】**

1998 第13回女性史青山なを賞

**【2014年度の活動報告】**

◎各個研究

**・研究課題**

エイジフレンドリー・コミュニティと文化的資源

**・研究の目的、内容**

エイジング研究と社会的包摂に関連し、高齢者のニーズに応える環境形成はすべての世代の人々が暮らしやすい環境に繋がるという「エイジフレンドリー・コミュニティ」構想の動向に関する情報を収集・整理し、この視点に関わる調査研究を進め成果を公開する（外部資金（科学研究補助金（基盤研究（B））特設分野研究（ネオ・ジェロントロジー）研究代表者：鈴木七美）。また、エイジングに関する比較文化研究として、「オルタナティブ・メディスン」の高齢社会における適用に関し現地調査を進める（外部資金（科学研究費補助金（基盤研究（C））研究代表者：鈴木七美）。

**・成果**

外部資金（基盤研究（B）特設分野研究（ネオ・ジェロントロジー）「多世代共生『エイジ・フレンドリー・コミュニティ』構想と実践の国際共同研究」研究代表者：鈴木七美）に関連する研究成果公開として、国際研究集会開催、講演および発表を行った。

1）国際パネル開催および発表：国際研究集会 IUAES2014（国際人類学民族科学連合）において、国際パネル "Considering ideas and practices to create 'age-friendly communities'"（NME / Commission on Aging and the Aged panel）を企画開催し、"Age Friendly Community and Cultural Resources: Considering the experience of care workers in a private sector elderly care institution that experienced the Great East Japan Earthquake" の発表を行った。

2）（招待講演）第151回東北人類学談話会「高齢化時代のエイジング・イン・プレイス――『エイジ・フレンドリー・コミュニティ』運動と課題」於：東北大学文学研究科棟

3）（シンポジウム発表）"Creating an Age-friendly Community in Japan: A Search for Resilient Ways to Cherish New Commons," Symposium: Culturally Competent Strategies to Assist Underserved Populations From Diverse Cultures, 2015 Aging in America Conference, March 25, Hyatt Regency Chicago. 2014。また、これらの成果を一般向け講演会に生かした。①大阪府高齢者大学校講師「『エイジ・フレンドリー・コミュニティ』研究とその実践 希望ある高齢期から考える」②大阪府高齢者大学校講師「若者たちが楽しむ町 高齢者のしごとから考える」③「『エイジング・イン・プレイス』をめぐる議論と実践」（みんぱくウィークエンド・サロン　研究者と話そう）。

「コミュニティ」に関連する知見を深める作業の一環として、事典項目を執筆した：「コミューン」『世界民族

百科事典』丸善出版、2015。

外部資金（基盤研究C「スイスにおける高齢者のウェルビーイングと代替医療の適用に関する文化人類学研究」研究代表者：鈴木七美）に関連するSERを編集し、論文および事典項目を執筆した。①「未病から考える高齢社会の養生とレジリエンス」日本未病システム学会『日本未病システム学会雑誌』Vol.20，No.2，2014，pp.31-35（2014.8）　②"Care as Self-help: Self-fashioning Conducted by Alternative Medicine in Antebellum America," Nanami Suzuki ed., *Healing Alternatives: Care and Education as a Cultural Lifestyle*. SER No.120 National Museum of Ethnology, pp.93-118（2014.9）　③「民族薬学」『世界民族百科事典』国立民族学博物館編、丸善出版、2014。

◎出版物による業績

［編著］

Suzuki, N.（ed.）

2014　*Healing Alternatives: Care and Education as a Cultural Lifestyle*（Senri Ethnological Reports 120), Osaka: National Museum of Ethnology［査読有，機関研究・科研（基盤研究(C)）成果].

［論文］

鈴木七美

2014　「未病から考える高齢社会の養生とレジリエンス」日本未病システム学会『日本未病システム学会雑誌』20(2)：31-35。

Suzuki, N.

2014　Care as Self-help: Self-fashioning Conducted by Alternative Medicine in Antebellum America. In N. Suzuki（ed.）*Healing Alternatives: Care and Education as a Cultural Lifestyle*（Senri Ethnological Reports 120), pp.93-118. Osaka: National Museum of Ethnology［査読有，機関研究・科研（基盤研究(C)）成果].

［事典項目］

鈴木七美

2014　「コミューン」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.556-557，東京：丸善出版。

2014　「民族薬学」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.706-707，東京：丸善出版。

［その他］

鈴木七美

2014　「*The Anthropology of Care and Education for Life: Searhching for Resilient Communities in Multicultural Aging Societies*（Senri Ethnological Studies no.87）Nanami Suzuki（ed.）国立民族学博物館/2014年」『民博通信』145：29。

◎口頭発表・展示・その他の業績

**・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告**

2014年５月16日　'Age Friendly Community and Cultural Resources: Considering the Experience of Care Workers in a Private Sector Elderly Care Institution that Experienced the Great East Japan Earthquake,'（小泉敦保と共同発表）パネル027: "Considering Ideas and Practices to Create 'Age-friendly Communities'（NME / Commission on Aging and the Aged Panel)" 国際人類学民族科学連合（IUAES2014)、幕張メッセ（国立民族学博物館機関研究「包摂と自律の人間学」領域プロジェクト「ケアと育みの人類学」成果公開)［査読有、機関研究成果］

2015年３月25日　'Creating an Age-friendly Community in Japan: A Search for Resilient Ways to Cherish New Commons,' Symporium: "Culturally Competent Strategies to Assist Underserved Populations From Diverse Cultures," 2015 Aging in America Conference, Hyatt Regency, Chicago［査読有、科研　特設分野（基盤研究(B)）研究成果］

**・研究講演**

2014年12月17日　招待講演「高齢化時代のエイジング・イン・プレイス――『エイジ・フレンドリー・コミュニティ』運動と課題」第151回東北人類学談話会、東北大学文学研究科棟２Ｆ大会議室

2015年１月23日　「『エイジ・フレンドリー・コミュニティ』研究とその実践――希望ある高齢期から考える」NPO法人大阪府高齢者大学校　世界の文化に親しむ科、大阪市教育会館

2015年１月30日　「若者たちが楽しむ町――高齢者のしごとから考える」NPO法人大阪府高齢者大学校　世界の文化に親しむ科、大阪市教育会館

2015年３月６日　「キルトから広がる世界」NPO法人大阪府高齢者大学校　世界の文化に親しむ科、大阪市教育会館

◎調査活動

**・海外調査**

2014年６月19日～７月14日―スイス、ドイツ（科学研究費補助金（基盤研究(C)）「スイスにおける高齢者のウェルビーイングと代替医療の適用に関する文化人類学研究」（研究代表者：鈴木七美）に関わる資料収集及び調査）

2014年11月６日～12月７日―アメリカ合衆国（科学研究費補助金（基盤研究(B)）（特設分野研究「ネオ・ジェロントロジー」）「多世代共生『エイジ・フレンドリー・コミュニティ』構想と実践の国際共同研究」）研究代表者：鈴木七美）に関わる資料収集及び調査）

2015年３月23日～４月14日―アメリカ合衆国（科学研究費補助金（基盤研究(B)）（特設分野研究「ネオ・ジェロントロジー」）「多世代共生『エイジ・フレンドリー・コミュニティ』構想と実践の国際共同研究」）研究代表者：鈴木七美）に関わる学会参加及び調査）

◎社会活動・館外活動

**・他機関から委嘱された委員など**

Editorial Advisory Board for *Anthropology & Aging*（A&A: The Official Publication of the Association for Anthropology and Gerontology（AAGE）、日本文化人類学会学会誌『文化人類学』編集委員会委員

**・非常勤講師**

東北大学文学部人文社会学科「文化人類学各論」（集中講義）、東北大学文学研究科人間科学専攻「文化人類学特論II」（集中講義）

## 關　雄二［せき　ゆうじ］――教授

1956年生。**【学歴】**東京大学教養学部教養学科文化人類学分科卒（1979）、東京大学大学院社会学研究科修士課程修了（1982）、東京大学大学院社会学研究科博士課程中退（1983）**【職歴】**東京大学教養学部助手（1983）、東京大学総合研究資料館助手（1986）、天理大学国際文化学部助教授（1995）、国立民族学博物館民族社会研究部助教授（1999）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2001）、国立民族学博物館研究戦略センター助教授（2004）、国立民族学博物館研究戦略センター教授（2005）、国立民族学博物館先端人類科学研究部長（2007）、国立民族学博物館研究戦略センター教授（2009）**【学位】**社会学修士（東京大学大学院 1982）**【専攻・専門】**アンデス考古学、文化人類学 1）古代アンデス文明の形成過程、2）現代ペルーの文化行政、3）考古学と国民国家形成、4）世界遺産と国別の文化遺産との相互関係**【所属学会】**日本文化人類学会、日本ラテンアメリカ学会、古代アメリカ学会、Society for American Archaeology

**【主要業績】**

［単著］

関 雄二

2010 『アンデスの考古学　改訂版』東京：同成社。

2006 『古代アンデス――権力の考古学』京都：京都大学学術出版会。

［共編］

大貫良夫・加藤泰建・関 雄二編

2010 『古代アンデス――神殿から始まる文明』（朝日選書863）東京：朝日新聞出版。

**【受賞歴】**

2008　濱田青陵賞

2008　科学分野の功績に対する表彰（ペルー国立サン・マルコス大学）

2008　クントゥル・ワシ賞（ペルー文化庁カハマルカ支局）

【2014年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

古代アンデスにおける権力生成過程の研究

・研究の目的、内容

南米の太平洋沿岸部、とくに今日のペルー共和国を中心に成立した古代アンデス文明に焦点をあて、権力の形成について理論的な解釈をおこなう。具体的には、ペルー北部山中パコパンパ遺跡を調査し、文明の基礎が築かれた形成期（B.C. 2500～紀元前後）における経済やイデオロギーの様相を検出する。なお上記の調査部分は、科学研究費補助金基盤研究（S）をあてる予定である。

・成果

2011年度から科学研究費補助金基盤研究（S）を取得し、フィールドワークを含め、研究を推進した。成果としては、SES No.89を編集したほか、論文を４本出版した。このほか内外の国際学会、研究集会、シンポジウムにおいて７本の研究発表をおこない、第68回日本人類学会大会においてシンポジウム「アンデス文明形成期における人類学・考古学研究の最新成果」を組織した。

◎出版物による業績

［編著］

関　雄二

2014 「他者・表象」（章の編集）国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.721-749，東京：丸善出版。

Seki, Y.（ed.）

2014 *El Centro Ceremonial Andino: Nuevas Perspectivas para los Períodos Arcaico y Formativo*（Senri Ethnological Studies 89）. Osaka: National Museum of Ethnology［査読有］.

［論文］

関　雄二

2014 「古代アンデス文明におけるモニュメントと社会」一瀬和夫・福永伸哉・北條芳隆編『古墳時代の考古学９　21世紀の古墳時代像』pp.192-210，東京：同成社。

2014 「古代アンデスにおける神殿の『はじまり』――モノをつくりモノに縛られる人々」池内 了編『「はじまり」を探る』pp.127-140，東京：東京大学出版会。

2014 「南米ペルーにおける文化遺産観光とその問題点――国際協力の現場から」天理大学アメリカス学会編『アメリカスのまなざし――再魔術化される観光』pp.20-34，奈良：天理大学出版部。

Seki, Y.

2014 Introducción. En Y. Seki（ed.）*El Centro Ceremonial Andino: Nuevas Perspectivas para los Períodos Arcaico y Formativo*（Senri Ethnological Studies 89），pp.1-19. Osaka: National Museum of Ethnology［査読有］.

2014 La diversidad del poder en la sociedad del Período Formativo. Una perspectiva desde la sierra norte. En Y. Seki（ed.）*El Centro Ceremonial Andino: Nuevas Perspectivas para los Períodos Arcaico y Formativo*（Senri Ethnological Studies 89），pp.175-200. Osaka: National Museum of Ethnology［査読有］.

［書評］

関　雄二

2014 「『渇きの考古学』スティーヴン・ミズン著　水の管理めぐる文明史たどる」『日本経済新聞』７月６日朝刊。

［事典項目］

関 雄二

2014 「他者・表象」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』p.721，東京：丸善出版。

2014 「世界遺産と民族」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.510-511，東京：丸善出版。

［その他］

関　雄二

2014 「北米先住民のタバコとパイプ」『Herend Owl Club 通信』18：1。

2014 「北米先住民とタバコ」『世界のふくろう2005-2014　モンゴロイドの壮大な旅を追って　第十回＜北アメリカ＞2014』p.5，東京：星商事株式会社。

2014 「土器泥棒と自警団」『月刊みんぱく』38(4)：2-3。
2014 「発掘と盗掘の違いはどこにあるのか――盗掘者の論理と、権威の側に立つ国や考古学者の論理と攻防の姿」『図書新聞』3159号（５月24日）３面。
2014 「著者自身による新刊書紹介『アンデスの文化遺産を活かす――考古学者と盗掘者の対話』（臨川書店、2014年）」『ラテンアメリカ・カリブ研究』21：82-85。
2014 「マフィアばかりではないゴッドファザー」『チャスキ（アンデス文明研究会会報）』49：3。
2014 「困ったときにはゴッドファザー」『月刊みんぱく』38(7)：21。
2014 「三千年越しの出会い　南米アンデスの文化遺産の保存と活用をめぐる試み」『季刊民族学』150：39-40。
2014 「４つの約束」『チャスキ（アンデス文明研究会会報）』50：3。
2014 取材・インタビュー「世界遺産　ナスカの地上絵にグリーンピースが落書き！」『FRIDAY』32(1)：10-11。
2015 「コメント」『基幹研究「人類学におけるミクロ－マクロ系の連関」二〇一三年度　第二回公開セミナー（二〇一四年一月二三日）『坪井正五郎』の著書　川村伸秀氏を囲んで』pp.36-44, 東京：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 基幹研究「人類学におけるミクロ－マクロ系の連関」。

◎映像音響メディアによる業績

**・TV・ラジオ番組などの制作・監修**

［TV 番組］

関 雄二監修

2015 「アンデス・スペシャルⅠ　激走！7500キロの大山脈」『THE 世界遺産』TBS（１月４日放送）。
2015 「アンデス・スペシャルⅡ　列車でゆく天空のインカ帝国」『THE 世界遺産』TBS（１月11日放送）。

◎口頭発表・展示・その他の業績

**・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告**

2015年１月25日　関 雄二「古代アンデスにおける神殿の登場と権力の発生」公開フォーラム「古代文明の生成過程――エジプトとアンデス」JP タワー ホール＆カンファレンスホール１

**・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告**

2014年８月６日　Dos modos del proceso social del Período Formativo en la sierra norte del Perú: Kuntur Wasi y Pacopampa. Simposio Internacional “Los orígenes de la civilización en el Perú: Nuevas perspectivas antes nuevos descubrimientos,” Museo de la Nación, Lima, Perú
2014年８月21日　¿Quién va a poner en valor al patrimonio cultural? I Congreso Nacional de Arqueología, Museo de la Nación, Lima, Perú
2014年10月９日　Aparición del templo y de la diferenciación social en el Período Formativo: Desde una perspectiva de los estudios realizados por la misión japonesa. Centro Cultural de San Marcos, Lima, Perú
2014年10月10日　Establecimiento del poder en la sociedad del Período Formativo: desde una perspectiva de la sierra norte. 10 de octubre de 2014, Pontificia Universidad de Católica del Perú, Lima, Perú
2014年11月２日　「ペルー北高地パコパンパ遺跡からみたアンデス文明における権力形成」第68回日本人類学会大会シンポジウム『アンデス文明形成期における人類学・考古学研究の最新成果』（オーガナイザー：長岡朋人、関 雄二）アクトシティ浜松コングレスセンター
2014年11月２日　「ペルー、パコパンパ遺跡出土人骨の生物考古学的研究――2005～2014年調査による新知見」（長岡朋人、森田 航、関 雄二、鵜澤和宏、Jan Pablo Villanueva, Mauro Ordóñez livia, Diana Alemán Paredes, Daniel Morales Chocan）第68回日本人類学会大会シンポジウム「アンデス文明形成期における人類学・考古学研究の最新成果」（オーガナイザー：長岡朋人、関 雄二）アクトシティ浜松コングレスセンター
2014年11月26日　「アンデス文明の誕生と神殿建設」日本DNA 多型学会第23回学術集会、愛知県産業労働センター ウインクあいち
2014年12月６日　鵜澤和宏、ディアナ・アレマン、関 雄二「パコパンパ遺跡の儀礼的コンテキストから出土した動物骨資料――資料形成過程の解明に果たすタフォノミー分析の可能性について」古代アメリカ学会第19回研究大会、名古屋大学

・**広報・社会連携活動**

2014年５月19日　「南米アンデスの巡礼路」芦屋川カレッジ大学院、芦屋市民センター

2014年11月８日　「現代を読み解く世界史　内戦とテロリズムから見る現代ラテンアメリカ　グアテマラとペルーの事例から」朝日カルチャーセンター新宿

2014年11月13日　「文化遺産の国際協力」（中学２年生を対象とした国際理解の講演）板橋第一中学校

2014年11月14日　「マチュ・ピチュの発見」立花市民大学、尼崎市立立花公民館

2014年12月20日　「2014年度ペルー北高地パコパンパ遺跡の発掘調査」アンデス文明研究会、東京外国語大学本郷サテライト

2015年１月21日　「南米アンデス文明の遺跡を巡る考古学者と盗掘者との闘い」産経新聞社主催、みんぱく創設40周年記念 カレッジシアター「地球探究紀行」あべのハルカス近鉄本店 ウイング館９階 SPACE 9

2015年２月20日　「アンデスの文化遺産の保存と活用」阪神シニアカレッジ

◎調査活動

・**海外調査**

2014年７月２日～９月18日―ペルー（中央アンデス地帯における発掘調査）

2014年９月24日～10月18日―ペルー、英国（中央アンデス地帯における発掘調査及び英国の遺跡の考古学的調査）

2015年２月24日～３月14日―ペルー（ペルー国立サン・マルコス大学との学術協定延長に関する協議及び、昨夏のパコパンパ発掘調査出土遺物の分析）

◎大学院教育

・**指導教員**

主任指導教員（４人）

◎上記以外の研究活動

・**人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など**

科学研究費補助金基盤研究（S）「権力の生成と変容から見たアンデス文明史の再構築」研究代表者

◎社会活動・館外活動

・**他機関から委嘱された委員など**

文化遺産国際協力コンソーシアム副会長、文化遺産国際協力コンソーシアム中南米分科会委員、文化遺産国際協力コンソーシアム企画分科会委員、日本学術会議連携委員、ペルー全国学長会議編集局理事、ペルー国クントゥル・ワシ文化協会（NPO）クントゥル・ワシ博物館監査役、アンデス文明研究会顧問、金沢大学国際文化資源学研究センターアドバイザー

## 平井京之介［ひらい　きょうのすけ］―― 教授

**【学歴】**東北大学文学部社会学科社会学専攻卒（1988）、ロンドン大学ユニバーシティ・カレッジ人類学部社会人類学修士課程修了（1992）、ロンドン大学ロンドン経済政治学院人類学部博士課程修了（1998）**【職歴】**花王株式会社本社チェーンストア部（1988）、国立民族学博物館第１研究部助手（1995）、国立民族学博物館民族文化研究部助手（1998）、国立民族学博物館民族文化研究部助教授（2001）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（2006）、国立民族学博物館研究戦略センター教授（2013）**【学位】**Ph.D.（ロンドン大学ロンドン経済政治学院人類学部 1998）、M.Sc.（ロンドン大学ユニバーシティ・カレッジ人類学部 1992）**【専攻・専門】**社会人類学 1）アジア産業労働者の人類学的研究、2）ラオス仏教の人類学的研究、3）コミュニティの政治人類学的研究**【所属学会】**日本文化人類学会、The Royal Anthropological Institute、組織学会

**【主要業績】**

［単著］

平井京之介

2011　『村から工場へ――東南アジア女性の近代化経験』東京：NTT 出版。

［編著］

平井京之介

2012 『実践としてのコミュニティ――移動・国家・運動』京都：京都大学学術出版会。

［論文］

Hirai, K.

2008 The Romantic Ethic and the Notion of Modern Society: Imagining Communities among Northern Thai Factory Women. In S. Tanabe（ed.）*Imagining Communities in Thailand: Ethnographic Approaches*, pp.135–160. Chiang Mai: Silkworm Books.

**【2014年度の活動報告】**

◎各個研究

**・研究課題**

水俣病被害者支援運動の人類学的研究

**・研究の目的、内容**

本研究は、人びとが水俣病被害者を支援する運動を通じて新たにコミュニティを形成し、国家や社会との関係をつくりかえようとする過程を、人類学的アプローチを用いて明らかにする試みである。本研究では、熊本県水俣市の水俣病被害者支援NPOをコミュニティという観点から調査研究することによって、1970年代半ばから現在までのあいだに、この運動の活動や組織、関係性、資源と、そこに参加する人びとの志向する社会のイメージがいかに変化してきたか、またその過程において、国家統治や資本主義との関係をどのように変化させてきたかを解明することを目的とする。

**・成果**

本年度は、昨年度から３年間の予定で実施している科学研究費補助金プロジェクト（基盤研究（C））「水俣病被害者支援運動のコミュニティに関する人類学的研究」の研究活動の一部として、熊本県水俣市のNPOにおいて約２か月間の集約的な現地調査を実施し、特に、民間知識や儀礼的知識、社会的記憶など、NPOに蓄積された知や実践の様式に焦点を当てた調査をおこなった。さらに、NPOと、行政機関や政治団体、地域社会との関係を把握するために、聞き取り調査を実施した。また、昨年度に実施した国際シンポジウム“Social movements and the production of knowledge: politics, identity and social change in East Asia”の成果を刊行物としてまとめるための準備をおこなった（2015年７月刊行予定）。

◎出版物による業績

［共編著］

Sonoda, N., K. Hirai and J. Incherdchai（eds.）

2015 *Asian Museums and Museology 2014: International Workshop on Asian Museums and Museology in Thailand*（Senri Ethnological Reports 129）. Osaka: National Museum of Ethnology［査読有，学振研究拠点形成事業Ｂアジア・アフリカ学術基盤形成型の成果］.

［論文］

Sonoda, N. and K. Hirai

2015 Introduction. In N. Sonoda, K. Hirai and J. Incherdchai（eds.）*Asian Museums and Museology 2014: International Workshop on Asian Museums and Museology in Thailand*（Senri Ethnological Reports 129）, pp.1–7. Osaka: National Museum of Ethnology［査読有，学振研究拠点形成事業Ｂアジア・アフリカ学術基盤形成型の成果］.

［事典項目］

平井京之介

2014 「コミュニティ」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.544–545，東京：丸善出版。

2014 「消費」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.596–597，東京：丸善出版。

［その他］

平井京之介

2014 「書評『理性の暴力』――水俣病を中心に」『ごんずい』135：28–29。

◎口頭発表・展示・その他の業績

**・展示**

常設展東南アジア展示新構築

◎調査活動

・**国内調査**

2014年４月６日～４月９日―熊本県水俣市（水俣病被害者支援運動のコミュニティに関する人類学的研究）
2014年５月11日～５月13日―熊本県水俣市（水俣病被害者支援運動のコミュニティに関する人類学的研究）
2014年５月29日～６月１日―富山県富山市、新潟県新潟市、石川県金沢市（水俣病被害者支援運動のコミュニティに関する人類学的研究）
2014年６月13日～６月15日―福島県福島市、いわき市（水俣病被害者支援運動のコミュニティに関する人類学的研究）
2014年６月16日～６月18日―熊本県水俣市（水俣病被害者支援運動のコミュニティに関する人類学的研究）
2014年７月13日～７月15日―熊本県水俣市（水俣病被害者支援運動のコミュニティに関する人類学的研究）
2014年８月18日～８月19日―熊本県水俣市（水俣病被害者支援運動のコミュニティに関する人類学的研究）
2014年９月16日～９月17日―熊本県水俣市（水俣病被害者支援運動のコミュニティに関する人類学的研究）
2014年10月20日～10月21日―熊本県水俣市（水俣病被害者支援運動のコミュニティに関する人類学的研究）
2014年11月３日～12月26日―熊本県水俣市（水俣病被害者支援運動のコミュニティに関する人類学的研究）
2015年３月23日～３月24日―三重県四日市市（水俣病被害者支援運動のコミュニティに関する人類学的研究）

・**海外調査**

2014年８月24日～８月28日―タイ（タイの博物館・博物館学に関する共同研究・現地調査）

◎大学院教育

・**大学院ゼミでの活動**

１年生ゼミ担当

## 樫永真佐夫［かしなが　まさお］―― 准教授

1971年生。**【学歴】**早稲田大学第一文学部日本文学専修卒（1994）、東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学専攻修士課程修了（1997）、東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学専攻（文化人類学コース）博士課程単位取得退学（2001）**【職歴】**日本学術振興会特別研究員（1997）、国立民族学博物館民族社会研究部助手（2001）、国立民族学博物館民族社会研究部准教授（2008）、国立民族学博物館研究戦略センター准教授（2010）、総合研究大学院大学准教授併任（2012）**【学位】**学術博士（東京大学 2006）、学術修士（東京大学 1997）**【専攻・専門】**文化人類学（東南アジアにおけるタイ系民族の民族誌的研究）**【所属学会】**日本文化人類学会、早稲田大学文化人類学会

**【主要業績】**

［単著］

樫永真佐夫

2013 『黒タイ歌謡「ソン・チュー・ソン・サオ」――村のくらしと恋』東京：雄山閣。
2011 『黒タイ年代記――「タイ・プー・サック」』東京：雄山閣。
2009 『ベトナムの祖先祭祀――家霊簿と系譜認識をめぐる民族誌』東京：風響社。

**【受賞歴】**

2010　第６回日本学術振興会賞

**【2014年度の活動報告】**

◎各個研究

・**研究課題**

ベトナムにおける黒タイ文字と文書／東南アジアにおけるボクシングの文化人類学

・**研究の目的、内容**

今年度も、ベトナム西北地方からラオス北部にかけて居住している盆地民、黒タイの伝統文化の継承に焦点を当てた現地調査と文献調査に基づく民族誌的研究を継続する。とくに今年度は、黒タイ文字の創成と、伝統歌謡テクストに関する考察を中心的に行う。

　また昨年度に引き続き、東南アジア（ベトナム、タイ、ラオスを中心とする）におけるボクシングの受容と発展に関する現地調査と文献調査を行う。

・成果

黒タイの古い歌謡テクストを自身の民族誌データに基づいて分析し、黒タイの植物観を考察した論文「黒タイ歌謡の中の植物とくらし」が、落合雪野・白川千尋編『ものとくらしの植物誌――東南アジア大陸部から』（臨川書店）の１章として刊行された。

国立民族学博物館編『世界民族百科事典』（丸善出版）刊行にあたっては、編集委員として「神話・歴史」の章を編集したのみならず、「祖先崇拝」の項目も執筆した。庄司博史編『世界の文字事典』（丸善出版）でも、「ベトナム語」の項目を執筆した。

フランスによるインドシナの植民地化が進んだ19世紀後半、当時のベトナム西北部の黒タイ首領たちが、外部の諸国家や首領たちに対するどのような政治的、外交的戦略から黒タイ文字を創成したのかを歴史的に考察した論文を執筆した。現在、編著者とともに編集作業中であり、2015年度以降に出版する。

そのほか、ベトナム社会文化研究の一環として、「今年はヤギ年」「主役は人形なのか、人なのか？――ベトナムの水上人形劇」等の小論を発表した。

◎出版物による業績

［論文］

樫永真佐夫

2014 「黒タイ歌謡の中の植物とくらし」落合雪野・白川千尋編『ものとくらしの植物誌――東南アジア大陸部から』pp.295-310，京都：臨川書店。

［事典項目］

樫永真佐夫

2014 「ベトナム語」庄司博史編『世界の文字事典』pp.168-173，東京：丸善出版。

2014 「祖先崇拝」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.158-159，東京：丸善出版。

2014 「歴史・神話」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』p.205，東京：丸善出版。

［その他］

樫永真佐夫

2014 「主役は人形なのか、人なのか？――ベトナムの水上人形劇」『月刊みんぱく』38(5)：14-15。

2015 「今年はヤギ年」『月刊みんぱく』39(1)：8-9。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・研究講演

2014年11月１日 「黒タイ歌物語『イン・エン』」（樫永真佐夫＆谷 由起子トークショー）OUTBOUNDにおける展覧会『H. P. E 谷 由起子の仕事 ラオス少数民族との布づくり（2014年10月29日～11月17日）』OUTBOUND（東京都武蔵野市）

2015年１月28日 「多民族共生を考える――ベトナム西北部の人々のくらしから」産経新聞社主催、みんぱく創設40周年記念 カレッジシアター「地球探究紀行」あべのハルカス近鉄本店 ウイング館９階 SPACE 9

・広報・社会連携活動

2014年５月４日 「ベトナム、黒タイのディエンビエンフー60年」第343回みんぱくウィークエンド・サロン

2015年１月16日 「文化って、なに？――こんなものも、あんなものも食べてみた」大阪成蹊女子高等学校美術・イラスト・アニメーションコース進路講演、大阪成蹊女子高等学校

◎調査活動

・海外調査

2014年10月７日～10月17日―ベトナム（ベトナムの黒タイの歌物語に関する研究）

◎大学院教育

・大学院ゼミでの活動

１年生ゼミ「地域文化学基礎演習Ⅰ」、リサーチプロポーザル

・博士論文審査委員

予備審査委員（１件）

## 丹羽典生［にわ　のりお］――――――

2014 「みんぱく世界の旅　フィジー①　お誕生日会は一生に２度」『毎日小学生新聞』７月12日。
2014 「みんぱく世界の旅　フィジー②　みんなの日々の楽しみは…」『毎日小学生新聞』７月19日。
2014 「みんぱく世界の旅　フィジー③　さまざまな文化 もめごとも」『毎日小学生新聞』７月26日。
2014 「みんぱく世界の旅　フィジー④　かつて、フィジーに移住した日本人もいた」『毎日小学生新聞』８月２日。
2014 「民主制への復帰か、さらなる混乱の序章か――フィジーにおける８年ぶりの総選挙の帰結」『国際人権 ひろば』118：12-13。
2015 「旅・いろいろ地球人　信じる②　出会った意味」『毎日新聞』１月29日夕刊。

◎口頭発表・展示・その他の業績

**・共同研究会**

2015年２月28日 「神学と宗教的社会運動――フィジー・ダク村落開発事業の事例から」『宗教の開発実践と公共性に関する人類学的研究』

**・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告**

2014年５月５日 ‘Accommodating Political Crisis: the Perspective of Ethnic Minorities in Fiji.’ Panel “Crisis as Ongoing Reality: Perspectives from Different Anthropological Locations” (Covenor: Niko Besnier, Susana Narotzky), IUAES 2014 with JASCA, Makuhari Messe, Chiba, Japan

2014年６月22日 「応援の人類学に向けた試論」『応援の人類学――政治・スポーツ・ファン文化からみた利他性の諸相』国立民族学博物館

2014年11月29日 ‘Introduction: Challenge for the Traditional Man in Contemporary Japan.’ Anthropology of Japan in Japan, Nanzan University

2014年11月29日 ‘Challenge for the Traditional Man in Contemporary Japan: From a Case Study of the College Cheering Group as Japanese Organization.’ Anthropology of Japan in Japan, Nanzan University

2015年２月23日 「ヴァヌアツ人としての自己形成――フィジーにおけるヴァヌアツ移民を事例として」『科学研究費補助金「太平洋島嶼部におけるマイノリティと主流社会の共存に関する人類学的研究」研究会』京都大学

2015年３月27日 「消えた日本人移民――19世紀フィジーにおける実験とその記録」『日本オセアニア学会』田沢湖公民館大集会室（秋田）

◎調査活動

**・海外調査**

2014年８月５日～８月22日―フィジー（OS型言語の文処理メカニズムに関するフィールド言語認知脳科学的研究）

2014年８月25日～９月５日―ニューカレドニア、ヴァヌアツ（太平洋島嶼部におけるマイノリティと主流社会の共存に関する資料の収集）

2015年１月30日～２月９日―ニュージーランド、トンガ（「トランスナショナルな社会運動と政治参加の人類学：オセアニア大国の移民を事例に」に関わる資料収集及び調査研究）

2015年３月２日～３月16日―オーストラリア（「トランスナショナルな社会運動と政治参加の人類学：オセアニア大国の移民を事例に」に関わる資料収集及び調査研究）

◎上記以外の研究活動

**・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など**

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同利用・共同研究課題「地域民族誌の方法論と人類学的空間構想力の可能性の探求」（研究代表者：高倉浩樹）共同研究員、科学研究費補助金（基盤研究（A））「太平洋島嶼部におけるマイノリティと主流社会の共存に関する人類学的研究」（研究代表者：風間計博）研究分担者、科学研究費補助金（基盤研究（C））「トランスナショナルな社会運動と政治参加の人類学：オセアニア大国の移民を事例に」研究代表者

## 三尾　稔［みお　みのる］――――――

ンド地域研究」国立民族学博物館拠点が主催した国際研究ワークショップにおいてその成果を英文で発表した。

「現代インド地域研究」推進事業に関しては、国立民族学博物館拠点の代表として、研究会やシンポジウムの開催、研究資料の受け入れなど拠点事業の推進を主導した。拠点の研究はグループ１「現代インドの宗教：運動と変容」及びグループ２「環流する現代インド文化」から組織される。今年度は両グループ合同の研究会を３回開催したほか、国際研究セミナーと国際研究ワークショップを１回ずつ開催した。報告者はこれらの国内研究会の企画立案に関与し、研究会を主宰した。拠点プロジェクトの研究成果は、「現代インド地域研究」ネットワーク全体で出版を計画している全６巻の研究叢書のうちの第６巻として編集し、2015年５月初旬に出版される予定である。この巻において、報告者自身は編者として関与するだけでなく、序論および第12章を執筆している。

また、「現代インド地域研究」プロジェクトと「イスラーム地域研究プロジェクト」との連携研究プロジェクト「南アジアとイスラーム」プロジェクトにおいて、報告者が企画・立案・責任者となって2014年10月にシンポジウムを開催した。このシンポジウムの成果は、報告者が共編者となって2015年３月に論文集として刊行された。

「現代インド地域研究」国立民族学博物館拠点は、研究ネットワークの国際化の推進にも積極的に取り組んでいる。2010年度に研究交流に関する覚書を交わしたエジンバラ大学南アジア研究センターとの間では日本の南アジア研究の成果の英文叢書としての刊行事業を進めている。本年度は、原稿の取りまとめ等の編集作業を進め、刊行が開始された。報告者は、この英文叢書のうちの２冊の編集執筆を行っており、このうち１冊は2015年５月中に出版される予定である。

『「沖 守弘インド民族文化写真資料アーカイブ」のデータベース作成』プロジェクトでは、文化資源プロジェクト経費と「現代インド地域研究」プロジェクト経費を活用し、総点数20,217点のスライド写真のうち8,200点あまりのデジタル化を終えるとともに、5,000点あまりのテキスト情報の打ち込みを行った。

文化資源プロジェクト「『ラージャスターン州の生活・信仰・儀礼』に関する映像資料の編集と現地語版の作成」では、2011年度に実施した映像音響資料取材プロジェクト（「インド・ラージャスターン州における社会変容と婚礼」）の成果による取材資料を、ビデオテーク・マルチメディア・コンテンツ番組として編集製作した。

◎出版物による業績

［編著］

三尾 稔・山根 聡編

2015 『英領インドにおける諸宗教運動の再編――コロニアリズムと近代化の諸相』京都：人間文化研究機構地域研究間連携研究の推進事業「南アジアとイスラーム」。

［事典項目］

三尾　稔

2015 「4．宗教・信仰」（編集担当）国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.127-163，東京：丸善出版。

2015 「4．宗教・信仰（セクション概説）」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』p.127，東京：丸善出版。

2015 「ディアスポラ・ナショナリズム／遠隔地ナショナリズム」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.76-77，東京：丸善出版。

2015 「ヒンドゥー・ナショナリズム」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.78-79，東京：丸善出版。

2015 「分類される『宗教』」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.128-129，東京：丸善出版。

［その他］

三尾 稔

2014 「みんぱく世界の旅インド①　インドの人はカレーが大好き？」『毎日小学生新聞』５月17日。

2014 「みんぱく世界の旅インド②　インド人はことばの天才！？」『毎日小学生新聞』５月24日。

2014 「みんぱく世界の旅インド③　牛と一緒に暮らす人びと」『毎日小学生新聞』５月31日。

2014 「みんぱく世界の旅インド④　めざせ！プロクリケットプレーヤー」『毎日小学生新聞』６月７日。

2015 「問われる故郷と祖国の意味　映画『ミルカ』で考える印パ問題」『産経新聞』２月３日夕刊。

◎映像音響メディアによる業績

**・DVD・CD などの制作・監修**

［DVD］

三尾 稔監修

2015 『みんぱく映像民族誌　第15集　ラージャスターンの結婚式』日本語，106分。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機構の連携研究会での報告

2014年10月11日　'Enchantment of the Past: Nature of "Faith through Things' in the Worrier's Spirits" Cult of Southeastern Rajasthan.' 現代インド地域研究国立民族学博物館拠点 2014年度国際研究ワークショップ、国立民族学博物館

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2014年12月14日　'Circum-Terrestrial Movements and Its Global Impacts.' 2014年度現代インド地域研究国際全体集会 "Perspectives, Dialogues and Challenges: India, Japan and the Making of Modern Asia," India Habitat Centre, New Delhi, India

・研究講演

2014年11月４日　みんぱく公開講演会『無形文化遺産――選ぶ視点　選ばれる現実』総合司会、日経ホール

2014年11月13日　「暮らしの変化から見る『躍動』インドの姿」クラブ広島例会、ウェスティンホテル大阪

2015年３月20日　みんぱく公開講演会『いやし旅のウラ？おもて？――現代アジアツーリズム考』企画・パネルディスカッション司会、毎日新聞オーバルホール

・広報・社会連携活動

2014年４月16日　「インドの大地に春を呼ぶ――ホーリーの火祭り」産経新聞社主催、みんぱく創設40周年記念カレッジシアター「地球探究紀行」第２回、あべのハルカス近鉄本店 ウイング館９階SPACE９

2014年５月31日　みんぱくワールドシネマ『マイネーム・イズ・ハーン』解説

2014年６月25日　「家族をつなぐ　社会をつなぐ――インドの婚礼」産経新聞社主催、みんぱく創設40周年記念カレッジシアター「地球探究紀行」第９回、あべのハルカス近鉄本店 ウイング館９階SPACE９

2014年９月10日　「インドの女神にささげる歌と踊り」産経新聞社主催、みんぱく創設40周年記念 カレッジシアター「地球探究紀行」第16回、あべのハルカス近鉄本店 ウイング館９階SPACE９

2014年10月５日　「ヒンドゥー教世界の神々のイメージ」第358回みんぱくウィークエンド・サロン

・展示

南アジア展示場の新構築（2015年３月19日オープン）南アジア展示チーム責任者

◎調査活動

・海外調査

2014年７月23日～８月11日―インド（現代インドにおける宗教の動態におよび大都市の消費文化の現状に関する調査）

2014年10月21日～10月25日―イギリス（国立民族学博物館とエディンバラ大学の国際学術交流協定の延長に関する審議）

2014年12月11日～12月18日―インド（「現代インド地域研究」プロジェクト主催国際シンポジウム参加）

◎大学院教育

・大学院ゼミでの活動

１年生ゼミ担当

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

人間文化研究機構地域研究推進事業「現代インド地域研究」国立民族学博物館拠点 拠点代表

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

京都大学地域研究統合情報センター運営委員、日本南アジア学会理事、日本文化人類学会評議員

・特別講師

2014年５月23日　「暮らしに根ざすヒンドゥー教の世界」園田学園女子大学総合生涯学習センター・シニア専修コース「国際文化学科」

2015年１月28日　「南アジア展示場の新展示」大阪大学人間科学部「人類学実習実験」

## 伊藤敦規［いとう　あつのり］――――――

◎出版物による業績

［論文］

伊藤敦規

2015 「国立民族学博物館における研究公演の再定義――『ホピの踊りと音楽』の記録とフォーラムとしてのミュージアムの視点からの考察」『国立民族学博物館研究報告』39(3)：397-458［査読有］。

2015 「博物館をめぐる対話――国立民族学博物館における＜ホピの踊りと音楽＞公演」高倉浩樹編『展示する人類学――日本と異文化をつなぐ対話』pp.113-141，京都：昭和堂［査読有］。

［事典項目］

伊藤敦規

2014 「北米先住民」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.296-297，東京：丸善出版。

2014 「手工芸」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.496-497，東京：丸善出版。

2014 「博物館と返還」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.518-519，東京：丸善出版。

2014 「表象に対する権利」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.736-737，東京：丸善出版。

［その他］

伊藤敦規

2014 「日本国内の米国先住民研究の展開のために――民族誌資料で関係者を束ねる」『民博通信』145：20-21。

2014 「旅・いろいろ地球人　生き物⑦　精霊の化身、仮面」『毎日新聞』７月17日夕刊。

2015 「みんぱく世界の旅　アメリカ先住民ホピ①　おいのりで雨雲を呼ぶ」『毎日小学生新聞』１月10日。

2015 「みんぱく世界の旅　アメリカ先住民ホピ②　願いを込めて『ソーシャルダンス』」『毎日小学生新聞』１月17日。

2015 「みんぱく世界の旅　アメリカ先住民ホピ③　身体能力高いホピの人々」『毎日小学生新聞』１月24日。

2015 「みんぱく世界の旅　アメリカ先住民ホピ④　伝統的な生活を大切に」『毎日小学生新聞』１月31日。

Ito, A.

2014 Re-Collection and Sharing Traditional Knowledge, Memories, Information, and Images: Problem and the Prospects on Creating Collaborative Catalog. *MINPAKU Anthropology Newsletter* 38: 11-12.

2014 （掲載記事）International Collaboration Helps Connect Museum of Northern Arizona to Hopi Community. *Navajo-Hopi Observer* 34(50): 1, 4.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2014年５月７日　‘Intellectual Property: Consideration on “Copyrighted Works” to be Uniquely Given by Ethnological Museums,’ “JICA Museology Course,” National Museum of Ethnology

2014年10月５日　‘Introduction,’ Minpaku International Workshop “Collection Review: Methodology and Effective Utilization for the Museum and the Source Community,” National Museum of Ethnology

2014年10月５日　‘Tasks of Collection, Accumulation, Documentation, and Effective Utilization of SC’s Comments,’ Minpaku International Workshop “Collection Review: Methodology and Effective Utilization for the Museum and the Source Community,” National Museum of Ethnology

2014年10月５日　‘Reconnect Museum and Source Community,’(with R. Breunig and K. H.-Gilpin) Minpaku International Workshop “Collection Review: Methodology and Effective Utilization for the Museum and the Source Community,” National Museum of Ethnology

2014年10月６日　‘Introduction of “Kachina doll” Collection Labeled Hopi in Minpaku,’ Minpaku International Workshop “Collection Review: Methodology and Effective Utilization for the Museum and the Source Community,” National Museum of Ethnology

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2014年５月15日　‘Collaborating with the Source Community,’ IUAES panel “Re-imagining Ethnological Museums: New Approaches to Developing the Museum as a Place of Multi-lateral Contacts and Knowledge (Commission on Museums and Cultural Heritage),” Makuhari Messe［査読有］

2014年６月８日　「米国先住民資料の所在と管理情報の現状、国立民族学博物館のInfo-Forum Museum構想の報告」アメリカ学会第48回年次大会、米国先住民分科会、沖縄コンベンションセンター

2014年11月１日　「米国先住民ホピ製宝飾品の真髄を真贋判断から考える」首都大学東京「学術成果の都民への発信拠点・組織の形成」研究グループシンポジウム『伝統文化は誰のもの？　文化資源をめぐる協働を考える』首都大学東京

2015年３月26日　‘Collaborative Collection Research with Source Community: Introduction of “Info-Forum Museum Project”,’ 36th American Indian Workshop “Knowledge and Self-Representation,” Johann Wolfgang Goethe-Universität, Frankfurt am Main［査読有］

**・民博研究懇談会**

2014年９月４日　「所蔵博物館とソースコミュニティにとっての資料熟覧」第260回民博研究懇談会

**・展示**

「ホンモノ？ニセモノ？――『ホピ製』宝飾品の真作贋作」（2014年10月31日～2014年11月13日、首都大学東京「学術成果の都民への発信拠点・組織の形成」研究グループ企画展『伝統文化は誰のもの？――文化資源をめぐる協働を考える』）、首都大学東京91年館

**・広報・社会連携活動**

2014年10月31日～11月13日　映像作品上映『アメリカ先住民 ホピの銀細工づくり――銀板に重ね合わせる伝統』首都大学東京「学術成果の都民への発信拠点・組織の形成」研究グループ企画展『伝統文化は誰のもの？――文化資源をめぐる協働を考える』首都大学東京91年館

2014年10月31日～11月13日　映像作品上映『インディアン・ジュエリーの現在』首都大学東京「学術成果の都民への発信拠点・組織の形成」研究グループ企画展『伝統文化は誰のもの？――文化資源をめぐる協働を考える』首都大学東京91年館

2015年２月17日　「ソースコミュニティと収蔵資料の『再会』の重要性について」北海道アイヌ協会・国立民族学博物館第２回研修生講義、国立民族学博物館

2015年２月27日　「米国先住民アートの知的財産権問題――ソースコミュニティと収蔵資料の『再会』」園田学園女子大学 平成26年度特別講座「現代世界の諸問題」第５回講義、園田学園女子大学

◎調査活動

**・海外調査**

2014年６月29日～７月11日―アメリカ合衆国（北アリゾナ博物館との学術協定調印式に参加及び米国南西部の博物館等文化施設調査）

2014年11月17日～12月12日―アメリカ合衆国（北アリゾナ博物館での資料調査）

2015年３月15日～３月30日―オランダ、ドイツ（フォーラム型情報ミュージアムに関する事前調査、及びAmerican Indian Workshopでの研究発表）

◎上記以外の研究活動

**・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など**

国立民族学博物館共同研究会「米国本土先住民の民族誌資料を用いるソースコミュニティとの協働関係構築に関する研究」研究代表者、国立民族学博物館フォーラム型情報ミュージアム・開発型プロジェクト「北米先住民製民族誌資料の文化人類学的ドキュメンテーションと共有」研究代表者、科学研究費補助金（若手研究（A））「日本国内の民族学博物館資料を用いた知の共有と継承に関する文化人類学的研究」研究代表者、国立民族学博物館機関研究「民族学資料の収集・保存・情報化に関する実践的研究――ロシア民族学博物館との国際共同研究」（研究代表者：佐々木史郎）共同研究員、国立民族学博物館機関研究「文化遺産の人類学――グローバル・システムにおけるコミュニティとマテリアリティ」（研究代表者：飯田 卓）共同研究員、北海道大学アイヌ・先住民研究センター共同研究「先住民族アートプロジェクト」（研究代表者：山﨑幸治）共同研究者、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同研究「地域民族誌の方法論と人類学的空間構想力の可能性の探求」（研究代表者：高倉浩樹）共同研究者

◎社会活動・館外活動

**・他の機関から委嘱された委員など**

地域研究コンソーシアム運営委員、日本文化人類学会50周年記念誌国際大会ソーシャル・プログラム委員

◎学会の開催

2014年10月５日～10日　国立民族学博物館国際ワークショップ『資料熟覧――方法論および博物館とソースコミュニティにとっての有効活用を探る』主催、国立民族学博物館・科学研究費補助金（若手研究（A））『日本国内の民族学博物館資料を用いた知の共有と継承に関する文化人類学的研究』・フォーラム型情報ミュージアム・開発型プロジェクト「北米先住民製民族誌資料の文化人類学的ドキュメンテーションと共有」

## 河合洋尚［かわい　ひろなお］――助教

1977年生。**【学歴】**関西学院大学社会学部卒業（2001）、東京都立大学大学院社会科学研究科（修士課程）修了（2003）、東京都立大学大学院社会科学研究科（博士課程）修了（2009）**【職歴】**嘉応大学客家研究院講師（2008）、中山大学社会学・人類学学院助理研究員（講師）（2010）、国立民族学博物館研究戦略センター機関研究員（2011）、国立民族学博物館研究戦略センター助教（2013）**【学位】**博士（社会人類学）（東京都立大学 2009）、修士（社会人類学）（東京都立大学 2003）**【専攻・専門】**都市人類学、景観人類学、漢族研究**【所属学会】**日本文化人類学会、東京都立大学社会人類学会、日本華僑華人学会、中国広東民族学会

**【主要業績】**

［単著］

河合洋尚

2013 『景観人類学の課題――中国広州における都市環境の表象と再生』東京：風響社。

［編著］

河合洋尚編

2013 『日本客家研究的視角与方法――百年的軌跡』北京：社会科学文献出版社。

［論文］

Kawai, H.

2012 Creating Multiculturalism among the Han Chinese: Production of Cantonese Landscape in Urban Guangzhou. *Asia Pacific World* (International Association for Asia Pacific Studies, New York and London: Berghahn) 3(1): 50-68.

**【受賞歴】**

2001　安田三郎賞

**【2014年度の活動報告】**

◎各個研究

**・研究課題**

1）中国漢族地域の都市景観形成にまつわる人類学的研究

2）環太平洋における客家の移動、文化再生、景観形成にまつわる越境民族誌

3）漢族の人類学的研究にまつわる先行研究の整理

**・研究の目的、内容**

1）景観人類学の理論と手法を再考するとともに、その視点と手法をもって中国華南地方の漢族社会における景観形成を解読する。

2）客家、特に中国南部とベトナムに居住するンガイ人に着目し、その国境を超えた文化的ネットワークを明らかにする。科研「漢族的特色の空間利用とエスニシティの再編――中・越隣接エリアの調査研究」の一環として、中国南部、ベトナムだけでなく、再移住先であるアメリカ等でも調査をおこなう。

3）日本、アメリカ、中国等における漢族の人類学的研究を整理する。

**・成果**

1）景観人類学の理論を簡潔に紹介し、中国華南地方の事例からそれを再考する論文「景観人類学の射程と展望――中国客家地域における景観建設の事例から」（『山形大学歴史・地理・人類学論集』16号）を発表した。

2）今までほとんど知られていなかったベトナム客家の概況、および移動、社会組織、文化創造、アイデンティティの実態について「ベトナム客家の移住とアイデンティティ――ンガイ人に関する覚書」（『客家與多元文化』９号）や「ベトナムの客家に関する覚書――移動・社会組織・文化創造」（『華僑華人研究』11号）という２つの論文でまとめた。また、四川省や広西チワン族自治区における客家および客家文化の生成について華僑とのかかわりから論じた。その成果は、中国語論文「族群話語与社会空間――四川成都、広西玉林客家空間的建構」（黄忠彩・張継焦編『企業和城市発展――并非全是経済的問題』）、「客家語話与文化産業――以梅州、玉林、成都為例」（韓敏・末成道男編『中国社会与民族的話語分析――人類学的理框架論及個案研究』）などで発表した。これらの論文は、科研「漢族的特色の空間利用とエスニシティの再編――中・越隣接エリアの調査研究」の研究成果の一部である。

3）日本の客家研究について中国語で紹介した論文「日本客家研究的軌跡――従日本時代台湾調査到後現代主義視角」（『全球客家研究』創刊号）を台湾の雑誌で発表した。

◎出版物による業績

［論文］

河合洋尚

2014 「『客家の故郷』の誕生――広東省・福建省・江西省の省境における客家空間の生産をめぐって」末成道男・劉 志偉・麻 国慶編『人類学と「歴史」――第一回東アジア人類学フォーラム論文集』北京：社会科学文献出版社（日中両言語）。

2014 「対于日本客家民間信仰以及風水研究的個人見解――从空間――場所論的観点来看」周 建新・温 春香編『客家民間信仰和地域社会研究』pp.16-25，哈爾浜：黒竜江人民出版社。

2014 「人工環境的社会文化人類学理論――走向調整論的途径」羅 勇・邹 春生編『客家民居与聚落文化研究』pp.296-312，哈爾浜：黒竜江人民出版社。

2014 「族群話語与社会空間――四川成都、広西玉林客家空間的建構」韓 敏・末成道男編『中国社会的家族・民族・国家的話語及其動態――東亜人類学者的理論探索』（Senri Ethnological Studies 90）pp.115-131，大阪：国立民族学博物館［査読有］。

2014 「社会主義中国における宗教復興」『唯物論研究』129：1-5。

2015 「景観人類学の射程と展望――中国客家地域における景観建設の事例から」『山形大学歴史・地理・人類学論集』16：39-54。

河合洋尚・呉 雲霞

2014 「ベトナムの客家に関する覚書――移動・社会組織・文化創造」『華僑華人研究』（日本華僑華人学会）11：93-103［査読有］。

2014 「ベトナム客家の移住とアイデンティティ――ンガイ人に関する覚書」『客家與多元文化』（日本客家文化協会）9：6-51。

［その他］

河合洋尚

2014「景観人類学――さらなる可能性の模索」『民博通信』146：24-25。

2014 「旅・いろいろ地球人　父親③　出稼ぎと故郷への帰還」『毎日新聞』12月４日夕刊。

◎映像音響メディアによる業績

**・電子ガイドの制作・監修**

［中国地域の文化］

河合洋尚監修

2014 『メルボルンの中華街』日本語，英語，韓国語，中国語。

陳天璽・河合洋尚監修

2014 『冥界用品』日本語，英語，韓国語，中国語。

2014 『獅子舞・龍舞』日本語，英語，韓国語，中国語。

◎口頭発表・展示・その他の業績

**・学会または館外のシンポジウム**

2014年４月26日 「華僑与宗教復興――華南客家地区的客家景観和霊性」国際シンポジウム『宗教与文化』南京大学社会学院人類学研究所

2014年５月18日 「趣旨説明：ランドスケープの人類学――競合論から整合論へ」「構造色としての景観――中国客家地区における文化的景観の競合と整合」第48回日本文化人類学会分科会『ランドスケ

ープの人類学――競合論から整合論へ』（代表：河合洋尚）、幕張メッセ
2014年５月21日　「日本茶道与潮汕功夫茶的比較」安溪人民政府主催国際シンポジウム『中国茶的世界』安溪永隆国際酒店
2014年５月31日　「趣旨説明」仙人の会座談会『中国の宗教とフィールドワーク』武蔵大学
2014年８月２日　「中国雲南省における＜僑郷空間＞の創出」（阿部朋恒との共同発表）華僑華人学会研究会、東京大学
2014年８月３日　「ベトナム客家の移住とアイデンティティ――ンガイ人に関する覚書」日本国際客家文化協会主催、国際学術シンポジウム『客家と多元文化』明治大学
2014年９月13日　「日本的財神信仰与徐福信仰――新宮市地方団体与華僑（客家）団体的信仰実践」国際シンポジウム『第三回財神信仰研討会』遼寧省本溪県

・みんぱくゼミナール
2014年８月16日　「世界遺産に住む――中国・客家の伝統家屋」第435回みんぱくゼミナール

・研究講演
2014年６月21日　「景観人類学の射程と展望――中国客家地域における景観建設の事例から」山形大学歴史・地理・人類学研究会第16回大会、山形大学
2014年８月１日　「客家料理の多様性と商業利用」立命館大学経済学部主催、立命館大学経済学セミナーシリーズ、立命館大学びわこくさつキャンパス
2014年９月16日　「景観人類学的視角与展望――粤東客家地域的景観建設為例」中国社会科学院連続講演会・第56回人類学論壇、中国社会科学院人類学・民族学研究所
2014年10月４日　「中国客家地域における生命観と『抱護』の思想」第２回学際シンポジウム『沖縄の村落観を問い直す』沖縄県立博物館・美術館

・広報・社会連携活動
2014年６月１日　「華僑の移住と文化――ベトナム」第347回みんぱくウィークエンド・サロン

この部分は電子媒体による公開の許諾が得られていません。

◎社会活動・館外活動

・非常勤講師
流通科学大学「民族文化誌」

## 菅瀬晶子［すがせ　あきこ］――助教

**【学歴】**東京外国語大学外国語学部アラビア語学科卒（1995）、東京外国語大学大学院地域文化研究科博士前期課程（アジア第三専攻）修了（1999）、総合研究大学院大学文化科学研究科博士後期課程（地域文化学専攻）修了（2006）**【職歴】**日本女子大学文学部史学科非常勤講師（2006）、総合研究大学院大学葉山高等研究センター上級研究員（2006）、日本女子大学文学部史学科非常勤講師（2008）、日本女子大学文学部史学科非常勤講師（2009）、神奈川大学経営学部非常勤講師（2010）、日本女子大学文学部史学科非常勤講師（2010）、共立女子大学国際学部非常勤講師（2010）、大阪大学外国語学部非常勤講師（2010）、総合研究大学院大学学融合推進センター特別研究員（2010）、国立民族学博物館民族社会研究部助教（2011）**【学位】**博士（文学）（総合研究大学院大学 2006）、修士（学術）（東京外国語大学大学院 1999）**【専攻・専門】**文化人類学・中東地域研究（パレスチナ・イスラエルを中心とした、東地中海地域アラビア語圏）**【所属学会】**日本中東学会、日本文化人類学会、京都ユダヤ思想学会

【主要業績】

［単著］

菅瀬晶子

2012 『豊穣と共生への祈り――パレスチナ・イスラエルにおける聖者アル・ハディル崇敬』（民族紛争の背景に関する地政学的研究19）大阪：大阪大学世界言語研究センター。

2010 『イスラームを知る６　新月の夜も十字架は輝く――中東のキリスト教徒』東京：山川出版社。

2009 『イスラエルのアラブ人キリスト教徒――その社会とアイデンティティ』広島：渓水社。

【受賞歴】

2006　長倉研究奨励賞、総研大研究賞

【2014年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

東地中海アラブ諸国における宗教的アイデンティティの表象

・研究の目的、内容

共同研究「パレスチナ・ナショナリズムとシオニズムの交差点」が本年度で終了予定であり、本年度後半に成果公開としての国際シンポジウムを、東京で開催することをめざしている。その発表内容にあわせ、キリスト教徒のパレスチナ・ナショナリスト２名の調査を進めることが今年度の目標である。したがって、本年度の研究は歴史学的文献調査が中心となるであろう。昨年度後半におこなった現地調査で入手した文献を精読し、いかにしてキリスト教徒がパレスチナ・ナショナリズムに貢献してきたのかを解き明かす。

また、イスラエルで現在起こっているアラブ人キリスト教徒徴兵問題と、その結果として蔓延しつつあるキリスト教徒に対するヘイトクライムの事例を収集し、排外主義が日常的にみられるようになった日本の現状と比較検証する。

・成果

先行研究の精読とともに、キリスト教徒アラブ・ナショナリスト２名（前項でパレスチナ・ナショナリストと表記しているが、研究を進める過程でアラブ・ナショナリストと呼んだほうが適切であるという判断に至ったので、以降はアラブ・ナショナリストと表記する）の調査をパレスチナ・イスラエルにおいて夏期におこなった。その結果、パレスチナ・イスラエルで入手できる文献資料は限られており、また研究機関に所蔵されていても閲覧に制限がかけられていることが判明した。そこで、入手できる範囲で文献を収集し、現地の研究者と意見交換をおこなった。この調査の最中に、イスラエル国内のアラブ人キリスト教徒に対するヘイト・クライムの実態や、徴兵問題に対する一般市民の見解についても聞き取り調査をおこなった。このテーマについても、次年度以降も引き続き調査を続行してゆく予定である。

夏の調査で収集した文献の調査に基づき、共同研究内で発表をおこなったほか、その内容を増補したものを成果報告としてのシンポジウム「イスラエル建国以前のパレスチナをめぐるナショナリズムの諸相」にて発表した。本シンポジウムのプロシーディングスは、次年度になんらかのかたちで出版予定である。

また、当該年度に受け入れていたユーセフ・カンジョウ外国人研究員とともに、機関研究「文化遺産の人類学――グローバル・システムにおけるコミュニティとマテリアリティ」の研究成果として、国際フォーラム「紛争地の文化遺産と博物館」を企画し、開催した。この国際フォーラムにおいて、報告者はイスラエルの占領下にあるパレスチナ自治区における、パレスチナ文化やパレスチナ人アイデンティティの定義の成立と博物館のかかわりについて発表をおこなった。

◎出版物による業績

［論文］

菅瀬晶子

2015 「レバノン南部の聖者アル・ホドル崇敬にみられる『聖者の占有』とその背景――歴史的パレスチナとの比較から」『国立民族学博物館研究報告』39(4)：465-510［査読有］。

Sugase, A.

2014 The Beginnings of a New Coexistence: a Case Study of the Veneration of the Prophet Elijah (Mar Ilyas) among Christians, Muslims and Jews in Haifa after 1948. In P. S. Rowe, J. H. A. Dyck and J. Zimmermann (eds.) *Christians and the Middle East Conflict,* pp.84-98, London/

New York: Routledge［査読有］.

［書評］

菅瀬晶子

2014「中東の宗教史を概観するうえで、画期的な専門書（アズィズ・S・アティーヤ著『東方キリスト教の歴史』）」『週刊読書人』8月22日4面。

［事典項目］

菅瀬晶子

2014「4．宗教・信仰　正統と異端」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.132-133，東京：丸善出版。

2014「9．移動・移民　ディアスポラ」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.352-353，東京：丸善出版。

［その他］

菅瀬晶子

2014「旅・いろいろ地球人　共に生きる　①究極の祝祭」『毎日新聞』4月10日夕刊。

2014「旅・いろいろ地球人　共に生きる　⑤イスラム横丁の人情」『毎日新聞』5月8日夕刊。

2014「世界宗教地勢　パレスチナ・イスラエル――教皇訪問に冷めた目　マロン派大司教は歓迎」『中外日報』7月9日。

2014「キリスト教徒アラブ・ナショナリストの先進性と限界――第4回パレスチナ・アラブ会議を例に」『民博通信』146：14-15。

◎口頭発表・展示・その他の業績

**・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告**

2014年5月15日　'Distribution of Pork in the Islamic/Jewish-dominant areas: A Case Study of Palestine and Israel.' The Conference of the International Union of Anthropological and Ethnological Studies, Makuhari Messe, Chiba, Japan

2015年2月7日　「占領下における博物館の運営と課題――パレスチナの事例」国際フォーラム『紛争地の文化遺産と博物館』国立民族学博物館

2015年3月13日　「ナジーブ・ナッサールのアラブ・ナショナリズム観――『シオニズム』とカルメルでの活動から」シンポジウム『イスラエル建国以前のパレスチナをめぐるナショナリズムの諸相』東京大学東洋文化研究所

**・研究講演**

2014年5月31日　招待講演「イスラエルのアラブ人キリスト教徒とその現状」日本ユダヤ学会公開シンポジウム『イスラエルの内なる他者――「イスラエル・アラブ」とユダヤ人社会』早稲田大学戸山キャンパス

2014年10月10日　「パレスチナ・イスラエル紛争を知る」泉北教養講座ライフセミナー、ビッグ・アイ1階研修室

2015年2月18日　「聖地に生きる――パレスチナとイスラエル」産経新聞社主催カレッジシアター「地球探究紀行」あべのハルカス近鉄本店ウイング館9階「SPACE 9」

2015年2月28日　展示場ミニレクチャー（みんぱくワールドシネマ『もうひとりの息子』関連）、国立民族学博物館ナビひろば

2015年3月16日　「パレスチナにおける巡礼――エルサレム、ベツレヘム、その他あまたの聖地への旅」芦屋川カレッジ、芦屋市民センター

2015年3月19日　「中東のキリスト教徒からみたイスラーム世界」宝塚国際理解ゼミナール、宝塚南口会館

**・広報・社会連携活動**

2014年6月7日　「多みんぞくの街・新大久保とハラールフード産業」第432回国立民族学博物館友の会講演会

2014年7月6日　「多みんぞくの街・新大久保物語――生まれ育った者の視点から」第350回みんぱくウィークエンド・サロン

2014年7月12日　みんぱく映画会『かぞくのくに』国立民族学博物館講堂

2014年10月19日　国立民族学博物館友の会東京講演会「多みんぞくの街・新大久保とハラールフード産業」モンベル渋谷店5階サロン

2014年12月21日　「みんぱくクッキングスクールin総研大」講師、総合研究大学院大学文化科学研究科学術交

流フォーラム2014『文化をカガクする？』国立民族学博物館
2015年２月28日　みんぱくワールドシネマ『もうひとりの息子』国立民族学博物館講堂
◎調査活動
・**海外調査**
2014年８月７日～８月28日―イスラエル（パレスチナにおけるアラブ／パレスチナ・ナショナリストについての資料収集、及びパレスチナ・イスラエルのアラブ人キリスト教徒のアイデンティティに関する聞き取り調査）
◎上記以外の研究活動
・**人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など**
東京工業大学大学院イノベーションマネジメント研究科「ぐるなび」食の未来創成寄付講座「世界の食文化と食ビジネス――文化人類学的アプローチから」共同研究者
・**非常勤講師**
滋賀県立大学「国際関係論」（2014年10月１日～2015年３月31日）
◎学会の開催
2015年２月７日　国際フォーラム「紛争地の文化遺産と博物館」国立民族学博物館

## 文化資源研究センター

### 野林厚志［のばやし　あつし］――――――

的な影響を、現地調査を中心にして明らかにする。そのうえで、工芸生産がエスニシティの形成やそれを利用した諸行動とどのような関係にあるのかについて探究する。調査対象としては原住民族（タイヤル、パイワン、サキザヤ）、平埔族（クヴァラン、シラヤ）を予定している。

なお、本研究は科学研究費補助金（基盤研究(B)）「台湾原住民族の分類とアイデンティティの可変性に関する人類学的研究」に連動して実施するものである。

・成果

本年度は、当初の研究計画にしたがい、特にパイワン族の工芸生産に焦点をあてながら、現地で制作、流通している盛装用の衣装をめぐる集団内、集団間関係、ならびに盛装用の衣装に不可欠な刺繍の基本的な技法についてフィールド調査を行った。パイワン族は原住民族の中でもその社会組織の特徴から、エスニシティが他の集団と比較的明確に区別されてきた。同時に、パイワン族は南部と東部とで異なる系統を自覚し、これらは物質文化の特徴にも反映されている。南部は盛装衣服にはビーズが多用され、東部集団は刺繍が優占で、両者を視覚的に区別する一つの特徴となっていた。ただし、こうした相違が形成されたのは、系統の違いというよりは、交易等による外部からの物質の流入といった社会経済的環境に委ねられる部分が多く、南部から東部へ移住した人々も移住先における衣装制作の環境に適応した衣服の変化を見せていることから、系統が必ずしも物質文化の特徴を維持する機能をもつのではないという、物質文化の歴史的変化に関する仮説モデルを引き出すことになった。新たな仮説モデルに関連したこれまでの研究成果を台湾における国際シンポジウム、アメリカ人類学会の年次大会等で発表した。なお、本研究は科学研究費補助金（基盤研究(B)）「台湾原住民族の分類とアイデンティティの可変性に関する人類学的研究」に連動して実施した。

◎出版物による業績

［単著］

野林厚志

2014 『タイワンイノシシを追う――民族学と考古学の出会い』京都：臨川書店。

［編著］

日本順益台湾原住民研究会編（野林厚志主編）

2014 『台湾原住民研究の射程――接合される過去と現在』台北：順益台湾原住民博物館。

［論文］

野林厚志

2014 「平埔族の物質文化の境界性――国立民族学博物館の収蔵資料を事例として」日本順益台湾原住民研究会編（野林厚志主編）『台湾原住民研究の射程――接合される過去と現在』pp.341-368，台北：順益台湾原住民博物館。

2014 「台湾原住民族の料理の環境文化史」『第七回台日原住民族研究論壇』pp.235-247，台北：国立政治大学原住民族研究中心。

［事典項目］

野林厚志

2014 「先住民運動」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.276-277，東京：丸善出版。

2014 「博覧会と民族」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.524-525，東京：丸善出版。

2014 「被差別民コミュニティ」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.576-577，東京：丸善出版。

2014 「民族と身体的特徴」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.692-693，東京：丸善出版。

［その他］

野林厚志

2014 「旅・いろいろ地球人　悪人、悪玉⑧　呉鳳という伝説」『毎日新聞』４月３日夕刊。

2014 「親日の真意」『産経新聞』４月15日夕刊。

2014 「旅・いろいろ地球人　共に生きる⑧　失われない時を求めて」『毎日新聞』５月29日夕刊。

2014 「旅の読書室64　旅の装い」『まほら』79：50-51。

2014 「MAP システム」『月刊みんぱく』38(5)：3。

2014 「自然環境に対応した生業」『月刊みんぱく』38(5)：4-5。

2014 「古きを温めて新しきを創る」『月刊みんぱく』38(5)：6-7。

2014 「前言」日本順益台湾原住民研究会編（野林厚志主編）『台湾原住民研究の射程』pp.4-6，台北：順益台湾原住民博物館。

2014 「みんぱっく――持ち出し可能な小さな博物館」『月刊 初等教育資料』2014(6)：84-85。

2014 「旅の読書室66　外国人が感じる日本の魅力とは」『まほら』81：50-51。
2014 「『2014年第７回日台原住民研究フォーラム』に参加して」『台湾原住民研究』18：161-164。
2014 「百年を超える輝き」『季刊民族学』150：71-72。
2014 「口蹄疫のパンデミック」『月刊みんぱく』38(11)：6-7。

◎映像音響メディアによる業績

・電子ガイドの制作・監修

［中国地域の文化］

野林厚志

2014 『中国地域の展示』日本語，英語，韓国語，中国語。
2014 『弩弓』日本語，英語，韓国語，中国語。
2014 『原住民族の工芸』日本語，英語，韓国語，中国語。
2014 『民博に収蔵されている台湾資料』日本語，英語，韓国語，中国語。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告

2015年２月20日 ‘Rewiring Museum Information: Mobile and Cloud.’ International Symposium “New Horizons for Asian Museums and Museology,” National Museum of Ethnology, Osaka, Japan

・共同研究会

2015年１月18日 「肉食のブランド化――イベリコ豚を事例として」『肉食行為の研究』

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2015年２月６日 「ブタを大きく育てる意義――客家社会の生き物観」生き物文化誌学会第58回例会、沖縄こどもの国チルドレンセンター

2014年12月５日 ‘Beyond Repatriation: A Sustainable Relationship Between Source Community and the Ethnological Museum,’ “Negotiating Identities: A Role or a Challenge for the Museum?” The 113th Annual Meeting of the American Anthropological Association. Washington D.C., United States of America

2014年10月12日 「台湾原住民族の料理の環境文化史」『第７回台日台湾原住民族研究論壇』国立政治大学原住民族研究中心、台北

2014年９月15日 ‘Representation of Taiwan Indigenous Peoples’ Culture in Japanese Museum.’ “Museum, Exhibition, and Cultural Representation,” The 2014 International Conference on Formosan Indigenous Peoples: Contemporary Perspectives, Institute of Ethnology, Academia Sinica, Taipei, Taiwan

2014年５月17日 ‘A Hunting Practice of “Ryoyukai”: the Relationship between Hunters in Voluntary Organization in Japanese Local Society.’ “Hunting, Animal Welfare, and Defense against Wildlife Attack.” (P051), IUAES Inter-Congress 2014, Makuhari Messe, Chiba, Japan

・研究講演

2014年10月24日 「ブタの弁明Ⅰ――なぜイノシシはブタになったのか」NPO法人大阪府高齢者大学校　世界の文化に親しむ科、大阪市教育会館

2014年10月31日 「ブタの弁明Ⅱ――中国客家のブタ飼養と性のタブー」NPO法人大阪府高齢者大学校　世界の文化に親しむ科、大阪市教育会館

2014年11月14日 「ブタの弁明Ⅲ――生ハムはなぜイベリア半島で作られるのか」NPO法人大阪府高齢者大学校　世界の文化に親しむ科、大阪市教育会館

2015年２月26日 招待講演 ‘An Ethno-archaeological Approach to Hunting: a Comparative Study of Hunting Techniques among Taiwanese Indigenous Groups.’ Lecture at the University of Ottawa, sponsored by the School of Sociological and Anthropological Studies and the Chair in Taiwan Studies

・広報・社会連携活動

2014年４月20日 「台湾原住民族の工芸文化――むかし、今、そして未来」第341回みんぱくウィークエンド・サロン

2014年４月29日 「日本統治時代の台湾の日常」『台湾映画鑑賞会　映画から台湾を知る「村と爆弾（原題：稻

草人）」』みんぱく映画会
2014年５月６日　「二二八事件とその後の政治的弾圧とむきあった台湾の人びと」『台湾映画鑑賞会　映画から台湾を知る「超級大国民（原題：超級大國民）」』みんぱく映画会
2014年５月28日　「美麗島の手しごと――台湾の伝統刺繍」産経新聞社主催、みんぱく創設40周年記念 カレッジシアター「地球探究紀行」あべのハルカス近鉄本店 ウイング館９階SPACE９
2014年６月８日　「経済成長にともなう台湾化の中の外省人の経験」『台湾映画鑑賞会　映画から台湾を知る「童年往事 時の流れ（原題：童年往事）」』みんぱく映画会
2014年６月14日　「現代の台湾社会の温度を感じさせる世代間関係」『台湾映画鑑賞会　映画から台湾を知る「海角七号 君想う、国境の南（原題：海角七號）」』みんぱく映画会
2014年８月27日　「五年に一度、祖先に会う――台湾パイワン族の五年祭」産経新聞社主催、みんぱく創設40周年記念 カレッジシアター「地球探究紀行」あべのハルカス近鉄本店 ウイング館９階SPACE９
2014年８月31日　「悪い魚と普通の魚――タオ族の魚食文化」『連続講座　台湾を知る』国立民族学博物館
2014年９月７日　「高砂族と向き合った日本人研究者――鹿野忠雄と馬淵東一」『連続講座　台湾を知る』国立民族学博物館
2014年９月23日　「パイワン族工芸の伝統と今」『連続講座　台湾を知る』国立民族学博物館

◎調査活動

**・海外調査**

2014年８月16日～８月25日―台湾（台湾原住民族の分類とアイデンティティの可変性に関するフィールド調査）
2014年９月14日～９月18日―台湾（順益台湾原住民博物館開館20周年記念国際シンポジウムへの参加）
2014年10月10日～10月14日―台湾（研究成果の公開ならびに文献資料の渉猟）
2014年12月３日～12月８日―アメリカ合衆国（アメリカ人類学会研究大会参加及び発表）
2015年２月24日～２月28日―カナダ（オタワ大学での講義ならびにカナダ歴史博物館キュレーターからの情報収集）
2015年３月26日～３月30日―台湾（台湾における原住民族食文化に関する文献調査）

◎大学院教育

**・指導教員**

主任指導教員（１人）、副指導教員（２人）

**・論文審査**

予備審査委員（１件）

◎上記以外の研究活動

**・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など**

総合研究大学院大学学融合推進センター戦略的共同研究「『料理』の環境文化史――生態資源の選択、収奪、消費の過程が環境に与えるインパクト」代表者、科学研究費補助金（基盤研究(B)）「台湾原住民族の分類とアイデンティティの可変性に関する人類学的研究」代表者

**・民間の奨学金および助成金からのプロジェクト**

順益台湾原住民博物館研究賛助金「台湾原住民族の文化、社会、歴史に関する総合的研究」代表者、“Hunting, Animal Welfare, and Defense against Wildlife Attack.” IUAES Inter-Congress 2014シンポジウム、パネル等の組織

## 久保正敏［くぼ　まさとし］――副館長（企画調整担当）、教授

## 園田直子［そのだ　なおこ］――教授

**【学歴】**パリ第１大学文学部卒（1980）、パリ第１大学科学技術修士課程修了（1982）、エコール・ド・ルーブル卒（1983）、パリ第１大学博士課程修了（1987）**【職歴】**フランス博物館科学研究所研究員（1987）、国立美術館絵画修復研究所（フランス）研究員（1989）、国立歴史民俗博物館助手（1991）、国立民族学博物館第５研究部助手（1993）、国立民族学博物館第５研究部助教授（1997）、国立民族学博物館博物館民族学研究部助教授（1998）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（1999）、国立民族学博物館文化資源研究センター助教授（2004）、国立民族学博物館文

化資源研究センター教授（2007）、国立民族学博物館情報管理施設長（2009）、館長補佐（2010）**【学位】**Doctorat de 3ème cycle（Histoire de l'art）博士（美術史）（Université de Paris I, 1987）、Maîtrise des Sciences et Techniques（Conservation et restauration des oeuvres d'art, des sites et objets archéologiques et ethnologiques）科学技術修士（Université de Paris I, 1982）**【専攻・専門】**保存科学**【所属学会】**ICOM（国際博物館会議）、IIC（国際文化財保存学会）、文化財保存修復学会、IIC-Japan（国際文化財保存学会日本支部）

**【主要業績】**

［編著］

園田直子編

2010 『紙と本の保存科学（第2版）』東京：岩田書院。

日高真吾・園田直子編

2008 『博物館への挑戦――何がどこまでできたのか』千葉：三好企画。

［学位論文］

Sonoda, N.

1987 Identification des matériaux synthétiques dans les peintures fines pour artistes par pyrolyse couplée avec la chromatographie en phase gazeuse. Application à l'étude de quelques tableaux d'art contemporain, Thèse de Doctorat de 3ème cycle, Université de Paris I, Panthéon-Sorbonne.

**【受賞歴】**

2010 文化財保存修復学会第4回業績賞

**【2014年度の活動報告】**

◎各個研究

**・研究課題**

大型民族資料を対象とした環境に「やさしい」殺虫処理法の使い分け

**・研究の目的、内容**

国立民族学博物館では、民族資料の防虫・殺虫処理法を選択するにあたっては、ひと、資料、環境に配慮してきた。2004年度以降は、海外からの新着資料には化学薬剤を用いた殺虫・殺カビ処理を行い、国内で加害された資料に関しては二酸化炭素処理、高温処理、低温処理など、化学薬剤を用いない手法で殺虫処理している。この方針に沿いながら、船資料に代表される大型民族資料を対象に、いかに適切かつ効率的に殺虫処理法の使い分けができるか検討する。そして、その方針をもとに多機能資料保管庫への船資料の戻し入れを、今年度より始める。

**・成果**

資料の大きさ・形態・材木の厚みに着目し、化学薬剤を使用しない殺虫処理法の使い分けの基準を検討した。まず、多機能保管庫（船資料用に新設）に併設した処理室で、大型密封バッグを用いた二酸化炭素処理の初動実験を実施、検証し、稼働可能な状態とした。その結果をふまえて、バッグ内での二酸化炭素処理と、保管スペースの一角での大型資料用の包み込み二酸化炭素処理にふりわけ、全体のおよそ8割の船資料の殺虫処理と戻し入れが完了した。ここまでの成果は、2015年6月の文化財保存修復学会で発表している。二酸化炭素処理以外の手法として、同じく大型密封バッグを用いての低酸素濃度処理の初動実験を実施、検証し、稼働可能な状態にした。また、太陽熱を利用したコンテナ内での高温処理の可能性を検証したところ、夕方以降の温度降下をいかに遅らせるかが課題としてあがった。次年度の夏季に追加実験を行い、実施条件を精査する。

◎出版物による業績

［共編著］

園田直子・小長谷有紀・I. Lkhagvasuren編

2014 『アジアにおける博物館・博物館学の「いま」――モンゴル、ミュージアム・クリルタイ』ウランバートル：モンゴル国立文化遺産センター（日本語・モンゴル語）。

Sonoda, N., K.Tamura and Nu Mra Zan（eds.）

2015 *Asian Museums and Museology 2013: International Research Meeting on Museology in Myanmar*（Senri Ethnological Reports 125）. Osaka: National Museum of Ethnology［査読有］。

Sonoda, N., K. Hirai and J. Incherdchai（eds.）

2015 *Asian Museums and Museology 2014: International Workshop on Asian Museums and Museology in Thailand* (Senri Ethnological Reports 129). Osaka: National Museum of Ethnology［査読有］。

［論文］

園田直子

2014 「『染象牙果菜置物』（安藤緑山作）の観察結果」『超絶技巧！明治工芸の粋――村田コレクション一挙公開』（特別展カタログ）pp.146-149，東京：三井記念美術館。

2014 「持続的な資料管理に向けた収蔵庫『再』編成」園田直子・小長谷有紀・I. Lkhagvasuren 編『アジアにおける博物館・博物館学の「いま」――モンゴル、ミュージアム・クリルタイ』pp.19-27（日本語），pp.187-197（モンゴル語），ウランバートル：モンゴル国立文化遺産センター。

2015 Museum Environment Control for Sustainable Collection Management. In N. Sonoda, K. Hirai and J. Incherdchai（eds.）*Asian Museums and Museology 2014: International Workshop on Asian Museums and Museology in Thailand* (Senri Ethnological Reports 129), pp.27-35. Osaka: National Museum of Ethnology［査読有］。

2015 「『染象牙果菜置物』（安藤緑山作）の観察結果」『三井美術文化史論集』8：15-22。

［その他］

園田直子

2014 「評論・展望　民博の国際協力――博物館学国際研修の20年」『民博通信』147：2-7。

2014 「絵画をかたちづくるもの――絵具の科学」『平成25年度文化財保存修復セミナー講義録』pp.75-82，大阪：関西大学国際文化財・文化研究センター。

Sonoda, N.

2015 Introduction. In N. Sonoda, K. Tamura and Nu Mra Zan（eds.）*Asian Museums and Museology 2013: International Research Meeting on Museology in Myanmar* (Senri Ethnological Reports 125), pp.5-10. Osaka: National Museum of Ethnology［査読有］。

2015 Closing Remarks for the Bagan Meeging. In N. Sonoda, K. Tamura and Nu Mra Zan（eds.）*Asian Museums and Museology 2013: International Research Meeting on Museology in Myanmar* (Senri Ethnological Reports 125), pp.81-82. Osaka: National Museum of Ethnology［査読有］。

2015 Opening Remarks. In N. Sonoda, K. Tamura and Nu Mra Zan（eds.）*Asian Museums and Museology 2013: International Research Meeting on Museology in Myanmar* (Senri Ethnological Reports 125), pp.151-152. Osaka: National Museum of Ethnology［査読有］。

園田直子・日髙真吾・和髙智美

2014 「博物館害虫・不快害虫の発生源に関する一考察」『文化財保存修復学会第36回大会於東京研究発表要旨集』pp.184-185［査読有］。

Sonoda, N. and K. Hirai

2015 Introduction. In N. Sonoda, K. Hirai and Jarunee Incherdchai（eds.）*Asian Museums and Museology 2014: International Workshop on Asian Museums and Museology in Thailand* (Senri Ethnological Reports 129), pp.1-7. Osaka: National Museum of Ethnology［査読有］。

関 正純・園田直子・谷本佳奈・岡山隆之

2014 「フリース法を用いた強化処理の有効性」『文化財保存修復学会第36回大会於東京研究発表要旨集』pp.102-103［査読有］。

殿山真央・関 正純・桐山亮平・岡山隆之・園田直子

2014 「紙資料のためのセルロース誘導体を用いた静電紡色（エレクトロスピニング）による紙の強化法」『文化財保存修復学会第36回大会於東京研究発表要旨集』pp.30-31［査読有］。

日髙真吾・園田直子・和髙智美・北村 繁・小谷竜介・川又隆央

2014 「被災した漆器製品の応急処置事例」『文化財保存修復学会第36回大会於東京研究発表要旨集』pp.162-163［査読有］。

◎口頭発表・展示・その他の業績

**・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告**

2014年８月25日　Museum Environment Control for Sustainable Collection Management, International Research Meeting on Museology in Thailand, Kanchanaphisek National Museum and Central Storage, Thailand

2015年２月21日　「趣旨説明」国際シンポジウム『アジアにおける新しい博物館・博物館学の展望』国立民族学博物館

2015年２月21日　「Managing and Analyzing Museum Environmental Data（博物館環境データの管理・分析システムの開発）」国際シンポジウム『アジアにおける新しい博物館・博物館学の展望』国立民族学博物館

2015年２月22日　「司会」（セッション５　総合ディスカッション：博物館と国際協力）国際シンポジウム「アジアにおける新しい博物館・博物館学の展望」国立民族学博物館

2015年３月29日　「博物館・博物館学に関する国際協力・研修――国立民族学博物館の事例から」国立民族学博物館・金沢大学共同開催文化資源学シンポジウム『文化資源の保存・継承に向けた国際協力』石川県政記念しいのき迎賓館

**・機構の連携研究会での報告**

2015年２月20日　「趣旨説明」人間文化研究機構・連携研究「人間文化資源」の総合的研究「人間文化資源の保存環境研究」国立民族学博物館研究フォーラム『持続可能なIPMに向けて――博物館環境データの分析手法を考える』文化財保存修復学会例会、国立民族学博物館

2015年２月20日　「総括・今後の展望」人間文化研究機構・連携研究「人間文化資源」の総合的研究「人間文化資源の保存環境研究」国立民族学博物館研究フォーラム「持続可能なIPMに向けて――博物館環境データの分析手法を考える」文化財保存修復学会例会、国立民族学博物館

**・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告**

2014年６月７日　「紙資料のためのセルロース誘導体を用いた静電紡糸（エレクトロスピニング）による紙の強化法」（殿山真央・関　正純・桐山亮平・岡山隆之・園田直子、発表は関　正純）、文化財保存修復学会第36回大会、明治大学アカデミーコモン

2014年６月７日　ポスター発表「フリース法を用いた強化処理の有効性」（関　正純・園田直子・谷本佳奈・岡山隆之）文化財保存修復学会第36回大会、明治大学アカデミーコモン

2014年６月７日　ポスター発表「被災した漆器製品の応急処置事例」（日髙真吾・園田直子・和髙智美・北村繁・小谷竜介・川又隆央）文化財保存修復学会第36回大会、明治大学アカデミーコモン

2014年６月７日　ポスター発表「博物館害虫・不快害虫の発生源に関する一考察」（園田直子・日髙真吾・和髙智美）、文化財保存修復学会第36回大会、明治大学アカデミーコモン

**・広報・社会連携活動**

2014年７月12日　「資料の保存・取り扱いについて」MMP2014年度新規メンバー養成研修、みんぱくミュージアムパートナーズMMP、国立民族学博物館

2014年12月10日　「資料の保存と活用」文化資源プロジェクト2014年度年末年始展示イベント「ひつじ」、国立民族学博物館

◎調査活動

**・国内調査**

2014年４月21日―三井記念美術館（資料保存と展示に関する情報収集）

2015年２月９日―名古屋工業試験場（紙の分析手法に関する情報収集および打ち合わせ）

2015年２月28日～３月１日―名古屋工業大学（紙の強化処理実験に関する研究打ち合わせ）

2015年３月６日～３月７日―東京文化財研究所（文化財を取り巻く環境と保存についての情報収集）

**・海外調査**

2014年８月24日～８月28日―タイ（タイの博物館・博物館学に関する共同研究・現地調査）

2014年９月21日～９月27日―香港（国際文化財保存学会第25回大会に参加及び東アジアにおける紙資料保存に関する情報収集、動向調査）

◎大学院教育

**・大学院ゼミでの活動**

2014年10月27日、28日、29日　「資料保存科学（モノ資料・基礎）」平成26年度学融合教育事業・総研大レクチャー、国立民族学博物館

◎上記以外の研究活動

**・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など**

人間文化研究機構連携研究「人間文化資源」の総合的研究「人間文化資源の保存環境研究」研究代表者、科学

研究費補助金（基盤研究（B））（一般）「劣化の進んだ図書・文書資料の長期保存に向けた大量強化法の開発」研究代表者、日本学術振興会研究拠点形成事業 B. アジア・アフリカ学術基盤形成型「アジアにおける新しい博物館・博物館学創出のための研究交流」日本側コーディネータ

◎社会活動・館外活動

**・他機関から委嘱された委員など**

国立歴史民俗博物館資料保存環境検討委員会委員、独立行政法人文化財研究所自己点検評価・外部評価委員、舞鶴市ユネスコ世界記憶遺産有識者会議委員、知覧特攻平和会館保存検討委員会委員

**・非常勤講師**

東京農工大学「環境資源物質科学特論」（集中講義）、関西大学国際文化財・文化研究センター平成25年度文化財保存修復セミナー「文化財各論（保護と活用）・美術工芸品（I）絵画」

◎学会の開催

2015年２月20日　研究フォーラム「持続可能な IPM に向けて――博物館環境データの分手法を考える」（人間文化研究機構・連携研究「人間文化資源」の総合的研究「人間文化資源の保存環境研究」・文化財保存修復学会例会）、国立民族学博物館第５セミナー室

2015年２月21～22日　国際シンポジウム「アジアにおける新しい博物館・博物館学の展望」国立民族学博物館第４セミナー室

## 信田敏宏［のぶた　としひろ］――教授

1968年生。**【学歴】**東京都立大学人文学部人文科学科社会学専攻卒（1992）、東京都立大学大学院社会科学研究科社会人類学専攻修士課程修了（1995）、東京都立大学大学院社会科学研究科社会人類学専攻博士課程単位取得退学（2000）**【職歴】**東京都立大学人文学部社会学科助手（2001）、国立民族学博物館民族学研究開発センター助手（2003）、国立民族学博物館研究戦略センター助手（2004）、国立民族学博物館研究戦略センター助教授（2006）、国立民族学博物館文化資源研究センター教授（2014）、総合研究大学院大学文化科学研究科教授併任（2014）**【学位】**社会人類学博士（東京都立大学 2002）**【専攻・専門】**社会人類学、東南アジア研究**【所属学会】**日本文化人類学会、東南アジア学会、日本マレーシア学会、東京都立大学社会人類学会

**【主要業績】**

［単著］

信田敏宏

2013 『ドリアン王国探訪記――マレーシア先住民の生きる世界』（フィールドワーク選書１）京都：臨川書店。

2004 『周縁を生きる人びと――オラン・アスリの開発とイスラーム化』京都：京都大学学術出版会。

Nobuta, T.

2009 *Living on the Periphery: Development and Islamization among the Orang Asli in Malaysia.* SubangJaya, Malaysia: Center for Orang Asli Concerns.

**【受賞歴】**

2006　第４回東南アジア史学会賞

**【2014年度の活動報告】**

◎各個研究

**・研究課題**

マレーシアの先住民コミュニティに関する民族誌的研究

**・研究の目的、内容**

本研究では、マレーシアの先住民コミュニティ（集落や村落などの伝統的コミュニティから NGO や先住民ネットワークなどを媒介とする新たなコミュニティを含む）の変容過程について、世界の先住民が置かれた状況と比較しながら民族誌的に検討する。具体的には、グローバル化のなかで変容する先住民のコミュニティや人びとの関係性、近年になって活発化している先住民運動や NGO 活動などに焦点を当てながら研究を進める。

**・成果**

私自身がプロジェクトチーム・リーダーを務めた東南アジア展示新構築において、「都市の風景」セクションの

「民族工芸の今昔」コーナーで本研究の成果の一部を公開した。私自身が収集したマレーシア先住民の民族工芸品を展示し、それらが現在NGOの支援のもと制作、販売されていることを展示キャプションで解説することにより、一般の来館者にマレーシア先住民の生活や現在のNGOによる支援の状況を知ってもらうことは、マレーシアのみならず世界の先住民の現状に関心を持ってもらえるきっかけとなるのではと考えている。

また、国立民族学博物館編『世界民族百科事典』（丸善出版）の企画・編集に携わり、事典項目の選定や編集作業において、本研究の成果を示した。グローバル化のなかで変容しつつある伝統的コミュニティやそこに生きる人びとの関係性の変化など、世界の先住民が置かれている新たな状況を紹介している。

そのほか、障がい児の子育てに関するエッセイと単著を執筆した。当初は本研究とは直接関係のない分野ではあったが、執筆に際して「マイノリティ」という立場についての考察を深めていくにつれ、同じく「マイノリティ」であるマレーシア先住民との共通項を多く見いだすことができ、障がい者をとりまく状況や社会のあり方、人びとの意識等について、本研究の成果が生かされた。

◎出版物による業績

［単著］

信田敏宏

2015 『「ホーホー」の詩ができるまで――ダウン症児、こころ育ての10年』東京：出窓社。

［論文］

信田敏宏

2015 「私たちの選択」道信良子編『いのちはどう生まれ、育つのか――医療、福祉、文化と子ども』（岩波ジュニア新書799）pp.29-42，東京：岩波書店。

［事典項目］

信田敏宏

2014 「東南アジア先住民」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.308-309，東京：丸善出版。

2014 「NGO」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.390-391，東京：丸善出版。

2014 「仕事・労働」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』p.399，東京：丸善出版。

2014 「文化特異性障害」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.690-691，東京：丸善出版。

［その他］

信田敏宏

2014 「旅・いろいろ地球人 父親① 入り婿の村」『毎日新聞』11月20日夕刊。

◎口頭発表・展示・その他の業績

**・共同研究会**

2014年４月26日 「統治される森に生きる――マレーシア、オラン・アスリの事例」『熱帯の「狩猟採集民」に関する環境史的研究――アジア・アフリカ・南アメリカの比較から』

**・広報・社会連携活動**

2014年６月26日 「東南アジアの文化人類学――マレーシア先住民のフィールドワークより」龍谷大学付属平安中学校対象、国立民族学博物館

2014年７月15日 「東南アジアの文化人類学――マレーシアを中心に」帝塚山中学校対象、国立民族学博物館

2015年２月４日 「マレーシアの自然と生きる人びと」産経新聞社主催、みんぱく創設40周年記念 カレッジシアター「地球探究紀行」あべのハルカス近鉄本店 ウイング館９階SPACE９

2015年２月28日 「多様なイスラームを知ろう――アジアのイスラーム社会・マレーシアを例に」TIFAセミナー、豊中市立男女共同参画センター

◎大学院教育

**・指導教員**

副指導教員（１人）

◎上記以外の研究活動

**・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など**

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同利用・共同研究課題「地域民族誌の方法論と人類学的空間構想力の可能性の探求」共同研究員（代表：高倉浩樹）

## 吉田憲司［よしだ　けんじ］――教授

1955年生。**【学歴】**京都大学文学部哲学科美学美術史学専攻卒（1980）、大阪大学大学院文学研究科芸術学専攻博士前期課程修了（1983）、大阪大学大学院文学研究科芸術学専攻博士後期課程単位取得退学（1987）**【職歴】**ザンビア大学アフリカ研究所共同研究員（1984）、大阪大学文学部助手（1987）、国立民族学博物館助手（1988）、国立民族学博物館助教授（1992）、総合研究大学院大学文化科学研究科併任（1993）、国立民族学博物館博物館民族学研究部教授（2000）、国立民族学博物館文化資源研究センター教授（2004）、国立民族学博物館文化資源研究センター長（2006）、放送大学客員教授（2010）**【学位】**学術博士（大阪大学大学院文学研究科 1989）、文学修士（大阪大学大学院文学研究科 1983）**【専攻・専門】**文化人類学、博物館人類学**【所属学会】**日本文化人類学会、日本アフリカ学会、民族藝術学会、王立人類学協会（Royal Anthropological Institute イギリス）、アフリカ学会美術協議会（The Arts Council of the African Studies Association アメリカ）

**【主要業績】**

［単著］

吉田憲司

2014 『宗教の始原を求めて――南部アフリカ聖霊教会の人びと』東京：岩波書店。

1999 『文化の「発見」――驚異の部屋からヴァーチャル・ミュージアムまで』東京：岩波書店。

1992 『仮面の森――アフリカ・チェワ社会における仮面結社、憑霊、邪術』東京：講談社。

**【受賞歴】**

2004　第１回木村重信民族藝術学会賞

2000　第22回サントリー学芸賞（芸術・文学部門）

1993　日本アフリカ学会研究奨励賞

**【2014年度の活動報告】**

◎各個研究

**・研究課題**

文化の創造・継承と表象に関する博物館人類学的研究

**・研究の目的、内容**

文化の創造と継承、そしてその表象における博物館・美術館の役割に改めて注目が集まっている。文化の創造と継承の過程をいかに追跡し、いかなる形で自文化と異文化を含む文化の表象に結び付けていくのか。その作業に、博物館・美術館はいかなる形で関与するのか。文化の研究と表象の課題を改めて検証し、問題点を洗い出すとともに、その将来に向けての新たな可能性を考究する。

**・成果**

文化の創造・継承のプロセスをリアルタイムで観察した記録として、南部アフリカにおける新たなキリスト教文化の生成過程についての過去25年の研究成果を集大成し、単著『宗教の始原を求めて――南部アフリカ聖霊教会の人びと』（岩波書店、2014年６月）として刊行した。その書の中で、社会の危機的あるいは萌芽的な状況において、憑依や降霊を伴う宗教運動が興隆する事実を明らかにした。

また、文化遺産の表象の新たな理論と手法に関して、単著『文化の「肖像」――ネットワーク型ミュージオロジーの試み』（2013）等を通じて得られた研究成果を、2014年２月から６月まで東京の国立新美術館で、同年９月から12月まで国立民族学博物館で開催した「イメージの力――国立民族学博物館コレクションにさぐる」展の展示に反映し、実践的なかたちで公開した。同展は、博物館と美術館の垣根をこえた協働のもとで開ける、美術（アート）と器物（アーティファクト）といった区別を無化する、新たな文化表象のありかたを示すものとなった。

◎出版物による業績

［単著］

吉田憲司

2014 『宗教の始原を求めて――南部アフリカ聖霊教会の人びと』東京：岩波書店。

2014 『文化の「発見」――驚異の部屋からヴァーチャル・ミュージアムまで（岩波人文書セレクション）』東京：岩波書店。

［論文］

吉田憲司

2014 「イメージの力――民博から新美、そして民博へ」『季刊民族学』150：4-7。

2014 「民博における仮面の収集」『季刊民族学』150：98-103。

2014 「シンポジウム・イメージの力再考」『民族藝術』31：8-27。

2014 「博物館と美術館の壁を越える――『イメージの力――国立民族学博物館コレクションにさぐる』展から」『NACT Review 国立新美術館研究紀要』1：211-212。

2014 「『イメージの力――国立民族学博物館コレクションにさぐる』展――国立新美術館と民博、そして日本文化人類学会との協働の試み」『文化人類学』79(4)：439-443。

Yoshida, K.

2014 Exhibition "The Power of Images: The National Museum of Ethnology Collection." *MINPAKU Anthropology Newsletter* 39: 13-14.

2015 Museum Exhibition Today, 2013. In N. Sonoda, K. Tamura and Nu Mra Zan (eds.) *Asian Museums and Museology 2013: International Research Meeting on Museology in Myanmar* (Senri Ethnological Reports 125), pp.37-56. Osaka: National Museum of Ethnology［査読有］.

［その他］

吉田憲司

2014 「世界無形文化遺産と民族のアイデンティティ――南部アフリカ、チェワの祭りから」『月刊みんぱく』38(10)：14-15。

2014 吉田憲司・石毛直道・藤井龍彦・松原正毅・和田正平「座談会　民博の礎」『季刊民族学』150：8-17。

◎口頭発表・展示・その他の業績

**・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告**

2014年５月19日 「アートと人類学のあいだ」国際コロキアム『アートと人類学』国立民族学博物館

2014年８月５日 討論「モノとの対話――何が聞こえる？何が見える？」博学連携教員研修ワークショップ2014 in みんぱく『学校と博物館でつくる 国際理解教育――センセイもつくる・あそぶ・たのしむ』国立民族学博物館

2014年９月22日 「イメージの力を再考する」民族藝術学会創立30周年記念大会 公開シンポジウムII『イメージの力・再考』国立民族学博物館

2015年２月７日 「コメント」機関研究成果公開国際フォーラム『紛争地の文化遺産と博物館』国立民族学博物館

2015年２月21日～２月22日 「博物館と開発協力」国際シンポジウム『アジアにおける新しい博物館・博物館学の展望』国立民族学博物館

**・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告**

2014年５月15日 'Re-imagining Ethnological Museums: New Approaches to Developing the Museum as a Place of Multi-lateral Contacts and Knowledge (Commission on Museums and Cultural Heritage).' 日本文化人類学会50周年記念国際研究大会合同開催（IUAES 2014)、幕張メッセ

2014年５月17日 'Memory, Heritage and Disasters: the Cases in Tohoku, Japan and Mozambique.' 日本文化人類学会50周年記念国際研究大会合同開催（IUAES 2014)、幕張メッセ

2014年11月８日～10日 「アート（美術）とアーティファクト（器物)、美術館と博物館のあいだ」シンポジウム『日本における「美術」概念の再構築』福岡アジア美術館

2014年11月30日 「人類学の視点から見る仮面」神戸女子大学古典芸能研究センター研究プロジェクト「日本古典芸能の横断的総合的研究拠点の形成」主催、国際研究集会『見つめる能面・能面を見つめる』シンポジウム「能面を科学する」神戸女子大学ポートアイランドキャンパス

2015年３月16日 「人類学からみた『イメージ人類学』」シンポジウム『ノマドとしてのイメージ――ハンス・ベルティンク「イメージ人類学」再考』立命館大学 衣笠キャンパス

**・みんぱくゼミナール**

2014年９月20日 「イメージの力――みんぱくのコレクションが語るもの」第436回みんぱくゼミナール

**・研究講演**

2014年７月９日～13日　招待講演「文化遺産の返還をめぐる世界の動き2014」国立台湾歴史博物館

2014年８月26日　‘Ongoing Movements in the Museum Exhibition 2014,’ Kanchanaphisek National Museum, Bangkok, Thailand

2015年１月13日～15日　基調講演「文明の転換点における博物館――次代のミュージアム像を求めて」シンポジウム『Museum 2015 Tokyo』明治大学

・展示

2014年２月19日～６月９日　「イメージの力――国立民族学博物館コレクションにさぐる」実行委員長、国立新美術館

2014年５月26日　秋篠宮文仁親王・同妃両殿下ご視察に際する「イメージの力――国立民族学博物館コレクションにさぐる」展についてのご進講、国立新美術館

2014年９月11日～12月９日　特別展「イメージの力――国立民族学博物館コレクションにさぐる」実行委員長、国立民族学博物館

◎調査活動

・国内調査

2014年４月８日～９日―国立新美術館（「イメージの力」展の展示資料の調査）

2014年７月28日～30日―神奈川県立生命の星・地球博物館・東京大学文学部・東京国立博物館（博物館を通じた地域コミュニティの活性化をめぐる研究動向の把握・資料調査）

2014年10月11日～12日―弥勒寺官衛遺跡群・関市洞戸円空記念館（造仏表現における鉈ばつり技法の発祥と展開に関する調査研究）

2014年11月24日～25日―東京藝術大学美術館（特別展「イメージの力」展の展開に関する施設・資料調査）

2015年１月18日～19日―福井県陶芸館・越前陶芸村（海外日本古美術展への越前焼復興・出品事例の資料を調査）

2015年１月29日～30日―石川県九谷焼美術館・石川県立美術館・九谷ミュージアム（鏑木商舗）（海外日本古美術展への九谷焼出品事例の資料を調査）

2015年３月23日～24日―金ヶ崎要害歴史館（被災文化遺産所在調査専門委員会議による調査）

2015年３月28日～30日―唐桑町津波石・南三陸町防災対策庁舎・女川町旧女川交番（東北地方三陸海岸部における被災遺構の処遇と記憶の継承に関わる現地調査）

・海外調査

2014年６月23日～６月29日―ロシア（機関研究「民族学資料の収集・保存・情報化に関する実践的研究――ロシア民族学博物館との国際共同研究」国際ワークショップへ参加）

2014年８月24日～８月27日―タイ（タイの博物館・博物館学に関する共同研究・現地調査）

2015年２月25日～３月11日―オランダ、イギリス（日本古美術展にみる日本観とその変遷に関する基礎的研究、及び文化資源デジタル・アーカイヴズの実態調査）

◎大学院教育

・指導教員

主任指導教員（５人）、特別共同利用研究員（１人）

◎社会活動・館外活動

・非常勤講師

お茶の水女子大学「生活文化学講座」、「文化情報論」（集中講義）、大阪芸術大学「芸術行動論の研究」（集中講義）

◎学会の開催

2014年９月20日～22日　民族藝術学会第30回（30周年記念大会）、国立民族学博物館

## 上羽陽子［うえば　ようこ］――准教授

1974年生。**【学歴】**大阪芸術大学芸術学部工芸学科染織コース卒（1997）、大阪芸術大学大学院芸術文化研究科博士課程前期修了（1999）、大阪芸術大学大学院芸術文化研究科博士課程後期修了（2002）**【職歴】**大阪芸術大学大学院芸術文化研究科研究員（2002）、大阪芸術大学通信教育部工芸学科ファイバーコース非常勤講師（2003）、大阪市立クラフトパーク織物工房非常勤指導員（2003）、京都精華大学非常勤講師（2007）、国立民族学博物館文化資源研究センター助教（2008）、総合研究大学院大学准教授併任（2014）**【学位】**博士（芸術文化学）（大阪芸術大学 2002）、修士（芸術文化学）（大阪芸術大学 1999）**【専攻・専門】**民族芸術学、染織研究、手工芸研究**【所属学会】**民族藝術

学会、意匠学会、日本風俗史学会、日本南アジア学会、生き物文化誌学会

**【主要業績】**

［単著］

上羽陽子

2006 『インド・ラバーリー社会の染織と儀礼――ラクダとともに生きる人びと』京都：昭和堂。

［論文］

上羽陽子

2010 「NGO 商品を作らないという選択――インド西部ラバーリー社会における開発と社会変化」『地域研究』10(2)：204-223。

2008 「インドの手工芸と振興活動――ラバーリー社会を事例に」デザイン史フォーラム編，藤田治彦責任編集『近代工芸運動とデザイン史』pp.292-299，京都：思文閣出版。

**【受賞歴】**

2010　意匠学会作品賞

2007　第 4 回木村重信民族藝術学会賞

**【2014年度の活動報告】**

◎各個研究

**・研究課題**

現代インドの手工芸文化に関する民族芸術学的研究

**・研究の目的、内容**

現代インドにおいて、ものづくりの作り手の創意工夫や、手工芸技術の継承法について実践的にアプローチし、製作者が伝統的形態の継承と現代的な要素の採用をいかに選択しているかを明らかにすることを目的とする。同時に、文化資源である現地の人びとのものづくり関する知識に関して、展示やワークショップを通じてどのように活用することができるか実践的研究を行う。なお、本研究は、科学研究費補助金（基盤研究(C)「現代インドにおける染織技術の戦略的継承法に関する民族芸術学的研究」、2014～2017年度）および（基盤研究(A)「アジア地域における布工芸品の生産・流通・消費をめぐる文化人類学的研究（代表：中谷文美)」、2014～2017年度）の課題として実施する予定である。

**・成果**

本年度は、2014～2017年度に研究代表者として実施する科学研究費プロジェクト（基盤研究(C)）「現代インドにおける染織技術の戦略的継承法に関する民族芸術学的研究」の研究活動の一部として、インド西部の女神儀礼用染色布の生産現場およびデリーを中心とした大都市の手工芸関連マーケットにおいて約 1 か月間の現地調査を実施した。また、2014～2017年度に研究分担者として実施する科学研究費プロジェクト（基盤研究(A)）「アジア地域における布工芸品の生産・流通・消費をめぐる文化人類学的研究（代表：中谷文美)」の研究活動の一部として、インド東部およびブータンでの織物製作、ラック染色の現状、野蚕飼養についての基礎的データを収集した。

現在、南アジアで急激に進む経済成長やグローバル化は、このような染織生産地へも多くの影響を与えている。そういったなかで、染織の現場において生産者がどのように素材や手工芸技術を継承するかとともに、日々開発が進む化学繊維や化学染料といった新たな素材や技術をどのように取り入れる、あるいは排除しながら産地を維持しているかについても参与観察を行った。

そして、本研究の成果としてインドの染織技術に関するフィールドワークに焦点をあてた単著（『インド染織の現場――つくり手たちに学ぶ』（フィールドワーク選書12）臨川書店）を発表した。また、これまでの研究・収集の成果として、本館南アジア展示新構築「染織の伝統と現代」のセクションを公開した。展示では、商品としての職人による手仕事と、自家用としての村落の女性たちの手仕事が比較できる工夫を試み、同時に、現代の都市におけるファションがいかに伝統的染織技術と関連しているかも提示した。さらに、それらの染織技術が目で見て理解できるように染織技術解説パネルを作成し、物質文化の展示における手法開発を実践した。

◎出版物による業績

［単著］

上羽陽子

2015 『インド染織の現場――つくり手たちに学ぶ』（フィールドワーク選書）京都：臨川書店。

［事典項目］

上羽陽子

2014 「衣と流行」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.438-439, 東京：丸善出版。

［その他］

上羽陽子

2014 「実りと豊かさに覆われる（世界の民族衣装　手仕事からうまれる花々 file.4）」『フラワーデザインライフ』555：8。

2014 「ヨーロッパからの花束（世界の民族衣装　手仕事からうまれる花々 file.5）」『フラワーデザインライフ』556：8。

2014 「色とたわむれる（世界の民族衣装　手仕事からうまれる花々 file.6）」『フラワーデザインライフ』557：8。

2014 「マヤが培う彩り（世界の民族衣装　手仕事からうまれる花々 file.7）」『フラワーデザインライフ』558：8。

2014 「バルカンに舞う草花（世界の民族衣装　手仕事からうまれる花々 file.8）」『フラワーデザインライフ』560：8。

2014 「特集・座談会　コラボの力　新美術館 × みんぱく――座談会「イメージの力」展ができるまで」『月刊みんぱく』38(9)：2-9。

2014 「舞い踊る蝶と花（世界の民族衣装　手仕事からうまれる花々 file.9）」『フラワーデザインライフ』561：8。

2014 「大平原を飾る花（世界の民族衣装　手仕事からうまれる花々 file.10）」『フラワーデザインライフ』562：8。

2014 「花嫁に映える伝統ファッション（世界の民族衣装　手仕事からうまれる花々 file.11）」『フラワーデザインライフ』563：8。

2014 「旅・いろいろ地球人　父親④　わが子を婚約させるために」『毎日新聞』12月10日夕刊。

2014 「新たな『手芸』の構築をめざして」『民博通信』147：10-11。

2014 「ゴワゴワを活かす――ネパールの羊毛加工から」『月刊みんぱく』39(1)：4-5。

2014 「パレスチナに咲く花（世界の民族衣装　手仕事からうまれる花々 file.12）」『フラワーデザインライフ』564：10。

2015 「幼児の成長を願う（世界の民族衣装　手仕事からうまれる花々 file.13）」『フラワーデザインライフ』565：10。

2015 「野蚕の宝庫 インド」『月刊みんぱく』39(3)：4-5。

2015 「ステッチに包み込まれる（世界の民族衣装　手仕事から生まれる花々 file.14）」『フラワーデザインライフ』566：10。

◎口頭発表・展示・その他の業績

**・共同研究会**

2014年４月12日　「インド、ラバーリーの刺繍布の『消費』をめぐる表象」『表象のポリティクス――グローバル世界における先住民・少数者を焦点に』

**・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告**

2014年12月13日　「家畜糞の染色利用について――インド西部カッチ県の事例から」砂漠化プロジェクト・日本沙漠学会沙漠誌分科会主催『日本沙漠学会沙漠誌分科会研究会／南アジアの生業（なりわい）研究会第４回研究会「世界の半乾燥地における家畜糞利用」』総合地球環境学研究所

2015年１月15日　‘Embodied Knowledge in Rabari Embroidery Patterns.’ “Knowledge Transfer Across Borders: Integrative Approaches, A German-Japanese Colloquium,” University of Göttingen, German

2015年３月30日　「次年度のインド野蚕調査にむけて」科学研究費補助金（基盤研究（A））『アジア地域における布工芸品の生産・流通・消費をめぐる文化人類学的研究』（代表：中谷文美）2014年度第３

回研究会、岡山大学津島キャンパス

・研究講演

2014年５月25日　「インド染織の伝統と現代――ラバーリー女性の手仕事から」大阪日本民芸館主催、大阪日本民芸館春季特別展『インドの染織と絵――Folkcrafts of India』（2014年３月８月～７月21日）関連みんげいゼミ、国立民族学博物館第３セミナー室

2014年６月３日、2014年６月10日、2014年６月24日　「模写実践と異文化理解――インド西部の刺繍布を読みとる」（３回連続講座）川島テキスタイルスクール

2014年６月12日　「手織り絨毯の織技術について」株式会社絨毯ギャラリー主催『シルクロード絨毯塾』クロス・ウェーブ梅田

2014年６月27日　「インド、ラバーリーの手工芸――牧畜文化と男性の手仕事から」NPO法人大阪府高齢者大学校　世界の文化に親しむ科、大阪市教育会館

2014年７月４日　「インド、ラバーリーの手工芸――幼児婚と女性の手仕事から」NPO法人大阪府高齢者大学校　世界の文化に親しむ科、大阪市教育会館

2014年７月５日　「インドのキタープチャルカで糸紡ぎ」ワークショップ2014、川島テキスタイルスクール

2014年７月21日　夏休みこどもワークショップ「貝からわかる世界の暮らし」ファシリテーター、国立民族学博物館本館企画展示場

2014年８月30日、８月31日　「インド伝統的刺繍技術入門」京都造形芸術大学×東北芸術工科大学『公開講座25選』大阪藝術学舎

2014年９月23日　「『民族衣装』とファッション」神戸ファッション美術館主催、特別展示『世界のファッション――100年前の写真と衣装は語る』展関連イベント「世界と日本のファッションの現在と未来を考える」神戸ファッション美術館４階セミナー室

2014年９月27日　「インド刺繍からみる女性の知恵と工夫」大阪府男女共同参画推進財団主催、第２回『はなみずき会』大阪府男女共同参画・青少年センター（ドーンセンター視聴覚スタジオ）

2014年11月26日　「色と光が放つイメージ」「みんぱく×ナレッジキャピタル――イメージの力をさぐる」国立民族学博物館主催、グランフロント大阪ナレッジキャピタル CAFE Lab.

2014年11月22日～11月23日　「体感!! イメージの力」特別展『イメージの力――国立民族学博物館コレクションにさぐる』展 関連ワークショップ講師、国立民族学博物館特別展示館

2015年３月22日　「現代インド『民族衣装』の魅力――ラバーリーの衣文化から」NHK文化センター梅田教室主催、梅田阪急ビルオフィスタワー17階

・広報・社会連携活動

2014年12月７日　「邪視をはねかえす力」第364回みんぱくウィークエンド・サロン

◎調査活動

・海外調査

2014年８月９日～８月23日―インド、ブータン（アジア地域における布工芸品の生産・流通・消費をめぐる文化人類学的研究に関する現地調査）

2014年10月４日～10月23日―インド（現代インドにおける染織技術の戦略的継承法に関する民族芸術学的研究調査）

2015年１月13日～１月18日―ドイツ（日独学術コロキウムに参加）

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

民族藝術学会編集（学会誌）委員

・非常勤講師

京都精華大学「文様史１」、「クラフト１」

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

科学研究費補助金（基盤研究（C））「現代インドにおける染織技術の戦略的継承法に関する民族芸術学的研究」研究代表者、科学研究費補助金（基盤研究（A））「アジア地域における布工芸品の生産・流通・消費をめぐる文化人類学的研究」（研究代表者：中谷文美）研究分担者

## 林 勲男［はやし　いさお］――――――

◎出版物による業績

［論文］

林 勲男

2014 「無形文化遺産に関する復興支援」園田直子・小長谷有紀・I. Lkhagvasuren 共編『アジアにおける博物館・博物館学の「いま」――モンゴル、ミュージアム・クリルタイ』pp.127-135, ウランバートル：モンゴル国立文化遺産センター。

2015 「生者の記憶、死者との対話」木田暢子編『災害に学ぶ――文化資源の保存と再生』pp.39-65, 東京：勉誠出版。

◎口頭発表・展示・その他の業績

**・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告**

2015年２月22日 'Museums as Hubs for Disaster Recovery and Rebuilding Communities,' International Symposium "New Horizons for Asian Museums and Museology," National Museum of Ethnology

**・共同研究会**

2015年１月25日 「防災研究と在来知」『災害復興における在来知――無形文化の再生と記憶の継承』

**・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告**

2014年５月17日 'Disasters and Memories: Traces, Recollections and Stories,' International Union of Anthropological and Ethnological Sciences, Makuhari Messe, Chiba, Japan

**・研究講演**

2014年10月12日 「災害の記憶・記録をいかに未来に伝えるか――世界の被災地での試み」長岡市立図書館長岡市文書資料室、川口公民館

2015年３月17日 「TeLL-Net の10年の活動紹介」TeLL-Net フォーラム実行委員会、TKP ガーデンシティ仙台勾当台

**・広報・社会連携活動**

2014年10月19日 「死者を送る――ニューギニアの彫刻と儀礼」第359回みんぱくウィークエンド・サロン

◎調査活動

**・国内調査**

2014年６月21日～６月24日―岩手県大船渡市・遠野市・釜石市・宮古市（科学研究費補助金（基盤研究(S)）「減災の決め手となる行動防災学の構築」（研究代表者：林 春男）に関わる現地調査）

2014年８月６日～８月９日―新潟県長岡市・新潟市（災害復興・地域づくり活動の記録化に関する現地調査）

2014年８月13日～８月17日―岩手県遠野市・大船渡市（東日本大震災の記録・記憶に関する現地調査）

2014年12月８日―宮城県仙台市（科学研究費補助金（基盤研究(S)）「減災の決め手となる行動防災学の構築」（研究代表者：林 春男）に関わる調査）

2014年12月12日～12月13日―宮崎県宮崎市（外所地震（1662年）による津波災害の記憶の継承と防災に関する調査）

2014年12月20日～12月21日―新潟県長岡市（科学研究費補助金（基盤研究(S)）「減災の決め手となる行動防災学の構築」（研究代表者：林 春男）に関わる中越地震災害復興調査

2015年１月９日～１月13日―宮城県名取市・南三陸町・仙台市・山形県山形市（科学研究費補助金（基盤研究(S)）「減災の決め手となる行動防災学の構築」（研究代表者：林 春男）に関わる調査）

**・海外調査**

2014年８月24日～８月28日―タイ（タイの博物館・博物館学に関する共同研究・現地調査）

2014年11月９日～11月17日―ニュージーランド（ジョージ・ブラウン・コレクションの総合的データベース構築に関する協議）

◎社会活動・館外活動等

**・他の機関から委嘱された委員など**

鹿児島大学博士論文審査委員

◎学会の開催

2014年11月24日 日本文化人類学会課題研究懇談会「災害の人類学」第５セミナー室

## 日髙真吾［ひだか　しんご］――――――

Ethnological Reports 125), pp.69–78. Osaka: National Museum of Ethnology［査読有］.

2015 Rescue and Emergency Treatment for Tangible Cultural Properties. In N. Sonoda, K. Hirai and J. Incherdchai（eds.）*Asian Museum and Museology 2014: International Workshop on Asian Museums and Museology in Thailand*（Senri Ethnological Reports 129), pp.57–62. Osaka: National Museum of Ethnology［査読有］.

2015「企画展『歴史と文化を救う』を振り返る」『展示学』52：36–39。

2015 日髙真吾責任編集「公開シンポジウム『災害と展示』」『展示学』52：32–54。

2015「生活の記憶を取り戻す――文化財レスキューの現場から」木部暢子編『災害に学ぶ――文化資源の保全と再生』pp.175–199，東京：勉誠出版。

［その他］

日髙真吾

2014「安藤緑山作『染象牙果菜置物』『染象牙貝尽し置物』の蛍光Ｘ線分析」広瀬麻美・小林祐子・藤田麻希・朝山衣恵編集『「超絶技巧！明治工芸の粋」図録』pp.150–153，東京：浅野研究所。

2014「文化という視点からの支援活動」『季刊民族学』148：10–11。

2014「文化財レスキュー活動の現在――保存科学の現場から」『季刊民族学』148：13–17。

2014「時代玩具コレクションについて」『月刊みんぱく」38(12)：2–3。

2015「箱根駅伝のユニフォーム」『月刊みんぱく」39(1)：22–23。

2015「駕籠について」『第137回開場30周年記念文楽公演　国立文楽劇場』pp.24–25，大阪：国立文楽劇場。

古水 力・笹山政幸・橋本裕之・日髙真吾

2014「支援をどうつないでいくか――沿岸部民俗芸能をとりまく状況から」『季刊民族学』148：32–39。

◎映像音響メディアによる業績

**・国立民族学博物館映像音響資料の制作・監修**

［ビデオテーク］

日髙真吾制作監修

2015『金属加工技術彫金と鍛金１――金槌の種類』日本語，８分。

2015『金属加工技術彫金と鍛金２――器をつくる』日本語，13分。

2015『金属加工技術彫金と鍛金３――指輪をつくる』日本語，15分。

2015『金属加工技術彫金と鍛金４――タガネをつくる』日本語，12分。

2015『金属加工技術彫金と鍛金５――ペンダント』日本語，８分。

2015『金属加工技術彫金と鍛金６――タガネの種類』日本語，19分。

2015『金属加工技術彫金と鍛金７――糸鋸』日本語，９分。

2015『金属加工技術彫金と鍛金８――キサゲ』日本語，６分。

2015『金属加工技術彫金と鍛金９――地金を丸くする』日本語，５分。

**・電子ガイドの制作・監修**

［日本の文化］

日髙真吾監修

2015『三線をつくる』日本語，英語，韓国語，中国語。

2015『エイサー』日本語，英語，韓国語，中国語。

◎口頭発表・展示・その他の業績

**・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告**

2014年12月14日「民博の資料管理技術をエジプトで活用する」一般社団法人文化財保存修復学会主催・国立民族学博物館共催、公開シンポジウム『文化財を伝える――日本の保存技術が古代エジプト文明の秘宝を救う』国立民族学博物館

2015年３月29日「古代文明の遺産を守る――大エジプト博物館保存修復センターにおける人材育成プロジェクト」金沢大学主催・国立民族学博物館共催、文化資源学シンポジウム『文化資源の保存・継承に向けた国際協力』石川県政記念しいのき迎賓館

**・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告**

2014年５月12日「文化財レスキューとは何か？レスキュー活動を通じて考えたこと」東海大学公開連続講座「モノを守り・伝えるコトとは？文化財の保存と活用をめぐって」東海大学

2014年５月20日　‘Exhibition Techniques 1: Text Information including Explanation.’ “The 6th Domestic Workshop on Conservation of Archaeological Bronze Objects at the History Museum of Armenia in May 2014,” History Museum of Armenia

2014年５月20日　‘Renovation of Permanent Exhibition in National Museum of Ethnology.’ “The 6th Domestic Workshop on Conservation of Archaeological Bronze Objects at the History Museum of Armenia in May 2014,” History Museum of Armenia

2014年５月21日　‘Management of exhibition hall in National Museum of Ethnology.’ “The 6th Domestic Workshop on Conservation of Archaeological Bronze Objects at the History Museum of Armenia in May 2014,” History Museum of Armenia

2014年５月21日　‘Exhibition Techniques 2: Management of Lighting Temperature and Humidity.’ “The 6th Domestic Workshop on Conservation of Archaeological Bronze Objects at the History Museum of Armenia in May 2014,” History Museum of Armenia

2014年６月７日　「被災した漆器製品の応急処置事例」（日髙真吾・園田直子・和髙智美・北村 繁・小谷竜介・川又隆央）文化財保存修復学会第36回大会、明治大学

2014年６月７日　「博物館害虫・深い害虫の発生源に関する一考察」（園田直子・日髙真吾・和髙智美）文化財保存修復学会第36回大会、明治大学

2014年６月７日～８日　「阪神・淡路大震災における文化財保存修復学会の活動」（日髙真吾・内田俊秀）文化財保存修復学会第36回大会、明治大学

2014年６月７日～８日　「東日本大震災における文化財保存修復学会の活動」（日髙真吾・内田俊秀）文化財保存修復学会第36回大会、明治大学

2014年７月５日～６日　「安藤緑山の牙彫技術に関する一考察」（日髙真吾・園田直子・和髙智美・河村友佳子・橋本沙知・小林祐子）日本文化財科学学会第31回大会、奈良教育大学

2014年８月12日　「東日本大震災の文化財レスキューについて――民俗文化財の事例」『「みんなでまもるミュージアム」事業　第２回全体会議』九州国立博物館

2014年９月４日　「展示と災害――博物館における被災文化財の可能性」『展示論講座』日本展示学会、京都国立博物館

2014年９月25日　‘Rescue and Emergency Treatment for Tangible Cultural Properties.’ “International Research Meeting on Museology Thailand,” Kanchanaphisek National Museum, Thailand

2014年10月27日　‘Museum Exhibition: Renovation of Permanent Exhibition in the National Museum of Ethnology.’ “2014, 8th Training Workshop for the Protection of Cultural Heritage in Central Asia: Training Workshop on Exhibition and Publication of the Excavation Report,” The Institute of History and Cultural Heritage of the National Academy of Sciences of the Kyrgys Republic

2014年10月28日　‘Management of Lighting/Temperature and Humidity in a Museum’ “2014, 8th Training Workshop for the Protection of Cultural Heritage in Central Asia-Training Workshop on Exhibition and Publication of the Excavation Report,” The Institute of History and Cultural Heritage of the National Academy of Sciences of the Kyrgys Republic

2014年10月28日　‘Management of Exhibition Hall: Case Study of the National Museum of Ethnology.’ “2014, 8th Training Workshop for the Protection of Cultural Heritage in Central Asia: Training Workshop on Exhibition and Publication of the Excavation Report,” The Institute of History and Cultural Heritage of the National Academy of Sciences of the Kyrgys Republic

2014年11月20日　「気仙沼市仮収蔵施設の保存環境」平成26年度宮城県被災文化財等保全連絡会議研修会、東北歴史博物館

2014年12月４日　「文化財保存修復学会における今後の備え」平成26年度文化庁委託事業「文化財（美術工芸品）等緊急保全活動・現況調査事業」研究会『これからの文化財防災――災害への備え」東京文化財研究所

2015年１月16日　「文化財の保存科学研究に見る人文科学と自然科学の連携の可能性」『第10回日・韓人文政策フォーラム――人文科学に関する新しい視点』韓国メルキュールホテル

・研究講演

2015年２月８日　「文化財レスキュー事業後の民博の東北支援」『心を繋ぐ衣服と伝統文化』神戸ファッション美術館

2015年３月４日　「被災文化財等のレスキュー活動」『文化財の防災に関する研修』奈良文化財研究所

2015年３月８日　「被災民俗文化財のレスキュー活動」兵庫県立歴史博物館

◎調査活動

・海外調査

2014年５月17日～５月30日―アルメニア共和国（アルメニア歴史博物館における人材育成ワークショップの講義・実習に参加及び保存修復に関連する技術・材料に関する情報収集）

2014年８月24日～８月28日―タイ（タイの博物館・博物館学に関する共同研究・現地調査）

2014年10月22日～10月30日―キルギス共和国（キルギス共和国国立科学アカデミー歴史文化遺産研究所における人材育成ワークショップの講義および実習に参加、保存修復に関する情報収集）

2015年１月15日～１月17日―大韓民国（日韓における人文学の政策に関する意見交換と情報収集）

◎社会活動・館外活動

・他機関から委嘱された委員など

文化財保存修復学会理事、日本民具学会理事、文化財虫害研究所総合的防除対策検討委員会委員

## 福岡正太［ふくおか　しょうた］――――――

具体的には、1) 鹿児島県硫黄島および徳之島の芸能を例として、映像による芸能の民族誌的記録の作成および活用のあり方を探る。特に、映像を音楽芸能の関係者と記録者との相互関係を築くメディアとして位置づけ、映像による民族誌の作成が音楽芸能の上演や伝承に与える影響について研究する。2) 東南アジアの音楽芸能、特にゴングにかかわる文化に焦点をあて、映像を用いて地域間の比較研究を進め、相互関係を明らかにする。また、1)、2) を通じて、映像音響資料のアーカイブ化と公開における諸課題についても検討したい。なお、1) は主に人間文化研究機構連携研究「人間文化資源」の総合的研究「映像による芸能の民族誌の人間文化資源的活用」班の研究活動として進め、2) は、科学研究費補助金（基盤研究 (B)）「映像を用いた東南アジアのゴング文化の音楽人類学的研究」の研究活動として進める。

・成果

1）硫黄島の芸能（八朔太鼓踊り）について、さらに調査撮影を進め、これまでの映像素材を整理した。また、人間文化研究機構連携研究メンバーである、藤岡幹嗣氏が編集した映像および過去の記録映像を現地で上映し、意見交換を行った。その結果、現在からの隔たりに応じて、毎年の踊り手の構成の変化、映った人の成長や島の社会構成の変化、生活文化の歴史的変化など、それぞれの映像に異なる関心が抱かれる傾向が明らかになった。映像記録の意味は、視覚的、聴覚的に記録されたものにより客観的に決まるのではなく、見る側の視点によって変化するということができる。徳之島の芸能については、すでに作成したマルチメディア番組「徳之島の唄と踊りと祭り」に新たな撮影素材を加え、天城町ユイの館における公開を開始した。また、同じ素材を基に、「人類の文化資源に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築」プロジェクトにより、「徳之島の民俗芸能に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築」を進めた。このシステムは、コメント機能により、ユーザーが新たな情報を加えられるところに特徴があり、このシステムにより、それぞれのレパートリーに関する経験や知識を蓄積することを目指している。基本的なデザインと画面遷移を決定し、現地において、デモンストレーションに基づき、次年度の現地公開に向けた協議を行った。なお、これらの成果について人文科学とコンピュータ研究会（情報処理学会）および日本民俗音楽学会等で発表を行った。

2）東南アジアのゴング文化について、インドネシアのジャワ島にて、鉄のゴングの製作と流通について調査撮影を行った。この20～30年の間に、学校へのガムランの導入などにより、鉄のガムランの受容が増え、新たな製作拠点の形成や流通ルートの発展があったことが明らかになった。鉄製のゴングのこぶ状の部分に真鍮製のこぶをさらにかぶせて取り付けるなど、製作技法にも工夫が加えられており、その様子を映像で記録した。また、2011年に開催した国際シンポジウムおよび2013年に行った東洋音楽学会大会のシンポジウムの成果に基づく英文報告書を刊行した。

◎出版物による業績

［編著書］

Fukuoka, S.

2014 *International Symposium Audiovisual Ethnography of Gongs in Southeast Asia: Proceedings.* Inter-Institutional Research Project “A Study on Visual Ethnography of Performing Arts as Human Cultural Resources.” Tokyo: National Institutes for the Humanities.

［論文］

福岡正太

2014 「音楽芸能の伝承において映像記録が果たしうる役割――徳之島の芸能を例に」『研究報告人文科学とコンピュータ』2014-CH-104(10)：1-3。

2014 「音盤に聴く東アジアの音楽交流――日本コロムビア外地録音資料を例に」国際常民文化研究機構編『渋沢敬三の資料学――日常史の構築』（国際シンポジウム報告書5）pp.33-39, 横浜：国際常民文化研究機構。

［その他］

福岡正太

2014 「みんぱく世界の旅　東南アジアの芸能①　聖なる楽器ゴン・スカティ――インドネシア」『毎日小学生新聞』 6 月14日。

2014 「みんぱく世界の旅　東南アジアの芸能②　人形芝居ワヤン・ゴレック――インドネシア」『毎日小学生新聞』 6 月21日。

2014 「みんぱく世界の旅　東南アジアの芸能③　影絵芝居スバエク・トム――カンボジア」『毎日小学生新聞』 6 月28日。

2014 「みんぱく世界の旅　東南アジアの芸能④　仮面のおどりトペン・チルボン」『毎日小学生新聞』 7月5日。

2014 「芸能の映像記録」『季刊民族学』38(4)：150。

2015 「無形文化遺産と音楽研究（文化遺産おもてうら）」『月刊みんぱく』39(2)：14-15。

2015 「国際伝統音楽学会『音楽とマイノリティ』研究会 第8回シンポジウム」日本音楽学会『西日本支部通信』8：15-16。

◎口頭発表・展示・その他の業績

**・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告**

2014年10月18日 「音楽芸能の伝承において映像記録が果たしうる役割――徳之島の芸能を例に」人文科学とコンピュータ研究会（情報処理学会）発表会、関西大学千里山キャンパス第三学舎D501教室

2014年12月13日 「映像記録を民俗芸能の営みの中に位置づける」シンポジウム『民俗音楽の新たな胎動をさぐる』日本民俗音楽学会第28回大会、東京音楽大学A館200教室

2015年2月8日 「フォーラム型情報ミュージアム・徳之島について」「徳之島の民俗芸能に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築」研究会、国立民族学博物館特別研究室

**・研究講演**

2014年5月6日 「探求！現役フィールドワーク研究者に聞く記録と意味」『梅棹忠夫と21世紀の「知的生産の技術」シンポジウム』グランフロント大阪ナレッジキャピタル北館タワーC8階

2014年5月14日 「霊と交流する楽器ゴングの今」産経新聞社主催、みんぱく創設40周年記念 カレッジシアター「地球探究紀行」あべのハルカス近鉄本店 ウイング館9階SPACE 9

2014年7月16日 「影が紡ぎ出す物語――カンボジア無形文化遺産の伝承」産経新聞社主催、みんぱく創設40周年記念 カレッジシアター「地球探究紀行」あべのハルカス近鉄本店 ウイング館9階SPACE 9

2014年8月6日 「島のまわりに人がつどう――鹿児島県硫黄島」産経新聞社主催、みんぱく創設40周年記念 カレッジシアター「地球探究紀行」あべのハルカス近鉄本店 ウイング館9階SPACE 9

2014年9月5日 「世界のリズムの多様性――足し算のリズム」NPO法人大阪府高齢者大学校　世界の文化に親しむ科、大阪市教育会館

2014年9月12日 「世界のリズムの多様性――おしりで合わせるリズム」NPO法人大阪府高齢者大学校　世界の文化に親しむ科、大阪市教育会館

2014年11月4日 「コメント」国立民族学博物館・日経新聞社主催、みんぱく公開講演会『無形文化遺産――選ぶ視点、選ばれる現実』日経ホール

**・研究公演**

2014年7月20日 みんぱく研究公演「アリラン峠を越えていく――在日コリアン音楽の今」司会、国立民族学博物館講堂

**・展示**

東南アジア展示

**・広報・社会連携活動**

2014年6月22日 音楽の祭日、国立民族学博物館

◎調査活動

**・国内調査**

2014年8月25日～8月27日―三島村硫黄島（連携研究「映像による芸能の民族誌の人間文化資源的活用」の一環として「八朔太鼓踊り」の調査撮影）

2014年9月27日～9月29日―徳之島（連携研究「映像による芸能の民族誌の人間文化資源的活用」の一環として映像番組の上映会の開催および伝統芸能の上演の撮影等）

2015年1月7日～1月8日―徳之島（フォーラム型情報ミュージアムの構築における今後の連携協力についての打ち合わせ、および芸能の調査撮影についてロケーションハンティング）

2015年1月17日～1月18日―那覇市（連携研究「映像による芸能の民族誌の人間文化資源的活用」の一環として、「大阪のエイサー――思いの交わる場」（国立民族学博物館製作）の上映会および意見交換会）

2015年2月14日～2月16日―徳之島（フォーラム型情報ミュージアムの構築にかかわる芸能の調査撮影および今後の連携協力についての打ち合わせ）

2015年3月5日～3月7日―三島村硫黄島（連携研究「映像による芸能の民族誌の人間文化資源的活用」の一

環として「八朔太鼓踊り」映像の上映会を開催）

・**海外調査**

2014年８月８日～８月17日―インドネシア（東南アジアのゴング文化についての調査及び資料収集）

2014年９月14日～９月21日―インドネシア（東南アジアのゴング文化についての調査及び資料収集）

◎上記以外の研究活動

・**人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など**

フォーラム型情報ミュージアムプロジェクト「徳之島の民俗芸能に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築」代表者、人間文研究機構連携研究「人間文化資源」の総合的研究「映像による芸能の民族誌の人間文化資源的活用」代表者、科学研究費補助金（基盤研究（B））「映像を用いた東南アジアのゴング文化の音楽人類学的研究」代表者

◎社会活動・館外活動

・**非常勤講師**

大谷大学「民族誌講義」「社会学研究」、同志社大学「芸術学特論」、京都文教大学「音楽人類学」

## 南 真木人［みなみ　まきと］――――――

盤研究（B））「体制転換期ネパールにおける『包摂』を巡る社会動態の展開に関する比較民族誌的研究」（代表者：名和克郎）により実施し、関連するテーマで科研費の応募をすすめる。

・成果

科学研究費補助金（基盤研究（B））「体制転換期ネパールにおける『包摂』を巡る社会動態の展開に関する比較民族誌的研究」（代表者：名和克郎）により、ネパールにおいて現地調査を行い、随時国内での聞き取り調査を実施した。調理師には独自のネットワークがあり縁故採用が多い一方、各種専修学校の留学生はネパールの教育コンサルタントを介して同郷の友人が先行者を頼って同じ学校に留学するケースが多いことが明らかになった。留学は開かれた移住システムといえるが、ヴィザの発給率が高い出入国管理局がある地域の特定の学校に集中することも確認できた。成果の一部は、国立民族学博物館編『世界民族百科事典』の「出稼ぎ労働者コミュニティ」、「移民送り出しシステムとネットワーク」、「トランスナショナル社会空間」、および「移民大国ネパール」三尾 稔・杉本良男編『現代インド6 環流する文化と宗教』pp.122-126、東京大学出版会（2015年）で発表した。

◎出版物による業績

［共編］

南 真木人・石井 溥編

2015 『現代ネパールの政治と社会――民主化とマオイストの影響の拡大』（世界人権問題叢書92）東京：明石書店［査読有，共同研究成果］。

［論文］

南 真木人

2015 「民族運動とマオイスト――マガルの事例から」南 真木人・石井 溥編『現代ネパールの政治と社会――民主化とマオイストの影響の拡大』（世界人権問題叢書92）pp.339-381，東京：明石書店［査読有，共同研究成果］。

［事典項目］

南 真木人

2014 「トランスナショナル社会空間」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.260-261，東京：丸善出版。

2014 「移民送り出しシステムとネットワーク」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.334-335，東京：丸善出版。

2014 「出稼ぎ労働者コミュニティ」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.550-551，東京：丸善出版。

［その他］

南 真木人

2014 「旅・いろいろ地球人　共に生きる⑦　鶏ともつながる」『毎日新聞』5月22日夕刊。

2014 「筑波時代の掛谷さん」『生態人類学会ニュースレター』No.20 別冊：31-3。

2014 「苦学して夢をかなえるネパール人」『月刊みんぱく』38(8)：5。

2014 「みんぱく世界の旅・ブータン①　幸せの国 ブータンの『ヤク』」『毎日小学生新聞』10月18日。

2014 「みんぱく世界の旅・ブータン②　天日干しの野菜やお肉」『毎日小学生新聞』10月25日。

2014 「ネワール寺院用方杖」『国立民族学博物館2015年オリジナルカレンダー』千里文化財団。

2014 「みんぱく世界の旅・ネパール①　ネパール　ヒンドゥー教のカースト」『毎日小学生新聞』11月1日。

2014 「みんぱく世界の旅・ネパール②　ネパールの村照らすLED灯」『毎日小学生新聞』11月8日。

2015 「バーラ――ネパール、マガール人の豆コロッケ」『月刊みんぱく』39(1)：18-19。

2015 「プルキシ仮面」『図画工作教師用指導書アート・カード解説1・2上／1・2下』p.35，東京：日本文教出版。

◎映像音響メディアによる業績

・国立民族学博物館映像音響資料の制作・監修

［ビデオテーク］

南 真木人・寺田吉孝制作監修，井ノ本清和・安藤葉月制作，国立民族学博物館製作

2015 「ネパール 都市の結婚式」日本語，28分15秒。

2015 「ネパール 山村の結婚式」日本語，28分05秒。

2015 「ネパールの金細工」日本語，19分08秒。

南 真木人・寺田吉孝・藤井知昭（1982年取材）制作監修、井ノ本清和・安藤葉月制作、国立民族学博物館製作 2015 「カトマンドゥ盆地の30年」日本語，25分30秒。

◎口頭発表・展示・その他の業績

**・機構の連携研究会での報告**

2015年１月25日 「『移民の文化』の形成過程――ネパール人移住労働者から」『現代インド地域研究国立民族学博物館拠点（MINDAS）第４回合同研究会』国立民族学博物館

**・共同研究**

2015年２月１日 「包摂の制度にアクセスする主体と力――移民の送り出しシステム」『ネパールにおける「包摂」をめぐる言説と社会動態に関する比較民族誌的研究』

**・展示**

南アジア展示新構築、巡回展「マンダラ展――チベット・ネパールの仏たち」（高知県立歴史民俗資料館）

**・広報・社会連携活動**

2014年５月18日 「在留ネパール人の現在」第345回みんぱくウィークエンド・サロン

2014年12月４日 「仮面『バイラヴ』ほか」『特別展イメージの力――国立民族学博物館コレクションにさぐる』ギャラリートーク、国立民族学博物館特別展示棟

2014年12月４日 「ネパールの移住労働の現状――増えてきた女性労働移民」NPO法人国際交流の会とよなか・とよなか男女協働推進センターすてっぷ共催、「すてっぷ」視聴覚室

2015年２月７日 「都市の婚礼、山村の婚礼――ネパール社会の現在（いま）を結婚式に探る」第439回国立民族学博物館友の会講演会、国立民族学博物館

2015年２月25日 「ネパールの今と昔――1982年の映像から」産経新聞社主催、みんぱく創設40周年記念 カレッジシアター「地球探究紀行」あべのハルカス近鉄本店 ウイング館９階SPACE９

◎調査活動

**・海外調査**

2014年11月16日～11月28日―ネパール（民族名自治州をめぐるマガール人の対応に関する調査研究）

◎大学院教育

**・指導教員**

副指導教員（２人）

**・論文審査委員**

博士論文審査委員（１件）

◎上記以外の研究活動

**・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など**

人間文化研究機構地域研究推進事業「現代インド地域研究」国立民族学博物館拠点（代表者：三尾 稔）研究分担者、科学研究費補助金（基盤研究（B））「体制転換期ネパールにおける『包摂』を巡る社会動態の展開に関する比較民族誌的研究」（研究代表者：名和克郎）研究分担者

## 山本泰則［やまもと　やすのり］―――― 准教授

**【学歴】**大阪大学基礎工学部生物工学科卒（1978）、大阪大学大学院基礎工学研究科博士前期課程修了（1980）、大阪大学大学院基礎工学研究科博士後期課程退学（1983）**【職歴】**国立民族学博物館第５研究部助手（1983）、国立民族学博物館博物館民族学研究部助手（1998）、国立民族学博物館博物館民族学研究部助教授（1998）、国立民族学博物館文化資源研究センター助教授（2004）**【学位】**工学修士（大阪大学大学院基礎工学研究科 1980）**【専攻・専門】**文化資源情報学**【所属学会】**情報処理学会、電子情報通信学会

**【主要業績】**

［論文］

山本泰則

2011 「国立国会図書館PORTAと人間文化研究機構統合検索システムの連携について」『人間文化情報資源共有化研究会報告集』2：53-68。

Yamamoto, Y., F. Adachi and K. Hachimura

2013 Common Metadata to Search for Non-digital Cultural Resources in Heterogeneous Databases. *Proceedings of the International Conference on Culture and Computing 2013*, pp.225-224, IEEE Computer Society（CD-ROM）.

宇陀則彦・山田太造・村田良二・山本泰則

2012 「転写資料記述のための概念モデルの特徴と課題」『国立歴史民俗博物館研究報告』176：239-266。

**【2014年度の活動報告】**

◎各個研究

**・研究課題**

機械学習をもちいた民族学情報の検索

**・研究の目的、内容**

国立民族学博物館では、さまざまな民族資料情報のデータベースを作成して公開しているが、必ずしも十分な情報が付与されてはいるわけではない。特に標本資料に関するものは、同種の資料が多数ある、同じ資料に異なる名称が与えられているなど、単純な検索文字列の照合による従来の検索手法で情報を得るには限界がある。

本研究は、最近情報科学の分野で進展がめざましい機械学習の技術を応用して、データベースから有用な情報を抽出しようとするものである。多量のデータの統計処理やクラスタリングなどの手法により、データの構造を概観して全容を把握し、また不完全な情報から有用な情報を抽出する可能性について研究をおこなう。

**・成果**

今年度は研究の現状のサーベイをさらに進めるとともに、民博のデータベースの情報について、以下のような応用を試みた。

1）ジョージ・ブラウン・コレクション・データベースの収集地情報をカテゴリ化し、位置情報に変換する。

2）標本資料データベースの寸法・重量情報のパタンを分析する。

3）図書・雑誌目録データベースの情報から規格外のデータを見つける。

◎出版物による業績

［その他］

山本泰則

2014 「『ジョージ・ブラウン・コレクション』を地図にプロットする」『みんぱく e-news』160（http://www.minpaku.ac.jp/museum/enews/160）。

◎口頭発表・展示・その他の業績

**・広報・社会連携活動**

2014年８月24日 「みんぱくシンボルマークをえがく」第354回みんぱくウィークエンド・サロン

## 川瀬 慈［かわせ いつし］――助教

1977年生。**【学歴】**立命館大学文学部卒（2001）京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科博士課程修了（2010）**【職歴】**日本学術振興会 PD（2007）、マンチェスター大学研究員（2010）、ベルギー SoundImageCulture 客員講師（2011）、国立民族学博物館文化資源研究センター助教（2012）**【学位】**博士（地域研究）（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 2010）、修士（地域研究）（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究科 2007）**【専攻・専門】**映像人類学、民族誌映画制作**【所属学会】**英国王立人類学協会、日本映像民俗学の会、日本文化人類学会、日本アフリカ学会、日本ナイル・エチオピア学会

**【主要業績】**

［共編］

鈴木裕之・川瀬 慈編

2015 『アフリカン・ポップス！――文化人類学からみる魅惑の音楽世界』東京：明石書店。

分藤大翼・川瀬 慈・村尾静二編

2015 『フィールド映像術』（FENICS 100万人のフィールドワーカーシリーズ15）東京：古今書院。

［論文］

Kawase, I.

2014　The Amharic Oral Poetry by Lalibäločč. *Japanese Review of Cultural Anthropology* 15: 185–198.

**【受賞歴】**

2013　第19回日本ナイル・エチオピア学会高島賞

2008　最も革新的な映画賞 Premio per il film più innovative　イタリア・サルデーニャ国際民族誌映画祭

**【2014年度の活動報告】**

◎各個研究

**・研究課題**

民族誌映画のナラティブの革新

**・研究の目的、内容**

人類学、映画、アートの実践が交差する場から、従来のテクスト主体の民族誌記述に依存した民族誌映画のナラティブを革新し、文化の記録と表象における表現の地平を理論的・実践的に開拓する。

**・成果**

2014年度は、5月に開催された日本文化人類学会50周年記念国際研究大会（IUAES 2014、於：幕張メッセ）にて、川瀬が代表を務める民博共同研究「映像民族誌のナラティブの革新」メンバーたちとともに、『New Horizon of Anthropological Films from Japan』と題した上映企画を行い、各国の映像人類学者と民族誌映像の制作方法論や活用に関する議論を行った。そこでは、作品内における文字情報（ナレーション、あるいは解説字幕）の様式や研究者のパフォーマンス（立ち振る舞い、被写体との会話を含むインタラクション）の見せ方、或いは、次世代に向けた無形文化の記録保護というパースペクティブからの作品活用のありかたについて等の意見が交わされた。本企画を通し、映像人類学の研究拠点であるトロムソ大学や中国社会科学院の研究者と、人類学における映像実践に関する国際的な研究交流、共同研究についての具体的な計画を練ることができたのは大きな収穫であった。

出版を通した成果では、査読付きの学術雑誌『年報カルチュラル・スタディーズ』第2号の映像人類学特集企画に、研究課題に関する論稿を発表した。年度の後半には、編著者として関わった出版物『フィールド映像術』（古今書院）、そして『アフリカンポップス！文化人類学からみる魅惑の音楽世界』が刊行された。これらの出版物では、報告者の制作方法論やその変遷について紹介しつつ、民族誌映像を完結した作品としてではなく、被写体や、それを視聴する人々との創発的な営みのプロセスにあることを自身の制作や作品公開を基軸にしつつ考察した。民族誌映像のナラティブの革新と創造にむけた研究活動を展開することができたといえる。

◎出版物による業績

［共編］

分藤大翼・川瀬 慈・村尾静二編

2015 『フィールド映像術』（FENICS 100万人のフィールドワーカーシリーズ15）東京：古今書院。

鈴木裕之・川瀬 慈編

2015 『アフリカン・ポップス！――文化人類学からみる魅惑の音楽世界』東京：明石書店。

［論文］

川瀬 慈

2014 「音、身体、イメージの新たな関係――Sensoryscape from Gondar のこころみ」『年報カルチュラル・スタディーズ』2：198–203［査読有］。

Kawase, I.

2014 Documentary Films in Japan-Critically Engaging with the Society. *The 8th IRAN International Documentary Film Festival "CINEMA VERITE" Catalogue*, pp.112. Tehran: Documentary and Experimental Film Center.

2014 Prospects and Challenges of Ethnographic Filmmaking in Ethiopia. In H. Kim and Y. Park (eds.) *Audiovisual augmentation of the Intangible Cultural Heritage*, pp.74–85. Jeonju: Kim Geon.

2014 The Amharic Oral Poetry by Lalibäločč. *Japanese Review of Cultural Anthropology* 15: 185–198［査読有］.

［事典項目］

川瀬　慈

2014 「奏でられる集団の歴史」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.234–235，東京：丸善出版。

2014 「民族誌映画」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.490–491，東京：丸善出版。

Kawase, I.

2014 Visual Anthropology and Ethiopia. In A. Bausi and S. Uhlig（eds.）*Encyclopaedia Aethiopica Vol. 5: Y–Z*, pp.326–327. Wiesbaden: Harrassowitz Verlag.

［その他］

川瀬 慈

2014 「本と映画のはなし」『POPEYE』809：142–143，東京：マガジンハウス。

2014 「無形文化遺産をめぐる認識――エチオピアの音楽職能集団ラリベロッチ」『月刊みんぱく』38(6)：14–15。

2014 「映像民族誌の新たな時代」『民博通信』146：12–13。

2014 「第19回高島賞受賞記念講演」『JANESニュースレター』21：43–45。

2014 「現代のことば　路上の精霊」『京都新聞』 7月9日夕刊。

2014 「現代のことば　ムルの蛇」『京都新聞』 9月3日夕刊。

2014 「現代のことば　ゆでたまご売りの少女チャイナ」『京都新聞』11月4日夕刊。

2015 「現代のことば　神にささげる歌」『京都新聞』 1月8日夕刊。

2015 「旅・いろいろ地球人　信じる⑥　エチオピアの刺青」『毎日新聞』 2月26日夕刊。

2015 「現代のことば　あるシンフォニー」『京都新聞』 3月12日夕刊。

森田良成・伊藤良成・川瀬 慈

2014 座談会「フラハティから現在まで」『ドキュメンタリーマガジン neoneo』4：107–114。

◎口頭発表・展示・その他の業績

**・共同研究会**

2014年7月6日 「Sensory Turnの人類学への返答」『映像民族誌のナラティブの革新』

2015年1月25日 「トロムソ大学映像文化学科の研究動向、第8回Cinema Verite 国際ドキュメンタリー映画祭（イラン）の報告」『映像民族誌のナラティブの革新』

**・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告**

2014年5月15日 ‘Video Messages from the World: the Future with/of Anthropologies.’ “JASCA Roundtable,” IUAES Inter-Congress 2014, the International Conference Hall of Makuhari Messe, Chiba, Japan

2014年5月18日 ‘New Horizon of Anthropological Films from Japan.’ “Film Screening Program,” IUAES Inter-Congress 2014, the International Conference Hall of Makuhari Messe, Chiba, Japan

2014年10月10日 ‘Prospects and Challenges of Ethnographic Filmmaking in Ethiopia.’ “Audiovisual Augmentation of the Intangible Cultural Heritage,” International Intangible Film Festival Conference, National Intangible Heritage Center, Jeonju, Korea

2014年11月25日 ‘Ethnographic Approaches towards Visual Documentation-Camera as Witness of Communication and Collaboration.’ Bremer Initiative Qualitative Method Colloquium, University of Bremen, Germany

2014年12月1日 ‘Anthropological Knowledge in Audio-visual Storytelling.’ “The 8th IRAN International Documentary Film Festival Cinema Verite” Documentary & Experimental Film Center, Tehran, Iran

**・研究講演**

2014年10月22日 ‘Transcultural Encounters: Doing Visual Anthropology.’ Celebration talk for the new MA students, Transcultural Studies, University of Bremen, Germany

2014年11月24日 ‘Intangible Cultural Heritage and Ethnographic Filmmaking.’ Tromsø University Museum, Norway

**・映像上演**

2014年5月18日 *When Spirits Ride Their Horses*（Dir. Itsushi Kawase), “Film Screening Program,” IUAES Inter-Congress 2014, the International Conference Hall of Makuhari Messe

2014年８月10日　*When Spirits Ride Their Horses*（Dir. Itsushi Kawase), *Zaffimaniry Style*（Dir. By Itsushi Kawase and Taku Iida）第７回中華人民共和国映像人類学会年次集会（貴州市、中国）

2014年10月11日　*When Spirits Ride Their Horses*（Dir. Itsushi Kawase), 第１回無形遺産国際映画祭（全州市、韓国）

2014年11月13日　*When Spirits Ride Their Horses*（Dir. Itsushi Kawase), *Zaffimaniry Style*（Dir. By Itsushi Kawase and Taku Iida), *Tattoo Gondar*（Dir. Itsushi Kawase), 川瀬 慈作品特集, ブレーメン大学人類学・文化調査学部（ドイツ）

2014年11月21日　*When Spirits Ride Their Horses*（Dir. Itsushi Kawase), *Zaffimaniry Style*（Dir. By Itsushi Kawase and Taku Iida), *Tattoo Stories from Gondar*（Dir. Itsushi Kawase), 川瀬 慈作品特集, トロムソ大学映像文化研究科（ノルウェー）

2014年12月１日　*Room11, Ethiopia Hotel*（Dir. Itsushi Kawase), *Lalibalocc-Living in the Endless Blessing-*（Dir. Itsushi Kawase）第８回シネマ・ヴェリテ・国際ドキュメンタリー映画祭（イラン）

2015年２月19日　*Room11, Ethiopia Hotel*（Dir. Itsushi Kawase), *When Spirits Ride Their Horses*（Dir. Itsushi Kawase), *Tattoo Stories from Gondar*（Dir. Itsushi Kawase）川瀬 慈作品特集, La Péniche ANAKO（フランス）

◎調査活動

**・海外調査**

2014年７月17日～７月21日―韓国（民博ビデオテーク制作プロジェクト、韓国国立民俗博物館）

2014年８月８日～８月13日―中国（第７回中華人民共和国映像人類学会年次総会発表、中国の映像人類学研究動向調査、貴州師範大学）

2014年10月８日～10月12日―韓国（第１回無形遺産国際映画祭での発表、韓国の映像人類学研究動向調査、国立無形遺産センター、全州市）

2014年10月15日～11月20日―ドイツ（ドイツのエチオピア研究動向調査、民族誌映画収集、ブレーメン大学人類学・文化調査学部、ハンブルグ大学アジア・アフリカ研究所）

2014年11月20日～11月25日―ノルウェー（トロムソ大学の映像人類学研究、アフリカ研究動向調査、トロムソ大学博物館、トロムソ大学映像文化研究科）

2014年11月30日～12月８日―イラン（イランの民族誌映画の収集、テヘラン）

2014年12月８日～12月16日―ドイツ（ドイツのエチオピア研究動向調査、民族誌映画収集、ブレーメン大学人類学・文化調査学部、ハンブルグ大学アジア・アフリカ研究所）

◎上記以外の研究活動

**・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など**

国立歴史民俗博物館共同研究「研究資源としての民俗研究映像の制作と活用に関する研究」（研究代表者：内田順子）共同研究員

◎社会活動・館外活動

**・他の機関から委嘱された委員など**

Scientific Committee, Last Focus Visual Studies Conference, Sorbonne University of Paris, 2015

**・客員教授**

ブレーメン大学人類学文化調査学部客員教授（2014年10月～12月）

**・非常勤講師**

京都学園大学「民俗学特殊講義」（集中講義）、龍谷大学「多文化映像論Ｂ」（前期）

## 国際学術交流室

岸上伸啓［きしがみ　のぶひろ］―――― **室長　兼：副館長（研究・国際交流担当）、研究戦略センター教授**

印東道子［いんとう　みちこ］―――――――――――――――――――――――― **兼：民族社会研究部教授**

菊澤律子［きくさわ　りつこ］――――――――――――――――――――――――――――――兼：先端人類科学研究部准教授

齋藤　晃［さいとう　あきら］――――――――――――――――――――――――――――――兼：先端人類科学研究部准教授

MATTHEWS, Peter Joseph［マシウス、ピーター・ジョセフ］――――――――兼：民族社会研究部准教授

山中由里子［やまなか　ゆりこ］――――――――――――――――――――――――――――――兼：民族文化研究部准教授

横山廣子［よこやま　ひろこ］――――――――――――――――――――――――――――――兼：民族社会研究部准教授

## 梅棹資料室

久保正敏［くぼ　まさとし］――――――――室長　兼：副館長（企画調整担当）、文化資源研究センター教授

## 機関研究員

加賀谷真梨［かがや　まり］――――――――――――――――――――――――――――――――――――研究員

1977年生。**【学歴】**お茶の水女子大学文教育学部卒（2001）、お茶の水女子大学大学院人間文化研究科発達社会科学専攻（博士前期課程）修了（2003）、お茶の水女子大学大学院人間文化研究科比較社会文化学専攻（博士後期課程）修了（2006）**【職歴】**放送大学非常勤講師（2005-2014）、法政大学非常勤講師（2006-2011）、お茶の水女子大学大学院人間文化研究科附属人間文化研究所研究院研究員（2006-2009）、札幌医科大学非常勤講師（2008-現在）、日本学術振興会特別研究員 PD（2009-2011）、国立民族学博物館研究戦略センター機関研究員（2012）**【学位】**博士（社会科学）（お茶の水女子大学 2006）修士（社会科学）（お茶の水大学 2003）**【専攻・専門】**文化人類学、民俗学、南西諸島研究、ジェンダー研究**【所属学会】**日本文化人類学会、日本民俗学会、比較家族史学会、Society for Applied Anthropology

**【主要業績】**

［博士論文］

加賀谷真梨

2006「小浜島と竹富島の生存戦略にみる女性の実践――沖縄におけるジェンダー関係の再検討」お茶の水女子大学。

［論文］

加賀谷真梨

2012「プロセスとしての〈共同体〉――沖縄・波照間島の『戦争マラリア』をめぐる語りを事例に」『東洋文化』93：79-97。

2005「沖縄県・小浜島における生涯教育システムとしての年中行事」『日本民俗学』242：35-63。

**【受賞歴】**

2006　第26回日本民俗学会研究奨励賞

**【2014年度の活動報告】**

◎各個研究

**・研究課題**

1）高齢者介護と相続の相関にみる沖縄の「家族」に関する人類学的研究

2）離島の子どもの身体観・健康観・医療観に関する研究

・研究の目的、内容

1）介護保険サービスの拡充後もなお「家族」が高齢者の生に対する責任を手放さない要因を「継承」という行為それ自体を重んじる日本人の観念に由来すると仮定し、それを高齢者介護と位牌や土地の相続との相関に関する実態調査を通じて検証する。調査地は沖縄の波照間島と久高島とする。

2）離島社会における子どもの身体・健康・医療に関する文化的知識と行動パターン、及びその変化を沖縄県波照間島の調査を通じて明らかにする。

・成果

1）2014年度は、沖縄県内で同時期に同じプロジェクトの傘下で開始された離島の高齢者地域介護事業の現在の状況について、波照間島と久高島で比較調査を行い、特に久高島で同活動の継続が困難であった背景を、島の歴史、生業、社会構造等との連関に留意しながら明らかにした。その結果、近代化（世俗化）のうねりに対して、久高島の人々が霊的世界をそのまま保持し、それに依拠することで対応（対抗）しようとしたことが、地域介護をはじめとする祭祀以外の自律的な活動の継続を困難にしていることを明らかにした。具体的な研究成果として、波照間島における地域介護の実態を、論文「ジェンダー視角の民俗誌――個と社会の関係を問い直す」にまとめ、森話社刊行の『＜人＞と向き合う民俗学（2014）』に寄稿した。久高島に関しては、みんぱくのウィークエンド・サロンで発表した。また、アソシエーションの維持や存続という観点から、非営利で女性相談活動を行う女性団体を読み解いた論文「An Alternative Place for Women: A Case Study of Women's Support Activities in Japan」を『Senri Ethnological Studies』No.91に投稿した。

2）2014年度は、子どもの健康や医療を取り巻く社会環境の変化に着目しながら、子どもと「地域社会」との結びつき及びその変化について考察した。波照間島では1978（昭和53）年頃まで仮親慣行が盛んで、体の弱い子どもや神経質な子どもに産みの親とは別に「オヤ」をつけることで子どもの確かな成長を願う慣習があったこと。子どものいのちを救った恩人も「オヤ」となり、子どもの成長を見届ける役割を果たしたこと。子どもの病はマブヤ（魂）を落とした状況としても認識され、医師の診断に加えて呪医がその治療に当たっていたこと等を明らかにした。これらの成果の一部を、論文「子どもも親もみんなで育てる」にまとめ、岩波ジュニア新書『いのちはどう生まれ、育つのか――医療、福祉、文化と子ども』に上梓した。

◎出版物による業績

［論文］

加賀谷真梨

2014 「ジェンダー視角の民俗誌――個と社会の関係を問い直す」門田岳久・室井康成編『＜人＞に向きあう民俗学』pp.156-187，東京：森話社。

2015 「子どもも親もみんなで育てる」道信良子編『いのちはどう生まれ、育つのか――医療、福祉、文化と子ども』（岩波ジュニア新書799）pp.95-106，東京：岩波書店。

［その他］

加賀谷真梨

2014 「旅・いろいろ地球人　食べる③　歴史とつながる給食」『毎日新聞』 8月14日夕刊。

2015 「旅・いろいろ地球人　信じる④　母親の妙案」『毎日新聞』 2月12日夕刊。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会

2015年1月8日　「誰のための福祉事業か？――沖縄県A島の高齢者地域福祉活動に生じるコンフリクト」『家族と社会の境界面の編成に関する人類学的研究――保育と介護の制度化／脱制度化を中心に』

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2014年4月25日　「民俗学の方法論の探求――沖縄・八重山諸島の高齢者福祉を事例に」渡邊欣雄ゼミ研究発表、國學院大学

2014年5月16日　「Family and "family-like" People: Conflicts over Community-based Elderly Care」IUAES、幕張メッセ

2014年5月31日　「福祉化する社会と家族のインターフェイス」南西諸島研究会、明治大学

2014年6月15日　「インタビュー調査報告　"みずら"はどのように歩み、どこへ向かうのか？」特定非営利活動法人 かながわ女のスペースみずら総会における研究報告会、かながわ県民活動サポートセンター

2014年7月6日　シンポジウム「老化を考える――霊長類学から現代社会へのアプローチ」コメント、第30回

日本霊長類学会、大阪科学技術センタービル大ホール

2014年７月12日　「人類学におけるミクロ－マクロ系の連関」公開セミナー（第１回東アジア人類学研究会研究大会との共催）コメント、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

**・広報・社会連携活動**

2014年９月６日　波照間すごろくの企画運営、『ひらめき☆ときめきサイエンス　こどものいのちと対話しよう！ 世界のこどもたちの生活と医療』

2014年12月14日　「男の世界と女の世界――沖縄の離島社会の現在」第365回みんぱくウィークエンド・サロン

◎調査活動

**・国内調査**

2014年４月29日～５月４日―沖縄県竹富町（高齢者介護にみる沖縄の「家族」に関する人類学的研究）

2014年８月２日～17日―沖縄県石垣市、南城市（高齢者介護にみる沖縄の「家族」に関する人類学的研究）

2014年９月５日～７日―北海道利尻町、利尻富士町（離島の子どもの身体・健康・医療に関する文化的知識と行動パターンに関する研究）

2014年12月22日～29日―沖縄県竹富町（離島の子どもの身体・健康・医療に関する文化的知識と行動パターンに関する研究）

**・海外調査**

2015年３月１日～３月16日―オーストラリア（オーストラリアにおける日本（沖縄）研究の動向調査）

◎社会活動・館外活動

**・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など**

科学研究費補助金（若手研究（B））「高齢者介護と相続の相関にみる沖縄の『家族』に関する人類学的研究」研究代表者、科学研究費補助金（基盤研究（C））「離島社会における子どもの身体・健康・医療に関する文化的知識と行動パターン」（代表者：道信良子）研究分担者、法政大学沖縄文化研究所研究員

**・非常勤講師**

お茶の水女子大学「地域文化論」、札幌医科大学「21世紀問題群」

## 金田純平［かねだ　じゅんぺい］――研究員

1977年生。**【学歴】**関西学院大学総合政策学部総合政策学科卒業（2000）、神戸大学大学院総合人間科学研究科コミュニケーション学専攻博士前期課程修了（2005）、神戸大学大学院総合人間科学研究科コミュニケーション科学専攻博士後期課程修了（2008）**【職歴】**しんきん大阪システムサービス株式会社（2000-2003）、日本学術振興会特別研究員（DC2）（2006-2008）、神戸大学大学院国際文化学研究科特命助教（2008-2010）、株式会社国際電気通信基礎技術研究所専任研究員（2010-2011）、ATR Learning Technology 株式会社（2010-2011）、関西大学文学部特別任用准教授（2010-2012）、関西大学教育推進部特別任用准教授（2012-2013）、国立民族学博物館機関研究員（2013）**【学位】**博士（学術）（神戸大学大学院総合人間科学研究科 2008）、修士（学術）（神戸大学大学院総合人間科学研究科 2005）**【専攻・専門】**話し言葉における文法と音声および非言語行動の対照研究、人文研究および教育に関するコンピュータシステムのユーザーインタフェース研究**【所属学会】**情報処理学会、日本語教育学会、日本音声学会、日本語文法学会、ヨーロッパ日本語教師会

**【主要業績】**

［共著］

定延利之・森 篤嗣・茂木俊伸・金田純平

2012 『私たちの日本語』東京：朝倉書店。

［論文］

金田純平

2015 「文末の感動詞・間投詞――感動詞・間投詞の対照を視野に入れて」友定賢治編『感動詞の言語学』pp.28-59, 東京：ひつじ書房。

2014 「日本語教師によるビデオ教材の作成と共有のすすめ――企画・制作・公開・コミュニケーション」『日本語音声コミュニケーション』2：28-59, 日本語音声コミュニケーション研究会。

【受賞歴】

2013　日本音声学会学術研究奨励賞

【2014年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

1）博物館展示情報システムのユーザビリティの研究

2）人文研究・教育におけるICT技術の活用

・研究の目的、内容

1）来館者が直接利用する博物館展示情報システムについて、その利用状況やログの解析による数理・統計的手法に加え、人文・社会科学的手法である参与観察・行動観察による定性分析を通じて、そのシステムのユーザビリティ（使いやすさ）における問題点を明らかにし、根拠に基づいた改善案を提示することでユーザビリティの向上につなげる。

2）ICT技術を人文研究および教育に活用する場合、予算規模が小さく、また、特別なICTスキル（サーバ構築・運営技術等）を持たない個々の研究者・教員のレベルでも導入可能でかつ効果的な手法を提案する。当初は日本語教育分野に的を絞って研究を行う。

・成果

1）ビデオテークの利用ログからの利用状況と実際に被験者を用いたユーザーテストの結果を分析して、操作画面における問題点を洗い出し、ユーザーインタフェースの改善策について検討を行った。また、他のビデオライブラリーを訪問して、利用方式や端末のユーザーインタフェース、什器類の形状について調査を行い、次世代のビデオテークに相応しい仕組みの検討を行った。

　次世代電子ガイドの開発において、展示場の特定の位置にBluetoothの発信機（ビーコン）を設置し、展示物に接近するだけで電子ガイドの映像が取捨選択される仕組みを実験的に導入し、実用化に向けた試験を実施した。

2）日本語を学習するフランスの大学生（レンヌ第１大学）と日本語教育を学ぶ日本の大学生（神戸大学国際文化学部）の間でインターネットを介し協働して動画によるプレゼンテーションを制作する教育プロジェクトにおいて、動画の作成・公開に関する講義と授業Webサイトおよび動画の発信環境の整備を行った。プロジェクトの成果は2014年８月のヨーロッパ日本語教育シンポジウムでのポスター発表にて報告した。

◎出版物による業績

［論文］

金田純平

2015「文末の感動詞・間投詞――感動詞・間投詞の対照を視野に入れて」友定賢治編『感動詞の言語学』pp.28-59，東京：ひつじ書房。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2014年４月５日　‘The Lexical Correlates of “Characters”: A Contrastive Study on the Role Language among English, French and Japanese,’ “Colloque international: Japonais en contexte,” Université Bordeaux Montaigne

2014年８月26日　「キャラクタと文法」“Workshop on Japanese ‘character’ in Communication and Grammar,” Ljubljana University

2014年８月29日　「複言語・複文化環境における協働プロジェクト――日仏の遠隔授業を通して」（林 良子・国村千代と連名）第18回ヨーロッパ日本語教師会シンポジウム、リュブリャナ大学（スロベニア）

・展示

文化資源プロジェクト2014年度年末年始展示イベント「ひつじ」プロジェクトメンバー

◎調査活動

・海外調査

2014年４月２日～４月７日―フランス（国際会議「コンテクストに基づいた日本語の話し言葉」での研究発表及び言語コミュニケーションに関する打ち合わせ・情報収集）

2014年８月25日～９月５日―スロベニア、イタリア（第14回ヨーロッパ日本学会国際大会・ヨーロッパ日本語

教師会シンポジウムに参加及び情報収集、博物館・美術館における展示場情報メディア機器の調査）

◎社会活動・館外活動

**・非常勤講師**

神戸大学大学院国際文化学研究科「アカデミックライティング・日本語」「文化情報リテラシー専門演習」、関西大学大学院文学研究科「日本文献情報処理研究Ａ･Ｂ」、関西大学文学部「日本語学１　Ａ･Ｂ」、関西大学人間健康学部「スタディスキル・ゼミ」「導入演習」、兵庫医科大学「医学概論入門」

## 呉屋淳子［ごや　じゅんこ］――――――

は沖縄（本島）へ進学あるいは就職する若者が一般的であったが、名桜大学の制度改革によって、喜界島以北からも沖縄への移動がみられる。これは、奄美諸島内部の島々対沖縄（本島）を意識する状況を生み出していた。そのため、島内部では、民俗芸能の教育も「外」を意識した取り組みが行われるようになっていた。この「外」が沖縄だけなので、あるいは鹿児島を含んでいるものかは、今後の課題である。また、この成果は、2014年７月に名古屋大学で開催された日本比較教育学会において発表した。

◎出版物による業績

［博士論文］

呉屋淳子

2015 「沖縄県八重山諸島における『学校芸能』の創造と展開に関する研究」愛知：名古屋大学大学院教育発達科学研究科。

［論文］

고야준코（呉屋淳子）

2014 「오키나와현야에야마의 3고교의 향토예능」고려대학교한국어문교육연구소엮음『세계연극교육의 현황과 전망』（「沖縄県八重山の３高校の郷土芸能」高麗大学韓国語文教育研究所編『世界演劇教育の現況と展望』）pp.259-268, ソウル：民俗院。

고야준코（呉屋淳子）

2014 「박물관자료를활용한교육활동'일본국립민족학박물관사례를중심으로」국립민속박물관엮음『어린이와 박물관연구』（「博物館資料を活用した教育活動――日本国立民族学博物館の事例を中心に」韓国国立民俗博物館編『子どもと博物館研究』）7：60-70。

呉屋淳子

2014 「『伝統と文化』の教授を巡る教育制度と学校の関係性――沖縄県立八重山高等学校の教育課程の事例から」『（日本研究）』（韓国，中央大学）36：93-310。

◎口頭発表・展示・その他の業績

**・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告**

2014年６月30日 「박물관자료를 활용한 교육 - 국립민족학박물관의 사례를 중심르로（博物館資料を活用した教育――国立民族学博物館の事例を中心に）」韓国国立民俗博物館子ども博物館

2014年７月13日 「沖縄県八重山諸島における『学校芸能』の誕生と展開」『第50回日本比較教育学会』名古屋大学

**・研究公演**

2014年11月１日 「りんけんバンドみんぱく公演」企画・解説

**・広報・社会連携活動**

2014年７月５日 「ウチナンチューと教育」第433回国立民族学博物館友の会講演会

2014年８月４日 「モノ資料を活用した教育方法」大阪府初任者研修、国立民族学博物館

2014年８月５日 ワークショップ企画・運営者「『みんぱっく』で世界と教室をつなごう！」博学連携教員研修ワークショップ2014 in みんぱく「学校と博物館でつくる 国際理解教育――センセイもつくる・あそぶ・たのしむ」国立民族学博物館

2014年10月23日 「フィールドワークの実践方法」兵庫県西宮今津高校総合学科１年次（国際文化班23名、引率教員１名）講義、国立民族学博物館

◎調査活動

**・国内調査**

2014年７月13日―名古屋（「日本比較教育学会」に参加）

2014年７月26日～８月１日―茨城県（全国高等学校総合文化祭郷土芸能大会の調査）

**・海外調査**

2014年６月29日～７月２日―韓国（韓国国立民俗博物館・子ども博物館における国際学術大会での研究発表）

2015年２月24日～３月１日―韓国（日韓の高等学校における「学校芸能」の創造に関する比較研究）

2015年３月10日～３月19日―ペルー（海外における琉球古典芸能の教育とその継承に関する沖縄・奄美・ペルーの比較研究）

◎上記以外の研究活動

**・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など**

科学研究費補助金（若手研究(B)）「境界領域における民俗芸能の教授・創生に関する研究――奄美諸島の高等学校を中心に」研究代表者

## 末森 薫［すえもり　かおる］――――――

◎出版物による業績

［その他］

末森 薫

2014 「第36回文化財保存修復学会参加記」『文化財保存修復学会通信』148：3。

2014 「旅・いろいろ地球人　食べる⑦　エジプトＢ級グルメ」『毎日新聞』９月11日夕刊。

2014 「春の再訪を待つエジプト古代文明――アラブの春が過ぎて」『みんぱく e-news』159（http://www.minpaku.ac.jp/museum/enews/159）。

2014 コメント「和紙：技術をパピルス修復に――エジプト人、京都で研修」『毎日新聞』11月27日。

末森 薫・松田泰典・山内和也・藤澤 明

2014 「大エジプト博物館保存修復センター（GEM-CC）における人材育成を目的とした国際協力プロジェクト（Ⅲ）」『文化財保存修復学会第36回大会要旨集』pp.290-291。

Galal, H., M. Mahmoud, M. Ramadan, B. Dewidar, H. Tawfik, H. Ahmed, M. Mohamed, A. Mahdy, A. Wahab, W. Mostafa, H. Gamil, K. Suemori and Y. Matsuda

2014 Preventive Measures and Activities for Protection of Ancient Egyptian Artifacts in the Grand Egyptian Museum: Conservation Center（GEM-CC). In J. Bridgland（ed.）*ICOM-CC 17th Triennial Conference Preprints, Melbourne, 15-19 September 2014*. Paris: International Council of Museums.

◎口頭発表・展示・その他の業績

**・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告**

2014年６月７日～８日 「大エジプト博物館保存修復センター（GEM-CC）における人材育成を目的とした国際協力プロジェクト（Ⅲ）」文化財保存修復学会第36回大会、明治大学

2014年12月14日 「大エジプト博物館保存修復センターへの技術支援プロジェクト」一般社団法人文化財保存修復学会主催『公開シンポジウム　文化財を伝える――日本の保存技術が古代エジプト文明の秘宝を救う』国立民族学博物館講堂

**・展示**

文化資源プロジェクト2014年度年末年始展示イベント「ひつじ」プロジェクトメンバー

◎調査活動

**・海外調査**

2014年９月21日～９月27日―香港（第25回国際文化財保存学会（International Institute for Conservation of Historic and Artistic Works（IIC））への出席および情報収集）

2014年10月24日～11月９日―中国（河西回廊沿い（西安、天水、蘭州、武威、敦煌）の仏教石窟に関する調査研究活動）

◎上記以外の研究活動

**・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など**

科学研究費補助金（研究活動スタート支援）「中国石窟芸術技法・材料の解明による美術史観再考――麦積山石窟を事例として」研究代表者

◎社会活動・館外活動

**・他機関から委嘱された委員など**

文化財保存修復学会第37回大会実行委員、国際協力機構（JICA）大エジプト博物館保存修復センタープロジェクト専門家会議 JICA 専門家

## 浜田明範［はまだ　あきのり］――研究員

1981年生。**【学歴】**千葉大学文学部行動科学科卒業（2003）、千葉大学大学院文学研究科人文科学専攻修士課程修了（2005）、一橋大学大学院社会学研究科総合社会科学専攻単位取得（2010）**【職歴】**産業能率大学兼任教員（2008）、日本学術振興会特別研究員（PD）（2010）、江戸川大学非常勤講師（2011）、国立民族学博物館機関研究員（2013）、高知大学非常勤講師（2013）、立命館大学客員協力研究員（2013）**【学位】**博士（社会学）（一橋大学社会学研究科2012）、修士（文学）（千葉大学文学研究科 2005）**【専攻・専門】**医療人類学・アフリカ地域研究（西アフリカにおける生物医療と生政治の展開に関する研究）**【所属学会】**日本文化人類学会、日本アフリカ学会、The International

Union of Anthropological and Ethnological Sciences、Society for the Social Studies of Science and Technology

**【主要業績】**

［単著］

浜田明範

2015 『薬剤と健康保険の人類学――ガーナ南部における生物医療をめぐって』東京：風響社。

［論文］

浜田明範

2015 「書き換えの干渉――文脈作成としての政策、適応、ミステリ」『一橋社会科学』7（別冊）：125-150。

2010 「医療費の支払いにおける相互扶助――ガーナ南部における健康保険の受容をめぐって」『文化人類学』75(3)：371-394。

**【2014年度の活動報告】**

◎各個研究

**・研究課題**

西アフリカにおける生権力の複数性に関する人類学的研究

**・研究の目的、内容**

本研究の目的は、ガーナ南部における生物医療の展開に注目することにより、生物医療が、1) どのように異なる立場の人々の行為を統制しながら全体的な目標を達成しようとしているのか、2) どのようなモノ・行為・制度の配置によって人々の自己統治を促しているのか、3) どのように「生かすべき者」と「死ぬに任せる者」を結果的に選別しているのか、の３点について明らかにすることにある。

**・成果**

2014年度は、ガーナ南部の農村地帯における結核対策プログラムに関する現地調査を実施した。具体的な成果として、以下の諸点が明らかになった。1) 結核対策では実際に患者を発見・治療する看護師への働きかけが重視されている。2) しかし、看護師の結核対策への参与は限定的である。3) これは看護師の怠慢というよりは予算と人員の不足に由来する。4) 看護師に頼れない患者は、逆説的に、ドキュメントを用いて自己管理をしている。5) 患者の生活は結核対策というよりは家族の影響を強く受けている。6) 結果的に、結核治療の成否は、看護師と家族がいかに結核対策に参与するかに依然として依存している。

これらの成果のうち、生権力の複数性を解明するという本研究の目的に照らして、特に重要なのは、看護師に配布されたドキュメントを用いて患者自身が投薬管理を行っている点である。結核対策プロジェクトは、最終的には患者の体内にいる結核菌の振舞いを統治しようと試みるものであるが、そのためには患者に定期的な薬剤の服用させる必要がある。結核対策では、患者の行為を統制するために、直接監視下短期治療療法（DOTS）という方法が世界的に標準化されている。これは、患者が服薬しているかどうかを看護師に確認させる方法であり、患者ではなく看護師の行為を統制しようと試みている。しかし、ガーナではこの直接監視下短期治療療法が不徹底であることによって、つまり、看護師への統治がうまく機能していないことによって、患者自身による自己統治が要請されている。その結果、結核対策が配布している投薬チェックシートは、看護師の統治ではなく、患者の統治のための装置となっている。このように、ガーナ南部の結核体先においては、ある対象（看護師）への生権力的な働きかけの失敗が、別の対象（患者）への生権力的な働きかけの前提となるという、複数の対象に対する生権力的な働きかけの干渉のひとつの形態が見られた。このような生権力の複数性とその複雑な関係性を明らかにした本研究は、アフリカにおけるグローバルヘルスについての医療人類学研究だけでなく、生権力論にも大きな貢献となりうる。

今後の展望として、本研究で得られた成果を発展させ、マラリアやオンコセルカといったその他の感染症を対象に、ガーナ南部における感染症対策と生権力の動態を明らかにしていく予定である。

◎出版物による業績

［単著］

浜田明範

2015 『薬剤と健康保険の人類学――ガーナ南部における生物医療をめぐって』東京：風響社。

［論文］

浜田明範

2014 「アフリカにおける薬剤の流通と副作用――ガーナ南部のカカオ農村地帯を事例として」落合雄彦編

『アフリカ・ドラッグ考――交錯する生産・取引・乱用・文化・統制』pp.169-190, 京都：晃洋書房。

2015 「書き換えの干渉――文脈作成としての政策、適応、ミステリ」『一橋社会科学』7（別冊）：125-150。

Hamada, A.

2014 Payment and Milieu of Mutual-Aids: The National Health Insurance Scheme and Multiple Cares in Southern Ghana. In G. Mohácsi（ed.）*Ecologies of Care: Innovations through Technologies, Collectives and the Senses*（Readings in Multicultural Innovation 4), pp.161-177. Osaka: Doctoral Program for Multicultural Innovation, Osaka University.

2014 Medical Technology as Cultural Interface. In H. W. Wong and K. Maegawa（eds.）*Revisiting Colonial & Post-Colonial: Anthropological Studies of Cultural Interface*. Los Angeles: Bridge21.

［その他］

浜田明範

2014 「書評　浜本満著『信念の呪縛』」『くにたち人類学研究』9：1-9。

2014 「旅・いろいろ地球人　生き物④　カカオ畑のハチミツ」『毎日新聞』 6月26日夕刊。

2014 「なぜいま再分配の人類学なのか」『民博通信』145：24-25。

2014 「ガーナの楽しい選挙」『月刊みんぱく』38(10)：19。

2015 「人間学のキーワード　再分配」『月刊みんぱく』39(2)：20。

2015 「旅・いろいろ地球人　信じる③　エボラへの備え」『毎日新聞』 2月5日夕刊。

2015 「薬剤から見る西アフリカの医療――医療人類学の視点から」*THE LUNG perspectives* 23(1)：95-97。

◎口頭発表・展示・その他の業績

**・共同研究会**

2014年4月5日 「再分配を通じた集団の生成――論点整理と四つの方向性」『再分配を通じた集団の生成に関する比較民族誌的研究――手続きと多層性に注目して』

**・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告**

2014年5月18日 'Payment and Milieu of Mutual-Aids: The National Health Insurancce Scheme and Multiple Cares in Southern Ghana,' The International Union of Anthropological and Ethnological Sciences Inter-Congress 2014, Makuhari-Messe, Chiba, Japan

2014年5月30日 「環境の書き換え――ガーナ南部における結核と複数の統治」『京都人類学研究会』京都大学

2015年1月24日 「再分配研究の射程について」『現代人類学研究会』東京大学

**・広報・社会連携活動**

2014年12月21日 「エボラ出血熱と文化」第366回みんぱくウィークエンド・サロン

◎調査活動

**・海外調査**

2014年7月30日～8月30日―ガーナ共和国（「西アフリカにおける生権力の複数性――ガーナ南部における結核対策を事例に」に関する調査研究）

2014年11月30日～12月11日―アメリカ合衆国（北米における医療人類学の研究動向調査）

2015年2月1日～3月15日―ガーナ共和国、イギリス（ガーナ共和国における「西アフリカにおける生権力の複数性――ガーナ南部における結核対策を事例に」にかかる調査研究及びロンドンにおけるアフリカ地域を対象とした医療人類学の研究動向調査）

◎上記以外の研究活動

**・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など**

科学研究費補助金（研究スタート支援）「西アフリカにおける生権力の複数性――ガーナ南部における結核対策を事例に」研究代表者、国立民族学博物館共同研究若手「再分配を通じた集団の生成に関する比較民族誌的研究――手続きと多層性に注目して」研究代表者、立命館大学生存学研究センター若手研究者研究協力型プロジェクト「現代社会エスノグラフィ研究会」客員協力研究員、立命館大学国際言語文化研究所萌芽的プロジェクト研究「アフリカの社会と笑い研究会」客員協力研究員

◎社会活動・館外活動

**・他機関から委嘱された委員など**

IUAES Inter-Congress 2014 Social Programme Sub-Committee Member

**・非常勤講師**

産業能率大学「文化を知る」、江戸川大学「福祉・医療人類学」、高知大学「医療人類学」（集中講義）

◎学会等の開催

2014年11月８日　日本文化人類学会第３回次世代育成セミナー、国立民族学博物館第３・第４セミナー室

2014年11月22日　日本文化人類学会課題研究懇談会「医療人類学教育の検討」第４回研究会、国立民族学博物館第５・第６セミナー室

## 山本 睦［やまもと　あつし］――研究員

1978年生。**【学歴】**埼玉大学教養学部教養学科卒（2001）、埼玉大学大学院文化科学研究科修了（2003）、総合研究大学院大学文化科学研究科単位取得退学（2009）**【職歴】**日本学術振興会特別研究員 PD（2009）、法政大学非常勤講師（2009）、茨城大学非常勤講師（2010）、埼玉大学非常勤講師（2010）、文京学院大学非常勤講師（2012）、国立民族学博物館研究戦略センター機関研究員（2013）、山形大学人文学部助教（2014）**【学位】**博士（文学）（総合研究大学院大学文化科学研究科 2012）、修士（文化科学）（埼玉大学大学院文化科学研究科 2003）**【専攻・専門】**アンデス先史学、ラテンアメリカ研究、文化人類学 1）アンデス文明形成期の社会動態、2）神殿における建設活動と儀礼行為、3）地域間交流と社会変化の相互関連、4）地域間移動ルートの形成・維持過程、5）ペルー、とくに地方における文化遺産の管理と活用**【所属学会】**日本文化人類学会、古代アメリカ学会、Society for American Archaeology

**【主要業績】**

［博士論文］

山本 睦

2012 「先史アンデス形成期の社会動態――ペルー北部ワンカバンバ川流域社会における社会成員の活動と戦略から」総合研究大学院大学文化科学研究科。

［論文］

山本 睦・伊藤裕子

2013 「ペルー北部とエクアドル南部における形成期の地域間ルートと地域間交流―― GIS による加重コストルート分析を用いて」『古代アメリカ』16：1-30。

Yamamoto, A.

2010 Ingatambo: Un sitio estratégico de contacto interregional en la zona norte del Perú. *Boletín de Arqueología PUCP* 12: 25-52.

**【2014年度の活動報告】**

◎各個研究

**・研究課題**

古代アンデスにおける文明形成期の社会動態

**・研究の目的、内容**

南米ペルーを中心に成立したアンデス文明形成期（紀元前3000年～紀元前後）社会の展開に際して、公共・祭祀建造物をめぐる諸活動や地域間交流が重要な役割をはたしたことは明白である。しかし、両者の関係性についての実証的研究は不十分であるため、ペルー北部地域の考古学調査を通じて、既述の動態的相関を明らかにし、従来の文明論に新たな視座をもたらすことを目的とする。

**・成果**

2014年度は、８月から９月にかけて、ペルー北部山地のインカワシ市とクテルボ市周辺地域において、広域的な遺跡分布調査を実施した。この成果については、国内の学会で発表した。昨年までに実施したペルー北部地域の調査データを整理・分析し、その成果をもとにして、日本語論文を執筆した。また、同年度12月から３月には、ペルー南部のナスカ市近郊において、地上絵や遺跡の分布にかかわる考古学調査に従事した。

◎出版物による業績

［論文］

山本 睦

2014 「先史アンデス形成期における神殿をめぐる人々の活動と戦略――ペルー北部ワンカバンバ川流域のセトルメント・パターンと地域間交流から」『年報人類学研究』4：1-33［査読有］。

2015 「先史アンデスにおけるペルー北部チョタ－ノ川流域社会の形成と変遷」『国立民族学博物館研究報告』39(4)：511-573［査読有］。

◎口頭発表・展示・その他の業績

**・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告**

2014年５月18日 「アンデス文明形成期における神殿をめぐる人々の活動」日本文化人類学会第48回研究大会、幕張メッセ国際会議場（千葉県千葉市）

2014年12月６日 「ペルー北部地域の遺跡踏査――地域間ルート試論」古代アメリカ学会第19回研究大会、名古屋大学東山キャンパス野依学術交流館（愛知県名古屋市）

◎調査活動

**・海外調査**

2014年８月１日～９月12日―ペルー（ペルー共和国・北部山地における考古学調査）

2014年12月16日～３月27日―ペルー（ナスカ周辺地域における地上絵や遺跡の分布にかかわる考古学調査）

◎上記以外の研究活動

**・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など**

科学研究費補助金（基盤研究(S)）「権力の生成と変容から見たアンデス文明史の再構築」（研究代表者：關 雄二）研究協力者

## 吉田ゆか子［よしだ ゆかこ］――研究員

1976年生。**【学歴】**国際基督教大学教養学部卒（2000）、筑波大学地域研究研究科東南アジアコース（修士課程）修了（2002）、筑波大学人文社会科学研究科現代文化・公共政策専攻（博士課程）修了（2012）**【職歴】**株式会社インテージ マーケティング事業部（2002-2004）、日本学術振興会 特別研究員（DC2）（2009-2010）、筑波大学人文社会系博士特別研究員（2012）、国立民族学博物館先端人類学研究部機関研究員（2012）**【学位】**博士（学術）（筑波大学2012）、修士（地域研究）（筑波大学 2002）**【専攻・専門】**文化人類学 インドネシア地域研究 芸能研究**【所属学会】**日本文化人類学会、東方学会、「宗教と社会」学会、the International Union of Anthropologicaland Ethnological Sciences、International Council for Traditional Music、障害学会

**【主要業績】**

［論文］

吉田ゆか子

2011 「仮の面と仮の胴――バリ島仮面舞踊劇にみる人とモノのアッサンブラージュ」『文化人類学』76(1)：11-32。

2011 「仮面が芸能を育む――バリ島トペン舞踊劇に注目して」床呂郁哉・河合香吏編『ものの人類学』pp.191-210，京都：京都大学学術出版会。

2009 「バリ島仮面舞踊劇トペン・ワリと『観客』――シアターと儀礼の狭間で」『東方学』117：156-139。

**【受賞歴】**

2013 日本文化人類学会奨励賞

2011 みんぱく若手セミナー賞

2009 東方学会賞

【2014年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

1）バリ島天女の舞におけるレプリカの仮面の利用に関する研究

2）観光ショーにおける仮面の利用に関する研究

3）バリ島における障害のある役者たちの演劇実践に関する研究

4）モノからみるバリ芸能文化のグローバル化に関する研究

・研究の目的、内容

1）ケテウェル村の仮面舞踊「天女の舞（topeng legong）」は長い歴史と際立った神聖性においてバリ社会で特別な価値を置かれている奉納芸であり、そこに使われる一連の仮面はご神体としてパヨガン・アグン寺院にて祀られている。この演目は芸術祭などの世俗のイベントに招かれることがあるが、仮面の神聖性を守るため、寺院はレプリカの仮面を作成しそちらで代用している。本研究は、このレプリカの仮面の位置づけがしばしば曖昧であり、かつオリジナルとの境界をかく乱するような側面を有していることに着目する。そして、このレプリカの仮面が天女の舞の実践や地元共同体にどのような影響をもたらしているのかを明らかにし、レプリカや類似品の制作や利用といった営みが有している豊かな可能性について考える。

2）バリの村落ではバロンの仮面がご神体として祀られている。バリでは、観光芸能ショーなど世俗の上演にはこれらご神体ではなく、神聖でない仮面を用いることが法令で定められている。しかし実際には、この観光用の仮面が、次第に神聖性を帯びたり、儀礼で地元のご神体の仮面と共演したりというケースがある。本研究は、観光ショー用に生み出された仮面が引き起こす様々な出来事や、人々と仮面の関わり合いを分析し、これまで人間中心的に論じられてきた芸能の観光資源化という現象を再考する。

3）バリの演劇では、身体・精神障害を模倣した表現が、頻繁にジョークに用いられる。役者（通常は健常者）は麻痺のある不規則な歩き方や、ナンセンスな物言いを演じ、劇に生き生きとしたニュアンスを添える。このバリで、実際に自ら障害を抱えつつ演劇活動をする者たちがいる。本研究は、彼らの演劇実践の実態、動機、活動実態、その社会的受容を明らかにし、身体の損傷の有り方の社会的文化的多様性を考察する。

4）バリ芸能が、世界各地で現地の芸能家によって実践されるようになった現象について、仮面や楽器といったモノの移動の側面から考察する。バリでは、楽器や仮面は神格（あるいはその力）を宿す存在である。これらのモノが新たな土地でどのように扱われ、またその土地のモノの配置（e.g. 住環境）や物質文化や音楽文化にどのように影響され、また現地の人々にどのように働きかけるのか。音や舞や演技だけでなく、それを支える物質文化をも含みこんだ「芸能文化」の越境の問題として、このバリ芸能のグローバル化の現象を問い直す。

・成果

1）昨年度の研究成果を海外の学会（国際伝統音楽評議会　東南アジアのパフォーミング・アーツ部会）にて発表し、英語のプロシーディングにまとめた。また、複製論と関連付けながら東京外国語大学の共同研究会にて口頭発表し、人類学的モノ研究の立場から様々なコメントと課題を得ることができた。

2）昨年度の研究成果を国際学会（IUAES）にて発表した。また、これまでの事例研究の成果を、文化人類学における資源化の理論と接合し、観光人類学に対して議論を開いてゆくための考察を行った。この成果については2015年４月の東京大学の現代人類学研究会における口頭発表にむけて準備した。

3）４月には、国立民族学博物館の共同研究会において、「少数者の表象のポリティクス」というテーマに関連させた口頭発表を行った。そして、上演が単に何かを表象する場であるのではなく、その演技を笑ったり笑わなかったりする観客や共演者たちと「障害」のある演者たちが関係を確かめ合ったり、新たな関係を築いたりする場であることを論じた。夏の調査では、芸能活動を展開する３つの障害者団体のリーダーおよびメンバーにインタビューを行ったほか、上演のビデオ記録および即興劇中の台詞の文字起こしと翻訳を行った。また、健常者の役者、劇団のスタッフや支援者といった周囲の人々のインタビューも行った。これまでの成果を、協力者の田中みわ子氏と共に障害学会でポスター発表し、障害学の立場からの様々なコメントを得ることができた。

4）本年度は、３つの米国のガムランチーム（Galak Tika/ Sekar Jaya/ University of Hawaii）を訪れ、活動状況を調査した。バリの音楽的形式や文化的な要素を取り入れる度合いは、チームによって大きな幅があったが、どのチームにおいてもある程度バリのモノをめぐる信仰を尊重し、楽器への供物の献上などの実践がみられることがわかった。特にSekar Jayaでは社を建て、祈りの場とするなど、本研究にとって興味深い活動がいくつか見られた。また香港大学のチームに関しても指導者にインタビューすることができた。ジャ

カルタ調査では、バリ芸能におけるバリ・ヒンドゥ的な要素（モノをめぐる信仰もここに含まれる）に新たに解釈が加えられ、大多数を占めるムスリムの生徒たちに受け入れられやすいものへと再編されている側面があることがわかった。また、バリ調査ではゴン・クビャール（ガムランの最も一般的な形式）誕生100周年記念イベントを参与観察した。国内では阿佐ヶ谷バリ舞踊祭および富岡八幡宮の大祭等、主に神社や寺という空間で実施されるバリ芸能イベントを観察した。日本のバリ芸能活動におけるこれらの宗教的な空間の活用のあり方について考察し、翌年の国際伝統音楽評議会での発表へむけて準備を行った。

◎出版物による業績

［共著］

吉田ゆか子

2015 「フィールドでの芸能修行――出来事を引き起こすことと特殊例となること」床呂郁哉編『人はなぜフィールドに行くのか――フィールドワークへの誘い』pp.110-131，東京：東京外国語大学出版会。

［論文］

Yoshida, Y.

2015 How Replicated Masks Work in Balinese Society: The Case of Topeng Legong. In Mohd. Anis Md. Nor（ed.）*Proceedings of the 3rd Symposium of the ICTM Study Group on Performing Arts of Southeast Asia*, Institute Seni Indonesia Denpasar, Bali, Indonesia［査読有］.

［その他］

吉田ゆか子

2014 「文化遺産は誰のもの？――越境する人形劇ワヤン」『月刊みんぱく』38(7)：14-15。

2014 「旅・いろいろ地球人　食べる④　1人で黙々、という作法」『毎日新聞』毎日新聞8月21日夕刊。

2014 「評論展望　モノの人類学から芸能を考える――バリ島仮面舞踊劇トペンを手がかりとして」『民博通信』145：2-7。

2014 「旅・いろいろ地球人　驚く②　君は何曜日生まれ？」『毎日新聞』3月26日夕刊。

◎口頭発表・展示・その他の業績

**・共同研究会での報告**

2014年4月12日　「バリの障害者の演劇活動にみる表象のポリティクス――笑いとインペアメントの視点から」『表象のポリティックス――グローバル世界における先住民／少数者を焦点に』

2015年1月31日　「芸能研究とマテリアリティの人類学の交差点――研究会の主旨と背景」『演じる人・モノ・身体――芸能研究とマテリアリティの人類学の交差点』

**・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告**

2014年5月17日　'How Masks Made for Tourist Show Work in Balinese Society: Rethinking Balinese Cultural Tourism.' International Union of Anthropological and Ethnological Science Inter-Congress 2014, Makuhari Messe, Chiba, Japan

2014年6月13日　'How Replicated Masks Work in Balinese Society: The Case of Topeng Legong,' International Council for Traditional Music, Study Group on Performing Arts of Southeast Asia, Institute Seni Indonesia Denpasar,

2014年11月8日　ポスター発表「インペアメントをもつ身体と笑い――バリ島における演劇実践を事例として（田中みわ子との共同発表）」障害学会、沖縄国際大学

2014年12月14日　「複製がつむぐ天女の舞――インドネシア・バリ島の事例から」東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同研究会『「もの」の人類学的研究(2)人間／非人間のダイナミクス』東京外国語大学

2015年3月23日　'Human and Non-human Agents in Topeng Dance Drama in Bali.' Exchange Lecture on Culture and Society in Asia and Africa, University of Malaysia Sabah and Tokyo University of Foreign Studies

**・展示**

東南アジア展示新構築

**・広報・社会連携活動**

2015年2月15日　「インドネシア・バリ島の聖獣バロンと魔女ランダのいる暮らし――宗教儀礼から観光ショーまで」第372回みんぱくウィークエンド・サロン

◎調査活動

・**国内調査**

2014年５月30日～６月１日―東京（ガムランスタジオ音の森演奏発表会の調査）

2014年８月２日～８月４日―東京（阿佐ヶ谷バリ舞踊祭の調査）

2014年８月15日～８月16日―東京（富岡八幡宮におけるバリ舞踊の奉納に関する調査）

・**海外調査**

2014年６月13日～７月16日―インドネシア（バリ芸能文化のグローバル化に関する人類学的研究のための現地調査、国際伝統音楽評議会国際学会において研究発表及び情報収集）

2014年８月22日～９月14日―香港、インドネシア（香港におけるインドネシア芸能実践に関する情報収集及びバリ島における障害のある役者たちの演劇実践に関する人類学的研究のための現地調査）

2014年11月11日～11月22日―アメリカ合衆国（米国を中心とした民族音楽学の動向調査）

2015年２月15日～３月３日―アメリカ合衆国（米国においてバリ芸能実践に関する調査、ハワイ大学においてインドネシア芸能研究に関する動向調査）

◎上記以外の研究活動

・**人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など**

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 共同利用・共同研究課題「『もの』の人類学的研究(2)――人間／非人間のダイナミクス」（研究代表者：床呂郁哉）共同研究員、科学研究費補助金（挑戦的萌芽研究）「音響解析を用いたインドネシア・バリ島のガムランの変遷」（研究代表者：塩川博義）研究協力者

・**民間の奨学金および助成金からのプロジェクト**

公益財団りそなアジア・オセニア財団 調査研究・国際交流活動助成 研究課題「バリ島における障害のある役者たちの演劇実践に関する人類学的研究」代表

◎社会活動・館外活動等

・**非常勤講師**

岡山大学「文化人類学」（集中講義）

## プロジェクト研究員

### 相良啓子［さがら　けいこ］―――――――

［論文］

Palfreyman, N., K. Sagara and U. Zeshan

2015 Methods in Carrying out Language Typological Research. In E. Orfanidou, B. Woll and G. Morgan (eds.) *Research Methods in Sign Language Studies: A Practical Guide, 173–192*, West Sussex: Wiley-Blackwell.

**【2014年度の活動報告】**

◎各個研究

**・研究課題**

日本手話の数詞のバリエーションについて――関東地方と近畿地方の数詞「10」、「100」、「1000」に焦点を当てて

**・研究の目的、内容**

日本手話の数詞「10」、「100」、「1000」にみられる各２種類の変種に焦点を当て、関東地方と近畿地方でどちらの表現がどのように使用されているのか、またその現象にはどのような社会的要因が影響しているのか調査する。さらに、関連する表現について、日本手話と同じグループに属するとされている台湾手話と韓国手話にみられる分布についても例を記述し、整理する。なお、ここでは関東地方で主としてみられる変種を TEN-1、HUNDRED-1、THOUSAND-1、近畿地方で主としてみられる変種を TEN-2、HUNDRED-2、THOUSAND-2と呼ぶことにする。

**・成果**

関東地方と近畿地方で使われる「1000」の表現と、近畿地方における「10」、「100」、「1000」の表現の違いについて、どのような社会要因があるのかをみるために、Rbrul を用いて検定を行った。「1000」の表現については、関東地方では年齢や性差に有意差が認められなかったが、近畿地方のろう者が THOUSAND-1よりも THOUSAND-2の方を使用する傾向があることに対して、有意差（$P < 0.00002$）が認められた。また、近畿地方については、「10」、「100」、「1000」３つの表現のうち特に「1000」について有意差が認められ（$P < 3.67 \times 10-14$）、「10」、「100」については、年齢による有意差も認められた（$P < 0.048$）。46才以上に TEN-2、HUNDRED-2の表現を用いる人が多く、45才以下ではあまり用いられていないという結果が出た。

佐々木（2007）によると、台湾では日本時代、台北では東京の聾学校の教師、台南では大阪の聾学校の教師により、手話が普及した。数詞にもこの背景が反映されており、台北では TEN-1、HUNDRED-1、THOUSAND-1が、台南では TEN-2、HUNDRED-2、THOUSAND-2が使用されていることが確認できた。韓国手話については、韓国内における地域による違いは得られなかったが、文脈により、TEN-1もしくは TEN-2が使い分けられることがわかった。

◎出版物による業績

［M.Phil. Thesis］

Sagara, K.

2014 The Numeral System of Japanese Sign Language from a Cross Linguistic Perspective. University of Central Lancashire.

［論文］

Palfreyman, N., K. Sagara and U. Zeshan

2015 Methods in Carrying out Language Typological Research. In E. Orfanidou, B. Woll and G. Morgan (eds.) *Research Methods in Sign Language Studies: A Practical Guide, 173–192.* West Sussex: Wiley-Blackwell.

［その他］

相良啓子

2014 「旅いろいろ地球人　組織⑦　手話で広がる世界」『毎日新聞』11月６日夕刊。

2014 「異聞逸聞　耳が聞こえないからコミュニケーション障害か？」『月刊みんぱく』38(12)：21。

Sagara, K.

2014 Numeral Systems in Sign Languages Across the World. *MINPAKU Anthropology Newsletter* 39: 5–7.

◎口頭発表・展示・その他の業績

**・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告**

2014年10月５日　「手話言語類型論からの知見――いくつかの意味領域に対する通言語的調査の方法論」機関研究効果公開　第３回手話言語と音声言語に関する国際シンポジウム『言語の記述・記録・保存と通モード言語類型論』

**・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告**

2014年５月１日～３日　（With Palfreyman, N.）‘Counting the Difference: Variation in the Number Systems of Japanese, Taiwan and South Korean Sign Language,’ New Ways of Analysing Variation Asia-Pacific 3, Victoria University, Wellington, New Zealand

2014年８月28日～29日　‘Historical Relationship between the Numeral Signs of Japan, Taiwan and South Korea Sign Languages,’ The International Summer School 2014: Current Issues in Sign Language Linguistics（CISL), Charles University, Prague, Czech

2014年11月２日　「日本手話の数詞のバリエーションについて――関東地方と近畿地方の数詞『10』『100』『1000』に焦点を当てて」日本手話学会第40回大会、タワーホール船堀（東京）

2015年１月31日　パネリスト「パネルディスカッション　いま、なぜろう通訳者なのか」特定非営利活動法人手話教師センター主催『ろう通訳シンポジウム』桑山ビル（名古屋）

2015年２月１日　パネリスト「パネルディスカッション　いま、なぜろう通訳者なのか」特定非営利活動法人手話教師センター主催『ろう通訳シンポジウム』関西学院大学梅田キャンパス

2015年２月14日　パネリスト「パネルディスカッション　いま、なぜろう通訳者なのか」特定非営利活動法人手話教師センター主催『ろう通訳シンポジウム』フラクシア品川クリスタルスクエア（東京）

**・研究講演**

2014年11月11日　「世界の手話における数のしくみ、日本手話系言語における数表現の変化」2014年度東北大学全学教育リレー講義『手話の世界と世界の手話言語☆入門』東北大学川内北キャンパス

◎調査活動

**・海外調査**

2014年６月26日～７月22日―イギリス（日本手話、台湾手話、韓国手話の歴史言語学研究及びデータベースに関する打ち合わせ）

2014年８月23日～９月１日―チェコ（手話言語学に関する夏期講座の調査）

◎上記以外の研究活動

**・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など**

国立民族学博物館学術手話通訳養成事業運営委員

## 拠点研究員

### ■人間文化研究機構地域研究推進センター・「現代インド地域研究」国立民族学博物館拠点

### 竹村嘉晃［たけむら　よしあき］――研究員

**【学歴】**日本大学芸術学部演劇学科卒（1995）、沖縄県立芸術大学大学院音楽芸術研究科音楽学専攻修士課程修了（2001）、大阪大学大学院人間科学研究科人間科学専攻博士前期課程修了（2003）、大阪大学大学院人間科学研究科人間科学専攻博士後期課程修了（2012）**【職歴】**独立行政法人日本学術振興会特別研究員（DC2）（2005）、大阪大学国際企画推進本部特任研究員（2008）、和歌山県立医科大学保健看護学部非常勤講師（2009-2013）、国立民族学博物館外来研究員（2010-2014）、奈良大学社会学部非常勤講師（2011-2012）、国立民族学博物館共同研究員（2011-2014）、人間文化研究機構地域研究推進センター・現代インド地域研究国立民族学博物館拠点研究員（2014）**【学位】**博士（人間科学）（大阪大学大学院 2012）、修士（人間科学）（大阪大学大学院 2003）、修士（音楽学）（沖縄県立芸術大学大学院2001）**【専攻・専門】**芸能人類学、南アジア地域研究**【所属学会】**日本文化人類学会、日本南アジア学会、舞踊学会、民族藝術学会、日本スポーツ人類学会、東洋音楽学会、The Congress on Research in Dance

**【主要業績】**

［博士論文］

竹村嘉晃

2012 「神霊に生きる人びとの『現在』――南インド・ケーララ州のテイヤム祭祀の実践者たちをめぐる民族誌的研究」大阪大学大学院人間科学研科。

［論文］

竹村嘉晃

2014 「インド・ケーララ州出身者たちの神霊を介した故地とのつながり」細田尚美編『湾岸アラブ諸国における移民労働者――「多外国人国家」の出現と生活実態』pp.229-250，東京：明石書店。

2012 「鉄道局組合が祀るローカル神――南インド・ケーララ州における神霊信仰の隆盛と『ダルシャン運行』」『民族藝術』28：92-100。

**【2014年度の活動報告】**

◎各個研究

**・研究課題**

南インド社会における身体文化とその担い手たちの社会的世界の変容に関する研究

**・研究の目的、内容**

本研究の目的は、南インドのケーララ州北部に伝わるテイヤム祭儀を伝統的職業として担う不可触民の実践者たちを照射し、現代社会の動態や祭儀を取り巻く巨視的な位相と、彼らの生計活動や社会とのつながりといった微視的な要素がいかに実践レベルと関係し、影響を与えているのかを彼らの生活世界に足場をおく民族誌的記述から解明することにある。この思考過程を通じて神霊祭祀を「神秘化」することなく、審美的要素や芸態だけを語る芸能論に陥るのでもなく、「浄」「不浄」のカースト・ヒエラルキーのもとに「虐げられた人びと」として枠づけることもなく、グローバル化のなかでわれわれと同時代を生きる彼らの存在と生の営みへの理解を深めることを目指す。また、人類学的視点と舞踊・芸能研究的観点を融合させた方法論のもとで、市場経済原理に対する実践者たちの適応戦略の実態を調査し、彼らが技芸や社会的形態を維持しながらもその実践を創発・変容させていく過程を実践レベルから捉える芸能民族誌の新たな方法論を提示することも試みる。

**・成果**

南インド・ケーララ州北部のローカルなヒンドゥー社会では、テイヤムと呼ばれる神霊祭祀を照射し、カーストの伝統的職業として神霊の役割を担う実践者集団に密着した長期のフィールドワークをもとに、現代ケーララ社会におけるテイヤム祭儀の受容動向を多角的に考察した。また、実践者たちの間で生じる軋轢や世代間の齟齬、かれらの社会的世界の変容について、祭儀を取り巻くマクロな動向と技芸などのミクロな実践レベルと関連づけながら、神霊に生きる今日の「不可触民」の生の姿を民族誌として『神霊を生きること、その世界』（2015年５月刊行）を執筆した。

◎出版物による業績

［論文］

竹村嘉晃

2014 「インド・ケーララ州出身者たちの神霊を介した故地とのつながり」細田尚美編『湾岸アラブ　諸国における移民労働者――「多外国人国家」の出現と生活実態』pp.229-250，東京：明石書店。

［書評］

竹村嘉晃

2015 「書評　山本達也『舞台の上の難民――チベット難民芸能集団の民族誌』」『現代インド研究』5：261-264。

◎口頭発表・展示・その他の業績

**・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告**

2015年１月24日 「ローカルの伝統からナショナル、ハイブリットなコンテンポラリーまで――シンガポールにおける〈インド芸能〉の発展と文化政策」MINDAS 2014年度第４回合同研究会、国立民族学博物館

**・共同研究会**

2015年２月21日 「〈インド舞踊〉は国家と踊る――シンガポールにおける文化・芸術政策とインド芸能の発展」『東南アジアのポピュラーカルチャー――アイデンティティ、国家、グローバル化』

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2014年５月18日　‘Transmission of Local Ritual Performance in the Kerala Diaspora and its Impact of the Life: World of the Practitioners,’ IUAES 2014 with JASCA: the Future with/or Anthropologies, Makuhari Messe, Chiba, Japan

2014年６月22日　「神霊祭祀という文化イベント／ビジネス――湾岸諸国で暮らすケーララ移民の宗教実践と認識の齟齬」、「宗教と社会」学会第22回学術大会パネルセッション『グローバル資本主義を背景とした宗教実践の新展開――南アジア芸能の場合』天理大学

2014年12月７日　‘Positioning Bharatanatyam in Singapore in the 21th Century: Ethnic/National/South Asian or World Dance?’ International Conference on Bharatanatyam in Singapore 2014: the Emergence, Development & Future Directions of Bharatanatyam in Singapore & Malaysia, National University of Singapore, Singapore

◎社会活動・館外活動

・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

人間文化研究機構地域研究推進事業 現代インド地域研究国立民族学物館拠点 拠点構成員，国立民族学博物館若手共同研究「演じる人・モノ・身体――芸能研究とマテリアリティの人類学の交差点」（代表者：吉田ゆか子）共同研究員、科学研究費補助金（基盤研究（B））「インドにおける新しいメディア状況と芸能のグローバル化：文化の環流の人類学的研究」（研究代表者：松川恭子）研究分担者

◎社会活動・館外活動等

・非常勤講師

立命館大学産業社会学部非常勤講師、「スポーツ人類学」「スポーツ方法実習」、摂南大学外国語学部非常勤講師、「多文化の共生」「東南アジア文化論」、関西大学文学部非常勤講師、「南アジア・内陸アジア論１・２」

◎学会の開催

2014年７月19日～23日　8th International Symposium of the International Council for Traditional Music (ICTM) “Music and Minorities” Study Group, National Museum of Ethnology, 実行委員／事務局長

## 豊山亜希［とよやま　あき］――研究員

1977年生。**【学歴】**近畿大学文芸学部文化学科卒（2000）、関西大学大学院文学研究科哲学専攻修士課程修了（2002）、関西大学大学院文学研究科哲学専攻博士課程後期課程修了（2008）**【職歴】**関西大学文学部総合情報学部非常勤講師（2007-2012）、関西大学大学院文学研究科「EU-日本学教育研究プログラム」ポストドクトラル・フェロー（2008）、日本学術振興会特別研究員（PD）（2009）、国立民族学博物館外来研究員（2012-2014）、宮城学院女子大学附属キリスト教文化研究所客員研究員（2013-現在）、人間文化研究機構地域研究推進センター・現代インド地域研究国立民族学博物館拠点研究員（2014）**【学位】**博士（文学）（関西大学 2008）**【専攻・専門】**インド美術史 1）植民地インドにおける近代化概念の形成と美術の大衆化、2）戦間期の南アジア・東南アジアにおける日本製タイルの受容実態、3）古代インドにおける仏教石窟寺院の消長と社会変容**【所属学会】**美術史学会、美学会、日本南アジア学会、民族藝術学会、社会経済史学会

**【主要業績】**

［論文］

豊山亜希

2014　「ハヴェーリーにおける『インド的近代』の表象――植民地インドにおける商業集団マールワーリーの変わりゆくアイデンティティ」『多民族社会における宗教と文化』17：3-23。

2012　「『土着の伝統』と『複製の近代』――ハヴェーリー壁画にみる英領インド期の大衆美術とマールワーリー・アイデンティティ」『南アジア研究』24：56-80。

Toyoyama, A.

2012　Asian Orientalism: Perceptions of Buddhist Heritage in Japan. In P. Daly and T. Winter (eds.) *Routledge Handbook of Heritage in Asia*, pp.339-349. Oxon: Routledge.

【2014年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

植民地インドにおける視覚イメージの消費と日本製タイルの受容に関する美術史的研究

・研究の目的、内容

本研究の目的は、両大戦間期のインドにおいて、日本製の装飾タイルが都市部の中産階級住宅を中心に愛好された事実に注目し、その実態を明らかにすることによって、消費文化とアイデンティティ表象の相関性を理解することにある。

経済史の領域においては近年、当該時期の日印貿易について詳細な研究が進んでいる。しかし、陶磁器の一品目であるタイルへの注目度は決して高くなかった。実際にはタイルは、綿製品・絹製品・マッチなど他の主要輸出品と比較すると、消費市場における現存率がきわめて高く、実証性の高い研究資料である。

本研究においては特に、1) 現存するタイル張建造物の来歴とタイルの施工状況、2) タイル表面に施されたデザイン、3) タイル裏面（解体された建造物からの収集例によって確認可能）に施された商標、の 3 点に視座を定め、日本製タイルの消費者層とその嗜好性、および戦前期日本のタイル業界におけるインド市場への販売戦略を分析する。これらの考察を通して、両大戦間期という国際情勢の転換期において、インド社会のアイデンティティはいかなる変容を遂げ、そこに日本がどのように介在したのかを、表象文化の観点から明らかにする。

・成果

「現代インド地域研究」推進経費に基づいて、2015年 2 月から 3 月にかけて、インド、マレーシア、シンガポールにおいて調査を実施した。日本製タイルは、インドだけでなく東南アジア一帯にも広く流通したことが知られるため、今後の比較研究を視野に入れて調査対象に含めた。いずれの地域においてもイギリス支配期（19世紀から20世紀前半）にいわゆる植民地都市に建てられた歴史建造物について、その様式的展開とタイルの使用に関する調査を実施した。その結果、19世紀に対象地域で受容が進んだイギリス製タイルと比べると、両大戦間期に市場を席巻した日本製タイルは、移住商人など新興の中産階級に消費者層が集中していたこと、また消費者が現地の文化的伝統をタイルのデザインに求めていたことが実体的に把握された。

また同じ経費に基づいて、2014年10月にエジンバラ大学南アジア研究センターにおいてセミナー発表を行い、本研究の成果の一端を紹介した。さらに、科学研究費補助金（若手研究（B））「植民地インドにおける商業カーストの邸宅建築に関する基礎的研究」（研究代表者：豊山亜希）に基づき、2014年 8 月から 9 月にイギリスのスコットランド国立図書館および大英図書館において文献調査を実施した。特に、植民地政府が刊行した衛生環境や都市計画に関する報告書を重点的に調査した。その結果、19世紀後半に疫病が多発したことを受けて、都市の公衆衛生向上が推進された際に、タイルの積極的使用が推奨されたことを示す資料を多数収集することができた。次年度は、その成果の論文刊行を目指す。

◎出版物による業績

［論文］

豊山亜希

2014 「ハヴェーリーにおける『インド的近代』の表象――植民地インドにおける商業集団マールワーリーの変わりゆくアイデンティティ」『多民族社会における宗教と文化』17：3-23。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・民博研究懇談会

2014年12月10日 「植民地インドにおける日本製マジョリカタイルの受容――公衆衛生、消費、アイデンティティ表象」第262回民博研究懇談会

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2014年 5 月25日 「大戦間期のインド建築における日本製マジョリカタイルの受容とその記号性」社会経済史学会第83回全国大会、同志社大学

2014年 7 月22日 「公衆衛生と民族意識の表象――戦間期マールワーリーの日本製マジョリカタイル受容」科学研究費補助金（基盤研究（B））「インド商業集団（マールワーリー）の研究――実体と表象への学際的アプローチ」（研究代表者：中谷純江）研究会、追手門学院大阪梅田サテライト

2014年 9 月17日 「植民地インドと日本製〈マジョリカ〉タイル――公衆衛生と民族意識をめぐる美学」2014年度現代インド・南アジアセミナー、広島大学

2014年10月23日 ‘Aesthetics, Sanitation, and Nationalism: Japanese Majolica Tiles in Late Colonial India,’ “Seminar Series of the Centre for South Asian Studies,” The University of Edinburgh,

Edinburgh, United Kingdom

2014年12月13日 'Japanese Majolica Tiles in the Making of Indian Modernism and Nationalism,' "SNU-INDAS Conference," India Habitat Centre, New Delhi, India

2015年１月22日 「植民地インドにおける近代性の表象と変容――日本製タイルの受容に注目して」NIHU 地域研究推進センター研究員研究会、人間文化研究機構

2015年３月22日 「石窟寺院をめぐる西デカンの長期の景観変容――立地環境・建築様式・装飾形式の分析から」2014年度マハーラーシュトラ研究会例会、東京外国語大学本郷サテライト

◎調査活動

**・国内調査**

2014年４月28日―東京（19世紀から20世紀前半において日本およびイギリスで製作された美術工芸資料の熟覧調査）

**・海外調査**

2014年８月20日～９月４日―イギリス（植民地インドにおけるタイルの普及拡大に関する文献調査）

2014年10月21日～10月31日―イギリス（エジンバラ大学南アジア研究センターにおけるセミナー発表および植民地インドにおけるタイルの普及拡大に関する文献調査・資料熟覧調査）

2014年12月13日～12月16日―インド（「現代インド地域研究」推進事業の一環である INDAS-SNU Conference への参加および研究発表）

2015年２月12日～３月４日―インド、マレーシア、シンガポール（イギリス統治下のアジアにおけるタイルの普及と日本製タイルの受容実態に関する調査）

◎上記以外の研究活動

**・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など**

科学研究費（若手研究（B））「植民地インドにおける商業カーストの邸宅建築に関する基礎的研究」研究代表者、科学研究費（基盤研究（B））「インド商業集団（マールワーリー）の研究――実体と表象への学際的アプローチ」（研究代表者：中谷純江）研究分担者、国立民族学博物館文化資源共同研究員、宮城学院女子大学附属キリスト教文化研究所客員研究員

## 客員教員

### ■先端人類科学研究部・文化動態研究部門

### STIRK, Ian Christopher［スターク、イアン・クリストファー］―――― 教授

1946年生。**【学歴】**ケンブリッジ大学卒（1967）、北ウェールズ大学教職専門課程修了（1969）、エセックス大学言語学部博士課程単位取得（1978）**【職歴】**アンカラ大学講師、トリポリ大学（リビア）講師、エセックス大学講師を経て大阪外国語大学外国人教師（1980）、国立民族学博物館併任助教授（1994）、国立民族学博物館先端人類科学研究部客員助教授（2004）**【学位】**M. A.（エセックス大学 1976）

**【主要業績】**

［論文］

Stirk, I. C.

2005 「Restoring the naturalness of deduction」『大阪外国語大学英米研究』29：43-61。

2004 「Naturally ad absurdum」『大阪外国語大学英米研究』28：99-109。

2003 「On the Welsh verb system」『大阪外国語大学英米研究』27：19-32。

**【2014年度の活動報告】**

◎各個研究

**・研究課題**

対照言語学の研究

・研究の目的、内容

自然言語の統語論的解析、類推（analogy）構成文法の成立過程を考察する。

・成果

今年度も、自らの考えのいくつかを統語論（syntax）およびウェールズ語教授法に適用してきた。その結果を論文としてまとめたものを自身のホームページに掲載している。

Rhagarweiniad i' r Iaith Gymraeg ac Ieithyddiaeth ― Introduction to the Welsh Language and Linguistics（ウェールズ語およびウェールズ語言語学入門、 www.iancstirk.com/Teaching//Welsh.html） Braslun o'r Ynganiad ― Sketch of the Pronunciation（ウェールズ語発音の概略、 www.iancstirk.com/Teaching/Iaith_Gymraeg_Braslun_Ynganiad.pdf）

Gwers 1 ― Lesson 1（レッスン１、www.iancstirk.com/Teaching/Iaith_Gymraeg_1.pdf）Social expressions（挨拶などの社会生活で使われる表現、www.iancstirk.com/Teaching/Social_expressions.pdf）

## ■先端人類科学研究部・応用民族学研究部門

### 中山京子［なかやま　きょうこ］―――― 教授

1972年生。**【学歴】**東京学芸大学教育学部卒（1990）、東京学芸大学教育学研究科修士課程修了（1997）**【職歴】**静岡県公立小学校教諭、東京学芸大学附属世田谷小学校教諭を経て、京都ノートルダム女子大学講師（2005）、京都ノートルダム女子大学准教授（2009）、帝京大学教授（2013）**【学位】**学術博士（総合研究大学院大学 2010）**【専攻・専門】**社会科教育　国際理解教育**【所属学会】**日本国際理解教育学会、日本社会科教育学会、全国社会科教育学会、日本移民学会、異文化間教育学会

**【主要業績】**

［単著］

中山京子

2012 『先住民学習とポストコロニアル人類学』東京：御茶の水書房。

［編著］

中山京子編著

2012 『グアム・サイパン・マリアナ諸島を知るための54章』東京：明石書店。

森茂岳雄・中山京子編著

2008 『日系移民学習の理論と実践――グローバル教育と多文化教育をつなぐ』東京：明石書店。

**【受賞歴】**

2012　冲永壮一文化学術奨励賞

**【2014年度の活動報告】**

◎各個研究

・研究課題

文化人類学と教育をつなぐ国際理解教育

・研究の目的、内容

本研究では、以下の２つを目的とする。

1）文化人類学と教育が重なる領域「教育人類学」に関する文献を継続して収集し、これまで内外で示されてきた概念および領域の整理をする。その検討をふまえて、現代の「教育人類学」の定義、整理を試みる。

2）1）の中から特に国際理解教育に関わる方法論・内容論に着目し、具体的な教材開発やワークショップ、交流活動を行う。

以上の目的達成にむけて、本館展示を本研究の視点から調査する他、民博研究者へのヒアリングを行う。また、具体的に以下の研究活動を計画している。

・共同研究「文化人類学と教育をつなぐ国際理解教育」を申請し、人類学と教育にかかわる専門家による議論を集中的に行う。

・日本国際理解教育学会特定課題研究「海外研修・スタディツアーと国際理解教育」（2011～2013年度）チーム

を中心として、教育活動としてのフィールドワークの在り方や教材としての資料の提示や扱い方ついての議論を継続する。

・８月５日開催の国立民族学博物館と日本国際理解教育学会共催による「博学連携教員ワークショップ in 民博――学校と博物館でつくる国際理解教育」（文化資源プロジェクト）においては、「学校と博物館の連携」という枠に限定せず、教育と文化人類学と教育をつなぐ方法を思考するために、これまでのワークショップの在り方を批判的に検討し、問題点や課題の抽出を試みる。

・民博でリニューアルされた東アジア展示を中心に、展示の構成や内容を分析し、文化人類学と教育をつなぐ「国際理解教育」として、どのように展示を活用することが可能か、教育現場でどのようなテーマで教材開発や授業をすることができるか、検討をする。

・マリアナ諸島先住民族チャモロのアイデンティティ育成活動の一つとなっている「チャモロダンス」についての調査活動を継続し、教育人類学の視点から論考する。

外部資金の獲得に関しては、科学研究費補助金「グローバル時代における移民学習の教材開発――ポストコロニアルの視点から」（代表：森茂岳雄、2012～2016年度）と連携して本研究を展開することとする。

**・成果**

共同研究「文化人類学と教育をつなぐ国際理解教育」を申請し不採択となったが、研究協力メンバーと随時意見交換を行い、学際的な研究の課題と可能性を検討することができた。

日本国際理解教育学会特定課題研究「海外研修・スタディツアーと国際理解教育」（2011～2013年度）チームを中心として、教育活動としてのフィールドワークの在り方や教材としての資料の提示や扱い方ついての議論を継続し、「スタディツアーにおける学びと変容――グアム・スタディツアーを事例に」国際理解教育学会編集『国際理解教育』20号，明石書店，pp.51-60.（共著）にまとめた。

８月５日開催の国立民族学博物館と日本国際理解教育学会共催による「博学連携教員ワークショップ in 民博――学校と博物館でつくる国際理解教育」においては、ワークショプ10回の成果と課題を確認する作業を開始した。民博で行うワークショップの意味と教員研修の意味を再度検討することにより、実践的研究として分析をする必要が明らかになった。

７月と２月に、日本と歴史的、経済的に関わりが深いものの、学校教育ではほとんど取り上げられていないグアムにおいて、教育人類学の視点からフィールドワークを行った。特に、チャモロダンスの教育的取り組みについて参与観察し、文化と伝統の再生について検討することができた。

外部資金の獲得に関しては、科学研究費補助金「グローバル時代における移民学習の教材開発――ポストコロニアルの視点から」（代表：森茂岳雄、2012～1016年度）と連携し、移民を事例に人類学と教育をつなぐ教材の検討を行った。

◎出版物による業績

［論文］

中山京子

2014 「スタディツアーにおける学びと変容――グアム・スタディツアーを事例に」『国際理解教育』（国際理解教育学会紀要）20：51-60［査読有］。

◎口頭発表・展示・その他の業績

**・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告**

2014年７月23日 ‘Educational Actvities for Connecting Japan with Guam,’ “History Methods: Teaching with Historic Places”, 2014 Guam Teacher Institute, Pacific Historic Parks, Latte of Freedom, Guam

2014年11月22日 ‘The Prospect if Global Citizenship Education in the 21st Centry and the Task of Education for International Understanding.’ The 15th Annual Conference on Education for International Understanding at APCEIU, Korea

**・研究講演**

2014年９月29日 「グアムの歴史と文化」埼玉県立志木高等学校

2014年10月９日 「グアムの歴史と文化」大阪府立茨木西高等学校

2014年12月14日 「カルタ・紙芝居で学ぶ移民の歴史と多文化共生」八王子国際協会主催『市民のための国際理解講座』八王子学園都市センター

2015年２月６日 「多文化共生をめざす内なる国際理解教育への一歩」八王子国際協会主催『教員のための国際理解教育ワークショップ』八王子学園都市センター

・研究公演

2015年２月15日　‘East meets West.’（チャモロダンス公演）チャモロ文化フェスティバル“Dinaña Migagof Chamorro Dance Festival” Guam Historical Village at Gef Pa’go Park in Historic Inalajan

2015年２月16日　‘A Cultural Exchange Gathering at UOG with Professor Michael Lujan Bevacqua.’（チャモロダンス公演）Organiser: Dr. Micgael Lujan Bevacqua, University of Guam

2015年２月16日　‘East meets West.’（チャモロダンス公演）Micronesia Shopping Mall

## 山内直樹［やまうち　なおき］――教授

1947年生。**【学歴】**早稲田大学第二文学部卒業（1977）**【職歴】**山内編集事務所設立（1984）、季刊文化誌『is』編集長（1984）**【所属学会】**文化資源学会

**【主要業績】**

［共著］

山内直樹・辛島 昇・坂田貞二他

1981 『インド』東京：実業之日本社。

［編著］

山内直樹編

1998 『ぬっとあったものと、ぬっとあるもの』東京：ポーラ文化研究所。

［論文］

山内直樹

1976 「中部インド・ビームベトカの岩壁画群Ⅰ～Ⅲ」『考古学ジャーナル』121，124，125。

**【2014年度の活動報告】**

◎各個研究

**・研究課題**

広報誌のあり方に関する研究

**・研究の目的、内容**

現代的なテーマ、ヴィヴィッドな話題・問題を取り上げ、また若手研究者（書き手）の発掘により誌面の活性化をはかる。また、紙媒体の特性を活かした誌面構成を考える。

**・成果**

特集で現代的なテーマ、問題を意欲的に取り上げたことにより、紙面が活性化した。「今」のことが取り上げられることによって内容がヴィヴィッドになり、ヴィジュアル面においても工夫があった。

## ■文化資源研究センター・民族学応用教育研究部門

## 中村嘉志［なかむら　よしゆき］――准教授

1971年生。**【学歴】**神奈川大学理学部情報科学科卒（1994）、電気通信大学大学院情報システム学研究科博士前期課程修了（1996）、電気通信大学大学院情報システム学研究科博士後期課程退学（1997）**【職歴】**電気通信大学大学院情報システム学研究科助手（1997）、独立行政法人産業技術総合研究所特別研究員（2002）、独立行政法人産業技術総合研究所研究員（2005）、芝浦工業大学大学院連携大学院客員助教授・客員准教授（2006）、独立行政法人産業技術総合研究所技術研究員（2010）、電気通信大学大学院情報システム学研究科非常勤講師（2010）、国立民族学博物館文化資源研究センター客員准教授（2010）、国士舘大学理工学部准教授（2011）**【学位】**博士（工学）（電気通信大学 2005）**【専攻・専門】**情報システム学、情報通信工学、メディア情報学**【所属学会】**情報処理学会、電子情報通信学会、人工知能学会、IEEE、ACM

【主要業績】

［分担執筆］

赤松幹之・荒井民夫・内藤 耕・村上輝康・吉本一穂監修

2012 『サービス工学 51の技術と実践』東京：朝倉書店。

［論文］

中村嘉志・濱崎雅弘・石田啓介・松尾 豊・西村拓一

2008 「個人端末をWeb支援システムIDへリンクする一手法の提案」『日本知能情報ファジィ学会誌』20(4)：130-141。

中村嘉志・並松祐子・宮崎伸夫・松尾 豊・西村拓一

2007 「複数の赤外線タグを用いた相対位置関係からのトポロジカルな位置および方向の推定」『情報処理学会論文誌』48(3)：1349-1360。

【受賞歴】

2003 Best Presentation Award, The 29th Annual Conference of the IEEE Industrial Electronics Society (IECON2003)

2003 優秀論文賞、情報処理学会マルチメディア、分散、協調とモバイルシンポジウム（DICOMO2003）

2002 野口賞（優秀デモンストレーション賞）、情報処理学会マルチメディア、分散、協調とモバイルシンポジウム（DICOMO2002）

【2014年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

インタラクティブセンシングのアプローチによる学術資料の情報提供に関する方法論的研究

・研究の目的、内容

昨年度に引き続き、情報展示新構築を推進するため、学術資料の情報提供を来館者に行うためのインタラクティブな情報支援システムの方法論および設計法について、情報工学の側面から実践的に研究・議論する。2012年度から手がけてきたリサーチデスクと呼ばれる机に埋め込み式のみんぱく資料と展示に関する情報支援システム：イメージ・ファインダーについて、利用状況分析を進め、学術研究発表を行うことを本年度の主な研究内容とする。また、引き続きシステムの拡充についても専任教員らと議論する。

・成果

2014年度では、2012年度で運用を開始した本館2階の探究ひろばの情報支援システム：イメージ・ファインダーの利用状況分析を工学的だけでなく社会学的な実験によっても進めた。具体的には、来館者のユーザとしての利用状況を第三者視点で記録して分析し、結果をまとめて2014年6月に開催された日本展示学会第33回研究大会にて対外的に学術研究発表を行った。また、社会学的な見地からシステムと広場の被験者実験を組み立て、2014年8月に実施した。2014年8月末より1年間、本務の在外研究により国内不在のため国立民族学博物館での実作業は進められてはいないが、8月の被験者実験で得られたデータの分析結果は、2015年6月に開催されるJSAI2015（第30回人工知能学会全国大会）にて共著者が発表予定である。これにより、国立民族学博物館の研究推進ならびに広報の一助をなした。

◎口頭発表・展示・その他の業績

2014年6月22日 「仮想的な構造展示手法を用いた展示物提示システムの定点観測による利用状況分析」（中村嘉志・Harry Vermeulen・高橋 徹・中川 隆・福岡正太・野林厚志）日本展示学会第33回研究大会、三重県総合博物館

◎社会活動・館外活動

・他の機関から委嘱された委員など

情報処理学会 ヒューマンコンピュータインタラクション研究会運営委員、日本ソフトウェア科学会第22回インタラクティブシステムとソフトウェアに関するワークショップ運営委員

・客員研究員

ドイツ人工知能研究センター（DFKI）客員研究員（2014年9月～2015年8月）

## 平井康之［ひらい　やすゆき］ 准教授

1961年生。**【学歴】**京都市立芸術大学デザインコース卒（1983）、英国王立芸術大学院修士課程修了（1992）**【職歴】**コクヨ株式会社本社設計部（1983）、コクヨ株式会社家具事業本部オフィス家具部商品開発課（1988）、コクヨ株式会社人事部人材開発課付（1990）、コクヨ株式会社オフィス家具事業本部商品開発部商品開発室主任（1992）、コクヨ株式会社オフィス家具事業本部商品開発部商品戦略グループ課長補佐（1995）、コクヨ株式会社オフィス家具事業本部商品開発部商品戦略グループ課長（1997）、IDEO Product Development Senior Designer（1997）、IDEO Product Development Grand Rapids Studio（米国）Senior Designer（1998）、九州芸術工科大学芸術工学部助教授（2000）、九州大学大学院芸術工学研究院助教授（2003）、九州大学大学院芸術工学研究院准教授（2007）**【学位】**修士（英国王立芸術大学院 1992）**【専攻・専門】**デザイン専攻**【所属学会】**日本インテリア学会、日本デザイン学会、芸術工学会

**【主要業績】**

［監修］

平井康之

2006 『インクルーシブデザインハンドブック』財団法人たんぽぽの家編，奈良：財団法人たんぽぽの家。

［共著］

ジュリア・カセム・塩瀬隆之・森下静香・水野大二郎・小島清樹・荒井利春・岡崎智美・梅田亜由美・小池 禎・田邊友香・木下洋二郎・家成俊勝・桑原あきら著

2014 『インクルーシブデザイン』京都：学芸出版社。

［論文］

Elokla, N., Y. Hirai and Y. Morita

2010 Emotion Meassurement: A Proposal for Measuring User's Kansei. *Journal of Kansei Engineering and Emotional Research International Conference*, pp.2281-2292.

**【受賞歴】**

2014 2014年度グッドデザイン賞（研究活動・研究手法カテゴリー）
2014 第8回キッズデザイン賞（子ども視点の安全安心デザイン 子ども部門）
2013 「ユニバーサル都市・福岡賞　みんなにやさしい部門」最優秀賞（こども × くすり × デザイン実行委員会）
2013 The Include Asia Conference Awards「Champion of Inclusive Design」賞
2013 IAUD アウォード2013　入賞「みんなの美術的プロジェクト」
2010 第4回キッズデザイン賞（ソーシャルキッズサポート部門）
2009 2009年度グッドデザイン賞（パブリックコミュニケーションデザイン部門）
2009 第3回キッズデザイン賞（コミュニケーションデザイン部門）
2008 2008年度グッドデザイン賞（子どもの服薬に関するデザイン研究、こども＋くすり＋デザイン）
2008 第2回キッズデザイン賞（リサーチ部門、子どもの服薬に関するデザイン研究、こども＋くすり＋デザイン）
2003 三菱オスラム LED デザインコンテスト審査員奨励賞
2002 富山プロダクトデザインコンペティション入選
2002 2002年度国際デザイン年鑑（英国）掲載（審査付、Full Metal Jacket Chair）
1996 1996年度グッドデザイン賞（シナジアシリーズ）
1996 海南デザインコンペティション大賞（健康器具バンボレオ）
1996 1996年度レッド・ドット賞〈ドイツ・エッセンデザインセンター〉（インタープレイスシリーズ）
1994 1994年度グッドデザイン賞（インタープレイスシリーズ）
1993 第2回旭川国際家具デザインコンペティション入選（インタープレイスシリーズ）
1993 コクヨ株式会社功労賞（インタープレイスシリーズ）
1992 1992年度国際デザイン年鑑（英国）掲載（審査付、Perch Chair, Stacking Table）
1991 1991 Office Design Competition, EIMU, Milano, Italy 入選

【2014年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

博物館を中心とした公共空間におけるインクルーシブデザインの理論と方法に関る実践的研究

・研究の目的、内容

本研究では、民博が目指すユニバーサルミュージアムの次のステップとしての次世代ユニバーサルミュージアム構築にむけて、多様な来館者が問題なくアクセスでき快適に観覧できるだけでなく、展示空間における知覚鑑賞が可能となる展示デザインの評価手法の開発を行う。具体的には、これまでのユニバーサルミュージアムの議論を整理し、新たに展示資料や環境およびスタッフサービスなど既存の展示鑑賞を構成する諸要素について調査を行う。また多様な来館者の視点から、展示空間体験を調査し相互比較分析を行う。その結果をもとに課題を抽出、展示デザインの総合的なプロトタイプを制作し、最終的に知覚鑑賞に関する指標を作成することを目的とする。

・成果

本研究では、ユニバーサルミュージアムマトリクスに関する研究と、そのひとつの解決策のプロトタイプであるデジタル触地図の評価・実証実験と特許申請が本年度の成果である。これまで培ってきた多様な障がい者の気づきデータベースをもとに、アクセスだけではなく知覚鑑賞も含めて評価する指標づくりを行い、2015年１月に明治大学で開催された国際学会ミュージアム2015にて発表を行った。

デジタル触地図に関しては、2014年12月にその特許性が認められ、特許申請を行った。視覚障がいユーザーによる評価実験、ならびに2015年１月から２階受付の館内案内マップ前に試作機を約１か月設置し、実証実験を行った。その結果をもとにした修正に加え、視覚障がいユーザーだけではなく多様な利用者を想定した本体ボディの原寸デザインも合わせて行い、最終試作機を完成した。

◎出版物による業績

［監修］

ジュリア・カセム著、平井康之監修、ホートン・秋穂訳

2014 『「インクルーシブデザイン」という発想 排除しないプロセスのデザイン』東京：フィルムアート社。

［共著］

ジュリア・カセム・塩瀬隆之・森下静香・水野大二郎・小島清樹・荒井利春・岡崎智美・梅田亜由美・小池禎・田邊友香・木下洋二郎・家成俊勝・桑原あきら

2014 『インクルーシブデザイン』京都：学芸出版社。

［その他］

平井康之

2014 「人間学のキーワード　インクルーシブデザイン」『月刊みんぱく』38(9)：20。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2015年１月14日 「Study on the Evaluation of Universal Museum」大妻女子大学博物館・國立臺北教育大学・國立歴史博物館・全日本博物館学会・東京国立博物館・明治大学文学部・レスター大学博物館学研究室主催『Museum 2015　自己変革する博物館――変化し続ける組織づくり』明治大学駿河台校舎

・研究講演

2014年９月11日 「デザイン思考とは？」公益財団法人北九州産業学術推進機構主催、第130回産学交流サロン「ひびきのサロン」『デザイン思考セミナー』fabbit（北九州市）

2015年３月12日 「介護分野におけるデザイン思考の活用と成果」公益財団法人北九州産業学術推進機構主催、第136回産学交流サロン「ひびきのサロン」『デザイン思考セミナー Part ２』北九州学術研究都市産学連携携センター２階研修室

2015年３月28日 「高齢者の視点からのソーシャルインクルージョンCOI」九州大学大学院芸術工学研究院・九州大学産学官連携本部主催『高齢者の視点からのソーシャルインクルージョンCOI――高齢者イノベーションのプロジェクト報告』JR博多シティ会議室９F大会議室２

・広報・社会連携活動

2014年８月８日 出演「子ども×バリバラ“学校をデザインするプロジェクト”（前編）」『バリバラ』NHK E

テレ

2014年８月15日　出演「子ども×バリバラ“学校をデザインするプロジェクト”（後編）」『バリバラ』NHK Eテレ

・特許出願

2014年12月26日　「案内装置」特許申請（発明者：平井康之・冨本浩一郎・吉田憲司・日髙真吾・山中由里子）

◎社会活動・館外活動等

・非常勤講師

放送大学面接授業「欧州のユニバーサルデザイン」（集中講義）、明石工業高等専門学校「インクルーシブデザイン」

## 特別客員教員

### ■先端人類科学研究部・社会環境研究部門

### 末成道男［すえなり　みちお］―――― 教授

1938年生。**【学歴】**東京大学教養学部卒（1962）、東京大学大学院生物系研究修士課程修了（1964）、東京大学大学院社会学研究科文化人類学専攻博士課程単位取得満期退学（1970）**【職歴】**聖心女子大学文学部専任講師（1972）、聖心女子大学文学部助教授（1975）、聖心女子大学文学部教授（1983）、東京大学東洋文化研究所教授（1990）、東洋大学社会学部教授（1998）、東洋文庫研究員（1998）、国立民族学博物館先端人類学研究部特別客員教員（2013）**【学位】**社会学博士（東京大学社会学系大学院 1975）、文学修士（東京大学人文系大学院 1964）**【専攻・専門】**社会人類学・東アジアの社会と祖先祭祀（とくに親族。地域集団の構造と宗教）**【所属学会】**日本文化人類学会

**【主要業績】**

［単著］

末成道男

1998　『ベトナムの祖先祭祀――潮曲の社会生活』東京：風響社。

1983　『台湾アミ族の社会組織と変化』東京：東京大学出版会。

［編著］

末成道男

1995　『中国文化人類学文献解題』東京：東京大学出版会。

**【受賞歴】**

1975　第８回澁澤賞

**【2014年度の活動報告】**

◎各個研究

・研究課題

東アジアにおける祖先祭祀の変動に関する人類学的研究

・研究の目的、内容

1）これまで行ってきた社会人類学調査（台湾、韓国、ベトナム）の映像・画像資料の整理。デジタル化については、かなり進捗しているので、その注釈、分析、小論文執筆などを行う。

2）上記作業の過程で、問題点や変化を確認するため、条件の許す範囲で、短期（１～３か月程度）の再調査を行う。

3）機関研究「中国における家族・民族・国家ディスコースの生成と実態」へ参加し、東アジア人類学における中国研究の位置づけを考究する。

・成果

以下の論文集および論文を編集、執筆した。

◎出版物による業績

［共編著］

末成道男・劉 志偉・麻 国慶編

2014 『人類学与歴史』（第一届東亜人類学論壇報告集）北京：北京社会科学文芸出版社（上巻：中文，下巻：日文）。

韓 敏・末成道男編

2014 『中国社会的家族・民族・国家的話語及其動態――東亜人類学者理論探索』（Senri Ethnological Studies 90）大阪：国立民族学博物館［査読有］。

［論文］

末成道男

2014 「2013年七夕に21世紀初頭の台湾原住民研究を振り返る」『台湾原住民研究の射程――接合された過去と現在』pp.369-386，日本順益台湾原住民研究会。

2014 「中華漢族的家族和家――東亜人類学調査之所見」韓 敏・末成道男編『中国社会的家族・民族・国家的話語及其動態――東亜人類学者理論探索』（Senri Ethnological Studies 90）pp.19-29，国立民族学博物館［査読有］。

2014 「導言」末成道男・劉 志偉・麻 国慶編『人類学与歴史』（第一届東亜人類学論壇報告集）pp.3-19，北京：社会科学文芸出版社。

2014 「人類学与史学在家譜研究方面的不同」末成道男・劉 志偉・麻 国慶編『人類学与歴史』（第一届東亜人類学論壇報告集）pp.43-49，北京：社会科学文芸出版社。

## 古谷嘉章［ふるや　よしあき］―――― 教授

1956年生。**【学歴】**東京大学教養学部教養学科卒（1980）、東京大学大学院社会学研究科博士課程単位取得退学（1986）**【職歴】**東京大学助手（1988）、九州大学助教授（1989）、九州大学教授（2002）**【学位】**博士（学術）（東京大学大学院総合文化研究科 1992）、社会学修士（1982、東京大学大学院）**【専攻・専門】**文化人類学**【所属学会】**日本文化人類学会、日本ラテンアメリカ学会、American Anthropological Association

**【主要業績】**

［単著］

古谷嘉章

2003 『憑依と語り』福岡：九州大学出版会。

2001 『異種混淆の近代と人類学』京都：人文書院。

［論文］

古谷嘉章

2010 「物質性の人類学に向けて」『社会人類学年報』36：1-23。

**【2014年度の活動報告】**

◎各個研究

**・研究課題**

現代社会における先史文化の物質性についての研究

**・研究の目的、内容**

過去の時代に生きた人々の生活の営みは、現在でも物質的に存在しているが、その様態は様々である。本研究は、先史文化すなわち歴史資料の存在しない過去の社会に生きていた人々の文化が、現代社会において物質的に存在している（あるいは存在しなくなっている）様態について、人類学的に分析することを目的とする。具体的には、一方で、考古学的調査研究を対象として、他方で、現代の世界各地の社会において「先史文化がどのように物質的に存在しているか」を対象として、人類学的に研究する。

前年度より継続の科学研究費補助金・基盤研究（C）「現代アートを用いての先史文化理解と先史文化を用いての現代アート制作の人類学的研究」の研究代表者として、船橋市飛ノ台史跡公園博物館における「縄文コンテンポラリー展」をひきつづき調査するほか、国内２か所（青森市、岩手県一戸市・滝沢村）において「現代社会における縄文文化の意味づけと利用」の様態についてフィールドワークを行い、さらに連合王国２か所（セ

インズベリー視覚芸術センター、大英博物館）において、先史文化と現代アートのあいだに表われつつある新しい関係の実態について調査を行う。

・成果

民博共同研究「物質性の人類学――物性・感覚性・存在論を焦点として」を組織し、3回の研究会を主宰した（内容の一部は「世界は物質の流れのなかにある」『民博通信』146号に掲載した）。

ブラジルおよび日本における「現代社会における先史文化」についての調査にもとづき、IUAES 2014において招待発表を行った（Inheriting the Prehistoric Past, Artistically: Two Case Studies）。

船橋市飛ノ台史跡公園博物館における「縄文コンテンポラリー展」に前年から引き続いて協力し、企画段階から展覧会の全体について調査すると同時に、同展カタログに展覧会レヴュー論文を日本語および英語で掲載した（「イノチを生む動く線とリクツが生む複雑な形」ならびにMoving Lines engender Life / Complicated Forms are generated by Logic, 『縄文の手・現代の手』）。

科学研究費補助金・基盤研究（C）「現代アートを用いての先史文化理解と先史文化を用いての現代アート制作の人類学的研究」の研究代表者として、船橋市飛ノ台史跡公園博物館のほか、青森県（特別史跡三内丸山遺跡および縄文時遊館、青森県立美術館、小牧野遺跡、青森県立郷土館等）においてフィールドワークを行い、「現代社会における縄文文化の意味づけと利用」の様態について具体的かつ詳細に調査を実施した。また連合王国（Sainsbury Centre for Visual Arts, University of East Anglia; Museum of Archaeology and Anthropology, University of Cambridge; British Museum）において「現代社会における先史文化の物質性」について調査を行い、UEAにおいてはセミナーで研究報告を行った。

◎口頭発表・展示・その他の業績

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2014年5月16日　'Inheriting the Prehistoric Past, Artistically: Two Case Studies.' IUAES 2014、幕張メッセ

## 森山 工［もりやま　たくみ］――教授

**【学歴】**東京大学教養学部教養学科卒（1984）、東京大学大学院社会学研究科修士課程修了（1986）、東京大学大学院総合文化研究科博士課程修了（1994）**【職歴】**広島市立大学国際学部講師（1994）、広島市立大学国際学部助教授（1997）、東京大学大学院総合文化研究科助教授（2000）、東京大学大学院総合文化研究科教授（2012）**【学位】**博士（学術）（東京大学大学院、1994）、修士（社会学）（東京大学大学院、1986）**【専攻・専門】**文化人類学、マダガスカル地域文化研究**【所属学会】**日本文化人類学会、日本アフリカ学会、日本オセアニア学会

**【主要業績】**

［編著］

森山 工・飯田 卓・深澤秀夫編著

2013 『マダガスカルを知るための62章』東京：明石書店。

［論文］

Moriyama, T.

2013 Cultural Resource in Action: Mobilization of Culture in Madagascar under French Colonial Rule. Japanese *Review of Cultural Anthropology* 14: 31–53.

［翻訳］

森山 工訳

2014 『贈与論　他二篇』（マルセル・モース著）東京：岩波書店（岩波文庫）。

**【受賞歴】**

1997　第25回澁澤賞

**【2014年度の活動報告】**

◎各個研究

・研究課題

葬送と遺体の「所有」に関する人類学的研究

・研究の目的、内容

本研究計画は、マダガスカル中央高地北東部の農村地域における現地調査にもとづき、国家独立後の農村開発事業の影響によって変化しつつある葬送の実態を明らかにするとともに、そこにおいて遺体を「所有する」ということが持つようになった社会的意義を解明するものである。遺体の「所有」をめぐっては、当該の死者に連なる過去、および当該の死者から連なる過去によって現在を正当化するという観点から、その「所有」のあり方を考察する。マダガスカルについては、1988年以来断続的に行っている現地調査を継続するとともに、マダガスカル以外の他地域についても歴史学的・人類学的な文献を精査することにより、比較論的な視角から考察をほどこす。

・成果

2014年度は、諸般の事情によりマダガスカルにおける現地調査を実施することができなかった。それを補うべく、上記の「研究の目的、内容」に応じた文献による調査を適宜行うとともに、「遺体の『所有』」という研究課題と直接的に関係するものではないながら、「所有」を取り巻く問題群として「贈与」と「交換」に関する人類学的知見を考察し、以下の成果を発表した。

◎出版物による業績

［翻訳］

森山 工訳

2014 『贈与論　他二篇』（マルセル・モース著）東京：岩波書店（岩波文庫）。

［その他］

森山 工 「訳者解説――マルセル・モースという『場所』」pp.467-489, 森山 工訳『贈与論　他二篇』（マルセル・モース著）東京：岩波書店（岩波文庫）。

◎社会活動・館外活動等

・他の機関から委嘱された委員など

公益信託澁澤民族学振興基金運営委員、文部科学省教科用図書検定調査審議会専門委員

## ■先端人類科学研究部・文化動態研究部門

### 佐々木利和［ささき　としかず］――――――

イヌ資料については精査しておく必要がある。東大のアイヌ資料の大半は民博に収蔵されているが、アイヌ絵等の貴重作品はなお東大にある。これらは歴史性を踏まえた展示に欠くことができないものである。

・成果

本年度は東大総合博物館保管『蝦夷生計圖説』について精査した。この作品は作者村上嶋之允の養子である村上貞助が、作者の意を受けて増補したもので、18世紀末のアイヌの生業を知るうえで欠くことができないものである。今回の調査において、東大本は村上貞助の自筆本であることが確認され、資料として極めて信頼性が高いことが明らかとなった。

## 山田孝子［やまだ　たかこ］――教授

**【学歴】**京都大学理学部数学科卒（1970）、京都大学大学院理学研究科動物学専攻博士課程単位修得退学（1977）**【職歴】**京都大学総合人間学部助教授（1997）、京都大学大学院人間・環境学研究科教授（2003）、京都大学名誉教授（2012）**【学位】**博士（理学）（京都大学 1983）**【専攻・専門】**文化人類学、認識人類学、シャマニズム研究**【所属学会】**日本文化人類学会、日本人類学会、American Anthropological Association、International Association for Academic Shamanistic Research

**【主要業績】**

［単著］

山田孝子

2012 『南島の自然誌――変わりゆく人－植物関係』京都：昭和堂。

2009 『ラダック――西チベットにおける病いと治療の民族誌』京都：京都大学学術出版会。

1993 『アイヌの世界観――「ことば」から読む自然と宇宙』（講談社選書メチエ）東京：講談社。

**【2014年度の活動報告】**

◎各個研究

・研究課題

多文化空間におけるミクロ・リージョナル共同性構築・維持

・研究の目的、内容

これまでの研究により、1990年代以降の社会状況は、文化的同質性をもたらすとされた近代化やグローバル化の予想に反し、ローカルな文化の価値の見直しと、それにもとづく共同性とコミュニティの再構築に特徴があるという知見を得てきた。これを踏まえ、本研究は、チベット難民をはじめとする越境した人々に焦点をあて、ホスト社会の多文化空間のなかで、どのように自分たちのコミュニティを作り出していくのか、共同性構築と維持の原理を解明することを目的とする。

2013年度と同様に、科学研究費助成事業（基盤研究（B）「多文化空間に生きる越境者の共同性再構築に関する地域間比較研究」課題番号24310181、研究代表者：山田孝子）との連携により、比較の視点から調査研究を進めるとともに、この研究の一環として、2014年12月には、国際ワークショップ「人の移動と地域的共同性の再構築」を開催し、ミクロ・リージョナルな共同性構築・維持の原理についての考察を深化させる。

・成果

JSPS科研費24310181により、2014年６月26日～７月18日にかけてインド、ラダックで開催されるダライ・ラマによるカーラ・チャクラ儀礼を対象とするフィールド調査を実施し、カーラ・チャクラ儀礼のもつ宗教的意味はもちろんのこと、神々の実在性を顕現させる儀礼の式次第や荘厳さなどの典礼構造により、この儀礼が、チベット仏教圏におけるダライ・ラマを核とする連帯性を更新・強化させる役割を担っているという知見を得た。さらに、この研究の一環として、12月５日～７日には、国際ワークショップ「人の移動と民族的／地域的共同性の再構築（Migration and the Remaking of Ethnic/Micro-Regional Connectedness）」を国立民族学博物館、京都大学稲盛会館を会場に、JSPS科研費（課題番号24310181）とCIAS共同利用・共同研究プロジェクト「移動と宗教実践――地域社会の動態に関する比較研究」（2013～2014年度、代表：小島敬裕）との共同開催、および館長リーダーシップ経費による補助のもと実施した。日本人研究者７名、モンゴル、タイ、ロシア、スウェーデンからそれぞれ１名、カナダと中国四川省からのチベット人２名の計13名の研究発表により、多角的、領域横断的に、人の移動という動態をキーワードに共同性再構築の多様な事例が提示され、その共通性と個別性が明らかになった。

◎出版物による業績

［論文］

Yamada, T.

2015 Continuity of Shamanism Among the Ladakhi and the Sakha. In D. Eigner and J. Kremer（eds.）*Transformation of Consciousness: Potentials for Our Future*, pp.163-182. Kathmandu: Vajra Books.

◎口頭発表・展示・その他の業績

**・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告**

2014年12月６日 ‘Leadership and Empathy in the Remaking of Communal Connectedness among Tibetans in Toronto.’ International Workshop on “Migration and the Remaking of Ethnic/ Micro-Regional Connectedness,” National Museum of Ethnology ［JSPS科研費（課題番号：24310181）、CIAS共同利用・共同研究プロジェクト「移動と宗教実践――地域社会の動態に関する比較研究」（代表：小島敬裕）との共催、国立民族学博物館2014年度館長リーダシップ経費］

2015年３月26日 「ホスト社会における難民の自己再定置と共同性再構築・維持――トロント・チベット人社会の事例から」第20回生態人類学会研究大会、仙北市田沢湖公民館大集会室・プラザホテル山麓荘大会議室、大会事務局東京大学人類生態学教室

## 陳 天璽［チェン　ティェンシ］――――――

ーマとした電子ガイドの企画編集、展示場体験コーナーのモニタリング、情報追加などを行う。

また、共同研究会「人の移動と身分証明の人類学」の最終年度にあたり、移民の身分証明に着目した資料収集、インタビュー調査を行い、身分証明が人の移動に与える影響について明らかにする。

**・成果**

本年度は、東アジア展示場のリニューアルオープンに関連したイベント、例えば2014年４月19日に開催された、第431回みんぱくゼミナール「世界の華僑・華人と“故郷”」の講演を行ったほか、展示場体験コーナーのモニタリングや修正、情報追加などの作業を定期的に行った。ほかにも、同展示場についての紹介講演を、横浜商科大学「中華街まちなかキャンパス」において行った。

この他、2015年５月に千葉で行われたIUAESのパネルにおいて日本における無国籍者について、６月にジュネーブで行われたUNHCR-NGOコンサルテーションにおいて無国籍問題について、８月パナマで行われた世界華僑華人学会では横浜中華街における新華僑が街に与える影響について、９月にハーグで行われた無国籍グローバルフォーラムでは無国籍者の支援について、11月に早稲田大学で行われた日本華僑華人学会では華僑２世のアイデンティティについて発表を行った。

この他にも、日本におけるアジアの移民の２世の国籍問題について、インタビュー調査を行った。

◎出版物による業績

［論文］

陳 天璽

2014 「無国籍」山下晋司編『公共人類学』pp.205-223, 東京：東京大学出版会。

2014 「中華学校の変容と華僑華人研究への問い」『華僑華人研究』（特集　日本華僑華人学会設立10周年記念シンポジウム　華僑華人研究の回顧と展望）11：66-70。

2014 「無国籍状態の人から国籍・戸籍を再考する」『比較日本文化研究』17：29-47。

［書評］

Chen, T.（Lara）

2014 Book review: Creation of Culture and Identity of Ethnic Chinese in Japan: Chinese School, Lion Dance, Guandi Temple, Overseas Chinese History Museum, written by Yuling Zhang. *Journal of Chinese Overseas* 10(1): 118-120.

［その他］

陳 天璽

2014 「いくつもの『故郷』の融和」『月刊みんぱく』38(5)：8-9。

2014 「在米華人の故郷の在り処――国立民族博物館に寄贈された一枚の剪紙」『月刊 東亜』2014(6)：74-75。

2014 「中華学校の子どもたちにみるニホン」『月刊みんぱく』38(8)：6。

2014 「グローバル移動時代の領事ホットライン」『月刊 東亜』2014(9)：86-87。

2014 「越境時代の身分証明」『民博通信』146：18-19。

2014 「特別企画　無国籍というはざま　無国籍だった私」『法学セミナー』717：40-43。

2014 「真夏の中のヒマワリ――国家に揺らされて」「現代中国」プロジェクト著『Views on China：中国の今、プロが観る 政策研究報告「現代中国」プロジェクトWEB論考集３』pp.46-50, 公益財団法人 東京財団。

2014 「無国籍のドクター・アクショーノフ氏永眠」『月刊 東亜』2014(12)：80-81。

2015 「世界を移動するチャイニーズ」『月刊 東亜』2015(3)：86-87。

2015 「NPO法人無国籍ネットワークの代表『日本にも無国籍者がいることを知って。』」『国連UNHCR協会公式ブログ　チャリティ通信』2015年１月24日（http://www.japanforunhcr.org/charity-blog/?p=1196）。

2015 「なんみん応援隊インタビューVol.6　無国籍者に寄り添う　陳天璽さん」『国連難民高等弁務官駐日事務所　なんみん応援隊』（http://unhcr.or.jp/ouentai/interview/ouentai-interview06.html）。

2015 「無国籍の人が生きやすいよう支える」『女のしんぶん』（I女性会議中央本部）2015年１月31日（http://www.joseikaigi.com/_src/sc2980/2015_0131s.pdf）。

◎口頭発表・展示・その他の業績

**・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告**

2014年５月11日 「第２部 パネルディスカッション」（船曳建夫・與那覇 潤・陳 天璽・小川さやか）日本文化

人類学会50周年記念公開シンポジウム『人類学の明日、人類学との明日――「いま・ここ」から考える』東京大学駒場キャンパス

2014年５月16日　‘The Stateless in Japan: their identity and identification,’ Invited Session: Public Education Initiative: Mobilities, Migrations and Displacements, IUAES 2014 with JASCA, Makuhari Messe, Chiba

2014年５月24日　「分科会２：難民　国内外の難民の状況を通じて健康支援を考える」第29回日本国際保健医療学会 東日本地方会「マイノリティと健康――いのちの格差をどう縮めていくか」国立国際医療研究センター

2014年６月19日　‘A Personal Story of Overcoming Statelessness,’ Panel chaired by Chris Nash and Mark Manly, Invited Session: Campaigning to End Statelessness, UNHCR Annual Consultations with NGOs, Geneva

2014年６月21日　‘Officially Invisible: The Stateless (mukokusekisha) and the Unregistered (mukosekisha),’ Panel chaired by David Chapman, Invited Session: Identifying Self: Contemporary Japan and the Koseki (II), Asian Studies Conference Japan, Sophia University, Tokyo

2014年８月８日　‘The Impact of New Immigrants on Yokohama Chinatown,’ Panel chaired by Kathleen López, Invited Session: The Impact of New Immigrants on Yokohama Chinatown, Internation Society for the Studies of Chinese Overseas, Panama

2014年９月15日　‘Transnational and Interdisciplinary Collaboration on Statelessness: Case Studies in Asia,’ Invited Session: Networking for Change: the Importance of Collaboration on Statelessness, First Global Forum on Statelessness, Hague

2014年９月16日　Invited Thematic Roundtable: A Roundtable Discussion on ‘Statelessness and Empowerment’ with Stateless and Formerly Stateless Persons, Led by Barbara Hendricks, First Global Forum on Statelessness, Hague

2014年11月29日　「華人とは何か？華人３世、２世、1.5世の語りから見る在日華人意識の変容」パネリスト、2014年度日本華僑華人学会研究大会 第２回サーキュラー、早稲田大学

**・広報・社会連携活動**

2014年５月20日　「写真家Greg Constantine氏トークイベント・写真展 in 早稲田　見えなかった世界――写真の奥にみる無国籍の人々（Unseen World: Stateless People）」早稲田大学

2014年11月19日　「無国籍者をゼロに」『くらし☆解説』NHK

2014年11月21日　「夕方特集　知っていますか？“無国籍”の問題」『先読み！夕方ニュース』NHKラジオ第１

## ■先端人類科学研究部・応用民族学研究部門

### 市田泰弘［いちだ　やすひろ］――――――

Sakai, K., Y. Tatsuno, K. Suzuki, H. Kimura, and Y. Ichida
2005 Sign and Speech: Amodal Commonality in Left Hemisphere Dominance for Comprehension of Sentences. *Brain* 128(6) 1407-1417.

**【2014年度の活動報告】**

◎各個研究

**・研究課題**

日本手話の特徴をふまえた手話言語学教授法に関する研究

**・研究の目的、内容**

現在、大学および大学院レベルで手話言語学の講義を行うための日本語による教科書は存在しない。また、国内の大学において手話言語学を導入するにあたっては、日本手話の言語事実を取り込むのが適当であると考えるが、その教授法はまだ確立していない。近年の手話言語学に対する関心の高まりなどから、各単年度の講義の教授法を踏まえたシラバスの内容の検討が急務となっている。本研究では、複数の大学において実施する手話言語学の講義を通して、シラバス案の策定とその実効性の検証を行い、その結果を長期的には、日本語による手話言語学講義のための教科書執筆という形に反映させることを目的とする。具体的な内容としては、シラバスの検討においては受講学生の一般言語学の基礎知識の程度に合わせた内容および用例の選択を中心に、実効性の検証については主として受講学生の評価の集計によって行う（2013年度に研究を開始し、本年度は２年目にあたる）。

**・成果**

東京大学にて「日本手話研究Ⅱ」の講義を担当、シラバス案を策定し実践した。社会言語学的背景について扱う導入と、ヴォイス⇒アスペクト⇒モダリティという文法カテゴリーを基盤とした配列による本編からなるシラバス案を採用した。このようなタイプのシラバスにおいては、その実効性が受講学生の一般言語学の知識の程度に大きく依存することが昨年度明らかになったため、各文法カテゴリーの概説を十分に行うことにした。受講学生からは、日本手話の言語事実を検討するための基盤を提供するものとして有益であるとする意見がある一方、肝心の日本手話の言語事実の紹介と検討にあてる時間が相対的に減少することによる弊害を指摘する者もいた。講義の終盤においては、まずは日本手話の言語事実から出発し、その解釈にあたって文法カテゴリーとの関連にふれる、という形態をとったが、この方法はおおむね好評であった。来年度のシラバス案策定に生かしたい。

そのほか、みんぱく手話言語学フェスタ2014・第３回手話言語と音声言語に関する国際シンポジウム「言語の記述・記録・保存と通モード言語類型論」において移動表現について発表、東北大学のリレー講義にて音韻と文法に関する概論を担当した。

◎出版物による業績

［共著］

木村晴美・市田泰弘
2014 『改訂新版・はじめての手話』東京：生活書院。

◎口頭発表・展示・その他の業績

**・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告**

2014年10月３日 「日本手話における移動事象の表現――文法上の制約と動詞連続構文による解決」みんぱく手話言語学フェスタ2014・第３回手話言語と音声言語に関する国際シンポジウム『言語の記述・記録・保存と通モード言語類型論』、国立民族学博物館

**・みんぱく発 手話言語学講義と関連事業**

「日本手話研究Ⅱ（学部／通年）」、「言語学特殊講義（大学院／半年）」東京大学

2014年６月19日 「日本手話のしくみ（文法）について」関西学院大学

2014年10月14日 「【音韻論】日本手話の音韻と文法」東北大学全学教育リレー講義「手話の世界と世界の手話言語☆入門」東北大学

## 清水郁郎［しみず いくろう］――教授

1966年生。**【学歴】**芝浦工業大学工学部（1990）、芝浦工業大学大学院建設工学専攻修了（1992）、総合研究大学院大学文化科学研究科地域文化学専攻修了（2001）**【職歴】**大同工業大学工学部建築学科助教授（2005）、芝浦工業大学

工学部建築工学科准教授（2009）、芝浦工業大学工学部建築工学科教授（2013）**【学位】**博士（文学）（総合研究大学院大学 2001）**【専攻・専門】**建築学（計画）、東南アジア研究、物質文化研究**【所属学会】**日本文化人類学会、日本建築学会

**【主要業績】**

［単著］

清水郁郎

2005 『家屋とひとの民族誌――北タイ山地民アカと住まいの相互構築誌』東京：風響社。

［編著］

日本建築学会編

2012 『フィールドに出かけよう！住まいと暮らしのフィールドワーク』東京：風響社。

［論文］

清水郁郎

2014 「映画をめぐる生の交差――時間と空間の共有がもたらすもの」村尾静二・箭内 匡・久保正敏編『映像人類学――人類学の新たな実践へ』pp.158-174, 東京：せりか書房。

**【受賞歴】**

1992 第3回日本建築学会優秀修士論文賞

**【2014年度の活動報告】**

◎各個研究

**・研究課題**

東南アジアにおける木造建築建設にかかわる比較研究

**・研究の目的、内容**

本研究は、東南アジア大陸部のタイ系民族集団の木造住居や寺院について、建設にかかわる比較研究を行うことを目的とする。研究においては、現地調査を実施し、そこで得られた資料を中心に使う。また、国立民族学博物館所蔵の資料を適宜利用し、かつ文献資料とあわせて、当該地域の建築生産の現在的様態を明らかにする。そのさいには、建築物自体の物理的特徴に加え、建設にかかわる道具の伝播や材料の加工方法に留意し、それらによって産み出される建築構法にも着目する。さらに、建築生産にかかわる職能や社会組織の把握も行う。これらを統合して、当該地域における木造建築生産の整理・分類と理解の一助としたい。

現地調査については、2014年度から3年間に渡って、科学研究費補助金（基盤研究(B)）『東南アジア諸国の建築生産システムの実態および現代化プロセスに関する研究』（代表：蟹澤宏剛）の分担者となることが決まっており、東南アジア大陸部および島嶼部での調査をこうした資金を使って実現する予定である。

**・成果**

2014年9月に、タイ王国チェンライ県、メーサイ郡のコン・ムワン人の村と、チェンマイ県サンパトーン郡のタイ・クーン人の村で、それぞれ1週間程度の調査を行った。現地調査では、実測による住居の各種図面と村落全図の作成を行い、また、建設道具の把握、建築生産の様態について調べ、住居の形式、構法、間取り、職能などを明らかにした。さらに、住居内外で行われる儀礼や宗教的実践の分析から空間の意味論的分析を行い、居住空間と宗教的概念のかかわりやジェンダーによる空間の使用方法の違いなどを明らかにした。また、生業である農耕（水稲耕作）が居住空間の組織にどのように関与するのかを明らかにした。

当該研究を含む一連の研究に関する書籍・発表等の成果としては、以下が該当する。

2014 Spatial Characteristics Seen among the Phuan in Vientiane Province, Lao P.D.R., Especially Focusing on the House and Village. *Journal of Fine Arts*（Chiang Mai University）2557(1): 21-66.

2014 「タイ・ヤイの居住空間の特徴――東南アジア大陸部低湿地帯の居住空間にかかわる研究　その4」『日本建築学会学術講演梗概集（近畿）』pp.963-964.

◎出版物による業績

［論文］

清水郁郎

2014 「映画をめぐる生の交差――時間と空間の共有がもたらすもの」村尾静二・箭内 匡・久保正敏編『映

像人類学（シネ・アンスロポロジー）――人類学の新たな実践へ』pp.158-174，東京：せりか書房［査読有］。

2014 「タイ・ヤイの居住空間の特徴――東南アジア大陸部低湿地帯の居住空間にかかわる研究　その４」『日本建築学会学術講演梗概集（近畿）』pp.963-964，東京：日本建築学会。

2015 「十島村の居住空間の現在――口之島を中心に」『国際常民文化研究叢書　第10巻　アチックフィルム・写真にみるモノ・身体・表象（論文編）』pp.207-218，神奈川大学国際常民文化研究機構［査読有］。

Shimizu, I.

2014 Spatial Characteristics Seen among the Phuan in Vientiane Province, Lao P.D.R., Especially Focusing on the House and Village. *Journal of Fine Arts*（Chiang Mai University）2557(1): 21-66［査読有］.

［事典項目］

清水郁郎

2014 「水稲耕作民の住――移住と開拓」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.460-461，東京：丸善出版。

2014 「都市民の住――現代のヴァナキュラー」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.468-469，東京：丸善出版。

◎映像音響メディアによる業績

**・DVD・CD などの制作・監修**

清水郁郎

2014 「しずかな生活」村尾静二・箭内 匡・久保正敏編『映像人類学――人類学の新たな実践へ』付録（日本語、27分），東京：せりか書房。

◎口頭発表・展示・その他の業績

**・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告**

2014年９月12日～９月14日　「タイ・ヤイの居住空間の特徴――東南アジア大陸部低湿地帯の居住空間にかかわる研究　その４」日本建築学会学術講演会（近畿）、神戸大学国際文化部／工学部

◎調査活動

**・国内調査**

７月29日～８月10日―沖縄県宮古島市（池間島の住居、村落の調査）

12月３日～12月６日―宮崎県東臼杵郡椎葉村（椎葉神楽の調査）

**・海外調査**

2014年９月15日～10月１日―タイ王国チェンライ県、チェンマイ県（タイ系集団の住居と村落の調査）

2015年２月27日～３月11日―ラオス人民民主共和国（南部諸県における住宅生産に関わる調査）

◎社会活動・館外活動等

**・他の機関から委嘱された委員など**

日本建築学会・住宅計画運営委員会幹事、日本建築学会・建築計画委員会幹事

## 関本照夫［せきもと　てるお］―――― 教授

1947年生。**【学歴】**東京大学大学院社会学研究科博士課程中退（1976）**【職歴】**国立民族学博物館第五研究部助手（1976）、一橋大学社会学部講師（1981）、同学部助教授（1983）、東京大学東洋文化研究所助教授（1987）、同研究所教授（1991）、同研究所長（2006-2009）、東京大学を定年退職（2010）、国立民族学博物館先端人類科学研究部特任教授（2010-2013）**【学位】**社会学修士（東京大学 1974）**【専攻・専門】**仕事の人類学、布、工芸、物質文化、東南アジア研究**【所属学会】**日本文化人類学会、東南アジア学会、日本マレーシア学会、Association for Asian Studies

**【主要業績】**

［編著］

Sekimoto, T.（ed.）

2000 *Handicrafts and Industrial Development in Southeast Asia*（Toyota Foundation Research Grant Report）. Tokyo: Institute of Oriental Culture, University of Tokyo.

［共編著］
関本照夫・船曳建夫編
1994 『国民文化が生れる時――アジア・太平洋の現代とその伝統』東京：リブロポート。
Sekimoto, T., Semiarto Aji Purwanto and Hanantiwi Adityasari(eds.)
2003 *Handicrafts in the Age of Global Economy: Indonesia and Japan.* Depok: Center for Japanese Studies, University of Indonesia.

**【受賞歴】**
1983 第14回澁澤賞

**【2014年度の活動報告】**
◎各個研究
**・研究課題**
布と人間の人類学的研究
**・研究の目的、内容**
1）2011年１月～2013年３月の間に実施した機関研究・マテリアリティの人間学のプロジェクト「布と人間の人類学的研究」の成果刊行のため、編集作業を進める。
2）インドネシアのバティック染物業の研究を基軸に、物質性の人類学、布と人間の人類学について、執筆作業を行う。
**・成果**
学術雑誌に論文として発表するため、準備を進めている。『国立民族学博物館研究報告』に投稿予定。
◎社会活動・館外活動
**・他機関から委嘱された委員など**
財団法人東洋文庫研究員、国立大学法人教育研究評価委員会委員

## 曽我 亨［そが とおる］――教授

**【学歴】**名古屋大学理学部卒（1988）、京都大学大学院理学研究科後期博士課程修了（1994）**【職歴】**京都大学理学部助手（1994）、弘前大学人文学部助手（1995）、同助教授（2000）、同教授（2010）**【学位】**理学博士（京都大学 1999）**【専攻・専門】**生態人類学　1）北東アフリカの牧畜社会を対象とした生業・社会に関する研究、2）エスニシティと稀少資源に関する研究、3）難民の生存戦略に関する研究、4）人類進化論的研究**【所属学会】**日本アフリカ学会、日本ナイル・エチオピア学会、生態人類学会、日本文化人類学会

**【主要業績】**
［共著］
高倉浩樹・曽我 亨
2011 『シベリアとアフリカの遊牧民』宮城：東北大学出版会。
［論文］
曽我 亨
2011 「国家に抗する拠点としての生業――牧畜民ガブラ・ミゴの難民戦術」松井 健・名和克郎・野林厚志編『生業と生産の社会的布置』pp.389-426, 京都：昭和堂。
曽我 亨
2007 「〈稀少資源〉をめぐる競合という神話――資源をめぐる民族関係の複雑性をめぐって」松井 健編『資源人類学06 自然の資源化』pp.205-249, 東京：弘文堂。

**【受賞歴】**
1999 高島賞（日本ナイル・エチオピア学会）

【2014年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

東アフリカ牧畜社会における降雨変動と紛争頻度の関係

・研究の目的、内容

近年、アフリカにおける紛争の原因を、降雨や気候変動等による水資源量の変化と関連づける議論が活発になってきた。降雨変動が紛争に関係していること自体は、古くから指摘されてきたが、紛争解決には「政治的問題の解決よりも水問題を解決するほうが有効」という開発目標が、エビデンスに基づいて議論されるようになっている。単純な環境決定論を乗り越え、現代的な牧畜社会の実状を踏まえた上で、降雨変動が紛争を引き起こす具体的なメカニズムを解明する必要がある。本研究は研究期間内に、東アフリカ乾燥帯の牧畜社会を対象に、1）降雨変動と紛争頻度の相関を測定し、相関がある場合には、2）降雨量の変動が紛争を引き起こすメカニズムを解明する。

・成果

2014年度は、科学研究費補助金を用いて南エチオピア地域のガブラ・ミゴ社会を対象に、約４週間の現地調査を実施した。調査に先立ち、2013年９月に現地に赴いた際、現地の調査協力員が毎日の降雨のデータと、紛争の場所・規模・原因などについて正確な記録をとれるようトレーニングした。2014年の調査では、データを回収し、試験的な分析を試みた。まず、アメリカ海洋局が運営するARC2（African Rainfall Climatology version 2）の降雨データは、乾燥帯では精度がおちると言われている。そこで、現地協力員の記録と付き合わせることで、南エチオピアにおけるARC2のデータの精度を確認した。つぎに降雨変動と紛争頻度の相関を計算したが、相関はみられなかった。これは、低強度の紛争が雨季・乾季に関係なく頻発していたことから、このような結果になったものと思われる。この結果をうけて、低強度の紛争をどこまで含めて分析すべきか、方法論的な再検討をおこなった。

◎出版物による業績

［論文］

曽我 亨

2014 「生業」松田素二編『アフリカ社会を学ぶ人のために』pp.56-69, 東京：世界思想社。

日比野愛子・曽我 亨

2015 「地域に埋め込まれた／地域を創りだすローカル・イノベーション」『人文社会論叢　社会科学篇』33：1-16。

◎口頭発表・展示・その他の業績

2014年10月11日 「三項関係のなかで生まれる他者」第12回人類社会の進化史的基盤研究研究会、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

2014年11月３日 「人類学的視点から考える新たな他者像」第68回日本人類学会大会進化人類学分科会、アクトシティ浜松コングレスセンター

2014年12月６日 「生態人類学の観点から」基幹研究「人類学におけるミクロ－マクロ系の連関」第２回公開シンポジウム「『制度――人類社会の進化』（河合香吏編 京都大学学術出版会、2013）をめぐって」、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機関や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同研究員、科学研究費補助金（基盤研究（A））「アフリカ在来知の生成と共有の場における実践的地域研究」（代表：重田眞義、京都大学）研究分担者、科学研究費補助金（基盤研究（C））「難民の生存を支える新たな経済活動に関する人類学的研究」（代表：曽我 亨）

◎社会活動・館外活動等（2013年４月１日～2014年３月31日）

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所海外調査専門委員、京都大学アフリカ地域研究センター African Study Monographs 編集委員

## 林　史樹［はやし　ふみき］――――――

2014 「フィールドはだれのもの？」『韓国朝鮮の文化と社会』13：237-241。

◎口頭発表・展示・その他の業績

**・機関研究または国立民族学博物館主催のシンポジウムなどでの報告**

2014年12月６日　司会「韓国の事例」国立民族学博物館・立命館大学学術交流国際シンポジウム『世界の食文化研究と博物館』国立民族学博物館

◎調査活動

**・国内調査**

2015年２月４日～２月６日―対馬市（日韓間における人と移動に関する調査）

**・海外調査**

2014年８月22日～８月29日―大韓民国（インタビュー調査およびソウル大学でのシンポジウム参加）

2015年２月１日～２月４日―大韓民国（韓国華僑にインタビュー調査）

◎上記以外の研究活動

**・人間文化研究機関や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など**

科学研究費補助金（基盤研究（A））「帝国日本のモノと人の移動に関する人類学的研究――台湾・朝鮮・沖縄の他者像とその現在」（研究代表者：植野弘子）研究協力者

◎社会活動・館外活動等

日本文化人類学会編集委員

## 飯髙伸五［いいたか　しんご］――――――

る植民地期の史資料の活用可能性を検討することである。事例の検討によって、アジア・太平洋地域における日本統治の記憶と記録の比較研究に向けた基盤を提供することも視野に入れる。

・成果

科学研究費補助金（基盤研究（A））「太平洋島嶼部におけるマイノリティと主流社会の共存に関する人類学的研究」（研究代表者：風間計博＝京都大学）の分担者として、また慶應義塾大学次世代研究プロジェクト推進プログラム「太平洋島嶼の歴史生態学：「高い島」と「低い島」の景観史研究」（研究代表者：山口 徹＝慶應義塾大学）の協力者として、パラオおよび沖縄で現地調査を実施した。パラオでは、慶應義塾大学考古学研究室の調査に同行し、現地芸術文化局の協力のもと日本統治期の産業遺構の調査を実施した。沖縄では、戦前パラオに移住していた人々の同窓会で聞き取り調査を実施し、日本統治下パラオにおける現地社会と日本人社会との関係を、沖縄出身者の特異性に留意しつつ検討した。

パラオでの調査研究の一部は、飯髙伸五「パラオ諸島における日本統治期の鉱山採掘跡の現在」『太平洋諸島研究』2, pp.1-19（2014年７月、査読有）として刊行し、国際学会での発表 Iitaka, Shingo, “Mining, Bombing, and Touring: Dark Tourism and War Memory in Palau.” Pacific History Association 21st Biennal Conference 2014（2014年12月３日、於：国立台湾大学）も実施した。また、沖縄での調査研究の一部は、飯髙伸五「沖縄の『南洋帰り』による『記憶の継承』事業」『日本オセアニア学会 NEWSLETTER』110, pp.12-20（2014年12月、査読無）として刊行した。加えて、2014年度日本オセアニア学会関東地区例会では、パネル発表「オセアニアにおける『インターマリッジ』の現代的諸相――マジョリティとマイノリティの観点から」に参加し、飯髙伸五「母系的社会における『ハーフ』の潜在化と顕在化」（2014年12月13日、於：立教大学池袋キャンパス）を発表し、日本統治下パラオにおける植民地的コンタクトの一端を明らかにしようと試みた。

◎出版物による業績

［論文］

飯髙伸五

2014 「パラオ諸島における日本統治期の鉱山採掘跡の現在」『太平洋諸島研究』2：1-19［査読有］。

2014 「沖縄の『南洋帰り』による『記憶の継承』事業」『日本オセアニア学会 NEWSLETTER』110：12-20。

◎口頭発表・展示・その他の業績

2014年12月３日 ‘Mining, Bombing, and Touring: Dark Tourism and War Memory in Palau.’ Pacific History Association 21st Biennal Conference 2014, National Taiwan University, Taiwan

2014年12月13日 「母系的社会における『ハーフ』の潜在化と顕在化」2014年度日本オセアニア学会関東地区例会、立教大学池袋キャンパス

◎調査活動

・国内調査

2015年２月５日～２月９日―沖縄（科学研究費補助金（基盤研究（A））「太平洋島嶼部におけるマイノリティと主流社会の共存に関する人類学的研究」（研究代表者：風間計博＝京都大学）の研究分担者として、南洋群島帰還者会の「記憶の継承」事業の調査を実施）

・海外調査

2014年８月26日～９月３日―パラオ共和国（慶應義塾大学次世代研究プロジェクト推進プログラム「太平洋島嶼の歴史生態学：『高い島』と『低い島』の景観史研究」（研究代表者：山口 徹＝慶應義塾大学）に参加、日本統治期の産業遺構の調査を実施）

◎上記以外の研究活動

・人間文化研究機関や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同利用・共同研究課題「地域民族誌の方法論と人類学的空間構想力の可能性の探求」（研究代表者：高倉浩樹）共同研究員、科学研究費補助金（基盤研究（A））「太平洋島嶼部におけるマイノリティと主流社会の共存に関する人類学的研究」（研究代表者：風間計博）研究分担者

◎社会活動・館外活動等

・他の機関から委嘱された委員など

日本オセアニア学会理事・評議員、NPO 法人地域文化資源ネットワーク理事

・他大学の客員、非常勤講師

土佐リハビリテーションカレッジ「人間科学概論」

## 大杉 豊［おおすぎ　ゆたか］――――――

［共編］

西滝憲彦・関 宜正編

2014 『私たちの手話学習辞典Ⅱ』東京：一般財団法人全日本ろうあ連盟。

［その他］

大杉 豊

2014 「手話人文学の構築に向けて――『聾唖教授手話法』を読み解く」『手話・言語・コミュニケーション』1：104-144。

2014 「国際手話――手話言語接触現象とその先に見えるもの」『ことばと社会』15：255-261。

小林昌之・大杉 豊

2014 「ニュージーランド手話言語法の形成と発展」『手話学研究』23：57-75。

管野奈津美・大杉 豊・小林洋子・戸井有希

2014 「ろう者学教育コンテンツの開発と共同利用の展望」『筑波技術大学テクノレポート』22(1)：16-20。

◎映像音響メディアによる業績

**・電子ガイド・データベースの制作・監修**

大杉 豊・小林洋子・管野奈津美制作

2014 『ろう者学教育コンテンツ開発プロジェクト』（日本語・日本手話）昨年度より継続（http://www.deafstudies.jp/）

◎口頭発表・展示・その他の業績

**・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告**

2014年10月17日 「ろう者学教育コンテンツ及び手話言語コーパスの開発と共同利用――聾学校（特別支援学校）における活用の可能性」（小林洋子・戸井有希・管野奈津美との合同発表）第48回全日本聾教育研究大会、神戸国際会議場

2014年11月２日 「手話言語の語彙共有現象を記述・分析するにあたって」（坊農真弓・金子真美・岡田智裕との合同発表）日本手話学会第40回大会、鈴鹿医療科学大学千代崎キャンパス

2014年11月６日 「聴覚障害者の障害発生年齢による健康状態及びサービスへのアクセス違い――全国調査から」（小林洋子・田宮菜奈子との合同発表）第72回日本公衆衛生学会、宇都宮

**・研究講演**

2014年６月22日 「世界から見た日本のろう文化」広島県ろうあ連盟、広島市

2014年７月13日 「手話言語条例について」足立区聴覚障害者協会、東京都足立区

2014年７月19日 「手話言語法と手話言語条例」関東ろう者大会、茨城県土浦市

2014年７月26日 「ことばの仕組み」札幌市聴覚障害者協会、北海道札幌市

2014年７月27日 「手話言語法と私たちの暮らし」埼玉県聴覚障害者協会、埼玉県与野市

2014年７月28日 「授業における手話の活用」青森県立青森聾学校

2014年８月３日 「手話言語法制定に向けて」香川県聴覚障害者協会、香川県高松市

2014年８月11日 ‘Japanese Sign Language Corpus Project,’ Institute on Disability and Public Policy for the ASEAN Region, Kuala Lumpur, Malaysia

2014年８月31日 「教育を変えるために手話言語法を」岩手県聴覚障害者協会、岩手県盛岡市

2014年９月６日 「手話言語法への取組」九州ろうあ団体連合会、佐賀県佐賀市

2014年11月１日 「手話言語条例と手話言語法」京都府聴覚障害者協会、京都府城陽市

2014年11月16日 「手話言語法の制定を目指そう」四国ろうあ連盟、愛媛県松山市

2014年11月30日 「手話言語法の制定を目指そう」青森県ろうあ協会、青森県青森市

2015年１月18日 「手話言語法を考える」足立区聴覚障害者協会、東京都足立区

2015年１月23日 「手話言語法を考える」調布市聴覚障害者協会、東京都調布市

2015年２月５日 「手話言語法を考える」荒川区聴覚障害者協会、東京都荒川区

2015年２月11日 「手話言語法を考える」練馬区聴覚障害者協会、東京都練馬区

2015年３月21日 「ろう者学から見る合理的配慮の意義」朝日大学

◎調査活動

**・国内調査**

2014年11月28日～30日―長崎県・長崎地域の手話言語データ収集

2015年１月16日～18日―福岡県・福岡地域の手話言語データ収集

◎上記以外の研究活動

・**人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など**

人間文化研究機構連携研究「第3回国際シンポジウム「手話言語と音声言語の記述・記録・保存（代表：菊澤律子）」連携研究員、総合研究大学院大学学融合戦略的共同研究支援事業「手話言語学を世界へつなぐ――メディア発信とe-learning開発に向けて（代表：菊澤律子）」研究分担者、科学研究費補助金（基盤研究(B)）「ろう者コミュニティの視点による日本手話語彙体系の記録・保存・分析」研究代表者、筑波技術大学障害者高等教育研究支援センター「東日本大震災における聴覚障害学生への支援経験をベースとした大学間コラボレーションスキームの構築」事業「情報保障に関する研究基盤構築：日本語－手話コーパスの作成」研究代表者、筑波技術大学障害者高等教育研究支援センター「聴覚・視覚障害学生のイコールアクセスを保障する教育支援ハブの構築――情報保障と障害特性に基づく教育方法の協調的開発と資源共有に向けて」事業「ろう者学教育コンテンツ開発」研究代表者

◎社会活動・館外活動等

・**他の機関から委嘱された委員など**

社会福祉法人全国手話研修センター日本手話研究所事務局長、NPO法人日本ASL協会会長、財団法人現代人形劇センター理事、Executive committee member, Institute on Disability and Public Policy for the ASEAN Region、福島県郡山市手話言語条例検討委員会委員、鳥取県手話パフォーマンス甲子園実行委員会委員

・**非常勤講師**

「聴覚障害児指導法概論」国立大学法人群馬大学教育学部（集中講義）、「基礎英語」立正大学地球環境科学部（集中講義）、「ろう者文化と教育」国立特別支援教育総合研究所 特別支援教育専門研修（単発講義）

## 高城 玲［たかぎ　りょう］――――――

り、今年度の現地調査などに関しては主として科研費を利用する。

**・成果**

今年度は、上記科学研究費補助金と連動し、タイ北部チェンマイ県や中部ナコンサワン県、バンコクなどにおいて、都市部と農村部双方での政治・社会運動に関する現地調査、資料収集を計４回にわたって行った。関連する研究成果として、タイにおける政治・社会運動と地方農村部の関係を時系列的に整理した論文を発表したほか、国際研究会議での口頭発表も行った。

◎出版物による業績

［論文］

高城 玲

2015 「タイの政治・社会運動と地方農村部――1970年代から2014年までの概観」『神奈川大学アジア・レビュー』2：4-39。

2015 「アチックフィルム・写真と現地上映会――薩南十島と台湾パイワン族を中心に」神奈川大学国際常民文化研究機構編『国際常民文化研究叢書 第10巻 アチックフィルム・写真にみるモノ・身体・表象（論文編）』pp.19-50, 横浜：神奈川大学国際常民文化研究機構。

［事典項目］

高城 玲

2014 「コミュニティの象徴的構築」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.554-555, 東京：丸善出版。

◎口頭発表・展示・その他の業績

**・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告**

2014年４月22日 ‘Community and State Governance: Interaction of the king’s Birthday Ritual and Village Scout Training in Central Thai Village.’ The 12th International Conference on Thai Studies, University of Sydney

◎調査活動

**・海外調査**

2014年７月６日～７月20日―タイ王国チェンマイ県およびバンコク（タイにおける社会運動の相互行為に関わる現地調査）

2014年９月３日～９月10日―タイ王国ナコンサワン県（タイにおける社会運動の相互行為に関わる現地調査）

2014年12月11日～12月７日―タイ王国チェンマイ県（タイ農村部における社会運動に関わる現地調査）

2015年３月３日～３月16日―タイ王国チェンマイ県およびバンコク（タイにおける社会運動の相互行為に関わる現地調査）

◎上記以外の研究活動

**・人間文化研究機関や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など**

日本学術振興会科学研究費助成（基盤研究(C)）「タイにおける社会運動の相互行為に関する人類学的研究――都市と辺境の動態から」研究代表者、神奈川大学国際常民文化研究機構 共同研究「アチックフィルム・写真にみるモノ・身体・表象」研究代表者

## ■文化資源研究センター・民族学応用教育研究部門

### 前川啓治［まえがわ　けいじ］――――――

**【主要業績】**

［単著］

前川啓治

2004 『グローカリゼーションの人類学――国際文化・開発・移民』東京：新曜社。

2000 『開発の人類学――文化接合から翻訳的適応へ』東京：新曜社。

［編著］

前川啓治編

2012 『カルチュラル・インターフェースの人類学――「読み換え」から「書き換え」の実践へ』東京：新曜社。

**【2014年度の活動報告】**

◎各個研究

**・研究課題**

グローバリゼーションから視る組織文化の比較研究

**・研究の目的、内容**

大分県安心院および石川県能登の春蘭の里の農村民泊の組織化の経緯とその展開についてインタビューを中心に明らかにしてゆく。また、筑波地区において実施しているフットパス整備と農村民泊との融合の可能性を探ってゆく。

先立つ調査で、すでに農村民泊の先駆と認知されている安心院におけるグリーンツーリズム組織の制度化の過程を一定程度まとめているが、この研究課題ではとくに規制緩和の観点から、安心院の例を、後発の石川県能登の春蘭の里における農村民泊の展開や制度化の過程と比較し、行政の関わりや役割の可能性と限界という観点から一般化し、モデル化を試みる。そのうえで、筑波地区への農村民泊導入の可能性について具体的に検証してゆく。

大分県安心院および石川県能登の春蘭の里における農村民泊をそれぞれ２週間程度行い、農村民泊体験の参与観察をしながら、ビジターや役所の関連部署担当者にインタビューを行う。筑波地区で十年来継続しているフィールド調査は引き続き、随時行う予定である。

**・成果**

主として大分県安心院での農村民泊のフィールドワークによる実践的開発誌「安心院農村民泊のモデルと課題――日本における農泊の誕生」を報告書として作成している。この研究は、科学研究費補助金（基盤研究（C））による研究の一部である。20年前に開始された「安心院方式」といわれる会員制農泊であるが、大分県では安心院町を軸に官民が共同して規制緩和を進めてきた成果であり、この画期的な試みが後に、国の法律である旅館業法の施工規則の改正を促し、その対象外として明確化された。こうした動きは、草の根に起因する運動であり、その自然体での農村の提示という新たな観光形態の展開とともに、「下」からのグローカリゼーションの進展過程として捉えられるものであり、従来の理論的研究を検証し、さらにすすめるものである。

また、地域づくりという大きな枠組みからは、筑波山麓地域の地域づくり活動の中心的な担い手であり、郷土史家でもある元筑波町長・つくば市教育長による筑波山麓地域の遺跡についてのガイドウォークを録画・編集し、映像資料として作成した。具体的には、筑波大学人文社会系プロジェクト資金による映像アーカイブとして保存した。さらに、前川啓治編『筑波山から学ぶ――「とき」を想像・創造する』（査読あり）を、2015年１月に筑波大学出版会から刊行し、筑波山麓地域の歴史や民俗、文化、経済への理解が、具体的な地域づくりやその組織化の過程とどのように結びついているのかという点を明らかにしている。この編著は筑波山についての初めての総合的専門書として位置づけられている。

◎出版物による業績

［編著］

前川啓治編

2015 『筑波山から学ぶ――「とき」を想像・創造する』茨城：筑波大学出版会［査読有］。

［共編著］

Wong, H. W. and K. Maegawa（eds.）

2015 *Revisiting Colonial and Post-colonial: Anthropological Studies of the Cultural Interface*. Los Angeles: Bridge21 Publications［査読有］.

◎口頭発表・展示・その他の業績

**・研究講演**

2015年２月13日　「筑波山から学ぶ」茨城県商工会女性部研修会、つくば国際会議場

◎調査活動

**・国内調査**

2015年３月９日～３月20日―大分県安心院（農村民泊の調査）

◎上記以外の研究活動

**・人間文化研究機構や他の研究機関の共同研究員および研究協力者、あるいは科研およびその他のプロジェクトの代表者・分担者など**

科学研究費補助金（基盤研究（C））「開発から実践へ――安心院農村民泊による地域再生のモデル化と移植に関する政策的提言」研究代表者

## 外国人研究員 客員

### ■研究戦略センター・超領域研究部門

### CHU Xuan Giao［チュ スワン ザオ］――――――

してきた。

1996年からベトナムの東北地方に居住するヌン族の社会で長期間調査を行い、ヌン族が18世紀以降に中国から移住して以降の社会変動のプロセスと、村の宗教職能者である道公（タオ）の特質と社会的役割を明らかにしてきた。ヌン族の社会について、移住して以降、1954年に共産党政権が確立するまでは、王朝やフランスの統治下にあって、自律的な社会が維持されていた。その後、共産党統治下でヌン族が国民として把握され元来の自律的な社会が解体して行く。道公を中心としたヌン族の民間信仰は、「迷信異端」としてその価値を否定され、抑圧された。1986年以降のドイモイ政策以降、市場経済が浸透し、村民が個別に経済的利益を求め、社会の変動が顕著に見られるようになった。他方、ヌン族が自らの伝統文化を見直すようになり、道公は民族のアイデンティティの一端を担う重要な民族文化として再評価されるようになった。しかし、過去に否定されたゆえ、道公を肯定的にとらえ直す枠組みがまだ不完全で、その地位は確定していない。こうした問題についてベトナム語と日本語の研究論文を発表してきた。

招聘期間中は、ヌン族の特にこの20年間の社会変動の諸側面や道公信仰のあり方についてより掘り下げた研究を行いたい。その際に、同系の民族で、現在、社会変動の波に直面している中国広西の壮（チワン）族社会との比較研究は不可欠である。また、キン族における聖母信仰の状況との比較の視点からの検討も不可欠である。過去に塚田誠之教授・谷口房男教授（東洋大学）らの中国西南少数民族研究者、田村克己名誉教授・末成道男教授（国立民族学博物館客員）・三尾裕子教授（慶應義塾大学）・中西裕二教授（日本女子大学）らキン族研究者のとの交流を行ってきた。招聘期間中にも塚田誠之教授らとの共同研究を経て壮族・キン族との比較検討を行い、ヌン族の社会と信仰に対する理解を深めたい。

・成果

研究課題について、とくにカオバン省クワンウエン県に居住するヌン・アン集団に関して、20世紀後半から21世紀初のドイモイ以降のヌン・アン集団の社会文化変容について日本語での論文『ベトナムにおける市場経済化の進展と地域文化の生成――東北地方のヌン・アン集団の事例から』を執筆した。従来の研究ではヌン族は一枚岩として扱われてきたが、その下位集団に注目した。そして、従来は「中央から地方へ」、「経済から文化へ」という視点で研究がなされてきたが、地域住民の日常的な社会文化的行為のミクロな実態から、個々人のライフヒストリー、個々の家族や村の置かれた条件を考慮しつつ、ヌン・アンによる主体的な経済活動と伝統文化の復興・創造の実態を明らかにした。その中で当該集団の社会変動や民間信仰の動向についても検討を加え、その実態を明らかにした。この研究を進める過程で、ベトナム研究者の研究会「百越の会」（於：国立民族学博物館）で４回連続で発表した（2014年９月６日、11月８日、2015年１月17日、３月14日）。

さらに、上記の論文の要点を、2015年５月20日に開催された第265回民博研究懇談会で発表した。他に奈良大学社会科学部における科研「中越国境地域の市場から見た民族間交流とエスニシティの文化人類学的研究」の研究会（基盤研究（B）、代表者：芹澤知広教授）に招かれてコメントを行った。くわえて、末成道男教授、三尾裕子教授、中西裕二教授をはじめ、ベトナム研究者と学術交流を積極的に行った。

これらのほか、ベトナム語で課題に関連する論文「ヌン族ヌン・アン集団の研究史（Lịch sử nghiên cứu nhóm Nùng An trong tộc người Nùng ở Việt Nam）」、「ベトナムの聖母・柳杏伝説におけるハノイの西湖府の位置づけの変遷プロセス（Phủ Tây Hồ ở Hà Nội trong hệ thống truyền thuyết Mẫu Liễu）」を執筆した。

## FISCHER, Susan Donna［フィッシャー、スーザン ドンナ］――教授

任期：2014年11月１日～2014年11月30日

研究課題：手話言語学研究のとりまとめと今後の方向性に関する検討

**【学歴】**ハーバード大学ラドクリフ・カレッジ卒（1967）、マサチューセッツ工科大学博士課程修了（1972）**【職歴】**ソーク研究所研究員（1971）、ハワイ大学 第二言語としての英語学部客員助教（1974）、サンディエゴ州立大学言語学科講師（1977）、ロチェスター工科大学国立聾工科大学コミュニケーション研究科准教授、研究員（1978），ロチェスター工科大学国立聾工科大学研究科教授、研究員（1993）、カリフォルニア大学サンディエゴ校客員研究員（2006–）、ニユーヨーク市立大学大学院客員研究員（2013–）**【学位】**Ph.D.（言語学、心理学）（マサチューセッツ工科大学 1972）**【専攻・専門】**言語学

【主要業績】

［論文］

Fischer, S. D.

2011 Nominal Markers in ASL (with foreword, afterword, and commentary). *Sign Language & Linguistics* 15(2): 243-250.

2011 Marked Hand Shapes in Asian Sign Languages. In R. Channon and H. van der Hulst (eds.) *Formational Units in Sign Language*, pp.19-41. Boston: DeGruyter.

2011 Numeral Incorporation in Taiwan Sign Language. In Jung-hsing Chang (ed.) *Language and Cognition: Festschrift in Honor of James H.-Y. Tai on His 70th birthday*, pp.147-169. Taipei: The Crane Press.

【2014年度の活動報告】

◎各個研究

・研究課題

手話言語学研究のとりまとめと今後の方向性に関する検討

・研究の目的、内容

手話を対象とした記述言語学のみならず、手話言語の歴史変化の過程等についても深い造詣を持った研究者であること、また専門のアメリカ手話だけでなく、日本手話系の言語の調査も行っていること、さらに、音声言語学者が主として集まる研究集会へも積極的に参加しているという研究背景を活かし、機関研究「手話言語と音声言語の比較に基づく新しい言語観の創生」後半を迎えるにあたり、これまでのまとめと今後の方向性に関する検討を民博側の研究者と一緒に行う。また、昨年に引き続き、諸大学・機関において、集中講義、講演等を担当する。

・成果

機関研究プロジェクト「手話言語と音声言語の比較に基づく新しい言語観の創生」、および日本財団助成事業「手話言語学に関する講義の実施およびシンポジウム・セミナーの開催」に関して、そのとりまとめと今後の方向性に関する協議・検討を行った。また、手話言語学研究促進のための共同利用事業としての日本財団助成事業「手話言語学に関する講義の実施およびシンポジウム・セミナーの開催」(関連サイト http://www.r.minpaku.ac.jp/shuwa/l03.html) 関連では、関西学院大学での講義、香港中文大学、上海の復旦大学への出張を行った。

◎調査活動

・海外調査

2014年11月15日～11月23日―中国（復旦大学、香港中文大学において講演、及び手話言語学にかかる調査研究）

## KANJOU, Youssef［カンジョウ、ユーセフ］―――――――

Nishiaki, Y., Y. Kanjo, S. Muhesen and T. Akazawa

2011 Newly Discovered Late Epipalaeolithic Lithic Assemblages from Dederiyeh Cave, the Northern Levant. In E. Healey, S. Campbell and O. Maeda (eds.) *The State of the Stone Terminologies, Continuities and Contexts in Near Eastern Lithic* (Studies in Early Near Eastern Production, Subsistence, and Environment 13), pp.79–89. Berlin: ex oriente.

**【2014年度の活動報告】**

◎各個研究

**・研究課題**

戦争と博物館――戦火のもとの文化遺産の保護とコミュニティの再生

**・研究の目的、内容**

これまでアレッポ国立博物館館長就任とともに新規プログラムを立ち上げ、一部はすでに実施してきた。その経験を生かし、本館の機関研究「マテリアリティの人類学」の一環であるプロジェクト「文化遺産の人類学」に関連して、以下のような活動に従事する。1) 東日本大震災後の博物館復興支援プロジェクトへの参加。まずは震災時の日本における事例と、現在シリアの諸博物館が直面している問題の事例を比較研究する。その上で、文化遺産が紛争・自然災害のもとで直面する破損・消失・略奪等に対する防災と復元復興に有用な社会環境・技術・法律等に関する調査、研究をおこない提言する。2) ワークショップ・シリーズの開催。1) で得られた知見をもとに、現在のシリアが直面している問題や、やはり内戦を経験したレバノン、JICA 共催博物館学ワークショップにも参加者を派遣しているパレスチナの事例を比較し、戦災によるコミュニティの崩壊・再生と博物館の役割についてのワークショップ・シリーズを開催する。これにより、館内・館外の研究者との意見交換を活発におこない、機関研究の進展に貢献する。

**・成果**

民博における１年間の研究と収集資料整理の成果として、シリア、アレッポ博物館を事例に内戦下の文化遺産を保護するための新たな方策を構築中である。同時に、内戦下および将来において、特にローカル・コミュニティとの協力のもとに文化遺産を保護する最善の方法についてシリアの研究者仲間に提言した。さらに、民博での研究成果を下記の論文にまとめた。

◎出版物による業績

［論文］

Kanjou, Y.

2014 The Syrian Cultural Heritage Tragedy: Cause, Effect, and Approaches to Future Protection.（シリアの文化遺産の悲劇――原因・結果および保護に向けての今後の取り組み）『歴史都市防災論文集』8：271–278。

2014 An Anthropological Study of Neolithic Graves in Tel Qaramel, Northern Syria. *Adumatu Journal* 30: 7–19.

カンジョウ，ユーセフ

2014 「シリアの考古学的遺産の現状と将来」東京文化財研究所文化遺産国際協力センター編『シンポジウム Postwar Reconstruction of Syria and Cultural Heritage.（シリア復興と文化遺産）報告書』pp.49–61。

◎口頭発表・展示・その他の業績

**・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告**

2014年５月15日～18日 「内戦からの復興の展望――博物館と社会的絆」国際人類学・民族学科学連合（IUAES）国際研究大会（日本文化人類学会50周年記念合同共催）、幕張メッセ

2014年６月９日～13日 「内戦下における保護戦略とアレッポ国立博物館」第９回国際古代西アジア考古学会議、スイス、バーゼル大学

2014年６月23日 「内戦下のシリアにおける文化遺産の惨劇」東京文化財研究所

2014年12月２日～４日 「内戦下におけるアレッポ国立博物館」危機的遺産研究所（ACHS）会議　キャンベラ、オーストラリア国立大学

## KHOSRONEJAD, Pedram［ホスローネジャード、ペドラム］―――― 准教授

任期：2013年９月13日～2013年６月20日
研究課題：イランにおける信仰とジェンダーの表象――映像資料に見るシーア派儀礼
**【学歴】**テヘラン芸術大学卒（1997）、テヘラン芸術大学修士課程修了（1999）、パリ社会科学高等研究院（EHESS）専門研究過程修了（2001）、パリ社会科学高等研究院（EHESS）博士課程修了（2007）**【職歴】**オックスフォード大学、東洋学研究所中近東学科研究員（2004）、オックスフォード大学、セント・アントニーズ・コレッジ中東センター若手研究員（2005）、セント・アンドリューズ大学、社会人類学部特任研究員（2007）、セント・アンドリューズ大学、社会人類学部専任研究員（2010-現在）、フランス国立科学センター（CNRS）「社会、宗教、世俗性」グループ客員（2010-2013）**【学位】**博士（社会人類学）（パリ社会科学高等研究院（EHESS）2007）、D. E. A.（美術史）（パリ社会科学高等研究院（EHESS）2001）、修士（美術史）（テヘラン芸術大学 1999）**【専攻・専門】**映像人類学

**【主要業績】**
［編著］
Khosronejad, P.（ed.）
2012 *Saints and their Pilgrims in Iran and Neighboring Countries*. Herefordshire: Sean Kingston Publishing.
2012 *Unburied Memories: The Politics of Bodies, and the Material Culture of Sacred Defense Martyrs in Iran*（Special Issue of the Journal of Visual Anthropology 25(1)). Taylor & Francis, USA.
2011 *The Art and Material Culture of Iranian Shi'ism: Iconography and Religious Devotion in Shi'i Islam*. London: I. B. Tauris Publishers.

**【2014年度の活動報告】**
◎各個研究
**・研究課題**
イランにおける信仰とジェンダーの表象――映像資料に見るシーア派儀礼
**・研究の目的、内容**
ホスローネジャードは、イラン山岳遊牧民の宗教文化の研究者であると同時に、民族誌映画に関する国際的な学術行事をスイス、フランス、英国でオーガナイズするなど、欧州を拠点に活動してきた。自らもイランにおいて民族誌映像を制作しているが、映画やフッテージフィルムなども含めた映像資料を人類学においていかに活用するかという理論的な観点から、イラン関係の映像を多く収集してきた。このコレクションの中から、特にシーア派の宗教実践に係る映像を民博内外の研究者と共有し、信者が儀礼の中で体験する神や聖者とのつながりや、儀礼の場における男女の位置づけの違いを、民族映像がどのように捉えているかということを明らかにする。
**・成果**
1）研究活動の概要
・国内のイラン研究者や学生と交流し、研究活動の支援、将来的な日本の研究機関とセント・アンドリューズ大学（スコットランド）社会人類学部の共同研究プロジェクトを提言した。
・イラン研究およびイスラム研究に関する研究会、セミナー、学会に大阪、京都、東京各地で参加した。
2）研究成果の概要
・EASA 2014、中東・中央ユーラシア人類学第１回民族誌映像・メディアプログラムの制作。
・EASA 2014、現代における中東・中央ユーラシアの人類学と人類学者の将来像（討論会）。
・聖者崇拝についての編集版（2015年初旬に出版予定）。

## KIM Chang-ho（金 昌鎬）［キム　チャンホ］―――― 准教授

任期：2014年７月１日～2015年６月29日
研究課題：Digital Signage 技法を活用した博物館所蔵標本の情報サービス及び Virtual Museum 改善方案の研究
**【学歴】**韓神大学校宗教学科卒（1999）、漢陽大学校大学院文化人類学科修士課程修了（2002）、漢陽大学校大学院文化人類学科博士課程修了（2007）**【職歴】**漢陽大学校 ERICA 付設民族学研究所研究助教（1999）、韓国国立民俗博

物館民俗研究科研究員（2002）、韓国国立民俗博物館 専門契約職나級（2007.2-8）、韓国国立民俗博物館遺物科学科民俗アーカイブ学芸研究士（2007）、韓国国立民俗博物館展示運営科学芸研究士（2010）、韓国国立民俗博物館民俗研究科学芸研究士（2013）**【学位】**修士（漢陽大学校大学院 2002）**【専攻・専門】**文化人類学

**【主要業績】**

［修士論文］

金 昌鎬

2002 『韓国巫の他界観研究』漢陽大学校。

［論文］

金 昌鎬

2004 「韓國の符籍に關する小考」『生活文物研究』（韓国国立民俗博物館）12：53-73。

2002 「韓国巫俗の死（Death）と再生（Rebirth）」『韓国巫俗学』（韓国巫俗学会）5：31-56。

**【2014年度の活動報告】**

◎各個研究

**・研究課題**

Digital Signage 技法を活用した博物館所蔵標本の情報サービス及び Virtual Museum 改善方案の研究

**・研究の目的、内容**

1）進行中の研究概要

・人間の文化（生活史）を主題にする博物館で標本の物理的な情報のみならず、それに内在した人間の文化（行為）を効果的に伝達することのできる必要性が台頭――多様な媒体を活用した情報伝達の方法の模索が必要

・“博物館の資料はそれ自体も重要であるが，資料自体は文化についてのアイコン（icon）であるだけで、文化と人間を直接的に代弁することはできない”と認識

・資料に内在した文化的基盤の表現が排除された博物館→資料についての形態・材質・時代などの情報を越え、資料に内在した文化的基盤までも見せることのできる博物館を模索

2）進行研究の目的

・博物館所蔵資料に含意された文化を効果的に表現する多様な説明技法の創出

・進歩した情報の具現技術の積極的な活用を通して観覧客の知的欲求に即刻反応することのできる対話型（双方向）展示技法の開発：博物館型 Digital Signage のモデル定立

・民族学博物館としての変化を志向する韓国国立民俗博物館が多くの地域・民族の文化的特徴を多様な方法で導出・表現が可能なように企画力と技術力を蓄積

3）今後の研究方向

・民族学博物館として世界的な認知をもつ国立民族学博物館の所蔵品を中心に民族学資料についての博物館型 Digital Signage の基本運用モデルを設計

・博物館観覧客を対象とした対話型（双方向）Digital Signage モデルを発展させ Virtual Museum に接続，on-line と off-line が統合した情報の能動的な伝達体系を模索

・Virtual Museum に積極的な関心をもつ者への情報伝達力の強化方案を研究：Retargeting 技法の活用など，多様な方案を通して on･off-line 博物館の調和する発展方向を設定

**・成果**

日本の国立民族学博物館と韓国国立民俗博物館が志向するフォーラム型情報ミュージアムについて、その具体的方法論について相互に検討していくための基礎的研究を行った。

・国立民族学博物館における民族学資料の情報化に関する研究についてレビューを行った。

・国立民族学博物館の情報学研究スタッフおよび情報システム課のスタッフの協力を得て、韓国国立民俗博物館が志向する民族学資料の情報化と本館のそれとの接点について検討した。

2015年度に両館で共同開催をする特別展の準備作業を行った。

◎調査活動

**・海外調査**

2014年８月28日～８月31日―韓国（韓国国立民俗博物館との共同進行プロジェクト、フォーラム型情報ミュージアム構築と関連会議に参加）

2014年11月23日～12月２日―韓国（民博と韓国国立民俗博物館の共同進行特別展示に活用可能な遺物実査及び、資料の収集）

2015年３月24日～４月１日―韓国（民博と国立民俗博物館（韓国）の共同進行プロジェクトと関連して対象の遺物を点検）

## NARENGERILE（娜仁格日勒）［ナランゲレル］――――――

## OSTAPIRAT, Weera［オスタピラト、ウィーラ］―――― 准教授

任期：2013年６月18日～2014年６月17日
研究課題：クラ・ダイ祖語の語彙再建とオーストロ・タイ（クラ・ダイとオーストロネシア）系民族の歴史
**【学歴】**ラムカムヘン大学卒（1987）、カリフォルニア大学バークレー校修士課程修了（1996）カリフォルニア大学186バークレー校博士課程修了（1999）**【職歴】**カリフォルニア大学バークレー校（シナ・チベット語源辞典・分類語彙プロジェクト）研究員（1994）、国立民族学博物館外国人研究員（2000）、台湾中央研究院語言学研究所客員研究員（2002）、マヒドール大学アジア言語文化研究所（タイ）准教授（2005）**【学位】**博士（言語学）（カリフォルニア大学バークレー校 1999）、修士（言語学）（カリフォルニア大学バークレー校 1996）**【専攻・専門】**言語学（タイおよび東南アジア諸言語、歴史比較言語学）、言語民族文化史

**【主要業績】**
［論文］
Ostapirat, W.
2013 Northern-Min glottalized onsets and the principles of tonal split and tonal merger. In Peng Gang and Shi Feng（eds.）*Eastward Flows the Great River*（*Festschrift in Honor of Professor William S-Y. Wang on his 80th Birthday*）. Hong Kong: City University of Hong Kong Press.
2013 The Rime System of Proto-Tai. *Bulletin of Chinese Linguistics* 7(1): 189-227.
2009 Proto-Tai and Kra-Dai final *-l and *-c. *Journal of Language and Culture* 28.2: 41-56.

**【2014年度の活動報告】**
◎各個研究
**・研究課題**
クラ・ダイ祖語の語彙再建とオーストロ・タイ（クラ・ダイとオーストロネシア）系民族の歴史
**・研究の目的、内容**
これまで、クラ・ダイ祖語の数百に及ぶ共通語根を再建し、そこに反映された話者の歴史に関する研究をすすめてきた。今回の招聘期間中は、そのなかでも特に、オーストロネシア系民族との関係を解明することを目的とする。

クラ・ダイ祖語は、中国南部から東南アジアの地域にまたがる、タイ系およびラオ系の民族の属する重要な言語グループの祖語をさす。現在クラ・ダイ系民族は中国広東省からインド・アッサム地方、そして雲南省からマレー半島にかけて広範囲に居住している。再構された語彙は、社会的・文化的に意味を持つグループごとに分類することが可能と考えられ、それに基づき、クラ・ダイ系民族の先史における世界観、生活、社会の構図を浮かび上がらせること、さらには歴史を共有し、もしくは文化接触のあった他の民族の生活史をも明らかにできると考えられる。
**・成果**
クラ・ダイ語系の特定の18言語を選び包括的なデータベースを再建した。歴史言語学の比較研究法に基づきクラ・ダイとオーストロネシアの語彙比較を体系的に行った。予備研究と研究成果はさまざまな場、すなわちMINPAKU Linguistic Circleの研究会、国際シンポジウム「ヒト・穀物・言語の拡散」（国立国語研究所、立川）で発表・発信した。またその他の研究会、特に、国際シンポジウム「アジア・太平洋における生物文化多様性」（総合地球環境学研究所、京都）や、総合研究大学院大学国際シンポジウム「Modern Human Diversity on Genes and Culture」（総合研究大学院大学本部、葉山）では本研究について内外の研究者と討論や意見交換を行った。

クラ・ダイ祖語の約380語彙リストを作成した。各原語の推定形を再建したが、規則的音法則についての記述は総じてかなり確信のあるものである。本研究によりクラ・ダイ／オーストロネシアに関連するとみられる80～90の語根を発見した。予備研究の結果、基礎語彙、特に身体部分の語彙分野の共通語彙数の多さからクラ・ダイ／オーストロネシアは系統関係があることを示唆している。初期のクラ・ダイ／オーストロネシアの農業的関連性は“湿田”“米（総称）”“籾殻”“植える”などの共通の語根から考えられそうである。その一方、クラ・ダイにはオーストロネシアに広く分布する海や航海術に関する原語がなく、海洋志向のオーストロネシアの文化史がオーストロ・タイ系民族の祖先からの分離後、海に向かって展開したことに深い関連性があるのと対称的にクラ・ダイの祖先（おそらくオーストロ・タイ系民族）は陸地志向であったことを示している。クラ・ダ

イとオーストロネシア間の語彙上の関連性は、親族語彙（祖父母、父、子、娘婿、配偶者 等）、代名詞（I, we, thou, you 等）、野生動物（例：クマ、カワウソ、鳥、ヒル、ムカデ）、植物（例：タロイモ、ゴマ）、天然資源（例：火、水、月、雨）、物質文化（例：船）、記述的な動詞や感覚（例：生の、酸っぱい、黒い）、数字（１～10の基本数字）等の分野に顕著である。

## STRATHERN, Andrew［ストラサーン　アンドリュー］―――――――――――――――――――――――――――――― 教授

任期：2014年４月１日～2014年６月30日
研究課題：自然災害とその後――被災者はいかに対応し、希望をもつか
**【学歴】**ケンブリッジ大学トリニティ・カレッジ卒（1960）、ケンブリッジ大学大学院（Ph.D 取得）（1965）**【職歴】**ケンブリッジ大学トリニティ・カレッジ研究員（1965）、オーストラリア国立大学太平洋研究所研究員（1969）、パプアニューギニア大学教授（1973）、ユニバーシティ・カレッジ・ロンドン人類学科教授（1976）、国立パプアニューギニア研究所所長（1981）、ピッツバーグ大学、アンドリュー・メロン客員教授（1987）、ジェームズ・クック大学太平洋研究所所長（1996）、ピッツバーグ大学、アンドリュー・メロン特別教授（1988）**【学位】**Ph.D.（ケンブリッジ大学大学院 1965）**【専攻・専門】**社会人類学

**【主要業績】**
［共著］
Strathern, A. and P. J. Stewart
2011 *Peace-making and the Imagination: Papua New Guinea Perspectives*. Brisbane: University of Queensland Press.
Strathern, A. and P. J. Stewart
2011 *Kinship in Action: Self and Group*. Upper Saddle River. N. J.: Prentice Hall Publishing.
Stewart, P. J., A. Strathern, J. Trantow
2011 *Melpa-German-English Dictionary*. Pittsburgh, PA: University of Pittsburgh Library System.

**【2014年度の活動報告】**
◎各個研究
**・研究課題**
自然災害とその後――被災者はいかに対応し、希望をもつか
**・研究の目的、内容**
過去数年間にわたり、東アジア・オセアニア地域における大規模自然災害被災地（パプアニューギニア、西サモア、ニュージーランド、台湾南部など）でエスノグラフィー調査に基づく、災害研究をおこなってきている。研究テーマは、人びとが絶望という状況から協働しながら自らの生活再建への希望を見出し、それがコミュニティの復興に結びついていくプロセスを明らかにすることにある。これまでの研究で構築したこの「共生と希望」のモデルを発展させるため、東日本大震災に関する研究を日本の人類学者とともに実施し、上記の調査地でこれまで共同研究を実施してきた研究者や、海外の被災地調査に従事する日本の人類学者をも含めたネットワークを拡充し、災害人類学の確立とさらなる発展を目指す。
**・成果**
1）災害人類学者の国際ネットワークを確立した。
2）民博のジョージ・ブラウン・コレクション研究の今後の取り組みを企画した。
3）ノースカロライナのカロライナ・アカデミック・プレスと出版契約している次の著作にテータを付加した。
Stewart, Pamela J. and Andrew Strathern. Diaspora, Disasters, and the Cosmos: Rituals and Images. Durham, N. C.: Carolina Academic Press.（契約済、出版準備中）
◎出版物による業績
Stewart, P. J. and A. Strathern
2014 Working in the Field: Anthropological Experiences across the World. *Palgrave Macmillan* (http://us.macmillan.com/workinginthefield/PamelaJStewart#).

◎口頭発表・展示・その他の業績

**・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告**

2014年５月12日　（Pamela J. Stewart and Andrew J. Strathern）‘Local Peace-making Strategies and Meta-pragmatics.’ “Real and Symbolic Paths to Conflict Transformation and Cultural Reclamation,” 2014 OICD（Organization for Intra-Cultural Development）Annual Workshop, Doshisha University

2014年５月12日　（Andrew J. Strathern and Pamela J. Stewart）‘Past and Present Ethnography and Shifting Strategies of Conflict Resolution.’ “Real and Symbolic Paths to Conflict Transformation and Cultural Reclamation,” 2014 OICD Annual Workshop, Doshisha Universiy

◎調査活動

**・国内調査**

４月21日-24日―宮城県名取市（仙台における災害復興に関する現地調査）

**・海外調査**

2014年５月16日～６月７日―ドイツ（アウグスブルク大学での特別講義及び平和と紛争、災害に関連する資料・情報収集）

## YONENO, Michiyo（米野みちよ）［よねの　みちよ］―――― 准教授

任期：2014年４月１日～2014年６月30日

研究課題：民博映像番組の有効利用に関する研究

**【学歴】**東京芸術大学音楽学部楽理科学士課程（音楽学専攻）卒（1991）、アジア典礼音楽研究所研究生（1993-1994）、フィリピン大学音楽学部修士課程（音楽学専攻）修了（1998）、フィリピン大学社会科学哲学フィリピン研究プログラム博士課程（フィリピン研究専攻）修了（2011）**【職歴】**日本近代音楽館「新聞に見る日本の洋楽プロジェクト――明治編」調査員（1990）、フィリピン大学アジアセンター大学院専任講師（1998）、フィリピン大学アジアセンター大学院助教授（2005）、フィリピン大学アジアセンター大学院准教授（2012）**【学位】**Ph.D（フィリピン大学 2011）**【専攻・専門】**民族音楽学、地域研究

**【主要業績】**

［論文］

Yoneno, M.

2011　Singing of Modernity and US Shadow: Bodily Aesthetics and Ideology in Salidummay and Shoka. In K. Fujiwara and Y. Nagano（eds.）*The Philippines and Japan in America's Shadow*, pp.229-260. Singapore: National University of Singapore Press.

2002　Under Attack: Impact of Mass Media Technology on Indigenous Musical Practice in the Cordillera in the Philippines. In T. Craig and R. King（eds.）*Global Goes Local: Popular Culture in Asia*, pp.40-57. Vancouver: University of British Columbia Press.

2010　Song of Women?: A Reflection on Singing and Gender Complementarity in Modernizing Indigenous Communities in Northern Philippine Highlands. *JATI*（*Journal of Southeast Asian Studies*）15: 61-81.

**【2014年度の活動報告】**

◎各個研究

**・研究課題**

民博映像番組の有効利用に関する研究

**・研究の目的、内容**

米野は、受入教員の寺田吉孝が2008年にフィリピン・ルソン島でおこなった映像音響資料収集プロジェクトに参加した。本研究の目的は、このプロジェクトで収集した音響資料に基づいて、映像番組を編集するとともに、その過程で伝統音楽の継承における、映像メディア活用の可能性を検討することである。とくに、取材対象国・地域における映像番組の有効利用のための具体的な方法と問題点を整理検討する。

・成果

主な取材地としたタブク町とバルバラサン村は、報告者が長年調査を継続している地域である。編集にあたっては、現地の生活における音楽の重要性が十分に理解できるよう、これまでの経験と研究成果を生かすように努め、現地における有用性を高めるために、日本語、英語、イロカノ語の３言語で制作をおこなった。また、映像音響番組における文字情報の出し方に留意し、映像音響メディアの特性を最大限に引き出すための編集方法を議論しながら作業を進めた。番組中では、文字情報を最小限に抑え、追加情報を提供する方式について議論を重ね、ブックレットを作成することが実現の可能性が高いだけでなく、映像音響メディアの活用の面からも最も効果的であるという結論を得た。ブックレットの完成にはいたらなかったが、記載内容について取捨選択をおこなった。ブックレットの作成を念頭において、編集をすすめ、番組の制作を無事終えることができた。

## WILDE, Guillermo［ウィルデ・ギジェルモ］―― 准教授

任期：2015年１月16日～2016年１月14日

研究課題：ラテンアメリカとアジアにおけるキリスト教宣教と文化適応の比較研究

**【学歴】**ブエノスアイレス大学哲学文学部人類学専攻卒（1999）、ブエノスアイレス大学哲学文学部人類学専攻博士課程修了（2003）**【職歴】**国立科学技術研究会議（アルゼンチン）研究員（2005-）、ヌエストラセニョーラデアスンシオン・カトリカ大学大学院（パラグアイ）社会人類学専攻客員教授（2007）、国立サンマルティン大学（アルゼンチン）社会科学高等研究所准教授（2008-）、教皇庁立リオグランジドスウ・カトリカ大学大学院（ブラジル）歴史学専攻客員教授（2008）、リオデジャネイロ連邦大学大学院社会人類学専攻客員教授（2009）、社会科学高等研究所（フランス）宗教人類学センター客員教授（2010）、国立ミシオネス大学大学院（アルゼンチン）社会人類学専攻客員教授（2010）、パリ第３新ソルボンヌ大学ラテンアメリカ高等研究所パブロ・ネルーダ講座客員教授（2010-2011）

**【学位】**Ph.D（ブエノスアイレス大学 2003）**【専攻・専門】**文化人類学

**【主要業績】**

［単著］

Wilde, G.

2009 *Religión y poder en las misiones de guaraníes*. Buenos Aires: Editorial SB.

［編著］

Wilde, G.（comp.）

2011 *Saberes de la conversión: jesuitas, indígenas e imperios coloniales en las fronteras de la cristiandad*. Buenos Aires: Editorial SB.

［論文］

Wilde, G.

2011 Entre las tipologías políticas y los procesos sociales: elementos para el análisis de liderazgos indígenas en una frontera colonial. *Revista Anos 90* 18(34): 19-54.

**【受賞歴】**

2010 Premio iberoamericano of Latin American Studies Association

**【2014年度の活動報告】**

◎各個研究

・研究課題

ラテンアメリカとアジアにおけるキリスト教宣教と文化適応の比較研究

・研究の目的、内容

16世紀から18世紀にかけてのラテンアメリカのカトリック修道会の宣教活動を、同時代のアジアのそれと比較し、共通点と相違点を明らかにする。基本的な問題設定は次のふたつである。1) 世界宣教のネットワークの解明。宗主国の首府や修道会の本部が位置したヨーロッパの中枢と、宣教活動が展開されたラテンアメリカやアジアの辺境はどのように結ばれていたのか。辺境地域相互の関係はどのようなものだったのか。人やもの、情報の往還はどのようになされたのか。2) 文化適応の実態の解明。ヨーロッパ人宣教師と現地の人びとは互いをどのように認識し、どのように対応したのか。他者理解や文化相対主義はどの程度発達しえたのか。排斥され

るものと受容されるものの境界はどのように引かれたのか。社会や文化の混淆や融合はどのような形態をとったのか。

・成果

１月16日に国立民族学博物館に着任して以降、近世の日本・中国・インドにおけるカトリック修道会の文化適応に関する先行研究を収集し、検討した。また、共同研究『近世カトリックの世界宣教と文化順応』のメンバーを中心に、日本在住の研究者と交流し、意見交換を行った。３月末には中国に出張し、南米辺境のカトリック修道会の集住政策について報告するとともに、現地の研究者と交流した。

◎出版物による業績

［その他］

Wilde, G.

2014 Imagining Guaranis and Jesuits: Yesterday's History, Today's Perspective. *ReVista: Harvard Review of Latin America* 14(3): 58–60.

◎口頭発表・展示・その他の業績

・共同研究会での報告

2015年２月21日 「Writing Rites, Translating Concepts, Appropriating Customs: Missionary Anthropology in the South American Borderlands of Iberian Empires」『近世カトリックの世界宣教と文化順応』

・学会または館外のシンポジウム、研究集会などでの報告

2015年３月27日 Resettlement Policy in the Colonial Borderlands of Iberian Empires: Ethnocide, Ethnification, Ethnogenesis? 国際シンポジウム：Migration, Ethnicity, and the State. Guangzhou, China: Sun Yat-Sen University

◎調査活動

・海外調査

2015年３月22日～３月31日―中華人民共和国（近世カトリックの世界宣教に関する文献調査とシンポジウム参加）